

R188.6-B87ウ



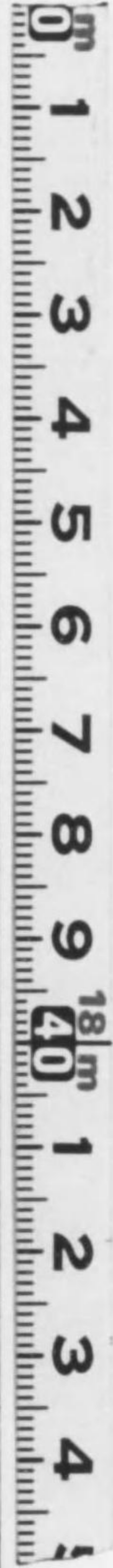
1200500766335

R188.6

B87

×

複写



始



40

R  
188.6  
1387



佛教專門學校編纂

# 淨土宗辭典

大東出版社



## 序

吉水の法流東山に發してより茲に八百歳、光華限りなく乾坤に盈ちて、絢爛たる文化は皇國に馥郁の花を開き、大悲の法泉群盲を露被し、甘露の法雨衆庶を滋潤す。德澤遐邇に布きて、灌注の益十方に逮ぶ。盛んなる哉華頂の宗風、教綱章然として八宗に冠絶し、究竟大乘の法水、智願海に流入す。選擇佛教の正理、至大絶妙の遺教、今にして顯彰せずんば又何れの秋にか成就せん。

惟ふに道は人に由つて弘まり、法は時を待つて顯はる。宿縁の薰發するところ、時至り人を得て、爰に淨土宗辭典、郁々乎として世に出づ。筆を含んでその由來を述べんとするに、感慨縦横、覺へずして轉々清然たるものあり。昭和五年春四月、我等同志祖山御忌會に登嶺の砌り、原田靈道、三長覺靜の兩君と會見し、談偶該辭典編纂の事に及び、出版完遂を誓約してより既に十有餘歳、その間編纂所を佛教専門學校内に置き、教職員一同粉骨碎身、同事協力して語彙を收拾すること一萬語、更に取捨選擇して七千語に限定し、これを分擔執筆するも容易に成らず、三長・原田の兩君は遂に幽明境を異にし、復起つ能はず。

幸にも不請の友大東出版社長岩野眞雄君あり、屢書を寄せて激勵倦むことなき道情は、やがて同志の胸肝に滲透して不屈の氣魄増し、昭和十四年の春より萬難を排して疾風迅雷、銳意以て筆を驅り、神人相搏つ迫力を以て渾身の努力を續け、皇紀二千六百年の聖紀を迎へ、志願漸く満足す。嗚呼偉なる哉その意氣、大なる哉その苦闘、自からその難事を遂行せる者のみ能くその苦衷を語るに足る。

先きに淨土宗全書、續淨土宗全書、淨土宗大年表出づるあり。今又この快舉成る。一宗の網格、列祖の立旨、義趣の開顯、蓋し學佛の徒をして裨益するところ至大なるものあらんか。鴻恩の奉答、宗風の恢興、護法の赤誠を砥礪して皇國文化の宣揚を期し、退代に流布して後學の心地を潤すに足らば、編者以て冥す可きか。辭典完成は獨り宗門の慶事たるのみならず、又以て學海の一大福音たり。遇々大東亞戰爭第二春を迎へ、國家方に危急の秋、該辭典の上梓を見たるは、これ全く編者の淬礪精進と大東出版社主の外護の賜にして、茲に至心隨喜のあまり所感を述べて序となす。

昭和十八年四月七日吉辰

佛教専門學校長 石 橋 誠 道

## 凡 例

### 一、内 容

① 本書は、題して淨土宗辭典と稱するも、その内容とするところは、ひとり淨土宗のみに限らず、淨土教一般は固より、佛教全體に亘つて、苟しくも淨土宗と直接間接に關係ある語彙は、能ふかぎり之れを收載し、施すに簡潔平明を旨とせる解説を試み、常用辭典として、一は以て學者研究の備要に擬し、一は以て初心者入門の手引の指針に充てんとしたものである。

② 語彙收拾の方針は、利用者の便を考慮し、多項目主義を採用し、その種類は、術語、法數、論題、流派、經典、宗書、佛菩薩、明王天部、人名、寺名、地名、成句、法式、伎樂、制度、行事、法具、圖像、雜語等の異名、略名、具名の肝要と思はるゝものは概ねこれを網羅した筈である。

### 二、排 列

① 「見出し」は歴史的假名遣によらず、すべてこれを表音式五十音順に依つた。

② 便宜上、キはイ、ヲはオ、ヰはジ、ヱはズに統合し、長音「ー」は清音の次に、半濁音、濁音は長音の次にこれを序列した。

③ 読み方は吳音によるのを通例とするも、間々漢音、唐音、音便、讀癖等あり、これらは最も一般に

用ひられてゐるものを採用した。但し、過去の人名等でその正確な読み方を審かにすることの出来な  
いものは、便宜上、吳音によるの外はなかつた。

三、解説

- ① 辭典の性質上、解説は専ら淨土宗の傳承の正義を明示することに重點を置き、一般佛教に關するものでも、その説明は、淨土宗に關係ある部分の叙述に力めた。
- ② 解説の執筆は、佛教専門學校全教授諸氏をはじめ、その他篤學の士にそれぞれ專攻の部門の擔當を依頼し、努めて慎重細心を期した心算であるが、尙ほその足らざるもの多きを惧れる。切に大方の示教を得て將來の完璧を期するものである。
- ③ 文章は言文一致體を標準とし、なるべく煩瑣冗長を避け、辭典に更に辭典を要するが如き弊はつとめてこれを排することに留意した。
- ④ 引用文の原典は殆んど漢文體なるも、讀みやすからしむるためにこれを和文體に改め「」を附し、取意文は「」を附せず。
- ⑤ 一語にして、その意義を異にするものは、(1)、(2)等の符號を附し、参照の場合は「↓」を記入し、人名の「見出し」の下には生年、寂年を皇紀により記載して讀者の便に供した。
- ⑥ 原語は、正確なるもののみを記して研究の參考に資した。
- ⑦ 本辭典は、昭和十四年に語彙の解説を一應完了したのであるから、人名については當時すでに物故してゐた者、書名に於ては當時既に印行されてゐたものに限り解説を施した。なほ、制度に關して

は、その後、宗制の大改正によつて著しい變革を來したので、校正に際してその一部に訂正を加へたものの、殆んど大部分に亘つては、從來の解説をそのまま、收載するの外はなかつた。大方の諒承を乞ふ次第である。

⑧ 寫眞の挿入、參考文献の舉示等は、解説の理解を深めるため肝要なことではあるが、本書編纂の趣旨に従つてこれを省略したが、法具のみは出来る限り、凸版寫眞を挿入して置いた。

四、編纂

- ① 本辭典の編纂は、前期は前田聽瑞氏、後期は惠谷隆成氏が主任となり、その細務は藤原了然氏が擔當し、校正は惠谷、藤原兩氏の勞による。
- ② 本辭典の成立に關し、前後十有餘年間、その勞苦を借にした編纂會同人は左の如くである。爰に錄して永く記念したいと思ふ。

石橋 誠道	稻垣 眞我	伊藤 眞徹	飯田 順雄	鞆 銅光
惠谷 隆成	角野 達堂	岸 信宏	小林 瑞淨	小西 存祐
佐藤 密雄	三田 全信	宍戸 壽榮	柴田 玄鳳	千賀 眞順
高島 寬我	當麻 定信	田中 順照	宅見 春雄	寶田 正道
千葉 良導	塚本 善隆	坪井 俊映	德地 廣賢	藤堂 俊章
林 俊鼎	藤原 弘道	藤原 了然	前田 聽瑞	三枝 樹正道
故原田 靈道	故三長 覺靜	故藤浦 慧嚴	故八橋 玉純	(五十音順)

- ③ なお、本辭典に關して永く高配を賜つた前校長小林瑞淨先生並に現校長石橋誠道先生の御芳情を銘記すると共に、本辭典の出版について大東出版社長岩野眞雄氏の與へられた献身的支援を深謝し、衷心の敬意を表する。
- ④ 終りに、本辭典編纂に際しては、直接間接、既刊の佛教諸辭典その他の諸書に負ふところが尠くない、寔にこれ普請衆力の賜である記して深謝する。
- ⑤ 校正はなるべく嚴正を期した心算であるが、尙、魯魚の誤少からざらんことを惧る。他日の是正を期するものである。

ア

**アイキョーブツポミ** 愛樂佛法味  
法悦にひたること。愛樂とは樂欲即ち願ひ求むること。法味とは西方淨土の菩薩が受用する功德のこと。自受用法樂の境地を云ふ。

**アエン** 阿縁 ニニノ 黒谷金戒光明寺第十二代。聖深、國龍と號す。清淨華院並に黒谷光明寺の兩山に號住す。長祿二年正月九日寂。一説享徳二年(三三三)八月九日といふ。壽不詳。

**アオーコーミヨージエンギ** 粟生光明寺縁起(三卷) 撰者不詳。淨土宗西山派本山粟生光明寺の縁起を記述せしもの。本書は古來より光明寺に秘藏せしを照空觀道之を見出し文化十三年上梓す。上・中・下三卷より成り、上卷には熊谷蓮生房入道・因縁と光明寺建立の縁起を明し、中卷には法然上人及蓮生房の往生の有様並に滅後の法難を明し、下卷には上人火葬の瑞相と光明寺の由緒に就き述ぶ。

**アカ** 阿伽 ニニノ 遇伽・遇迦・阿伽・遇伽・等に作り、水・功徳水等と譯す。もと

アイキョーブツポミ アコ

印度に於て客人接待の爲に用ひたるものなり。後轉じて佛前又は墓前に供ふる淨水を指し、今日に於ては専ら後義に用ふ。

**アカツキシ** 赤薬地 京都市東山區清水坂二丁目の西南一帯の地を云ふ。文永年間、然阿良忠と勢觀房の附弟蓮寂房とが同地に會し、四十八日の談義をはじめ兩流を校合せし遺跡なり。時に然阿をよみくちとして校合せしも悉く符合すと云ふ。依つて蓮寂房は勢觀上人の門流をば鑄西の義に符合せしめ、爾後別流をたてずと約諾す。談義に付ては勅傳四十六、九卷傳卷三・西宗要第二見聞(良榮)等に詳し。

**アキウラジヨウケン** 秋浦定玄 ニニノ 黒谷金戒光明寺第六十代。寂蓮社釋譽僧阿拙號と號す。俗姓は仁井田氏、常州江戸崎の人。弘化元年九月生る。嘉永五年四月同地大念寺釋譽に師事して法を嗣ぐ。安政五年三秋山増上寺に掛錫、宗學を研鑽すること十有餘年。明治六年十一月越前西福寺に晉重同十六年少教正に補せられ、同三十二年九月一宗公選により黒谷に轉住、正僧正に叙せらる。同四十四年大僧正に階む。この間、本山整備のため門末を督勵して堂宇の莊嚴、境内の改修につとむ。又宗學本校長、専門學院長等

に歴任し傍ら子弟を養ふこと多し。大正五年八月二十三日現職のまま寂。壽七十三。

**アグイ** 安居院 比叡山東塔竹林院の里坊。山城愛宕郡にありしものち廢絶す。今の京都上京區大宮上立賣の西方寺はその後なりと云ふ。宗祖に歸依せし聖覺法印住してより著名となる。

**アクゴ** 惡業 善業の對。惡果を招くべき身口意の動作を云ふ。五戒・十戒等に禁ずる諸業。

**アクシュ** 惡趣 善趣の對。惡業の酬によつて趣くところの場處。業の輕重により三惡趣・五惡趣等の別あり。↑サンナクシュ(三惡趣・ゴアクシュ(五惡趣))

**アクド** 惡道 前項に同じ。

**アクニンオージョ** 惡人往生 身口意の三業に惡を行ひ、特に佛法の正理を否認して信受せざる者が佛願に乗じて往生するを云ふ。觀經下三品の往生の如きこれなり、殊に眞宗に於ては惡人正機とて惡人を救ふを以て彌陀本願の本領と説く。

**アコ** 下炬 葬式の際、導師が火炬を乗つて、亡者を火葬するの意を表するものにして、轉じて導師が棺前に立つて告授する教語

となる。百通切紙第三に「下炬は智慧の火を以て、煩惱の薪を燒く標示なり」と云ふ。この式の始めは恐らく禪宗なるべきも、今では眞宗を除いて各宗殆んどこれを用ふ。下炬の起りは、支那黃檗の希運禪師に因ると云はる。傳燈錄によれば「禪師幼少にして出家し江西にあること二十年偶々郷里に歸りて母を訪ぬるに、母その顔を忘れて何れの人なるやを問ふ、希運母の迷執を憂ひ只江西の者と答へて去る、途中道中に逢ひその由を語る、知人歸りてその旨を母に告ぐ、母狂喜して希運の後を追ひ福清の渡場に沈溺す。希運母の聲に驚き舟中炬火を取りて照し見るに、母既に溺死せり。希運大聲を發して、一子出家すれば九族天に生じ、若し生ぜずんば諸佛の妄語なり」と一偈を唱え、一喝して炬火を投ず、其母遂に夜摩天に生ず」と云ふ。本宗に於ては先づ一本を下すは流轉門或は羅漢羅漢土の表示、一本を棄りて圓相を畫くは還滅門又は欣求淨土の表示となす。現時は木竹或は麻草を以て燈炬を製しこれを用ふ。但し土葬の時は鍋釜を以てこれに換ふ。これを下炬といふ。

アコー 阿訖 淨土宗並に時宗の僧侶の法諱の上に加贈する稱號。詳しくは阿彌陀佛

號又は阿彌陀佛名と云ふ。文治二年の秋俊乘房重源が大風談義の席に列して法然上人の説法を聞き信心肝に銘せし餘り、一の志願を立て吾が國の遺俗にして死後閻魔王宮に至り名字を問はれし時、佛號を唱へしめん爲め阿彌陀佛名をつくべしとて自ら南無阿彌陀佛と號せしに起源すと傳ふ。爾後吾が宗並に時宗にて此を阿訖と稱し、宗派を相承せる者はこの阿訖を法名中に加ふるを例とす。辨阿・然阿等その類なり。

アジヤセ 阿闍世 阿闍世 阿闍世に作り、未生怨と譯す。中印度摩揭陀國頻婆娑羅王の子。母の韋提希夫人が懷胎の時、相師占て此兒生れて父を害すべしと云ひしに由り未生怨と名づく。父王相師の言を懼れ夫人と謀り樓上より棄てしが、只指を損せしみにて死せず。故にまた婆羅留支(折指)と稱す。太子の時、釋尊教團の反逆者提婆達多に殺され、父王を弑し母后を幽閉して自ら王位に

即きしが、後、異母兄善婆に勸められ佛所に詣りて其の教を受け佛陀の歸依者となり、四禪を修して中印度の盟主となる。佛滅後第一結集に際し大檀越として一切の資具を供し、之が外護に當れり。佛滅後二十四年寂。

アシュン 阿春 三條山増上寺北谷の住僧。字は不可思議。諸學に精通し解深安論家に勝る。起信論本末の諸部に通じ毎夏二藏義を講ず。天和二年尾張國主の請により同地方を遷化せりといふ。壽不詳。

アショール 阿性房 法然上人の弟子。イソサイ(印西)

アズチシユロン 安土宗論 次項に同じ。

アズチモンドー 安土問答 正親町天皇天正七年五月二十七日近江國安土にて行はれし淨土宗對日蓮宗の宗論。曩に淨土宗關東の長老靈譽王念が安土に於て宗義を弘むるや日蓮宗の信者大脇傳内・建部智智より疑義を唱へ論問せしが、王念は日蓮宗の然るべき學僧と論議すべしと主張せしにより、織田信長の許可を得て安土淨土院に於て、前代未聞の淨土日蓮宗の大宗論開かれ出席者は淨土宗側より王念・西光寺聖譽貞安等、日蓮宗側より京都

妙覺・常光院日壽・妙滿寺久遠院日雄・頂妙寺日鏡・妙顯寺大藏坊等。判者として兩禪宗景秀・法性寺專譽・因果居士等參列して相互に論難應酬せし結果淨土宗の勝と判定せらる。大脇・建部は新羅に、日壽等の十三箇寺に屈辱的起請文を出して漸く結末を告ぐ。

アニーギコー 阿訖祇劫 阿訖祇劫 阿訖祇劫に作り、無數劫・無央數劫と譯す。印度數目の一。極大にして、數ふべからざる數量の劫。劫は分別の義、長時・大時又は時と譯す。極大なる時限の意にして多數の種別あり。阿訖祇劫は十の五二乘の分量ある劫をいふ。

アダチシヨ 足立鈔 良忠述。本因は觀經疏鈔八卷の内、散善義鈔三卷の異名。撰者良忠が武藏國足立郡野田に教化せられし時、松岡の禪師寺に於て談義せられしものを淨忍房の筆記せし所なり。足立に於ける談義の聞書なるが故に略して足立鈔と云ふ。本鈔の述作年代は明かならざるも、箕田の教化が文永年間なるを以て、恐らく此の頃なるべし。

アドー 下堂 佛堂より下ること。イタイドー(退堂)

アナン 阿難 Ananda 具がには阿難陀

と云ふ。譯して歡喜・慶喜・無染と云ふ。佛十大弟子の隨一にして、多聞第一と稱せらる。迦毘羅城の釋氏にして佛陀の從弟なり。阿難の傳記中、最も注意すべきもの三あり。一は二十餘年間、常隨給侍の弟子たりしこと。二は佛陀の姨母憍曇彌の出家に盡力せしこと。三は第一結集に於ける功績なり。長阿含一、中阿含三十三等に詳し。

アニチジ 阿日寺 奈良縣北葛城郡五位堂村。光明山誕生院と號す。惠心僧都誕生の靈地。寺寶の絹本着色聖觀音來迎圖は國寶なり。

アノクタラサンミヤクサンボダイ 阿多羅三藐三菩提 阿多羅三藐三菩提 阿多羅三藐三菩提は無上、三藐三菩提は正等覺(正遍知)、合して無上菩提・大菩提・菩提と譯す。佛の果證のこと。

アビバツチ 阿毘跋致 阿毘跋致 阿毘跋致・阿毘跋致に作り、不退・無退・不退轉と譯す。菩薩の地位より退轉せざるの義。菩薩ありて阿耨多羅三藐三菩提を得んと志念し深くその信に住し諸善法を集め、それより退轉して二乘地等に墮落せざるの意。

アブラヤマ 油山 筑前國早良郡にあり。聖武天皇の關代聖賢上人筑前國怡土郡

(福岡縣糸島郡)に七箇寺を立て、その寺の燈油の料に此山より麻油を作らしめたるより油山と云ふ。東油山(早良郡樋井川村)と西油山(同郡田隈村)に分れ、昔東油山・福壽寺に僧舎三百六十、西油山天福寺に僧舎三百六十ありしと云ふ。往昔の盛觀察するに足る。二願辨長建長元年廿九歳の時天台の奥義を究め、香月に歸り推されて油山の學頭となる。

アマカスターロウタダツナ 甘糟太郎忠綱 甘糟太郎忠綱 淨土歸仰の鎌倉武士。武藏國の御家人猪俣重野次廣忠の子なりと。建久三年勅を奉じて、比叡の堂家の横暴鎮壓の爲、飯岳八王子の社壇に登る途次、十一月十五日宗祖の座下に參じて、戰陣に於て命を失ふも念佛せば來迎に預からんとの説法を聞き、忠綱が往生は今日一定なりと悦びて、宗祖より賜はりたる袈裟を體の下にかけ、群居せる堂衆の中に奮闘し、遂に太刀折れ力及ばず、合掌念佛して往生す。

アマコー 尼講 一寺又は一佛菩薩等を中心として集合せる女子信徒の結社。近時何々寺婦人會と稱するものもこの類なり。所定の期日を設けて相集ひ、或は稱名念佛し、或は法話を聴き、或は佛前奉仕をなすを恒とす。



アマテラ 尼寺。尼僧の住職せる寺。起原は崇峻天皇三年(二五三)に學問尼善信等が百濟より歸り來つて櫻井寺に住せしに始まるものゝ如し。その後聖武天皇の時、國毎に國分尼寺を設置されてより現今に到るまで各宗を通じてその數甚だ多く、中には由緒ある尼門跡地もあり。京都の光照院・三時知恩寺等は其の著名なるものなり。

アマニユードー 尼入道 愚昧の道心者の意。女人の剃髮して佛門に入りたるを尼と云ひ、在家のまま剃髮して、佛門に入りたる男子を入道と云ふ。一枚起請文に「一文不知のぐどむの身になして、尼入道の無智のともからに同して」と云へる其の例なり。

アマノシロー 天野四郎 河内國の住人。もと強盜の張本なりしが、宗祖の説教により出家して教阿と號し、惡業を改め偏に専修念佛決定往生の想を定め、相模の河村に下りて正念往生す。壽不詳。

アマタ 阿彌陀 (1) 阿彌陀佛に同じ。  
アマタブツ (阿彌陀佛) (2) 覺明房長西の弟子。京都出雲路に居住、師承の諸行本願義を弘通せるも、師説に違して支義分釋名門に依據、十六門定善の義を立て鈔記を作る。弘安元年三月十五日寂。壽不詳。

アマタイケ 阿彌陀池 大阪市西區堀江町。欽明天皇十三年佛敎百濟より傳來し、その探古に關し、蘇我・物部の崇佛・排佛の二派意見對立し容易に決することを得ず依て佛像は蘇我氏に賜はり試みに禮拜せしめ給ふ。後ち天下に疫病流行せし爲め排佛派の物部は奏聞を得て、堂舎を破却し佛像を此池に投じたり。譽田善光靈感を得て之れを拾ひ上げ禮拜供養し、後信州善光寺を建てたりと傳ふ。現今此地に蓮池山智尊院和光寺と稱する淨土宗の尼寺あり。此寺は智善が元祿十一年に創立せしものにて本尊は承久三年に善光寺の本尊に模して鑄造せし金銅佛なり。

アマタキヨ 阿彌陀經 (1) 鳩摩羅什譯(一卷)。淨土三部經の一。小無量壽經・小經・四紙經・一切諸佛所護念經等とも言ふ。姚秦弘始四年(二五三)譯出。その内容は、佛が極樂の依正二報の莊嚴を説けるを、六方の諸佛が證説し、念佛の衆生を護念する旨を明す。本經の特色は無問自説すなはち問者なくして佛が自發的に説き出されしにあり。異譯として唐玄奘譯佛說稱讚淨土佛攝受經一卷あり。

アマタキヨイチセンチャク 阿彌陀經一選擇 選擇集第十六名號付屬章に出づ。宗祖は三部經の眞意は諸善萬行の中に於て念佛を選擇するを旨歸となすと云ひ、阿彌陀經について一選擇を擧ぐ。即ち選擇證説これなり。これ淨土往生の行少からずと雖も、六方の諸佛は餘行を證説せずして唯だ念佛の一行のみを選擇して證説したまふが故にかく云ふ。

アマタキヨイガツサン 阿彌陀經合讚 (一卷) 義賢觀徹著。阿彌陀經の末書。小經合讚ともいふ。先づはじめ五門を分つて一經の要を述べ、次に隨文解釋をなす。その手法毫に簡にして要を得、後世永く本經研究の指針となる。

アマタキヨキキ 阿彌陀經義記(二卷) 隨智願述。阿彌陀經の末書。本書は、天台智者大師智願が阿彌陀經の支義を論じ文意を釋せるもの。内容は、はじめに序文、次に經

の名義を釋し、ついで五重支義を以て經旨を究明せんとし、次に經文を序・正・流通の三分に分つて動物往生を主張す。本書は、日本偽作なりやの論あり、されど眞山智圓はこれを否定す。その文章簡略にして眞意了解しがたき極あり。

アマタキヨキシヨ 阿彌陀經義疏

(一卷) 宋元照述。阿彌陀經の末書。阿彌陀經疏義疏ともいふ。本書はもと律僧たりし著者が阿彌陀經の註釋をなし西方國生の志もたしがたく念佛の多端根なることを主張せるもの。内容は、はじめ自序あり、次に教・理・行・果の四法により阿彌陀經一部の綱要を示し、後ち入文解釋して執持名號を本經の宗旨となす。

アマタキヨキシヨモンジキ 阿彌陀經義疏開持記(三卷) 戒度述。阿彌陀經の末書。阿彌陀經開持記・戒度阿彌陀經疏・阿彌陀經戒度疏ともいふ。本書は淳熙年中四明龍山足庵沙門戒度が、元照の阿彌陀經義疏に或は註釋を施し、或はこれが布衍を試み、簡且要、よくその意を撰述せるもの。

アマタキヨサイシシヨ 阿彌陀經西資抄(二卷) 宋智圓撰。阿彌陀經の末書。

單に西資抄ともいふ。自作の阿彌陀經義疏を解釋せるものなりと傳ふるも現存せず。長西錄には惠淨の撰とあり。

アマタキヨジキダンヨチユキ 阿彌陀經直談要註記(八卷) 一シヨキヨジキダンヨチユキ(小經直談要註記)

(一卷) 前田聰瑞著。昭和三年刊。本書は、阿彌陀經の文に就て詳細平易なる解説を試みたるもの。その内容は十講より成り、はじめに序講として阿彌陀經の解説をなし、次に本講として經題・譯者・序正流通の三分について詳説し、最後に阿彌陀經の本文和譯並に新舊兩譯對照を載す。

アマタキヨシヤク 阿彌陀經釋(一卷) 源空述。三部經釋の一。阿彌陀經の末書。小經釋ともいふ。漢語體所撰の本書は、宗祖源空上人が俊乘房重源の請に應じて南都東大寺に於て講説されしものを筆記し、後ち修正して漢文體となせるものゝ如く、古本漢語體錄所收のものと異點少からず。何れにしても宗祖の述作なるが故に阿彌陀經研究上の權威ある資料とすべきものなり。

アマタキヨシヨ 阿彌陀經疏 (1) 新羅元曉述(一卷)。阿彌陀經義疏ともいふ。本書は、新羅國の元曉が阿彌陀經の簡單に註釋せしもの。内容は、經の大意、經の宗旨、入文解釋の三門に分ち、經文中の多善根福徳因縁を菩提心と解し、これを正行となし、一七日の執持名號を助行となすが如きは著しき特色なり。

アマタキヨシヨ 阿彌陀經疏 (二) 智圓述(一卷)。宋天禧五年作。阿彌陀經義疏ともいふ。本書は、天台の學匠眞山沙門智圓が阿彌陀經の註解を試みたるもの。内容は、はじめに自序、次に序説をなし、天台の五重支義に倣つて、辨名・辯體・明宗・論用・判教の五門を分別解説し、次いで入文解釋をなす。

(3) 唐窺基撰(三卷)。本書は、古來釋義の大家大慈恩寺沙門窺基の作とされたるも、近來該書は偽撰なりとなす説有力なり。内容は初めに大綱を示し以下七門を分つて經意を明し經文を釋す。

(4) 唐圓測述(一卷)。現存せざるも窺西樓了慧の如きよくこれを引用するより見れば、鎌倉時代頃には存せしものか。





三和寺創立に關心し、四十年二月三和寺寺號公稱を許可され、酒客若輩を教誨の擧げと鮮人教化に努む。病を得て大正三年七月二十四日任地に殉教す。壽三十八。

**アラカン** 阿羅漢 *Arhan* 阿羅訶・阿盧漢・阿羅阿に作り羅漢・阿羅と稱し、應供・殺賊・不生・離惡と譯す。三界の見思二惑を斷盡し、世間の供養を受くるに足る聖者を云ふ。即ち聲聞四果の究竟位に當る。原始小乘佛教に於ては佛をも亦た阿羅漢と稱せしも、大乘佛教に於ては専ら小乘の聖者のみを意味するに到れり。

**アラボトケ** 新佛 *ニイボトケ* ともいふ新亡の精靈に對する俗稱なり。

**アワノスケ** 阿波介 伏見に住せし無智邪見の陰陽師。常に酒色に耽溺し惡業をこととなす。ある時播磨に渡らんとし、道に迷ひ、現世の旅路すら先達必要なり況や後世の大事をやと道心を起し、宗祖の座下に至り念佛に歸仰し、常隨給仕して淨業を修す。常に百八の念珠二連もちて念佛す。問へば弟子ひまなく上下すれば其の緒つかれやすし。一連にては念佛し、一連にて數をとりて、つもの所を數を弟子にとれば緒やすまりてつかれずと。これ二連珠數の始めなり。爾後信心決定しひたすら念佛の功を積めり寂年壽不詳

**アノコ** 安居 *Anko* 雨期の義。即ち佛教徒が時期を定めて一所に會住し靜かに修養するを云ふ。印度の氣候として夏期は降雨甚しく遊化行乞すること困難なるを以て、一定の場所に會合し施主より飲食臥具等の供養を受け遊化中の罪障を懺悔し且つ佛陀の教誨を請ひ互に修行に精進すること三ヶ月、その最終日に自恣法を修し再び遊行教化に趣くを恒例とす。これを安居と稱す。安居の時期に關して異説あり、四分律行事鈔卷上に依れば四月十六日より七月十五日に至り至十六日を自恣の日とす。西域記卷八に依れば五月十六日より九月十五日までとす。吾が國では天武天皇十三年に行はれたる十五大寺の安居を以て其の始めとす。現今淨土宗・眞宗・禪宗等に於て之を行ひ、就中夏期に行ふものを夏安居、冬期に行ふものを冬安居、又は雪安居と呼ぶ。

**アンサイ** 安西 *Ansai* 伊豫の人。眞正法師に就き出家し、のち伊豫の大州の本誓寺に住す。淨業を修すること多年、阿彌陀佛の靈告により命終の期を知りたりと云ふ。寶永七年寂。壽七十一。

**アンジン** 安心 起行の對。心を所求所歸去行に止住して不動なること。安は安置、心は意念の謂。聖道門の發心に同じ。之を大別して所歸所求あるも未だ去行を具せざる總想欣求の心(總安心)と、所求所歸去行を具する安心(別安心)との二と爲すも、兩者相俟ちて初めて佛の正法に安住するを得。淨土門にては、觀經所説の三心を以て往生の正因と爲し、之を具して必得往生の安心を確立すべしと説くも、就中鐘西派にては厭欣心・菩提心・三心を皆安心と名づけ、西山派にては領解の三心、眞宗にては彌陀をたのむ信心を以て之に充つ。

**アンジョージョーシン** 安清淨心 三清淨心の一。イサンジョージョーシン(三清淨心)。

**アンジン** 安心 起行の對。心を所求所歸去行に止住して不動なること。安は安置、心は意念の謂。聖道門の發心に同じ。之を大別して所歸所求あるも未だ去行を具せざる總想欣求の心(總安心)と、所求所歸去行を具する安心(別安心)との二と爲すも、兩者相俟ちて初めて佛の正法に安住するを得。淨土門にては、觀經所説の三心を以て往生の正因と爲し、之を具して必得往生の安心を確立すべしと説くも、就中鐘西派にては厭欣心・菩提心・三心を皆安心と名づけ、西山派にては領解の三心、眞宗にては彌陀をたのむ信心を以て之に充つ。

**アンジン** 安心 起行の對。心を所求所歸去行に止住して不動なること。安は安置、心は意念の謂。聖道門の發心に同じ。之を大別して所歸所求あるも未だ去行を具せざる總想欣求の心(總安心)と、所求所歸去行を具する安心(別安心)との二と爲すも、兩者相俟ちて初めて佛の正法に安住するを得。淨土門にては、觀經所説の三心を以て往生の正因と爲し、之を具して必得往生の安心を確立すべしと説くも、就中鐘西派にては厭欣心・菩提心・三心を皆安心と名づけ、西山派にては領解の三心、眞宗にては彌陀をたのむ信心を以て之に充つ。

に「一念義に就いて安心起行の二門を立つ、謂く、安心門のときは心智の一念を以て不二の一念を解了す、乃ち此の理解を生因の體となし寂光土に生ずる淨土の體となし、此れを本願の正意となす」云々と評價されたるものにして、宗祖が「無念の新義を立て、稱の小行を失ふ」と言つて之を破斥されし所のもの。

**アンジン** の **イツシン** 安心一心 安心は之れを謂て言はゞ三心と次第するも東にて言はゞ「唯助け給へ」の一心に歸すと云ふ意。阿彌陀經隨講錄に「安心一心とは、願生の一心は即ち具九種の三心なり。故に元祖云たまはく、本願の至心信樂欲生我國、觀經の三心、小經の一心皆な三心なり。當に知るべし一心とは三心を指すこと」と言ひ、散善義傳通記に「所求所歸去行を思ひ定めて雜亂なきを安心一心と名づく」と言へる、皆この意なるべし。

**アンジンキギヨ** 安心起行 心を一處に安住して佛一如の眞理を體得せんとする方法的行動。略して心行とも言ふ。一般には、大經(至心・信樂・欲生)、觀經(至誠心・深心・廻向發願心)等の三心、小經の

一心等を以て安心とし、身口意三業に修する五念門・五種正行等を以て起行となすも、本宗に於ては一枚起請文に言へるが如く「たゞ往生極樂のために南無阿彌陀佛と申して安んずる往生するぞと思ひとりて申す」外には安心起行の體なしとす。即ち三心具足の念佛是なり。蓋し、安心は恰も目の如く目標に向ひて視ひを定め、起行は即ち足の如くそれに向ひて實行の歩を運ぶもの。されば此の二者は鳥の双翼、車の兩輪の如く互に離るべからざる關係にあり。所謂「知行足到清涼地」の心地その儘目的遂行に任ずる必要要件なり。

**アンジンキギヨ** サゴ 安心起行作業 淨土宗に於ける心行及び修相の綱格を該括せし語。略して心行業ともいひ、善導の往生禮讚に「今人を勸めて往生せしめんと欲す。未だ知らず若んが安心起行作業して定んで彼の國に往生することを得るや」と云へるに基づく。安心とは觀經に出づる至誠心・深心・廻向發願心の三にして、大經には之れを至心・信樂・欲生といひ、阿彌陀經には總括して一心と云へるもの。起行とは上の安心を以て身口意の三業に發起して修する行にして禮拜・讚歎・作樂・觀察・回向の五念門、

讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養の五種正行等。作業とは安心起行を策勵する相觀にして恭敬・無餘・無間・長時の四修をいふ。かく一往は安心・起行・作業の三種を分つと雖も、その實際に於ては、只だ助けたまへの一心に住して行住坐臥を分たす南無阿彌陀佛と稱ふるを、三心具足の念佛となし、淨土宗義の正意となす。安心・起行・作業の各項を照。

**アンジンキギヨ** サゴ 安心起行作業 淨土宗に於ける心行及び修相の綱格を該括せし語。略して心行業ともいひ、善導の往生禮讚に「今人を勸めて往生せしめんと欲す。未だ知らず若んが安心起行作業して定んで彼の國に往生することを得るや」と云へるに基づく。安心とは觀經に出づる至誠心・深心・廻向發願心の三にして、大經には之れを至心・信樂・欲生といひ、阿彌陀經には總括して一心と云へるもの。起行とは上の安心を以て身口意の三業に發起して修する行にして禮拜・讚歎・作樂・觀察・回向の五念門、

**アンジンケツジョ** 安心決定 安心の既に定まりて動搖せざる状態をいふ。

**アンジンジョーケツリヤクシヨ** 安心決略鈔(一卷) 聖德太子傳記。淨土傳燈要卷上所載。本書は、念佛を申すに於ては安心相傳の大事といふことあり。若しこの大事を相傳せざれば往生は不可能なりやといふ問に對して、本宗は普通平凡の人に對して説く所の教なるが故に決して六かしく説か

ず。念佛すれば必ず福業に詣ると信じて、あな有り難く南無阿彌陀佛・南無阿彌陀佛と稱へるばかりが本願の正體なりとす。この意味を十分に理解せし人、即ち安心相傳の人なり。要する所我宗は一教把持に習ひ教むるの教實なり。このことが最も重要であることなるもの。

**アンジンのセンジン** 安心淺深 衆生所具の安心の淺具と深具とを云ふ。濁世の凡夫同じく念佛を以て往生すれども其の品位階降同じからず。一念にして上上品に通ずるものあり、一形念佛して下下品に往生するものあり、これ安心の淺具と深具とによるものにして深具のものは高く淺具のものは低し。即ち安心を以て衆生往生の品位階降を區別するなり。

**アンジンノイツコキシンノイツコ** 安心の一向疑心の一向 心を専ら信に安んずるを安心の一向といひ、心を専ら疑に傾くるを疑心の一向といふ。即ち心行の多少による四句分別の中、一向心多の句を安心の一向と言ひ、信實の淺深による四句分別の中、一向疑心の句を疑心の一向と稱す。前者は一向に三心を具して決定往生の行を導くも、後者は専ら疑法を信じて、我が心の正體を疑ふ

が爲に或は往生する者もあり而らざる者も生ず。後者は所謂一分往生の徒なり。

**アンジンノオージュ** 安心の横強 (一) オージュノアンジン (横強の安心)

**アンジンノニジ** 安心の二字 (一) ジョーノアンジン (淨土宗七字の口決)

**アンジンモン** 安心門 起行門の對。

(一) 安心の起行門の根本要件とする安心派をいふ。淨土宗西流に於ては起行門すなはち念佛實踐を重要視するに對して、觀望義、幸四の一念義等に於ては念佛往生の義を領解することを根本要件となす。これを安心門といふ。聖光房師長の念佛名義集下に「或る人は一念義を立て、安心門起行門とて二門を立て、安心門の往生こそ目出度けれ、安心門を知らんと思はば、我が流に入て我が流の學文せよ、安心を知らずして申さんずる念佛は往生すまじ、徒ら事なりとて念佛申す者留む」と云へる是れなり。正流に於ては安心起行共に重要不可缺なりとなすも、安心派より見れば起行を重視するが故に起行門すなはち起行派といはれる。

分ち、別安心の中には横の三心、堅の三心等も分つも正しく要説するところは別安心なり。

**アンジンリユーニョー** 安心立命 佛

陀の聖教を信じ、心が安定して動轉せざることを。蓋し身を天命に任せて自ら安んずる安身立命より轉じたるものなるべし。多く禪家に於て云ふ所なるが餘宗にても用ふ。各宗の間にその所談相違せり。天台は三諦を離れて安心立命の所なしとし、禪宗は不可得の境地を指し淨土宗は願心・菩提心・三心を以て立命し、西山派は領解の三心により、眞宗は願心・信心を以て立命となす。中に就て淨土門は總安心と別安心の二種に區分して説く。(一)總安心。これは信心のみにて修行の末に伴はぬを謂ひ、これに菩提心・願心・觀無量壽經に説く至誠心・深心・懇切願心の三心・無量壽經に説く至心・信樂・歡生の三信これに當る。何れにしても身も心も阿彌陀佛に打ち任せて供養安奉なるをいふ。

**アンジンロン** 安心論 安心とは、淨土行人としての宗教信仰確立して、教で動搖せぬ所をいふ。これを淨土修行の要目とせしは善導なり。宗祖は「安心とは心づかひのあり

さまざま」と示されてある。然らば淨土宗は如何に心を安住するかと云ふに、心を極樂、阿彌陀佛、念佛に安住せしむることにして之を卒直に云へば唯「助け給へ」といふことなり。善導は淨土行者の安心として、觀望の三心即ち至誠心・深心・懇切願心を擧げ、西方を願ふ一般行者の必ず發さねばならぬ心として、一を闡くも往生出来ぬとなし、良忠は更に一般佛教意識の菩提心、厭世心をも開示せり。併し三心の大切なる事を強調せしは淨土宗列祖の擧を一にする所なり。(一)アンジン(三心)

**アンダエ** 安陀會 *antaksha* 三衣の一。安明婆娑・安多術・安陀羅跋薩に作り、內衣・中衣・裏衣・中著衣・下衣と譯し、五條の布切を以て作るより普通、五條衣・五條袈裟ともいふ。(一)アンダエ(五條袈裟)

**アンニョー** 安養 極樂淨土の異名。具さには、安養國・安養土、或は安養世界とも云ふ。無量壽經下卷に「善哉歡喜去、盡到安養國」と云ひ、良忠の觀望禪定善義傳通記第二には「觀望・小經には同じく極樂と名づけ、無量壽經には名づけて安養となす」と述べ、且つ安養の字訓に關して義寂は「心を安し、

身を養ふの義」とし、如法の淨業記には「安養生を安樂に養育するの義」と云へり。これ安養を以て極樂又は安樂の異譯となすの説なり。然るに一説には安樂は梵語 *anulabh* の譯にして、樂有の義を有し、安養は梵語 *anulabh* 或は須阿摩提 *anulabh* の譯にして、有甘露の義なるべしと云ひ、有甘露即ち安養の稱は、恐らくは彌陀淨土の原始的な意義ならんとせり。

**アンニョーイン** 安養院 (一) 神奈川縣鎌倉市大字名越。祇園山長榮寺と號す。當寺は初め律宗に屬し、開山は隆寛の高弟願行なり。願行は諸國巡行中當院久慈郡阿彌陀山に於て、一夜源朝の亡霊來り趣向を乞ふと夢みたるを以て、直ちに鎌倉に入り、之れを二位禪尼政子に告げ、稻瀬川の邊りに於て別時を創む。政子は夫朝の菩提の爲め一寺を創建し願行を住せしむ。此れ安養院開創の緣起なり。當院は延慶三年十一月關東大火の際及び元弘三年頃兵火に罹り兩度焼亡せし爲め、尊觀の遺跡たる善導寺に移建し、兩寺を合一して一寺とす。淨土宗に改められたるは第十五代昌譽の時にして、天文以後寺門興隆せしも延寶八年十月同様の災に罹り講堂燒失せり。尋いで本堂を再建し、その他觀音堂

地藏堂・鐘守社・鐘樓等を建立す。觀音堂は田代寺又は田代堂と稱せられしものを移建せしものにて千手觀音を安置し、坂東三十三所第三番の札所として名あり。(二)京都市下京區堀ヶ井通五條下ル。開山深誓法論大僧正。永祿元年、正親町天皇崩御。天皇は篤く深誓法論に歸依したまひ、後白河法皇創業の遺蹟に一字を建立し轉法輪廣度寺安養院と號す。後ち兵火に見舞はれ、明治十九年現在の堂宇を再建す。

**アンニョーシ** 安養寺 (一) 京都市東山圓山公園。現在時宗に屬するも法然上人の青水庵の遺跡なりと傳ふ。知恩院大鐘樓の傍にあり。近時漸く荒廢して今は小庵を存するのみ。

(二) 茨城縣結城縣豐岡村。無量山晴雲院と號す。延應二年横曾根城主羽生氏經の開基。初め文秀寺と稱せしを應永四年飯沼弘經寺開山良慶堂宇を再建して今の寺號に改むといふ。當寺は所謂曾根談所にしてかの了覺聖願法冠を敷きし芳躰にして徳川幕府時代には寺領を附せらる。

(三) 東京市淺草區田島町。開山單尊上人。桂昌院殿の新願により、元祿九年創建。同十一年類焼、同年木庄因幡守に再建仰付けられ現

在の地に再建す。

(4)若松市旭小路。修多羅山と號す。開山念譽上人。慶長四年八月城主大庭隆政守逝去の勸進益和尙引導焼香をなし、その布施として境内地を寄附せられ此の地に移轉す。本尊阿彌陀佛は行基菩薩の作なりと傳ふ。

(5)トクリヤデラ(野寺)

アンニョーシヨ― 安養抄 (1)著者不明(八卷)。平安末期の古寫本にして奈良東大寺圖書館に現存す。本書は、思想内容より見れば天台學者の手に成りしもの、如く、恐らく平安末期の天台淨土教學者良慶の著作ならんか。内容は、安養淨土並に三輩九品の往生相を詳説し、八十七科の問答より成る。

(2)印融述 (三卷)。釋論安養抄ともいふ。明應三年刊。本書は、龍樹の釋摩訶衍論十卷の中、第十卷四目下已下に於けるまとして淨土思想に關しての論斷法擇を記述せしもの。一部三卷の内容は、十六の問答より成る。

(3)源隆國述(十卷)。坂本西教寺藏。本書は宇治縣宰相たりし著者が、極樂淨土並に往生の様相を記述せしもの。本書は久しく缺本と推定されるが、近時近江坂本西教寺より發見さる。

アンニョーシヨ― 安養淨土ニアンニョー(安養)

アンニョーチソクソウタイシヨ― 安養知見相對抄(一卷) 珍海述。東大寺圖書館藏。大正藏經第八四卷所收。鎌倉時代寫本。本書は、平安末期の學僧たる著者が、自らの學系たる三論の立場より、彌陀淨土と兜率淨土とを相對比較せしもの。その内容は、はじめに懷感群疑論の八異、進ず淨土論の七種差別を惠心往生要集・天台十疑論等を率ゐて、西方は易、兜率は劣なりとし、次に慈惠の上生經疏の説を擧げて西方兜率共に是非詳説すべからざることを主張す。

アンニョーホーケ 安養報化 安養極樂淨土)は報土が化土かの論題。天台の如きは淨土三部經所説の西方淨土を凡聖同居土と判じ、又諸師も多く化土と判ずるに對して本宗にては淨土三部經の所説に立脚し、西方淨土は四十八願所成の淨土なる故因果感果の土となし、純報土にして化土に非ずとなす。道綽・善導は大乗同性經の説を引用して唯報非化の理由を論證せり。

アンニョーホーケ 安養報化 安養極樂淨土)

アンブクジ 安福寺 大阪府南河内郡玉手村。玉手山と號す。行基の開基と傳ふ。建

長六年多田左衛門尉光雲與覺の仰せをうけ當寺を復興し、後ち國守安福八郎左衛門宗正、淨財を投じて堂宇を重建す。應仁年間一時廢絶せし。寛文十年山科圓信寺の阿彌來りて其の廢墟に諸堂を造營し、輪奐の業を極む。阿彌は百萬遍知恩寺の流を汲みたれば、それより淨土宗に屬す。山水繪繪・善提樹蔭香宮等什寶頗る多し。

アンラク 安樂 極樂淨土の異名。トヤクラタジヨード(極樂淨土)

アンラクジ 安樂寺 (1)京都市左京區鹿谷町。山田山と號す。淨土宗西山派の寺。法然上人の弟子住持。安樂房の念佛修行の遺蹟。境内に、住持・安樂に隨つて華髮せし松蟲・鈴蟲の墓あり。

(2)岐阜縣不破郡本坂町。聖德太子草創と傳へられ、山上の法興印五重の塔は天智天皇御書提のために建立せし古塔、五重目の一石離れて峰にあり。寛正年中、足利義親遷徙して當寺に在りしが故に開山御所と稱す。寺内の梵鐘は初め播州にありしを慶長の亂に隣鎮として持來ると傳ふ。

アンラク。ジツシヨ― 安樂十勝 極樂淨土の殊妙なる點に十種を數ふ。慈惠大師

窺基の所説なり。十勝とは、一に、化土所居勝、二には所化命長勝、三には國非界聖勝、四には淨方無欲勝、五には女子不居勝、六には修行不退勝、七には淨方非穢勝、八には國土莊嚴勝、九には念佛攝情勝、十には十念往生勝なり。この十勝は天宮の十方に對して淨土の十勝として説かれ、以て淨土往生を要めしものにして阿彌陀經通發疏下に出づ。

アンラクシユ― 安樂集 (二卷) 唐道綽撰。淨土第一卷所收(義山校本)。本書は著者道綽が自己末道の體験より得たる信念に立脚して、二代佛教を聖淨二門に分別し、末法の劣機得脱の要道は偏に阿彌陀佛の西方淨土往生にあるべきことを勸進せしもの。その内容は觀經の概説とその釋意顯彰を主眼となし、十二大門に分つて安樂淨土に關する佛身佛土願行得益等種種義門の釋論を集説せり。

一部十二大門の中、第一大門に九小節、第二大門に三番料簡、第三大門に四番料簡、(以上上卷)第四大門に三番料簡、第五大門に四番料簡、第六大門に三番料簡、第七大門に二番料簡、第八大門に三番料簡、第九大門に二番料簡、第十大門に三番料簡、第十一大門に二番料簡、第十二大門に一番料簡あり(以上下卷)。以て二門教判、稱名念佛(一行三昧)、報身

報土、他力往生、本願念佛等を強調し後の善導教説の先驅となりし感徳からず。從つて支那淨土教史上の要書たるに止らず日本淨土教に於てもかなり重視され、その淨土教に對す功績優すべからざるものあり。末書亦た少からず、三祖良忠の私記を正流に於ける最古且最上の權威書とす。

アンラクシユゲンダン 安樂集玄譚 (二卷) 雲龍述。續淨第五卷所收。安樂集の末書。本書は、道綽の安樂集はその内容十二大門に亘り甚だ廣博なるも、その要は勸信求往の四字に竭くるものとなし、五門に分つてその玄譚を試みたるもの。

アンラクシユサンシャク 安樂集纂釋 (二卷) 圓諦述。續淨第五卷所收。安樂集の末書。本書は、萬福寺圓諦が道綽の安樂集註解を試み、良忠の安樂集私記をその規準となし、その他の釋論章疏を參考援用して安樂集の文義を究明し、且つ良忠私記中の難解の字句の註解をなす。

アンラクシユシキ 安樂集私記 (二卷) 良忠撰。淨土第一卷所收。安樂集の末書。弘安五年作。本書は、記主良忠が、その該博なる學識と卓拔せる識見と眞摯なる信仰とに

立脚して、道綽の安樂集の註解を試みたるもの。よく安樂集一部の深旨を顯示し亦た難解の字句を詳述す。本書は、安樂集末書の最初のものにしてよく一般に流布し、該書研究上の權威書ともいふべきもの。

アンラクシユシケンモン 安樂集私記見聞 (二卷) 良榮述。淨土第一卷所收。安樂集の末書。本書は、大澤圓通寺良榮が、良忠撰安樂集私記の註釋を試みたるものなるも、私記の末盡の義はこれを究明増補し、私記が解説を省略せる部分はこれを詳釋せるものなるが故に、良忠の私記の補遺ともいふべき内容を持つ。本書を良榮述とするは文雄の蓮門經釋録に初まるも、内容より見て眞偽疑はし。

アンラクシユノマツシヨ 安樂集の末書 唐の道綽禪師の安樂集は師の信仰體験よりした觀經觀乃至一代佛教觀として夙に善導大師によつて要視され、從つて該書の研鑽は古來廣く行はれその末書の現存するもの少からず。今、正流關係の主なるものをあぐれば安樂集私記(二卷)(良忠)・安樂集私記見聞(二卷)(良榮)・安樂集纂釋(二卷)(圓諦)・安樂集玄譚(二卷)(雲龍)等あり。各項参照。



易く而も決定往生の業なるが故にかくいふ。蹟西の淨土宗旨問答に「問、善導和尚所立の念佛は何んぞ易行にして而も亦た決定往生するぞ。答、觀念を用ひずと雖も唯だ彌陀の名號計を稱へ、亦た持戒を用ひずと雖も只だ口に佛名を唱ふ。之を以て案ずるに易行の念佛は其れ善導轉化の念佛なり。決定往生とは彌陀の本願を信じて一念の疑心無きが故に決定して極樂に往生することを得。故に善導和尚一切の衆生に於て念佛往生を教ふるなり。故に善導和尚の念佛を易行にして往生することを得ると云ふ」とあり。

**イキヨーフタイ** 易行不退 難行不退の對。易行他力の行法を修して不退轉に至るをいふ。イナシゴヨーフタイ(難行不退)

**イキヨーパーン** 易行品 (二卷) 龍樹造・鳩摩羅什譯。後秦弘始年中譯出の十住毘沙論卷五より抽出別行せしもの。本書は龍樹淨土教の精要を示せるものとし、凡に曇鸞によりて二道教判の典據として採用され又道綽の二門教判の示唆となれるものにして、その内容は虛弱の凡夫は自力聖道の行即ち陸路の歩行の難きに對して水路の乘船の易きにも比すべき信方便の易行を以て阿難越致地すなはち不退轉地に到るべきことを説く。その

易行法としては(一)東方善德佛等現在十方十佛(二)阿彌陀佛等現在一百七佛(三)五言三十二行の彌陀稱讚偈(四)過去七佛及び未來彌勒佛(五)總勝等佛(十一佛)(六)過・現・未の三世諸佛(七)善意等一百四十三菩薩等をあげこれらを憶念禮敬してその名號を稱すれば速に不退位に到ると説くも、淨土教にては一般にこの一品が阿彌陀佛を主説せるものと解す。

**イクエイチユウカツコ** 育英中學校所在地、茨城縣北相馬郡山王村大字山王。明治四十三年四月七日現校長齊藤典察が育英學舎中學として創立せるもの。その教育方針は佛教精神により人格教育を主眼とし自治訓練をなし、極端なる時代思潮に陥らざ公明正大堅實なる人材養成をなす。創立二十五週年紀念式に當り卒業生千二百餘名地方青年の中堅となり模範となり、本校出身者にして法の犯罪僅々二名特に本校の誇りとすと云へり。以てその大體を窺ふべし。

**イケノミズノミエ** 池水の御影 宗祖影像の一。法然上人の詠歌池の水を具象して畫ける宗祖御影にして、現在知恩院蔵。**イコー** 已講 學路第二級の名稱。イガツカイ(學路)

宗義開出・三流の相承・彌陀の淨土・出世本懷總別本願・本願念佛・總別安心・菩提心の解五種正行と五念門・十一門義以下二十項目について淨土宗義の精要を論述してその正意を顯彰し、終りに附録として持戒念佛を説き圓頓戒について論及するところあり。

**イタイエング** 草提厭苦 草提希夫人(類聚沙羅王の妃)が苦を厭ふて淨土を欣求するに三重の難あり。即ち初めは我が子阿闍世とその反逆提婆との懸計の爲めに幽閉せられしことを厭ひ、次には閻浮に生を受けしことを厭ひ、後に總じて苦の變遷を厭ひしことを云ふ。

**イタイケ** 草提希 *Yaitake* 毘希・吠陀提・吠提等と音譯し、思惟・思勝・勝身と意譯す。中印度摩揭陀國王頻婆娑羅の夫人にして阿闍世太子の生母。その事蹟は觀無量壽經に依れば、阿闍世太子が異友の示唆によつて父子相殘婆羅を七重の室内に幽閉し、餓死せしめんと企てし時、夫人は身に珍寶を塗り、璽路に雲を盛りて密に之を玉に隠し、且つ自ら深く厭世心を起し、佛陀に求哀憐愍せしを以て、佛陀は其の請を受けて玉宮に來り以て該經を演説せられしものにして、佛が第七華嚴觀を説かれし時無生忍を得、佛力によ

**イコントーのオージョー** 已今當往生イサンゼオジョー(三世往生)

**イサン** 位産 三三三増上寺第二十二代天竺社囑譽邊河と號す。俗姓不詳。或は信濃の人にして諏訪氏の末流鹽屋氏の息といふ。始め幡崎意に師事して宗戒二願を繼承し、下谷に清水寺を開き教舟の別道場となす。のち結城弘經寺邊無に嗣法研學す。學成りて川越蓮華寺・鎌倉光明寺・小石川傳通院等に居住し、慶安三年、幕府の命により増上寺に晉む。承應元年八月二十日寂。壽六十六。

**イシイダイセン** 石井大宣 *Daizen* 増上寺第六十九代。溫學と號す。明治五年小石川傳通院より鎌山に轉昇。明治十一年兩部管長制布かるゝや東部管長となり、同十二年五月職を辭し、同十七年一月廿五日寂。壽不詳。

**イシガキ** 石垣 筑後國竹野郡(難調縣)浮羽郡水堀村石垣。勅傳に「石垣の金光坊は上人稱美の言を思ふに、淨土の法門闡奥にいたれることしりぬべし」とある金光坊は、決答銘心録によるに此地にある石垣山圓樂院觀音寺の別當なりと云ふ。

**イシガキノコンコーボ** 石垣金光坊イコンコーボ(金光房)

**イシカワ** 石河 石川の里とも稱し、東鑑には相模國澁谷莊にありと云ひ、銘心録には相模國大庭の御厨内の郷の名なりと云ふ此の地に秩父の禪門道場あり、澁屋の一門秩父の末孫にして、世に石川禪門と云ふ。禪門は正嘉元年三祖に書狀を送りて來臨を求め、法然上人の行儀を物語らんとす。三祖は禪門よりの重ねての書狀により下總に於ける傳通記講述のなかばにして此の地に趣き禪門の物語を聴き、決答疑問抄の序文を書き改む。持阿の受決抄に三祖は鎌倉へ移住後も屢々禪門を訪れられし事を傳ふ。

**イシカワゼンモン** 石川禪門 *Zenmon* (道場)

**イシカワノサト** 石川里 前項に同じ。

**イシンクドク** 威神功德 佛の偉徳を顯す語。無量壽經卷上に「若し衆生ありて、其の光明の威神功德を聞いて、日夜に稱説し」云々と述べ、同卷下に「十方恒沙の諸佛如來皆共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讚歎し稱ふ」と云へるものこれなり。

**イズモシユヨ** 出雲宗要 (二卷) 桑門秀我著。昭和十年刊。本書は、淨土宗勸學桑門秀我師の喜壽を祝して桑門門下が恩師の論文集刊行を試みたるもの。その内容は、

りて苦惱を除き淨土を觀想することを得て大悟徹底せりと云ふ。

**イタイケロン** 草提希論 草提希夫人の本性は、權なりや實なりや又凡夫なりや菩薩なりやの論題。淨影は實にして大菩薩なりと云ひ、天台・瓊芝等皆な大權の化現なりと説くも、善導は凡夫にして聖者にあらず、實にして權にあらずと主張せり。次項參照。

**イタイゴンジツ** 草提權實 草提希夫人は權化の人なりや、事實の凡夫なりやの論題。觀經には「佛、草提希に告げたまはく、汝は是れ凡夫にして、心懸望方なり」と、これは實凡となせる説なり。心地觀經序品には、十六大國王の夫人として草提希夫人等を列らね之を嘆じて曰く「已に善く無量正定に入り、衆生を度せんが爲に女身を示現す」と、これは權人となせる説なり。以上權實二説に就いては、聖道淨土の諸師の間に異説あり、聖道門の師多くは權化の人となせるも、善導は實凡とせり。之に就いて良忠は觀經序分義傳通記卷三に二義を立て、一義には心地觀經・安樂集及び淨影の説を證として權人とし、一義には善導の釋を證として實凡なるべしとせり。然して自らは善導の釋義を依用せり。

**イタイチシヨ** 草提致請 觀經一部



の内容は總べて佛が慈悲希夫人の教誨に應へられしものなり。又は佛自説の部分ありやに  
ついでに論議。講論の後、慈悲希夫人が釋尊に請ひしは定善散善の両面に涉るとするに對し、善導は定善のみを立據の教誨として散善は佛の自説となし、これを立據するに遍所求・遍去行・俱修通所求・遍所求・別去行の五文を以てせり。

**イダイトクニン** 草提得忍 觀經所説の如く、慈悲希夫人が深宮に幽閉せられ、舌根を除くの法を釋尊に請へり。佛はこれに對して淨土を説く法を説き示し、第一日想觀より第七華座觀まで説き進まされし時、夫人は遂に無生法忍を得たるを云ふ。

**イダイヤクイ** 草提得忍 慈悲希夫人が無生法忍を得たる位次は如何と云ふ論議。淨影は菩薩十地の中七・八地の位とし、天台は初地初住なりと云ひ、嘉祥は上々・上中の二品は七地、上上品は初地の位と主張せるも、善導はこれらの諸師の説によらず、十信と初地となりと主張す。

**イチイチセイガンイシユジョー** 一々願爲衆生 彌陀四十八願の一々悉くは衆生救済の大慈悲の顯れなりとの意。この語、

善導の教母論に出づ。

**イチギョー** 一行 往生淨土のための唯一の行といふ意。いふまでもなく念佛の一行を指す。宗祖の選擇意には、雜行をすて、正行をとり、助業をすて、正定業すなはち念佛一行を佛の本願の行として選擇し、二祖四祖は授手印の中に於て結歸一行三昧といへり。これ正しく、切の往生淨土の行業ことごとく念佛の一行に歸着することを説けるものなり。

**イチギョー** 一形 一期ともいひ、俗に一代又は一生といふに同じ。吾人の形體の存続する期間を云ふなり。イチゴ(一期)

**イチギョーイン** 一行院 徳川中期の高徳本願の遺蹟。東京市小石川區原町。天曉山彌勒寺と號す。寛永三年の再建。圓山春貞、開基伏元三太夫、中興圓山本行者。本堂は東に面し本尊の聖觀世音は木像にして非覺大師の作と傳ふ。徳本行者の墓あり、御影石の瑞相を二重に繞らし高さ二丈餘の五輪塔あり。

**イチギョーグマンギョー** 一行具萬行念佛の一行に諸善萬行を具足せりといふ義。選擇集に「名號はこれ萬徳の證する所なり。然れば即ち四智三身十力四無畏等一切内證功德、相好光明説法利生等一切の外用の功德皆具す。

**イチゴンホーダン** 一言芳談 一言芳談抄とも云ふ。本書は日本淨土教の祖師先達中より法然・聖光・良忠・顯眞・明海・貞慶・聖覺等二十餘師の法説中より片言句々の短篇を抄録したるもの。その編述方針は始めより組織的に抄出することなく、目に觸るゝに従ひ座右の語として書き取りたるものゝ如し。原本は一巻本、二巻本、或は三巻本と種々あるも、藏書目録に従て收められたる一巻本がその原型を傳へてゐるものと思はる。編者不明なれど慈心及びその師良忠に師事せし者ならん。末書、一言芳談句解四卷・標註一言芳談三卷。

**イチジツ** 一實 (1) ↓カクザン (觀山) (2) ↓リユゼン (隆善)

**イチンヨ** 一乘 *ichin-ya* 二乘・三乘・五乘の對。一佛乘とも云ふ。一とは絕對にして二三等の別なきを云ひ、乘は運載の義にして佛の教法に譬ふ。各宗によりその深多少の異ありと雖も要するに一切衆生をして悉く成佛せしむる教法を云ふ。淨土教に於ては善導が立説分に頓教一乘海といへる如く念佛の法門を一乘法と解す。

悉く阿彌陀佛の名號の中に跪在す。故に名號功徳最も勝と爲す」といひ、又「念佛はこれ大善根なり、勝善根なり」とあり。大原問答に「萬善の妙體は六字の名號に存し、恆沙の功徳は口稱の一行に存す」といへるが如き皆この意なり。

**イチギョーザンマイ** 一行三昧 一相三昧ともいふ。心を念佛一行に專注する所謂念佛三昧のこと。元來、三昧に二あり。(一)理の一行三昧、即ち心を定めて眞如の理を觀すること。この三昧によつて行者よく法界平等を觀じ、無量の三昧を生ずるが故に三昧の根本と云はる。(二)事の三昧、即ち一心專念に念佛すること。これ念佛三昧の異名なり。念佛三昧は一心に佛の相好の莊嚴なるを觀察し、或は一心に法身の實相を觀じ(觀相)、或は一心に佛名を稱ふる(稱名)ことをいふ。遺教の安樂樂土下に紫首經の「相三昧並に文殊般若經の一行三昧等」を擧げ、諸經は多く念佛三昧を宗となすと云ひ、善導の往生禮讚偈に「直ちに修し易き稱名を勤むるの意なり」となせる是れなり。斯様に淨土教の一行三昧は理觀に非ずして、事の一行三昧を相承して、專稱名號の易行念佛を勤むるにあり。イケツキイキョーザンマイ(結歸一行三昧)

に喩へたるもの。三乘は川の如く一乘は海の如し。相對的に論ぜば、三乘の外に別に一乘ありて、一乘の三乘に超越せるは海の川より大なるか如し。又絕對的に論ぜば、一乘の外に三乘なく、初より一乘の大海に入りかぬる者の爲に暫く一乘の大海を分ち三乘の川を設けたるなり。かく川の海に流入する如く、三乘は一乘に歸すべきものなり。此の一乘法の廣大なること海の如くなる故に一乘海と云ふ。

**イチジョー** 一乘寺 (1) 福井縣福井市。同山は勢願房滿智。源智北國に念佛の法未だ弘まらざる爲、宗祖の誓により下向し、歸依の道僧尤だ多く、越前國一條ノ谷に三字を建立して道化を布く。此の寺は乃ち一乘圓頓の稱名を弘むる寺なるが故に稱して一乘寺といふ。兵亂に厄されて堂宇燬失、乃ち現地に移りて今日に及ぶ。

(2) 大阪府北河内郡枚方町。開山光譽素寛和尚。開基城主本多内膳。住古は比叡山の別院日吉權現の別當なりしが元久元年二祖鑑西上人南海の地方に下向のとき此地に留錫せしことあり、慶長五年淨土宗に改む。開山光譽素寛は靈巖の高足なり。寺寶數點。

**イチジョーハ** 一條派 次項に同じ。

**イテネンゴージョーキ** 一條流 三祖記主  
良忠門下六派の一。一條派ともいふ。禮阿然  
空の立つる一流にして、その門流多く京都一  
條(清淨華院)に住せしを以て此の名あり。  
又仁和寺の西谷法智明院に住せしを以て西谷  
流、又は法光明院義とも稱す。白旗流とは祖  
文の解釋に多少の相違あるも、安心起行の要  
旨に大差なく、禮阿の門下に向阿澄賢出で一  
條流を繼承し、尋で玄心・澄法・等照等の傑  
才出で、一時隆盛を見たるも、後次第に衰頹  
し、白旗流に合流せり。

**イチド** 一 道 ↓レイジュン(雷順)

**イチネン** 一念 多念の對。一尊念佛を  
いふ。無量壽經卷下に「其の名號を聞いて信  
心歡喜し、乃至一念す」と云へり。この一念  
の意義について淨土諸家の間に異説あり。宗  
祖は善導の往生禮讚偈等に依りて念聲は一の  
義を立て、一念を一尊の稱名念佛となす。眞  
宗の如きは、願成就の一念を信心の一念とし  
無量壽の法蓮文の一念を行の一念とす。或  
は又兩説を合して、一念大力の力は信に在り  
と雖も、それを得るは行に在りと云ひ、或は信  
の一念を得たる功德を稱へ願はす稱名によせ  
て、一念大力を説くとなす等諸説あり。此の

他又願成就の一念を至心願の成就せる所に  
名づけ、之を事究竟の一念とする説あり。又  
佛體に歸する能歸の一念とする説等あり。

**イチネンオージョ** 一 念往生義  
次項に同じ。

**イチネンキ** 一念義 宗祖門下の異義の  
一。建久年間に至り宗祖門下の間に異義を生  
じ、淨土往生に關して多念・一念の論あり。  
この中、淨土往生は多念を要せず一念を以て  
往生決定すと主張する一派を云ふ。蓋し一念  
義中に數種の主張あり。妙瑞は淨土宗要支派  
に「一念の邪義に三家あり、成覺房・法本房・  
觀覺房なり」と云ひ、續西名目問答卷第  
一にも同説一出せり。觀覺の宗義を直に一念  
義と名づくるは多少の異義あるも、一念義よ  
り流れ出でたる一派なることは一般の認むる  
所にして、一念義の代表的なるものは成覺房  
幸西なり。彼は元と比叡山西塔の學僧なりし  
が、後ち宗祖門に入りて受業し、日本天台  
の教義を以て淨土宗義を稱し、遂に一念義の  
新説を唱導せり、即ち本門の彌陀、蓮門の彌  
陀の義を立て、眞佛は衆生が本業具してある  
ものなれば、凡夫の信心が佛智の一念に冥合  
するるとき決定往生疑ひなきものにして一念の  
外に更に多念を必要とせずと云へり。又肥後

國地方の門徒は善の相續開會の一念義を主張  
したるもの、如し。

**イチネンキチョージキショーモン** 一  
念義停止起請文 ↓ケンホクエツショ(遣  
北越書)

**イチネンゴージョー** 一念業成 多念  
業成の對。一念業成ともいふ。一念にて業  
事成就して往生の當果決定するの意。宗祖は  
「一念多念の稱名皆往生の因となり、業終平生  
の念佛共に業事成就の義あり」とし、一念多念  
臨終平生等その何れの一處にも就かざりしが  
其の門下成覺房幸西の如きは、一念義を立て  
行者の信心と佛智の一念と相應冥會する時、  
往生の業事成就すとし、良忠門下に於ても了  
聖道光、名越尊觀等は一念業成説を立て、平  
生及び臨終或は多念を論せず、悉く一念に無  
上廣大なる功德ありて往生の利益を得と云へ  
り。

**イチネンゴージョーキ** 一念業成義 前  
項に同じ。

**イチネンシ** 一念寺 京都市伏見區下鳥羽  
三町。建久二年宗祖法然上人廣設觀流のとき  
下鳥羽の南門より川船にて攝津大阪に下ると  
傳記に見ゆ。今の一念寺はその遺蹟なり。

**イチネンソクシヨ** 一念即生 一念

即得往生の略語。稱名の一念を以て淨土往生  
を得らるとなす義。凡そ淨土往生の行法に  
は種々あるも、就中、稱名念佛は彌陀の本願  
の正定業なるが故に、一向に専修す可きもの  
なり。宗祖は一念往生の理を基礎として以て  
多念相續を勧めらる。然るに幸西の如きはこ  
れを極端に解釋して、往生の行は最初の一念  
にて決定し、其後の念佛はたとへ千萬遍念佛  
すとも皆報恩の爲にして、多念相續甚だ無益  
なりと主張せり。

**イチネンダイリムジヨクドク** 一念

大利無上功德 名號の一念に無上大上の功  
徳あるを云ふ。有上小利の餘行の小功德に對  
してかくいふ。

**イチネンタネン** 一念多念 宗祖門下

に於て淨土往生の行法としての念佛修行につ  
いて一念にて往生を得となすものと、多念を  
要すとなすものとあり。成覺房幸西の如きは  
經に乃至一念即得往生と説けるを典據として  
最初の一念の念佛を重視し、其れ以後の念佛  
は彌陀の救済に對する報謝の行と考へ、必ず  
しも多念を要せずと主張するも、隆寛律師は  
これに對して、一念多念を臨終平生の機に配  
して一念往生を臨終の機に往生となし、多念

往生を平生念佛の機に往生と解し、要するに  
機根一様ならざるため觀心に違道ありて一尊  
ならざるも、執れにしても命のあらん限り念  
佛相續するを彌陀の願意なりと説く。然し彼  
は多念義を主張しつゝも臨終の一念を重じ其  
の結果往生の業事成就は、唯だ臨終に在りと  
説いて、念佛相續は臨終業成の豫備的行爲と  
解せり。

**イチネンタンネンフンベツノコト** 一

念多念分別事一卷隆寛述。續淨第四卷所收  
本書は宗祖門下の間に論議されし一念往生・  
多念往生の論に對して、撰者がその執れに  
も偏すべからざる所以を解釋の文を引證して  
論述せしもの。僅かに六紙足らざる小部の著  
書なり。普通隆寛律師は多念義主張者の如く  
云はれるも、此の書を見れば彼が多念義の  
偏執者ならざりしことを領解し得。本書歌  
種あり。

**イチビヤクサンカツマ** 一白三羯磨

授戒の作法。略して白四・白四羯磨・白四法  
ともいふ。白といふは表白にして大家に對し  
て自ら受戒することを告ぐる文なり。この表  
白文を一度讀むを白となす。羯磨といふ  
は受戒の作業をなすの義にて、正しく受戒に  
成を授くる旨を記せる表白文なり。先の表白

を終り、次に羯磨師へ授戒の作法を受者に教  
ふる(僧)より此の羯磨文を受けて、教の如く  
三度繰り返して唱ふるを三羯磨といふ。白す  
ること四度なれば四白ともいふ。

**イチマイキシヨクエンモン** 一枚起請

見聞(一卷) 聖德述。一枚起請文の末書。  
本書は、續西學聖德が宗祖の一枚起請文に  
對して自他の見聞せしところを記述したるも  
の。内容分科は、佛師のそれに異り四節に分  
つも、その宗義は専ら聖明の意を敘述せるも  
のなり。

**イチマイキシヨゲンロン** 一枚起請

談論 ↓ヨシミズユイセイゲンロン(吉水遺  
書談論)

**イチマイキシヨクローゼツ** 一枚起請

講説(二卷) 法洲撰。一枚起請文の末書。  
一枚起請文講説ともいふ。本書は法洲三法講  
説の一にして、著者が道俗に分り易く一枚起  
請文の講説をなせるもの。内容は、忍讓の一  
枚起請論及び闡通の一枚起請論を總論として  
自己の見聞領解を詳となし、説話的に講  
述せしもの。

**イチマイキシヨクシヨ** 一枚起請責

講(三卷) 北條的門述。一枚起請文の末書。

御遺書查詢ともいふ。本書は的門が、先輩の諸註を参考して、平易且説話的記述を以て一枚起請文の原意眞實を發揮せんとせしもの。現に的門上人全集第四に収録せり。

イチマイキシヨータンシンシヨ―一枚起請文

一枚起請文(二卷) 隆長撰。一枚起請文の末書。元祿九年作。一枚起請文但信抄ともいふ。本書は、麻谷忍漢の道友にして天台の學匠たる隆長阿闍梨が、一枚起請文の念佛は唯だ文の如く但信稱名にあることを主張せしもの。その内容は、随文釋經の形式をとり、別に分科を立てず、よく本願念佛の深旨を宣揚評述せり。

イチマイキシヨノチユ―一枚起請之証(一卷)

聖開撰。一枚起請文の末書。本書は、了譽聖開が一枚起請文を釋するに、一般釋經の例にならつて施化利生門、發達入道門等に分つて註解せしもの。その卓識よく一部の眞髓を闡示し、本書研究のための好資料なり。

イチマイキシヨベンジユツ―一枚起請辨述(一卷)

義山撰。一枚起請文の末書。正徳元年作。本書は、義山が一枚起請文の趣意を簡單平易に述べ、弟子がこれを筆記せしり。

もの内容は、二節に分つて隨文解釋をなしよく宗祖の眞意を説明せり。

イチマイキシヨモン―一枚起請文

源空撰。往生に關する要義を一紙に説め、彌陀釋迦二尊に起請するか故にこの名あり。又一枚消曇、或は一枚誓文ともいひ、淨土宗の宗祖が第一法語と尊重して、日夜讀誦し隨喜仰する所なり。撰時は建暦二年正月二十三日、宗祖入滅に近つき、門弟勢野房智の懇請に應じて、或後の遺訓に備へたるもの。内容は一代の教化の元意を略述したるものにして、殆んど之、同文の法語は筑紫物語集に出で、曾て西室聖房に授けられしものなり。聖谷全戒光明寺、百萬遍知恩寺、及び京極智願寺に、各本書と稱するものを蔵す。その註疏講説甚だ多し。

イチマイキシヨモンコーガイキキガキ

一枚起請文校閱書(三卷) 關通撰。一枚起請文の末書。寶曆十一年作。一枚起請文校閱書ともいふ。本書は、關通雲子(宗祖の一枚起請文を講述し、從二位藤原重親がこれを筆録せるものを、推尊すること七・八年、諸師の技聞を経て上梓せしもの。内容は、はじめ總論を掲げ、次に八門に分つて

一枚起請文の梗概を説き、字句の解釋をなさず、一にその眞意の顯彰に力をいたせる良書なり。

イチマイキシヨモンノマツシヨ

一枚起請文の末書 宗祖撰述一枚起請文の末書は古來甚だ多く、眞宗・西山派等の末書は且らく措くも、淨土宗のみにて百以上を數ふに足る。就中、了譽聖開の一枚起請之註一卷、聖德太子の一枚起請見聞一卷、忍漢の吉水遺書論一卷、隆長の一枚起請但信抄二卷、義山の一枚起請辨述一卷、關通の一枚起請文校閱書三卷、法洲の一枚起請講説二卷等最も重んぜらる。各項參照。

イチミシヤビヨ―一味瀉瓶

一味の瀉瓶を一瓶より他瓶に漏れなく漏らす如く、師より弟子に法を承すところなく傳承するをいふ。イシヤビヨソージヨ(瀉瓶相承)

イチミホード

一味報土 九品三流長西所説の淨土。長西は觀經所明の九品の階級を淨土に於ける品類とは解せず、攝土修行の機を淨土に於けるものと認するが故に、攝土の行人の修行は機により業により各の異り業道の化儀亦た同じからざるも、一たび往生すれば皆な一味の報土に生じ、俱に齊等不退

なりと説く。これ諸行と念佛とを同じく本願の行とする立場より當然出づべき主張なり。

イチモンジ

一文字 次項に同じ。イチモンジザ 一文字座 法會の際、導師と列して佛壇に向ひ一文字に坐することを一文字座と云ふ。貫主或は導師と等に列するが故に同席とも稱せらる。

イチモンフチ

一文不知 一箇の文字すら解知せぬ愚かなもの。かゝる根柢の人は稱名念佛修行の正機であり、然るに佛の機と云はれる。一枚起請文の中に「たとへ一代の法をよくノノ學すとも、一文不知のくむの身になして屋入道の無知のともがらに同じして智者のふるまひをせすしてたとへ一向に念佛すべし」といへる是れなり。

イチルイオージヨ

一類往生 二類往生の對。西山派の説。正流に於ては念佛・諸行の二類ともに往生を得るとなすに對して西山派祖證空は、極樂淨土往生を得るものは念佛行者の二類に屬り、餘他の諸行を修するものは往生することを得ずといふ。

イチレントクシヨ

一蓮托生 極樂に往生し、同一の蓮華に托生することを云ふ。阿彌陀經に「諸の上善人と俱に一處に會す」

と説き、五會法事讃卷下には「各留半坐乘聚台、待我國淨土行人」と云ひ、古歌に「先きだまはおくる、人を待ちやせん、花のうてなに半ばのこして」と云へる如きは、皆その意を表はせるものなり。

イツカンテン

一卷傳 具名を黒谷上人傳といふ。この本は一卷本なるが故に、かく云ふ。イタダニシヨニエンデン(黒谷上人傳)

イツケダシ

一家大師 善導大師のこと。淨土一門の始祖といふ意味なり。一家一宗大明・今家・今師等といふに同じ。イゾンド(善導)

イツコウ

一向 心を一方に向けて餘他を顧みざるを云ふ。無量壽經下卷に「一向專念無量壽佛」と云ひ、善導の觀經疏第四に「一向專稱彌陀佛名」と云へるが如し。選擇集上卷には「一向とは一向三向に對する言なり、例せば彼の五竺に三種の寺あるが如し。一には一向大衆寺、この寺の中には小衆を擧ぐることをなし、中略)既に一向と云ふ。餘を兼ねざることを明らけし」とあり。餘行を捨て念佛の一行を専らにするを以て一向專修と稱し眞宗の如きは之を以て宗名となす。

イツコーキ

一向派 淨土十五流の一。

一向衆ともいふ。小坂に住せし親鸞法橋の所説にして今日の一向宗即ち眞宗を指す。イシンランド(聖覺)

イツコーギシン

一向疑心 イジンシンク(深心四句)

イツコーコケシン

一向虛假心 ヤシジヨシンシク(至誠心四句)

イツコーサイホーエガン

一向西方廻顧 イエコーホツガンシンシク(廻向發願心四句)

イツコーサンゾン

一光三尊 光(後)背が一つになれる三尊佛をいふ。善光寺阿彌陀如來の如きその代表的なるものなり。一般に古き時代の佛像にこの形式多し。

イツコーシユ

一向宗 一向專念念佛の略。一向に阿彌陀佛を稱す宗旨といふ意なるも、俗には専ら眞宗の別稱として用ひらる。

イツコーシンジツシン

一向眞實心 イシンジヨシンシク(至誠心四句)

イツコーシンジン

一向信心 イジンシンク(深心四句)

イツコーセンジュ

一向專修 一向に専ら念佛を修するといふ意。一向とは選擇集にも言へる如く、二向三向等に對する言にし

て、念佛の外には何事をも行はぬといふ意味なり。選擇集には一向とは餘を兼ねざる言なりと言ふ。されば一向専修とは其さには一向専修念佛といふに同じく、無量壽經の一向専念無量壽佛といふ語と同意なり。但し念佛の外に四種の助業を修する者は、一向専修の人と言はるゝか否かに就ては議論あり、直釋四卷に詳説せり。

イツコーセンジュシユースンチャクシユウザイヤリン 一向専修 宗選擇集所有撰邪輪 一ザイヤリン(撰邪輪)

イツコーセンジュシユースンツシユウ 一向専修余佛宗 一向に専ら念佛の一行を修する宗旨といふ意。即ち淨土宗を指す。淨土宗はすべての行を正行と兼行との二種に分類し、その中兼行を廢捨て、専ら念佛の一行を修行するを本意とす。故にこの宗を又實踐的方面より、一向専修念佛宗といひ、或は略して念佛宗ともいふ。

イツコーセン 一向専念 一向専念無量壽佛、若しくは、向專念阿彌陀佛の略稱。イツコーセンジュ(一向専修)

イツコーヨジエガン 一向餘事廻顧 一エコーホツガンシヤク(一向餘心四句)

イツサイシヨクグマンゾククドク 一切所求滿足功德 華嚴淨土の二十九種莊嚴の中、國土十七種功德莊嚴の一。所求滿足功德成就といふ。此の莊嚴世界の衆生は業風に吹かれて諸事意の如くならざるに反し極樂淨土には衆生の衆生をして其の願求するところを悉く満足せしむる功德あるをいふ。

イツサイシヨブツシヨコネンキヨ 一切諸佛所護念經 阿彌陀經の異名。彼の經は一切諸佛の護持念する經なる故にかく名づく。即ち同經に「一切諸佛所護念經」とあり。アマミダキヨ(阿彌陀經)

イツサイシヨレイゲ 一切精靈偈 自願所修の善根功德を廻向して一切精靈の極樂往生に資せんことを念する偈文。一切精靈生極樂 上品蓮華成正覺 菩提行願不退轉 引導三有及法界」の中、上二句は法想回向、下二句は法想回向に當る。上二句は大毘盧遮那經、下二句は理趣分に出づ。

イツシヨシヨソク 一紙小消息 源空述。單に小消息ともいふ。本書は宗祖が黒田の聖人へ遺はしたる文書なり。その量は一枚起請文の倍にも足らぬ手紙形の假名書なるも、その内容は往生極樂の要領を述べたるものにして、淨土宗徒が宗意の規範として、一

枚起請文と共に朝夕誦する文章法語なり。五重相傳の初重果圓の一念骨髄が小消息を以て代表せられ、宗祖の生命である第十八願を中心とし、淨土の信仰生活をその中に收め、その重要さは一枚起請文と異なり一枚と云はる。

イツシヨフシヨ 一生補處 佛位を紹く補處の菩薩にして、菩薩の最高位即ち等覺を云ふ。蓋し一生歸佛せられるのみにて、次ぎに佛の位處を補ふ位との意なり。大經には「他方國土の菩薩衆、我が國に來生し、究竟して必ず一生補處に至る」と云ひ、阿彌陀經には「衆生する者、皆是れ阿彌陀致成なり 其中多く一生補處あり」とあり。彌勒上生經に依るに、今彌勒菩薩は兜率天にありて、その一生盡くれば、此人間界に降つて釋迦の佛處を補ひ成傳するが故に、彌勒をば一生補處の菩薩といふ。

イツシン 一心 信念の對象に向つて自己の心を專注し、他のものにより心を奪はれず、純乎として動搖せざるを云ふ。

イツシンイン 一心院 (山) 京都市東山区新橋通東大路東入。群仙山と號し本宗の所謂捨世地の本寺。開山は三聖社齋藤宗念。宗念は天文十六年入洛し、翌十七年青蓮院宮尊

續法親王より寺域を賜つて當院を創建し、青蓮院禪堂の阿彌陀佛像を移して本尊とす。後世百有餘寺の門葉を統べ一心院流(捨世地)なる一派をなす。永祿八年青蓮院宮より御供養料十八石を贈り、華頂宮第二代尊光法親王は本院を永く華頂宮御菩提所と定め給ひ爾來第六代尊超法親王に至る迄何れも本院に邪り奉り、御供養料十五石を受く。群仙山の山號は第六代尊超法親王下賜の扁額に依れるものなり。維新の際信長寄進の朱印二十三石餘、青蓮院宮御供養料十八石、華頂宮御供養料十五石を上地し、一時寺門衰退せし。歴代住職屢意再興に努め、堂宇書院の修補改築なり面目一新せり。

(2) 秋田縣北秋田郡大館町。起行山と號す。開山神賢。弘治元年常州小場城主佐竹三河守義實開基。慶長年中佐竹水戸城主秋田に移封のとき神變もこれに隨從して當地に移轉せり。元和元年、中興良圓一廓當寺を再興す。寺寶數點。

イツシンインネンブツドージョーシンキ 一心院念佛道場清規 天文二十三年、京都一心院開山神念が念佛道場の規として七ヶ條を定めたるもの。

イツシンギ 一心義 淨土十五法の一。

イツシンインネンブツドージョーシンキ—イツシンインネンブツドージョーシンキ

悟阿彌陀佛の所説なり。イツョードジョーリユ(淨土十五法)

イツシンキミヨ 一心歸命 心を他に散亂することなく一心に佛に歸依し奉り、佛に自己信心の至極を捧ぐるをいふ。往生論には「世尊我一心歸命盡十方無碍光如來」とあり。

イツシンジ 一心寺 大阪市天王寺區邊坂上町。通稱「荒陵の新別所」として初め壽命山觀禪院と稱せしが、天正年間本覺存平の中興ありて後、坂松山高岳院と號す。鎮西派總本山知恩院に屬し、法然上人二十五講の第七。もと天王寺の別所なりしが、慈鎮和尚別當たりし時、宗祖の爲に庵を結びて居らしめたりと傳ふ。後白河法皇天王寺行幸の御、宗祖と共に此處にて日想觀を修し給ふ。慶長年中大阪冬の役に家康此處に營所を設け亂後大阪城の廢材を以て堂宇を重修せしむ。全國的の納骨寺としてその名高し。現今の堂宇是なり。

イツシンセンネン 一心専念 一心に専ら阿彌陀佛を念すること。善導の觀經疏四に「一心専念彌陀名號、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業」とあり。

イツシンソクサンジン 一心即三心

イツシンインネンブツドージョーシンキ—イツシンインネンブツドージョーシンキ

阿彌陀經に説く一心も、觀經に説く慮の三心も共に大經第十八願の至心信樂欲生我國の意にして、助け給への一心を開きたるものが三心なれば今一心と云ふも三心の外の一心に非ざと説くをいふ。即ち願文には三心の外に別の心を立てず、又觀經にも「具三心者必生彼國」と云ひて別の心を立てず。

イツシンフラン 一心不亂 心を一心にして散亂せしめざること。阿彌陀經に「執持名號若一日乃至若七日一心不亂」云々とあり。

イツソーザンマイ 一相三昧 一イチゴヨザンマイ(一行三昧)

イツト 一到 靈女の講。一レイゲン(靈女)

イツトクヨーフシツ 一得永不失 圓頓善薩戒の戒體は衆生本有の色心なるが故に一度これを得れば永く失ふことなき徳あるをいふ。

イツピヤクシジユゴカジョーモンド 一 一百四十五箇條問答 和語證錄卷五所收。源空述。この書は、宗祖源空が、念佛生活上の諸種の質問百四十五箇條を教示されしもの。

イツブー 一風 京都報恩寺住僧。支那と號す、俗姓不詳。一説に京都の人なりと傳ふ。後土御門院の御宇洛北法園寺に住し天台淨土を兼學して報恩寺と改む。文應元年後柏原天皇、佛舍利・佛具等を賜ひ、同二年勅して寺額を賜ふ。壽不詳。

イツベンシヨーン 一涌上人 時宗の開祖智眞のこと。建治二年十二月、智眞紀州熊野權現に參籠のとき靈感を得てより自ら一涌と號せりといふ。イナシン(智眞)

イツボツク 一法句 一ニユーイツボツク(入一法句)

イトテン 以天 三三六五 鏡響と號す。俗姓不詳。相州小田原大蓮寺の住僧にして、德行顯著、ひたすら往生の業をばげみ、慶長十年三月二十五日寂。壽不詳。

イトーユーコー 伊藤祐見 三三三三 京都百萬遍了聖寺住僧、朝鮮開教の功勞者。天蓮社明覺阿百水指月と號す。明治六年生る。山口縣萩町、伊藤嘉右衛門の末子。幼にして京都妙泉寺關前院に就て得度し後ち愛知縣額田郡形野の大泉寺に暫す。明治三十一年開教使となり京城に開教院を興し、又開教學堂を創設して開教事業に盡すこと少なからず同四十二年京都大宮西照寺より轉じて百萬遍

了聖寺に住し寺門興隆に力を致す。この間日清・日露の兩戰役に出征し、又東京宗教大學幹事、同圖書館理事、知恩寺顧問、宗寶保存會委員等となり教界の爲めに貢献をなす。晚年淨土宗史の研究にあたり脱稿せざるに先つて寂す。時に昭和五年一月十一日。壽五十八遺稿は門弟塚本善隆これを整理上梓し、淨土宗史の研究と題して世に流布す。又師は特に愛宗護法の念厚く嘗て教行信證破壞論を上梓して護法の熱意を披瀝せしことあり。

イナ 維那 佛事法要のときの僧の役名又イノウと云ふ。維那は維那、即ち大衆を統轄する意味の漢語。那は梵語阿彌陀佛(Amitayus)の略にして僧衆の雜事を司り、之れを指授する意なり。行事鈔にはすでに釋尊の時の役ありといふ。後ち多く禪宗にて家僧の威儀規律を掌る重役に名づけしものなり。現時我宗に於ては、法要讀經の發聲即ち口頭役を維那と稱す。蓋しこの維那の巧不は法要の嚴肅さを保持する上に極めて要なるものにして、維那は音聲・威儀等に最も堪能なものが勤むべきなり。

イナオカ。シヨ 稻岡庄 宗祖法然上人の誕生地。美作國久米南條稻岡庄(岡山縣久米郡稻岡村誕生寺の邊)なり。久米郡は

清和帝貞觀年中に久米南條、北條とに分たれ後寛文年中改めて久米南條、久米北條と稱す稻岡庄は南庄と北庄とに分る。幾多の變遷を経しも明治初頭分裂して十六ヶ村となれり。

イネン 意念 法要の際、口に聲を出すこと無くして心中に十念を稱ふるを云ふ。

イネンオージョー 意念往生 四種往生の一にして臨終の時、聲に出して稱名せざれ共、意に念じて往生するを云ふ。イシシエオージョー(四種往生)

慈眼と號す。師は嘗て東京哲學館(現東洋大學)教授として唯識學を講義し居たりしが廣安眞隨の後を受けて朝鮮開教使長となり、京城明治町にありし淨土宗教會所を本町に移轉改築して開教院と改稱し、一命を開教事業に獻けて大正元年十二月二十五日開教院にて殉職せし人なり。(著書)唯識論講義一卷。

イハイ 位牌 佛具の一種。死者の戒名を書いてその靈を祀る木牌。其型に種々あり多く中陰中は白木のものを、忌明け後は餘物の位牌に代ふるを常とす。その形としては牌の下部に蓮葉を附せるもの、上部に雲形等の屋蓋を冠せるもの、兩側に扉のあるもの、唐草等を刻せる兩袖を附けたるもの、或は露出したもの等種々あり。戒名の書き方に就ても上の置字には圓寂・示寂・遷化(能化)、歸元・歸寂・物故・逝去(大人男女)・早世(子供)等の別あり、又下の置字にも尊儀(王位)・尊靈(高位)・靈位(精靈(普通一般))等の不同あるも、本義としては位牌の上の置字は用ひざるものとし、強いて用ひるならば本宗としては、上には菩提尊或は尊字又は尊字を書き、下には位或は靈の字を用ふる程度にすべきなり。位牌の起原に就ては、一説には、佛敎にて神主・木主・位版と稱して、栗木の長一

尺三寸五分の牌に亡者の官位氏名を記せしもの、轉用なりと云ひ、又一説には古代上古の靈代より轉じたるものと言はる。我國では鎌倉時代に既に行はれてゐたこと當時の文獻に見ゆ。

イハチ 以八 三三三三 室町末徳川初期の高僧。諱は存易、行運社信譽と稱し、又専求西と號す。奥州山崎の人。袋中良定の實兄に當り、七歳の時父を喪ひ、寶泉寺に入り蓮華大澤開通寺に於て宗義を研鑽し、後ち生實大嚴寺道譽貞把の名譽を慕ひて其の座下に學ぶ資性道心深く、名利を嫌惡し、隱棲の念切にして、遂に師の膝下を辭し諸方を歴遊行脚し足跡の印する所悉く念佛宣揚の法幢を掲げ、晚年安齋島に光明院を建立し此處に住し、又福澤作州誕生寺の復興をなす等廣く四衆の化益をことし、一大徳者の名譽を當代に輝かして慶長十九年九月入寂。壽八十三。

イハチシヨーンニギョーシヨーク 以八上人行狀記(一卷) 嚴島光明院素信著・想信重修・古知谷信阿消考・壽忍校訂。具名は華隆山光明院以八寺開祖行狀記。又は光明院開基以八人行狀記とも云ふ。本書は安藝國宮島光明院の開山以八上人の略傳を和文體を以て上人の生誕より落飾・修行・行記

イネントシヨーン 意念と稱念 三心具足の上にて助け給へ南無阿彌陀佛と心に念じて聲に顯はさぬを意念の念佛と云ふ。心に助け給へ口に南無阿彌陀佛と發聲するを稱念の念佛と云ふ。意念・稱念共に往生の業となるも、佛の本願に叶ふ念佛は聲に出して申す念佛なり。故に善導大師は顯文の乃至十念を稱我名號下至十聲と釋せられ、觀經には令聲不絕具足 念と云ふ。御法語に「口にて稱ふるも名號、心に念ずるも名號なれば、何れも往生の業となるべし、但し佛の本願は稱名の顯なるが故に、聲を立て稱ふべきなり」とあり。

イノウエゲンシン 井上玄胤 朝鮮開教の功勞者。朝鮮開教使長。編譯社搜。昭阿

禪僧との問答・臨終の奇蹟・門弟の逸話等を記述せしものにして、附録として嚴島に關する傳記二・三あり。

イフタイ 位不退 四不退の一。イシフタイ(四不退) (2)

イホーベン 異方便 善巧方便の意。普通と異なる手段をいふ。觀經に「諸佛如來に異方便あり」といへるは、正受の見のため方便としての定善十三觀並に章提が佛力の冥加によつて彼の彌陀佛國を見ることを得たる等を指す。

イマオカタツト 今岡達音 二五三二 近世の宗學者。千葉縣東葛飾郡善照寺住僧。大蓮社道譽心阿虛通と號し、又松庵とも云ふ。明治四年八月生る。島根縣松江市布智村今岡三吉郎の三男。十歳にして同村阿彌陀寺松井靈天に就て出家し、明治二十六年増上寺覺聖運海に宗成を相承す。爾來志を學の研鑽に向け同三十年淨土宗大學卒業以來勤皇義城に就き宗業を學ぶ傍ら俱舎を受け、後ち名古屋教授・宗敎大學教授、大正大學教授等となり學徒の敎養と宗學の研鑽に努む。師は扶宗護法の念厚き宗學者として世に知らる。昭和十四年三月十九日寂。壽六十七。遺稿は今岡教授遺稿記念論文集に收載す。

イモツシン 爲物身 イジツツシイ  
モツシン (實相身爲物身)

イリサシカイ 爲利作師成 四十八  
戒の一。内に徳なきも外には是れあるが如く  
靴ひ、名聞利養のために戒師となり弟子を求  
むることを戒めたるもの。

イリトセツカイ 爲利例説戒 四十  
八戒の一。財を貪り法を惜しむことを戒め  
たるもの。

イルイ。ジヨゴ 異類助業 同類助  
業の對。異類の善根とも云ふ。五種正行即ち  
讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養正行のうち、  
前三接一を同類助業とし、この餘の行業にし  
て念佛を助成すべきものを異類助業といふ。

即ち宗祖が、和語燈錄卷四に「決定往生の信  
をとりて、佛の本願に乗じてん上は、他の善  
根に結縁助成せんことまたく難行となるべか  
らず、往生の助業となるべきなり」と云へる  
が如きそれなり。

イルイ。ゼンゴン 異類善根 前項に  
同じ。

イワツキジヨコクジシ 岩付淨國寺  
志(一巻) 關門述。檀林岩付淨國寺志ともい  
ふ。文政天保年中作。十八壇林志の一。關門晚

年の著にて未定稿本なり。本書は、埼玉縣南埼玉郡  
玉置村町にある淨土宗關東十八壇林の隨一  
たる岩付淨國寺の寺志にして、轉住弘通・朱  
爾正實・諸堂院宇・靈寶傳器・舍利瑞縁・鼻  
祖諸傳・列世法徳・境内景勝・阿部家譜・北  
條氏系・負笈遊化・本末運等の十二項目に  
分ち記述せり。

インガ 因果 因とは生起の原因、果と  
は其の因により惹起されたる結果を云ふ。原  
因には又因(親)と縁(疎)とあり。三世に  
通じて因果應報の義あり、一切諸法は皆この  
因果の法則によりて生滅變化す。俱舍論には  
六因四縁五果を分別せり。

インカイ 姪戒 十重禁戒の一。慈悲心  
なく非道に姪欲を行ふことを戒めたるも  
の。

インガン 因願 因位に於て發せる志願  
成佛以前の位にて發したる本願をいふ。宗祖  
の大經釋には「此の經は即ち彼の阿彌陀佛の  
因願果證の功徳を説く」といふ。此の因願に  
就いて總願と別願とあり。總願とは所謂四弘  
誓願、別願とは彌陀の四十八願・導師の十二  
願・羅漢の五百の大願等の如し。この總  
願と別願との關係は全體と部分との關係の如  
くにして、宗祖の大經釋には「一に總願とは

一切の菩薩通じて此の願を發して菩提に趣向  
す、異路あることなし。別願とは、諸佛菩薩  
各不同なり」とあり。この意を布行して聖圓  
の選擇集直譯卷六には問答を設けて「尋ねて  
云く、總別二願その體各別なるか。答、是れ  
は廣略の異なり。弘決(決疑鈔)に總とは別  
を總じ別とは總を別すと云ふが故に。是れ則  
ち總願の時は、事廣くして卒爾に成じ難し、  
故に各の意樂に隨つて別願を發す。別に成ず  
れば成じ易きが故なり」といふ。

インガンカジヨ 因願果成 因位に  
於て發したる誓願、行を導びきてよく所約の  
果を成ずるに至る行相について言ふ。阿彌  
陀佛(法藏比丘)の發願成就せる等その一例  
にして、宗祖の無量壽經釋に「此經は則ち彼  
の阿彌陀佛の因願果證の功徳を説く」と云々と  
言へる是れなり。

インキン 引磬 佛事に用ふる樂器の名  
腕狀をなす小磬にしてその底部に紐を貫き、  
これに木柄を附けて提攜に便ならしめ小鐵桿  
を以てこれを撃つ。また手磬とも云ふ。引磬  
と云ふは、一説には持寶通覽卷中に「引磬は  
衆を引くの道具なり」といへる如く衆人を引  
導する具なるが故に引磬といふとなし、今一  
説には其の音が石磬よりも縮縮として引くが

故に引磬といふとあり。その打ち方は大磬の  
代りに用ふる場合はこれに準ず。

インゲイ 印契 *mudra* 母陀羅・日陀羅  
慈摩羅に作り、印・印相・印章・捺印と譯  
す。印とは印信、決定不改の義。契とは契約  
の義。密教にては總概の義とし諸尊の内證本  
誓、功徳の象徴にして法界を總攝せるものと  
云ふ。之れもと印度婆羅門教に由来し、密教  
にては印を大別して手印と契印となす。手印  
とは手指を以て示すもの、契印とは身相印即  
ち諸尊の所持する三昧耶形を云ふ。本宗にて  
用ふる手印は合掌印・撥遣印・洒水印等極め  
て僅少なり。

インゴ 院號 (1)法名の上に加贈する  
尊稱。もと 天皇御讓位後の御所の稱呼なり  
しが、冷泉院以後は 天皇の御讓號を奉らず  
して院號を稱せり。寺院に於ては天台眞言等  
に門跡寺院生ずるや共に院號を用ふるに至れ  
り。徳川時代には諸大名いづれも院號を用  
ひ、後には一般に士分以上の人の殺せる時、  
法名の上に加贈する事となれり。

(2)垣のある建物を院と言ひ、土塀にて圍み  
たる僧舎を意味す。後世には寺を總號とし、寺  
中に存する別舎を院と號せり。例へば延暦寺  
に止観院・初院等があるが如し。斯る編號を寺

院に對して院號と云ふ。

インサイ 印西 宗祖の弟子。洛東長樂  
寺の住僧にして當時の學匠なり。傳不詳。

インジュンヨホ 因願餘方 極樂淨  
土に人・天・聲聞等の差別名ある所以を詮は  
す語にして無量壽經に出づ。因は依因、願は  
從願、餘方は廣く所化の境界を指す。本來極  
樂には人大等の差別的果報なきも、唯だ餘方  
世界の衆生引接の爲、その世界の相に因願し  
てかゝる名稱を存するなり。而してその相に  
三説あり、本業(修因)に約する義、居處に  
約する義、舊名に約する義是れにして前二者  
は裏返、後者は眞覺の釋義なり。無量壽經卷  
上に「彼佛國土清淨安穩微妙快樂次、於無爲  
泥洹之道、其諸聲聞菩薩大人智慧高明神通洞  
達咸同一類形無異狀、但因其願餘方、故有天人  
之名而說端正超世希有容色微妙非、天非、人  
皆受自然虛無之身無極之體」と言へり。以  
て其意を知るべし。

インジョ 引接 引接とも書く。又迎  
接とも云ふ。佛や菩薩が大慈のみ手を垂れて  
念佛の衆生を誘引攝取すること。觀經に「命  
終らんと欲する時阿彌陀佛、大光明を放つて  
行者の身を照らし、諸の菩薩と共に手を授け  
て迎接す」と云へるが如きこれなり。↑タイ

コー(來迎)  
インジョーケチエンラク 引接結緣樂  
↓ジュラタ(十樂)  
インジョーシ 引接寺 下關市外瀬町。  
元祿三年忠覺徳一開創。開基小早川氏。はじ  
め龜山社地に在りしを慶長二年來譽の代に現  
在の地に移す。第三十一世總譽は萬里小路の  
騎子にして華頂宮より院家の號を賜はる。本  
堂には惠心作なる引接・來迎・發遣三彌陀を  
安置す。諸堂完備して該地方屈指の巨刹な  
り。日清戰爭後馬關條約締結の際支那全權李  
鴻章の來泊せし處として名あり。

インジョーシキ 引接式 ↓ソーギン  
キ(葬儀式)  
インジョーソ 引接想 三想の一。  
↓サンソ(三想)  
インゼイアマダキヨ 引磬阿彌陀經  
一種の曲調を附して阿彌陀經を誦するを云  
ふ。慈覺大師が承和五年に勅を奉じて入唐し  
五台山の北台普通院に於て、傳受したる法な  
り。古事談第三に依れば「慈覺大師、音聲不  
足に坐さしめ給ふの間、尺八を以て引磬の阿  
彌陀經を吹き傳へしめ給ふ。成就如是功徳莊  
嚴と云ふ所を吹き給はざりければ、常行堂  
の辰巳の松屋にて、吹きあつかはせ給たりけ

るに、空中に音ありて、告げて云く、ヤの音を加へよと云云。此より如是々と云ふヤの音は加はるなり」とあり。依て慈覺大師は首を以て、阿彌陀經講の法を傳へたることを知るべし。爾來、引聲念佛と共に、何時の作法として、比叡及び諸山に於て盛んに行はれたるも、現在では京都眞如堂、鎌倉光明寺にのみ行はる。

**インゼイネンブツ** 引聲念佛 緩漫なる曲調を附して、阿彌陀佛の名號を稱揚するを云ふ。慈覺大師圓仁が、支那五台山より傳へたる法なり。仁壽元年、圓仁始めて之を彼山に修し、諸弟子に傳授せし以來、大原勝林院・京都眞如堂を始め、諸處の常行堂に於てこの法を修し、一時その流行甚だ盛んなるものあり。拾玉集に「立軸やなむあみだ佛のこゑ引けば西にいざなふ秋の夜の月」と云ひ、又玉葉集に「常行堂の引聲念佛を聴聞して、前大僧正忠源と題して一夜もすがら西に心の引聲に、かよふ嵐の音を身にしむ」とあるは、當時その法の盛に行はれたるを語るものと云ふべし。明應四年後土御門院は觀音所崇を宮中に召されて此の法を行はしめ、當時眞如堂の衆徒も之に集まれりと傳へる。ついで祐崇は、引聲阿彌陀經と共に、此の法を鎌倉光

明寺に移し行ひしより、同寺にては毎年の規式として、十日十夜常行不斷の念佛を修し今に絶ゆることなし。

**インゾー** 引僧 先進とも云ふ。導師又は講師に先向しこれを導き案内する役僧をいふ。

**インゾー** 印相 **インゲイ**(印契) 因の對。未だ成せざる因中に已に成じたる果名を説くをいふ。たとへば波羅蜜といふは佛所得の智慧果の名なるも、佛道修行中の菩薩の行因をも波羅蜜となづくるが如きは正しく是れなり。

**インデンゴ** 院殿號 院殿とは院の殿人の義、即ち貴族の家人又は出入伺候する者をいふ。戒名にこの號を用ふるは足利尊氏に初まると云はる。天皇及び貴族に簡別せんが爲に院に殿を添へ院殿と云ふ。現今では殿を敬稱の義と解し高位高官の人に用ふ。

**インドー** 引導 衆生を善道に引き導く意。轉じて死人を濟度する儀式。葬儀の時導師が棺前に立ちて死者に云ひ渡す一種の教誨をいふ。これ禮葬上品上生の文に「金剛臺に乗じ、佛の後に隨從して、殯指の如き頃に彼の國に往生す」といふ來迎引導の說に基くも

のにして、亦その引導の語は淨飯王、淨飯王淨飯の時如來自ら手に香爐を執つてこれを引導し給ふとの故事によるとせらる。アコ(下炬)

**インドー**。デン 引導傳 **カジョー** デンゴ(關係傳法)

**インニ** 因位 果位の對。因地ともいふ。菩薩未だ佛果に至らざる以前、六度の因行を修しつゝある間の修行位。三部經に「彌陀如來は因位の時、もはらわが名號を念ぜんものを迎へんとちかひ給ひて」とあり、大佛頂首楞嚴經に「我れもと因地のとき念佛心を以て無生忍に入り、今此の界に於て念佛人を攝して淨土に歸せしむ」と言へる是れなり。

**インニホツシン** 因位發心 佛菩薩の未だ因位にある時、道心を發して修行に趣かんとするをいふ。法藏比丘の發願は即ち阿彌陀佛の因位發心なり。

**インニリモツ** 因位利物 佛菩薩の未だ因位にありて修行中、一切衆生を利益するに名づけたる語。

**インネン** 因縁 因とは果を生ずべき直接の原因を云ひ、縁とは因と協同して因をして果に至らしむるものを云ふ。例へば穀麥の種子は因にして、雨露水土等は縁なり。佛教

では一切の生成變化等はすべて因と縁との和合によつて生ずるものとなし、俱舍論には具さに六因四縁を分別す。

**インネンカマン** 因圓果滿 因位の萬行圓備して、果地の萬德充滿せる意。心地觀經卷一に「三僧祇劫に衆生を度し八萬の波羅蜜を勤修し、因圓かに果滿して正覺を成ず、住壽無量として去來なし」といへる是れなり。

ウ

**ウエノミヤチユウガツコ** 上宮中學校 所在地、大阪市天王寺區上ノ宮町。宗立五中學校の一。現在生徒數千五百名。その沿革は明治二十三年七月十日、大阪大教會が第二聯合と稱する京都支校より獨立して大阪支校を開きしに始まる。三十一年九月全國八大教區制となるや、第六教校となり、三十八年三月十日には第七教校をも合併の認可を得て膨脹し、改めて第六・七聯合教校は三十九年三月六日附を以て徵兵隊豫備專門學校入學の資格を認定せられ、四十四年七月教學院の決議により、中學組織に改め、四十五年三月二十六日第六・七聯合教校は上宮中學校と改むることを認可せらる。その後今日の校舎の偉容を誇るためには、岡田立頼・小林大藏の奔走によると雖も、また瀧川秀普・六花眞哉等の大阪教區總奮起の功績なり。創立以來昭和十年三月に至る卒業生千九百餘名を算す。

**ウエン** 有縁 無縁の對。繋屬の關係あるをいふ。佛菩薩の別願の對象となる衆生を有縁の衆生といふ。譬へば、本願念佛を修す

るものは阿彌陀佛有縁の衆生なり。善導の往生禮讚に「普く有縁を攝して本國に歸せしむ」といひ「有縁の衆生、光顯を蒙れば智慧を増長して三界を超ゆ」と云へるが如き是れなり。

**ウガイテツジヨ** 養德微定 **ニゴト** 明治初期の碩學。隨蓮社金剛寶阿と稱す。又松翁・古溪・古經堂・杞憂道人と號し、鑑藏家・考證家・外教排斥家として有名なり。筑後國の人。文化元年有馬藩士養德政喜の二男に生る。六歳久留米西岸寺禪院につき剃髮、笈を負ふて上洛し佛儒二道を研め、十九歳江戸に下り増上寺に於て宗戒兩脈を繼承し、明治十三年新谷の學寮主となり講筵を布く。又上洛し歸谷法然院に於て、忍藏の高麗鼓經校訂本を購寫し、奈良に赴き専ら古經を探索研究す。又明治維新の際時人歐米文化採取に急ぎ、佛敎排斥の運動起るに對して、關野管見錄・英耶論・釋教正謬初破再破・佛法不可斥論等數部の作を出して外教の排斥に努め、佛敎の興隆を計る。殊に明治三年の排佛同盟運動の如きは最も激甚を極めし爲、同盟清規一卷を著し各宗と聯合して佛敎の恢復を策す。この時相會する者一百五十名あり、能く協力一致して排佛運動に反旗を翻せり。

師は岩槻淨國寺・淺草寶願寺・小石川傳通院  
京都知恩院七十五世等に歴任し、宗法弘通に  
努め、化を諸國に及ぼして、佛寺・説教所を  
創建設置し教線擴張をはかり、明治十五年に  
宗學西部本校(のち淨土宗學林)を山内葉頂  
宮舊邸に開校して學徒の養成に努む。明治十  
八年三月淨土宗管長に補せられたるも、翌十  
九年宗制改革論喧嘩を極め容易に辭職し、  
遂に二十年四月在住三年にして辭表を提出し  
て隱退せしむ。弘通の念慮と懸にして各地を  
巡化し明治二十四年三月名古屋を巡教申入寂  
壽七十八。師の晩年は極めて悲愴と云ふべ  
きも然し師の勤精誠として永劫に輝き敬仰措  
く能はず。就中師の撰集蒐集せる古寫・古版經  
古畫・佛像等三百餘點を知恩院に寄納せし如  
きは特筆すべきものなり。尙ほ彼は詩文を善  
くし、雅樂に長じ、鑑藏家として造詣深かり  
しが如きは、師が如何に多能多藝なりしかを  
物語るものにして、著書は前掲の外、古辭題  
跋・傳語譯等數十部現存す。

- ウガンウキヨ一 有願有行 → エコー
- ホツガンシンシタ (廻向發願心四句)
- ウガンムキヨ一 有願無行 → エコー
- ホツガンシンシタ (廻向發願心四句)
- ウキヨームニン 有教無人 教はある

がそれを修行する人なしとの意。その教は存  
在するも實際にそれを修行する人なしといふ  
は、例へば聖遺宗の如き、理論は甚だ高妙  
なるも實際にそれを修行して直ちに成佛する  
人なき如き等はその一例なり。

ウクドク 雨功德 極樂淨土の二十九種  
功德莊嚴の中、國土十七種功德莊嚴の一。極  
樂淨土には天華・妙衣等を雨らして大衆のた  
めに供養の具となすの功德あるをいふ。

ウケンムケンタイ 有間無間對 五番  
相對の一。選擇集に正行と雜行とを比較して  
五種の分別をなす。その中第三に有間無間對  
をあぐ。即ち正行を修すれば阿彌陀佛に對す  
る憶念間斷することなく、雜行を修すれば憶  
念間斷するが故に正行勝れたりとなすをい  
ふ。→ ナパンソドイ(五番相對)

ウズマサ 太秦 京都市右京區にあり。  
市域に編入前は葛野郡太秦村なり。應神天皇  
の御代に支那より秦人歸化し、機械を業とし  
此地を賜つて住す。その精糸器に入つて次第  
に増し、その形巴漏に似たれば宇豆麻呂と云  
ひ、又此地に秦始皇を祭りたれば大の字を加  
へて太秦と云ふ地名を得たりと。廣隆寺の西  
南にある西向寺は嘉祿の法難に際し、宗祖の  
遺骸を蟻峨より移せし來迎房圓空の遺跡な

ウソージョー 有相往生 無相往  
生の對。有相の往生といふ意。形相ある淨土  
に形相ある人が往生する意味にして、論註に  
は之を見生といふ。普通淨土宗にて説く往生  
とはこの有相往生を云ふ。

ウソージョード 有相淨土 形相のあ  
る淨土といふ意。有相とは無相に對する語。  
すがたかたちのある淨土をいふ。謂ゆる指方  
立相の淨土を指す。

ウソ一ネンブツ 有相念佛 無相念佛  
の對。有相の念佛といふ意。或は佛の相好を  
觀じ、或は佛の名號を稱する等の行法に於て  
皆な有相の佛を目標として念ずるをいふ。即  
ち指方立相の上に於て念佛するをいふ。

ウソームソ一 有相無相 相のあるも  
のと相のなきものをいふ。すべて形があり相  
のあるものは有相であり、それらのなきもの  
は無相なり。

ウチシキ 打敷 地布・外敷に對して、  
佛前の卓上に敷くもの。内布・打布・卓布と  
もいふ。眞宗では卓圍を以て先づ卓を圍ひ、  
其上に打敷を覆ふ習慣なるも、本宗にては多  
く卓を全部覆ふ角形のものを用ふ。その縁由  
は、もとは天妙衣を以て座上に敷きしに因る

ものにして、無量壽經に「又衆寶の妙衣を  
以て普く其地に敷く、一切天人之を踐みて行  
く」と云ふが如し。尙ほ死者の衣服等を以



(敷 打)

て打敷等を作り供養することは舊刹住生經に  
「佛の言たまはく若し亡者の骸身の具、宗室園  
林を以て三寶に施せば、地獄の苦を抜くべし」と  
いへるに基くものと言はる。

ウチダテイオンニ 内田貞恩尼 二五〇  
大阪母普寺再興者。明治尼僧界の先覺。天保  
十一年十一月十三日、東京市日本橋通油町の  
「與兵衛下し」で名高い内田甚吉長女として生  
れ、俗名を徳子と呼べり。幼にして生家頗焼  
の災に遭ひ、家復興のため、徳子は兩國の祖  
父母の手に養はれ、こゝに觀音信仰の感化を  
受く。十一歳の秋徳川家の御殿奉公として行  
儀見習となりしが、十三四歳出家を志して果

ウチダテイオンニ—ウツノミヤヤサブローヨリツナ

さず、十六歳又甚吉が妻と七人の子供を残し  
て急死するや、徳川家を下りて養子を迎へ家  
業を繼ぐべき親族會の決議を辭し、元治元年  
十月二十六日夜中髪を切り千葉縣行徳に隱る

二十一歳の冬漸く許されて名僧福田行誠の門  
に入り貞普尼と云ひ、東京今戶玉姫町の蓮華  
院に寺院生活を精進す。居ること五・六年學問  
修行のため深川十方庵を建て行誠の講筵につ  
らなり後京都知恩院境内の宗學校設立せらる  
ゝや、十方庵を捨て、男僧の中に入り岸上依

嶺等につき希望の學問三昧の三年を過し、本  
山の旨を體し徹定等と共に明治十三年五月十  
四日遠く鹿兒島に出張布教せり。歸りて名古  
屋の無量壽院住職となりしも鹿兒島の信者の  
請により十六年七月再度布教し遂に小松原町  
に布教場を建設す。この頃法妹輪島國隆が師  
行誠の授けを得て知恩院山内に尼僧學校設立  
の請願を進行。開辦と共に尼僧教育に盡す、  
會約により遂に鹿兒島を引き上げ、二十一年

二月二十五日その開校式の後を受け初代監督  
兼教授として教育生活に入る。苦心經營の二  
年を経て大阪母普寺を借りて尼衆教場を開き  
その基礎を造り、二十三年七月荒廢せる由緒  
寺院母普寺の住職となりてその再興を計り二  
十年には本堂庫裡の新築成りその維持方法

も立ち、平和の晩年を迎ふ。大正七年四月十  
七日七十九歳の高齡にて門弟信者に惜まれな  
がら正念往生せり。

ウツトラソ一 多羅羅僧 Nitarsangha  
三衣の一。唱多羅羅僧・優多羅羅僧・郁多羅羅僧に  
作り、上衣・上著衣・覆左肩衣と譯し、三衣の  
中の中位にあるが故に中儀衣、大衆會のとき  
著するを以て入衆衣、七條の布切を以て作  
るが故に七條衣・七條袈裟と通稱す。→ シチ  
ジョーダサ(七條袈裟)

ウツノミヤゼンド一 宇都宮善道 二五八  
近世の宗政家。京都廣寺町稱名寺住僧。滿蓮  
社聲譽融阿圓應と號す。安政二年、愛知縣に  
生る。幼より稱名寺宇都宮眞道に師事し研鑽  
大いに努む。明治六年増上寺溫覺大宣に就き  
宗政を受け、同三十年師籍を嗣いで稱名寺に  
置す。福來教界に盡す所少からず、數次宗會  
議員に擧げられ又宗會議長として令名あり、  
大正二年執綱となり宗務に盡瘁し特に財政整  
理に力を致す。昭和三年九月二十三日寂。壽  
七十二。

ウツノミヤゼンモン 宇都宮禪門 大  
項に同じ。  
ウツノミヤヤサブローヨリツナ 宇都



官彌三郎頼綱 浄土師仰の鎌倉武士  
粟田白道兼の末孫、大進成綱の子。通稱彌  
三郎。鎌倉幕府に仕ふ。元久二年八月頼綱謀  
反をなすの端を構へるものあり、幕府小山朝  
政をして斬問せしめしも事無きを得。こゝに  
於て朝か運世の心を懐き、熊谷次郎の勸示に  
より、同月吉水の禪室に入り禪變して實信房  
運生と號す。宗祖法華中は、攝津縣尾の草庵  
を尋ねて教化を受け、宗祖法華の法難に  
當つては、家の子郎黨を率ひ、上人の遺骸を  
西山に隠匿するの護衛に任ずるなどの功多  
し。和歌と念佛とに餘生を送り正元元年十一  
月京師に没。壽八十八。

ウニョー 右統 印度禮法の一。尊者の  
佛を右に跪坐するを云ふ。無量壽經卷上に  
「佛足を禮首し、右繞三匝す」とあり。右繞を  
解するに古來異説あり。南山・義淨の意によ  
れば、尊者の右手の邊に向つて旋り、左手の  
邊に出ずるを右繞とし、之に反するを左繞と  
なす。

ウノキ。シシヨ 鷓木私鈔 西山派  
西谷流の頭學行觀は武藏國在厚郡調布村に寶  
幢院を建て、此處に止住し、其の著すところ  
の述作尤だ多く後學に依用さるゝもの渺  
からず。後世彼を鷓木の行觀と通稱し、彼の

著はすところの注疏を稱して鷓木の私鈔とい  
ふ。よカタエー(覺經)

ウバゲイシヤ 優婆塞會 二二七  
優婆塞會、優婆塞會、部波第護等にも作り、論  
議、法談、説法、論議經等と譯す。十二部經の  
一。佛の經説につき、佛又は高弟等が論議、  
分別・問答して、其の義理を辨じたる經典の  
形式を云ふ。往生論の具名を無量壽經優婆塞  
會願生偈といふが如きは其の一例なり。

ウラボン 孟蘭盆 二二七 烏藍婆  
拏、倒懸の義を有する梵語 Avalambana の轉  
訛せる語なり。玄應普義第十三に説くが如  
し。この孟蘭盆の起原につきては孟蘭盆經に  
佛の大弟子目連はじめて六神通を得て、父母  
を度し、乳哺の恩を報せんと欲し、盂蘭を以て  
世間を觀視するに、その母腹鬼中生れて飲  
食を見ず、皮骨連立せり。目連悲しみて之を  
救はんとするも能はず、具さに佛に白す。佛曰  
はく「七月十五日、僧自恣の時、當に七世の  
父母及び現在父母の厄難中の者の爲に飯食百  
味五菓等を具し、世の甘美を盡して以て盆中  
に著け、十方の大徳衆生を供養すべし」と。  
「時に目連、教への如く爲しければ、その日、  
目連の母は一切餓鬼の苦を脱するを得たり」  
とある之なり。吾が國に於ては、齊明天皇の

三年之を行ひしを嚆矢となす。後漸く民間に  
弘通して今に行はる。孟蘭盆會は略して盆會  
と云ひ、或は單に盆とも稱し、又亡者が歡喜  
する日と云ふ意より歡喜會とも或祭りとも稱  
す。今日行はる、孟蘭盆會は舊曆七月十五日  
又は新曆八月十五日等期日は一定せざるも最  
も人口に膾炙せる民間年中行事の一として盛  
大に行はれ、各宗の中淨土宗の孟蘭盆會最も  
盛んなり。

ウラボンキョー 孟蘭盆經 (一卷)  
西晉竺法護譯。孟蘭經とも云ふ。現今行は  
る、孟蘭盆會の基く處の經典にして、目連  
の請により佛陀が十方僧衆の自恣の日たる  
七月十五日、百味の飯食五菓等を供へ懸棺  
燈して佛僧等に供養せば、七世の父母の  
餓鬼の苦は救はれ、若し現在せる父母は無  
病長壽一切の善福を脱れしむる報恩の道を  
説き諭へるものなり。末書としては古藏の贊  
述・慈淨・惠治・宗密・高辨等の疏釋甚だ多  
し。

ウリウセキ 瓜生石 淨土宗總本山知恩  
院黒門前にある平石を云ふ。この石は古來種  
々取沙汰さるゝも、孰れが正しきか明らかな  
らず。華頂山山崎宗圓本記に「相傳牛頭天王  
此石上來現因社今建祇園始洛東瓜生山來現重  
し。

現此石上故得其石」と云ひ、或は「昔此石傍  
生瓜草夜中枝葉繁茂蓋石上即花開花上金札天  
降感神院之三字則祭之於粟田天王神跡而名瓜  
鉢故名此曰瓜生石云云」あり。

ウリスラ 瓜連 茨城縣那珂郡瓜連村。  
關東十八檀林の隨一たる草地山常福寺の所在  
地をいふ。

ウリスラジヨーフクジシ 瓜連常福寺  
誌(一卷)攝門撰。檀林志の一。檀林瓜連常福  
寺志とも云ふ。本書は關東十八檀林の隨一た  
る瓜連常福寺(茨城縣那珂郡瓜連村)の寺志に  
して著者晩年の作なるが故に未定稿本なり。そ  
の内容は創立沿革・伽藍の有様・開山了實の  
法系及歴代の略傳・修學知名僧の傳・祀祭の  
靈名・什費・古文書並に末寺の略歴等につい  
て記述せり。

ウルモノトキクニ 漆(間)時國 一八〇  
宗祖法然上人の父。法間氏は海氏・菅原氏と  
共に美作國三貴家の一に數へらるゝ名門にし  
て、かしくも仁明天皇の皇子西三條右大臣  
源光公の後胤、美作久米の押領使法元國の家  
系に列す。時國卿か本姓に慢じ、稻岡の預所  
源定明をあなどりて執務に従はず。定明これ  
を遺恨に思ひ、遂に保延七年春時國を夜討に  
す。時國ふかき疵を蒙り、一子勢至丸に復讐

を企てることなく、出家し菩提の道を修求せ  
よと懇ろに遺誡し長逝す。時に勢至丸九才な  
り。

ウロのジヨード 有漏淨土 無漏淨土  
の對。凡夫が有漏心を以て修したる善業力に  
て感じたる淨土を云ふ。煩惱に隨順して離れ  
ざるを以て有漏と云ひ、而も其の土清淨なる  
が故に淨土と云ふ。即ち迷ひの衆生の住む清  
淨土を指してかく云ふ。

ウワバカマ 上袴 一ハカマ(袴)  
ウナガ 雲臥 二二七 徳川中期の宗學者  
増上寺第三十四代。眞蓮社證譽と號し、獨清  
と稱す。江戸の人。幼にして増上寺快龍の弟  
子と成り、隱感風に頭角を顯はし、一時下谷  
橋隨院に在りて忍謙と學友たりしが、元禄元  
年小金東漸寺に住し、同十二年飯沼弘輝寺に  
移り、同十三年増上寺第三十四世となる。將  
軍綱吉の歸仰を得、常に城中に説法す。寶永  
元年麻布に退隱し、同七年五月寂。壽六十五  
師は専ら學徒の教養に當り、鎌山大家を尊し  
て頌義底本を修成し、又頌義校草を刊行し學  
徒に便せること至つて多し。

ウンガイ 運海 一ノガミウンガイ(野  
上運海)

ウンコーイン 雲光院 東京市深川區  
三好町。淨土宗深川五方丈の一。龍徳山光嚴  
寺と號す。慶長六年、往譽潮香開創。悅龍中  
興。徳川家康侍女阿茶局開基。初め日本橋馬  
喰町にありしが明暦の大火の際、祝融にかゝ  
り神田岩井町に轉じ、のち天和二年現在の地  
に移す。當地に於ける名刹にして子院七宇を  
數ふ。

ウンゴジ 雲居寺 建仁二年(一八六二)  
宗祖師七十の秋の頃、吉水草庵より雲居寺の  
勝應院陀院へ百日參詣し給へる旨勅傳に出づ  
勝應院陀院とは此寺の本堂の號なりと云ふ。  
永治元年勝西の供養せし金色の阿彌陀如來像  
は北京の大佛と云ひ、唐人の歸依厚く、竹谷  
乘顯房、徳大寺唯運房の奇瑞世に著はる。觀  
實には高台寺の塔頭春光院は其の遺跡なりと  
の寺僧の傳説を記す。京都了蓮寺の寺傳に依  
れば同寺の本尊は即ちこの阿彌陀如來なりと  
云ふ。

ウンシヨージ 運正寺 福井市緑町。  
森巖山と號す。開山知恩院第二十九代滿譽尊  
照大僧正。慶長十二年越前國主にして松平家  
始祖たる徳川秀康開創。同家累代の菩提所と  
なり寺費また渺からず。寺費、後水尾天皇宸  
翰・道覺法親王書の心經等。寺域宏壯、該地

方の名利なり。

ウンセイ 雲栖 二二〇〇 黒谷金成光明寺第十九代。洞窟社西譽と號す。永徳七年、山内に精舎院を創建し、翌年こゝに退隱、同十年三月二日寂。壽不詳。

ウンセイ 雲棲 一〇シユコ (殊安) 社連譽と稱し、又愚元と號す。長門に生る。幼にして母歿し、無常、道心を萌し、十一才蕨蓮知院雲頂に就き出家、十八歳東遊増上寺白隨に從ひ修學淨行意り無く、享保七年同寺學譽より宗臘經法を承け、同二十年歸國、厚狭郡末登妙庵寺に住し、衆請により法を説き道譽頗る高く四衆歸依深し。日常清肅、專念主義を持し、七日不臥專修百萬遍を修すること前後幾回なるを知らざりしと。享保二十年十二月寂。壽六十八。

ウンチヨ 雲頂 二二〇三 知恩院第五十一代。遺囑社譽譽風と號す。延寶七年生る。岩付淨國寺第二十一世・飯沼弘經寺第四十二世・小石川傳通院第二十八世等に歴任し、寛延三年十一月七十二歳にして幕府の台命により知恩院住職に轉拜、翌年十月大僧正に任ぜられ、在住二年餘、寶曆三年二月五日寂。壽七十五。

ウンチヨ 雲潮 一〇コカク (虎角) ウンドー 雲洞 二二〇三 徳川中期の人。諱は亮徹、青蓮社譽譽山と號す。俗姓は高木氏、宇都宮の人なり。幼小より學を好み十四歳の時雲頂に就て出家す。爾來、新田大光院・小石川傳通院・増上寺等に留錫し、志を専らにして佛道を精進し好學の譽れ高し、就中唐詩及び國學に長ず。寛保二年二月二十二日増上寺僧會に於て寂す。壽五十。(著書)論註正義二卷。

ウンバ 雲把 敦賀西福寺住僧。妙蓮社譽譽と號す。安曇虎角の門資。越前の宰相忠直、師に歸すること懇く、請して敦賀大原山西福寺に住せしめ寺領一百石を寄附せりといふ。壽不詳。

ウンバン 雲版 雲板とも書き、大阪ともいふ。版の形を雲形に繪造せるが故に雲版と云ふ。主に唐金を以て鑄、時を報する爲に打つものにして、その打方は版木による。



(版) 雲 故に雲版と云ふ。主に唐金を以て鑄、時を報する爲に打つものにして、その打方は版木による。

ウンリユ 雲龍 二二〇三 清淨華院第

四十五代。吳蓮社天譽と號す。寛文五年五月勅請により清淨華院に普賢。同十一年黄金若千を賜ひ講堂を修理す。元禄七年七月十九日寂。壽不詳。

ウンリンイン 雲林院 もと京都府愛宕郡紫野大徳寺の東南にあり。嵯峨・淳和二帝の行宮なり。後ち無品親王常康(延喜區子)の寺となし、貞觀十一年通照僧正に付屬し、天台宗の學所とし給ふ。現に上京區紫野雲林院の地名を存す。

エ

エ 慧 トサンガク (三學)

エイクンドー 永觀堂 淨土宗西山禪林寺派の本山。禪林寺の世稱。永觀律師入りて中興せるよりこの稱あり。トセンリンジ (禪林寺) (1)

エイク 榮久 二二七五 宇治平等院の學僧城譽と號す。西三條遺造院實隆の子なり。知恩院傳譽慶秀に就て出家し、關東に下り増上寺普賢聖觀に嗣法す。而て明應三年宇治平等院に住す。同院に本宗の勢力を扶植せしは實に師の力に依る。永正十二年十月二十五日寂。壽不詳。

エイクー 寂空 一八八九 比叡山黒谷の學僧。字は慈眼、良忍に師事し圓頓戒、龍通念佛の奥旨を受け、學徳兼備の英匠たり。久安六年宗祖十八歳にて黒谷に隱遁するや師に事へ、保元二年法蓮房信空亦た師に就て出家す。後ち宗祖の高風を慕ひて弟子の禮をとる。治承三年四月(一説に二月)二日寂。(著書)圓頓戒法藏大綱集一卷。

エイケイ 永慶 トレンシヨ (建勢)

エー エイヤクカンムリヨージユキヨ

エイコー 榮光 百萬遍知恩寺第十二代覺弘と號す。傳譽並壽不詳。

エイコーセキ 影向石 知恩院勢至堂の東側にあり。宗祖御終焉の時、加茂の明神降臨し給へりと傳ふる靈跡なり。

エイザン 寂山 トヒエイヤン (比叡山)

エイシヨイン 榮攝院 京都市左京區黒谷町。黒谷山主琴譽開基。徳川家康公の臣木俣守時、天正年中家康に隨つて京都に在り、黒谷山主琴譽と同じく三河の藩なりし誼を以て、天正十七年この地に當院を創建し琴譽を開山となす。

エイシヨージ 永正寺 海南市日方町。辨才山甘露殿と號す。開山果譽。永正年中開創。當寺は肥州徳川一門の歸依篤く菩提心院寶塔あり。永正元年奏聞を遂げ勅許を得て建立永正年號にて甘露殿永正寺の立額を賜ふ。故に門前通りを今に御門の町といふ。

エイシヨージ 永昌寺 東京市下谷區北稻荷町。朝日山顯成院と號す。永祿元年尊譽全開山。明暦二年、松浦兼敏守の母永昌院を非りその菩提所たり。文化年間堂宇再建現在に至る。

エイシン 永眞 (水心) 二二八九 黒谷金

戒光明寺第十八代。榮譽と號す。傳記不詳。戒光院の開山なりといふ。天文七年六月二十八日寂。壽不詳。

エイシンジ 英信寺 東京市下谷區入谷町。雄譽上人開山。長年中の草創なり。もと榮雲院と稱したりしが明暦二年九月、松平壹岐守英信死亡に際して現在の名に改稱せりといふ。

エイニヨゴ 嬰女號 孩子號の對。嬰とは生れたての兒、所謂みどりこのこと。通常成名にこの字を用ふるは大體生れて二・三歳頃までの女兒なり。二・三歳迄の死せる男子に嬰子の號を附すは不可。

エイフクジ 永福寺 神戸市兵庫區南仲町。開山空性。御宇多天皇弘安十年草創。元祿二年の建立なり。

エイヤクアミダキヨ 英譯阿彌陀經 マツタス・ミユラー譯。淨全第一別卷、東方聖書第四九卷所收。小極樂莊嚴經 (The smaller sukhavati-sutra) と題す。明治二十七年譯。本書は譯者が本邦に傳はれる梵本と經什譯の阿彌陀經とを南條文雄と共に比較校訂し英譯せるもの。

エイヤクカンムリヨージユキヨ 英

譯觀無量壽經 高橋順次郎譯。淨土第一別卷所收。The mahāyāna-sūtra 題す。明治二十七年譯。本書は漢譯觀無量壽經(觀良耶舍譯)を英譯せしもの。

エイヤクムリヨージユキヨイー 英譯無量壽經 マツタス・ミユラー譯。淨土第一別卷、東方聖書四十九卷所收。大極樂莊嚴經(The happy abhaya-sūtra)と題す。明治二十七年譯。本書は譯者が尼波羅所傳の諸種の梵本を南條文雄と共に校訂し英譯せしもの。

エイヨージ 永養寺 京都市下京區寺町佛光寺下ル。開山鎌倉光明寺第八世觀譽。文明十三年、足利義高開創。もと高辻西洞院にありしを、天正十三年豐臣秀吉公の命により現在の地に移し、朱印を賜ふ。

エオン 慧遠 (1) 一Oktin 支那東晉代の人。廬山白蓮社の祖。淨影寺慧遠に對して廬山の慧遠と稱し、又辨覺大師・正覺大師・圓悟大師・等備正覺圓悟大師ともいひ、遠公と略稱す。山西省雁門郡の人、長じて太行恒山に行きて道安に就き弟弟子と共に出家す。秦苻苻丕の道安を擯して長安に旋るに及び、道安に別れて荊州上明寺に至り、更に羅浮山に至らんとして廬山の清秀を見て此處に留り、慧水の巖崖により刺史桓伊東林精舍を建

て此に住す。支那佛教史上に名高き白蓮社の結社は太元年中、廬山般若菴精舍に於て行はれしものにして、慧水・慧持・曇恒等の同學門侶並びに慧遠を敬慕する當時の名士・劉遺民・雷次宗・周續之等百二十三人、阿彌陀三尊像前に於て設齋立誓西方往生を欣ぶ。羅什關中に入ると聞かば、特使を派して之と文通し往復數有り。又曇摩流支を扶けて十誦律を完譯せしめ、佛陀跋陀羅案牘によつて長安を去つて廬山に入るや、囑して蓮華多羅譯經を出さしめ、其の他譯法及び戒律の典籍整備に力を致す等佛教興隆に一大貢獻をなす。桓支が沙門をして王者に禮せしめんとするや、沙門不敬王者論を作つて此に抗す。廬山に住すること三十年遂に山を下らず。客人有りとるに虎溪を以てし、世に虎溪三笑の說話を傳ふ。晉義熙十二年八月歿。壽八十三。著書。問大業中撰義十八科三卷。明報應論一卷。沙門不敬王者論一卷。沙門報親論一卷等。詩文集に廬山集十卷有りといふも今傳はらず。(2) 隋代。一三〇 敬遠の人。姓は李氏。廬山の慧遠に對して淨影寺慧遠又は小遠ともいふ。十三歳にして出家し、僧惠暉師・湛律師等に師事し諸經の奥旨に徹す。北周の承光二年武帝敬佛の詔を下すも肯かず。これに抗す

ること三年。武帝崩じ隋の文帝佛教を再興するや天下の大德六人の隨一として召され淨影寺に住す。その下學徒雲集して七百を超ゆといふ。開皇十二年勅により翻譯の事を司り辭表を刊定す。同年歿。壽不詳。その人となり身長八尺五寸、腰九圍ありといふ。著書尤だ多く諸經の章疏五十餘卷を撰す。この中無量壽經疏二卷・觀無量壽經疏二卷等淨土教に關するものあり。

エオンリユー 慧遠流 支那淨土三流の一。廬山流又は白蓮社念佛ともいふ。東晉代の人。支那淨土教最初の提唱者たる廬山の慧遠により創始されしものにして、その内容は主として般舟三昧經による念佛を修せり。大元年間於て出家・居士等道俗の名士をはじめ慧遠の高徳を慕ひ、廬山に集るもの踵を接し一時はその數、數百を超え、ために社會的影響がからず、至大元年には白蓮社念佛を禁止せしことありし程なり。慧遠流の傳承は今日明かならざるも、我が國に於ても澄圓菩薩智演は支那留學の初り慧遠流の繼承者善度の下にこの流を學び、歸來後は大坂堺に旭蓮社を創立してこの念佛を修し、高野の心蓮また元暦元年高野山新別所に於て白蓮社の遺風を移してこの念佛を修し平氏の落武

者等の飽參するもの渺からず。イシナジョイドサンリユー(支那淨土三流)

エカン 懷感 支那唐代の人。新羅論七卷の著者。善導大師の弟子にして長安千福寺の住僧。はじめ有宗を學びよく強悍の資性を發揮せしも、後善導大師に歸依して淨土の要義を學び念佛三昧を證得せりといふ。自ら宿業重きを懺悔發露して群疑論を著し、その業牛にして寂。壽不詳。

エガン 廻願 廻向發願の略。所修の一切の善根を廻施し以て淨土に往生せんと發願するを云ふ。授手印には四句分別を設け、就中西方廻願を淨土宗の本意、念佛行者の廻願なりとなす。

エカンギョートーハンジュサンマイギョードーオージョーサン 依觀經等般舟三昧行道往生讚(一卷) 善導の五部九卷の隨一たる般舟讚の具名。ハンジュサン(般舟讚)

エキ 惠願 イエンチ(圓智) ②  
エコー 廻向 自己の作す所の功德善根を廻轉して、菩提等に廻向し、又は衆生に廻轉すること。往生論註卷下によるに、往相・還相の二廻向を明かす。往相廻向とは、自己

エカン エコーホツガンシンシク

の作せる過去及び今生の功德善根を衆生に廻施し、共に淨土に往生せんと願ふことにして上述の廻向とその意同じ。還相廻向とは、稍その意義を異にし、淨土に生じ已りて後、大悲心を起して更に此の土に歸り、一切衆生を教化して共に佛道に向はしめんと期するを云ふ。眞宗にては、この往還二廻向を以て彌陀の廻向となし、衆生よりは不廻向と名づくと言ふ。又死者の爲に讀經念佛するを廻向と云ふは、その功德を死者に廻施して、佛道に向はしむるの意なり。

エコーイン 回向院 (1) 東京市本所區東兩國。國豐山無難寺と號す。明暦三年の大火により積死焼出、その中、十萬八千人の死屍を一坑に埋め増上寺第二十二代善賢普賢は獨によつてこれが供養をなし、その塚上に一字を建立し小石川智香寺自心和尚を請して開山となす。その當時は諸宗山無難寺と號せしが後回向院と改む。爾來諸國の靈佛靈像等を開帳し又毎歲勸進相撲を興行する例となり、日本角力道本場所となれり。大正六年十一月同技館の焼失のとき類焼、後再建現在に至る。境内諸名士の墓多く、寶物亦た渺からず。(2) 東京市荒川區南千住町。開山弟譽義親。

寛文二年、本所回向院より獄中病死並に刑殺人等埋葬被戮且亡靈回向のため、刑場北に一字を建立せられんことを幕府に願ひ、その許可によつて創建せしもの。

エコク 衣箱 衣の櫛の意にして、又衣袂に作る。花を盛るものにして、後に華を盛る器を衣箱と云ふ。阿彌陀經に「各の衣箱を以て衆の妙華を盛り、他方十萬億の佛に供養す」とあり。

エコク 穢國 イエド(穢土)

エコーフエコータイ 回向不回向對イフエコーイ(不回向回向對)

エコーボサツ 慧光菩薩 宗祖法然上人の題號。文治四年(一一八四)、後鳥羽天皇より宗祖の徳を嘉賞して賜はりしもの。

エコーホツガンシン 廻向發願心 三心の一。イサンジン(三心)

エコーホツガンシン シク 廻向發願心四句 三心の隨一たる廻向發願心についての四句の内容。彌西上人の末代念佛授手印に二重の四句を出す。第一には、(一)有願有行(願と行と具足して初めて淨土宗意に契ふ)(二)無願有行(願なく唯實踐のみあるものにして宗意は契はず)(三)有願無行(願

のみありて實踐の伴はざるものにて宗意に契はず(四)無爾無行(願も行も共になく無關心なるものにしてもとより宗意に契はず)第二には、(一)西方通願(正しく西方淨土を願ふものにして宗意に契ふもの)(二)余事通願(西方往生以外の善願を願ふものにして宗意に契はざるもの)(三)西方餘事通願(上の兩者を併せ願ふものにして半は宗意に契ひ半は宗意に契はざるもの)(四)非西方通願(非餘事通願(上の兩者の何れをも願はざる世俗の輩をいふ)これなり)

エコーモン 廻向門 五念門の一。イネンモン(五念門)

エコー 栴檀 把手の香爐。大部分金屬を以て作られ、時には木を用ひることあり。佛前にて供養禮拜する時、捧持する香爐にして手爐ともいふ。從來、維那が栴檀を取つて大家を先導する事は淨飯泥泥經に「佛乃ち香爐を取つて棺前に在り導引す」との文に依るものなり。吾國にては佛敎渡來當時聖德太子既にこれを持用され、彼の大原開闢の際にも、顯眞法印が自ら栴檀香爐を執つて宗祖大師を引導せりとあるより見ても、古來より常にこれを使用せしこと窺はる。善導の法事讀に「手に香華を執つて佛に供養し奉る」とあるは、その形状は異なるも亦この意味なるべし。一説によれば、栴檀は香が身の穢身の行く所に從つて薫するものと解される故に、この香爐をもつて佛前の供物を清めることは或は間違かとも思はれる。栴檀の扱ひ方は、右手で栴檀の下部を握り、左手を添えて香爐を前方に捧げ、その置き方は、前卓上に設けられた箱又は籠籠ある時は其右方に香爐を前方に栴檀を手前にして置き、説相箱等なき場合は、香爐を左方にして横一文字に置き、机なきときは、膝の前に香爐を左方にして横に置くものなり。

エフン 慧嚴ニヒコ 増上寺第六十六代

エザン 懷山 伊勢國天然寺住僧。俗姓不詳。幼にして出家し小石川傳通院に修學し真性の解衆に勝る。後ち伊勢阿波津天然寺に入る。壽不詳。「著書」淨土源流章解蒙一卷。

エシヨ 依正 ↓エシヨニホー(依正二報)

エシヨ 惠昌 ↓エシヨニホー(四難)

エシヨイン 惠照院 國國縣三井郡善導寺村。建久二年、鑑西上人の開闢せられし寺。

エジヨウダイシ 慧成大師 法然上人の證號。宗祖の滅後五百五十四回忌に當り、寶曆十一年正月十八日、時の帝、桃園天皇より賜りたるもの。↑ホーネンシヨニシヨノシゾー(法然上人の證號)

エシヨニホー 依正二報 略して單に依正ともいふ。依報と正報との二種の果報。正報は又正果とも名づけ果報の主體たるもの即ち五蘊和合の身體を云ふ。依報は又依果とも名づけ、正報の所依の果報たる國土・器具等を云ふ。觀經玄義分に於ては、極樂の依正二報を通依報・別依報、通正報・別正報の四に分つ。通依報とは佛と聖衆と共に受用するもの、別依報とは彌陀のみに屬する華座にして、それ以外の寶池・寶樓等は悉く通依報なり。別正報とは彌陀を指し、通正報とは觀音勢至以下の聖衆を總攝す。依正二報とは亦器世間と衆生世間との二種の世間に相當す。

エシン 廻心 心を廻轉するの意。邪惡の心を廻轉改悔して佛道に歸し、或は二乘自利の心を廻轉して大乘に趣向すること。

エジン 惠尋 求道房ともいふ。黒谷光明寺第三代。生年等不詳。二尊院の正信房湛空に就いて淨戒密の學を修め、文永年中湛

空の鹿めにより叡山黒谷に登り、祖山の大成を復興す可く慈眼坊に於て佛敎大師の學生式の制に則り、一期十二年の叡山を祈誓せしが律衣を着用して慈惠大師の遺誡を守らざりしにより、一山より排斥され山に住することを得ず、遂に下山して白川の邊に新黒谷を開闢す。現今の大木山黒谷念成光明寺これなり。彼は圓成復興の偉人にして黒谷流の開闢は彼に始まる。「著書」圓成開闢書二卷。

エシンオージョー 廻心往生 廻心とは心を廻轉するの意、即ち邪惡の心を廻轉改悔佛道に歸入すること。故に廻心往生とは、五會法事讀に「但だ廻心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫をして變じて金とならしむ」とある如く、大乘に趣向して自利の心を廻轉し淨土に往生するを云ふ。

エシンコウダイ 廻心向大 小乗の心を廻轉して大乘に趣向するの意。二乘の人が小乘自利の心を捨て、大乘菩薩の道に歸入すること。二乗が廻心する時期に就いて、大般涅槃經第十一に「聲聞の預流は八萬劫、一來は六萬劫、不還は四萬劫、阿羅漢は二萬劫、佛覺は一萬劫を経たる後」といひ、大乘起信論義記卷上には回心の七位を説く。

エシンソーズ 惠慧心僧都 天台の

學僧、日本淨土敎の先覺者たる源信僧都は比叡山横川惠心院に住せしを以て住所に因んで惠心僧都といふ。↑ゲンシン(源信)

エデン 慧傳(惠傳) 三三三三 紀州光恩寺開山。字は亮翁、樂運社信譽と號す。俗姓源氏、永祿三年、三河國松平に生る。十一歳のとき同地大樹寺成譽に就いて得度、その勤めにより川越重尊寺成譽に師事せしが久しからずして感譽示寂し、住いて増上寺着光親智國師に嗣法すること十有餘年、内外の典籍を涉獵し解、顯密大小を兼ね傍ら神道を究む。後ち諸國に遊化して京師に至り、天皇に拜謁仰せつけられ上人號を賜ふ。天正十八年紀州那賀郡小倉に留錫するに師の道風を慕ふもの雲集し禮請もだし難く光恩寺を開闢す。慶長二年再び諸國遊化の旅に出で、至る所或は講學につとめ或は寺を興し化行やむことなし。慶長十三年光恩寺に歸り翌年知恩院開闢の請により宗祖忌の導師を勤め朝野の歸仰篤し。寛永十二年三月一日寂。壽七十六。

エド 穢土 穢惡不淨土の意。穢國・穢惡國土・不淨土ともいふ。論註卷上に「穢土の如來の大悲の謙忍を嘆ずと雖も、佛土は淨土の相あるを見ず」といひ、往生要集卷上本には、三界六道を穢土とし、之を厭離すべきことを説けり。

エドサキダイネンジン 江戸崎大念寺志(二卷) 攝門述。攝林江戸崎大念寺志ともいふ。文政天保年中作、十八撰林志の一。本書は、攝門終末の著にして未定稿本なり。關東十八撰林の體一たる大念寺(茨城縣稻敷郡江戸崎町)の寺志なり。その内容は寺録本由・大小伽藍・什寶靈・朱鳥領件・果世師名・輪下正衆・末字有縁・開山略歴等八項に亘つて記述せしもの。附録として攝門の略傳を記載す。

エト 惠頓(一三三七) 徳川初期の人。先蓮社勸譽稱阿と號す。甲州の人。岩槻淨國寺開山清嚴に師事して修學し、信濃上田芳泉寺第一世となり化を數く。慶長十六年五月二十日寂。壽不詳。

(二)三三三三 徳川末期の徳僧。圓運社勸譽稱阿と號し又無一と稱す。三河矢作邑の人。寛政元年生る。十一歳にして大阪阿彌陀池和光寺歸譽について出家、ついで江戸靈巖寺に宗要を學び、後ち京都大阪に往來して經歴・典壽・徳本行者・和州法隆寺觀音等に指教を仰ぐ。師欣求の志厚く和州稱念寺・京都獅子谷法然院・三河御舟村草庵等に別時念佛を修す。後ち京都西光寺義開より大乘成をうけ、

京都北野成等庵に住すること三年、次いで洛西泉谷西壽寺に歸栖、偏に淨業に精進し又山城・鳥取・橋津の三州に教諭を張る。道譽華頂宮尊法親王に達し、謁見を聽され賜物を與へらる。また師寺門經營の才に秀で歴住の諸寺堂宇面目を一新せりといふ。嘉永五年春徵恙あり。同月二十七日寂。壽六十四。泉谷西壽寺に葬る。

**エブクズイネン**。ガン 衣服隨念願 四十八願中の第三十八願。極樂淨土の天人は身心を勞して衣服を得ることなく、思ひのままに自然の法衣を具し又裁縫洗濯等の勞作を要せざらんことを誓はれしもの。

**エホー** 依報 ↓エシヨニホー(依正二報)

**エニヨギ** 慧命義(二卷) 播磨朝日山信親撰。母尾の高辨が撰邪輪を著して宗祖の遺業を攻撃せるに對して之を反破せしもの。現存せず。

**エウソージョー** 依用相承 キョーカソソージョー(經卷相承)

**エリン** 惠林 二〇九六 百萬遍知恩寺第十六代。結譽と號す。傳記不詳。永享八年六月八日寂。壽欠。

**エンカイ** 圓成 圓頓戒の略名。エンドンカイ(圓頓戒)

**エンカイキゲンシヨ** 圓成歸元鈔 (二卷)大玄撰。寫本。徳川中期圓頓戒復興に際して著者大玄が自らの意見を陳述し、兼ねて從來淨土宗に於て流布せし布薩戒を淨土宗正傳のものにあらずしてその妄傳なることを主張せしもの。

**エンカイキヨージシヨ** 圓成教示鈔 (二卷)貞極撰。貞極全集卷上所收。本書は貞極がその門人の間に應じて答へし圓成に關する問答の筆録なり。十二番の問答よりなる。

**エンカイケツ** 圓成口訣(一卷) 靈潭述。續淨第九卷所收。本書は、淨土律の創始者靈潭が淨土宗所傳の天台圓頓戒の意義を略述せしもの。その内容は、はじめに相持戒を説き次に總持戒を論じ、最後に淨土宗に於ける傳戒の意義を述ぶ。

**エンカイケイモ** 圓成啓蒙(一卷) 大玄撰。著者成譽大玄は我が宗に於ける圓頓戒の漸く衰へつゝあるを愴き、之を復興せんと努力し、この書を著して圓頓戒に關する要項五十一條を示したるもの。その内容は圓成は決して我宗の宗義と矛盾するものに非

れば恰も一手缺けたるが如く、又圓を解するも戒を受けざれば一手缺けたるが如し。故に戒と圓と具足して始めて完全な身證となるといふ意味なり。而して本書著作の理由は、當時の一般の人々が口に圓成を説くも身に持たず、圓成の書讀が讀出するも正意を誤るもの多き故に、この弊害を矯正する爲にこの書を著せし旨を本書の末尾に附記せり。

**エンカイヒケツコシヨ** 圓成秘訣己證(二卷)滋賀三井寺藏。本書は、淨土宗二祖釋長作と傳ふるも、その内容より中古の偽作と推定さる。内容は、鎌倉・足利時代にかけて旺んたりし口傳法門の影響を受けて圓戒の秘訣を叙述せしもの。

**エンカイホンゾン** 圓戒本尊 ↓ジュカイサンシヨ(授戒三聖圖)

**エンカイモンド** 圓戒問答(二卷) 大玄撰。寫本。淨土宗圓頓戒復興に對する大玄自身の意見をのべ兼ねて從來淨土宗に於て流傳せる布薩戒は淨土宗正傳のものに非ずしてその妄傳にすぎざること主張せるもの。

**エンカイリヤクセン** 圓戒略撰 大玄撰。圓頓戒の梗概を述べたるもの。

**エンキョーシ** 圓鏡寺 宮城縣栗原郡

ず。佛陀の流れを汲む者は戒を持つが當然であり、戒は佛敎の通則であり念佛の助業なることを述べ、又佛敎を宣布して廢惡修善を勸むる爲、又本願を信する者は惡事をなすも罪なしと考ふる者の鮮見を矯正する爲にも持戒は最も必要なる所以を力説せしもの。

**エンカイコギ** 圓成講義(一卷) 祖嚴述。續淨第九卷所收。圓頓戒の要義を説けるもの。本書は、通受の菩薩戒に對して別受の菩薩戒の存在を論證するために、南無法相宗と北無天台宗との相異、南山律と天台の圓戒との相異を述ぶ。

**エンカイサンカジヨ** 圓戒三箇條 ↓カジヨードンボ(箇條傳法)

**エンカイシキ** 圓成私記(一卷) 貞極撰。貞極全集卷上所收圓頓戒の名字・戒體・戒相・戒用・異名・證據・修正・授戒等に就て簡明に解説せしもの。

**エンカイニシヨキ** 圓戒二掌記(一卷) 貞極撰。續淨第九卷所收。享保十年三月作。本書は圓頓戒の要領を戒體・戒相・料簡の三項目に分つて説明し、圓戒の眞意を知らしめんと企てしもの。二掌といふは圓と戒とを二つの手に譬へて、戒を持つも圓を解せず

草・書寫の彌陀經一千卷・阿彌陀佛名號十萬に及ぶと。(傳) 願求上人行狀記・續日本高僧傳。

**エンク** 願求 三三九四 山城專福寺開山。俗性は源氏、京都の人、幼より出家の志ありしも果さず、遂に正保二年に至つて專念寺信譽に従つて得度す、時に十三歳。十七歳にして江戸に遊學し、靈巖寺阿山につき宗義の遺業を極む。明暦二年正月江戸の大火により三途の劇苦、無常隨流を悟り、美濃大蓮寺に寓し、翌三年美濃片山に隱棲す。爾來近畿諸方を遊化し、萬治二年考母と共に有馬温泉に浴し、衆の請に應じ、極樂寺にて説法す。住僧榮譽極越と共に師に住山を請へども、固辭して聽さず、されど止むなく席を繼ぎ住山九年に及ぶ。母の逝去と共に寛文七年二月退化し、京都・福津・伊勢・出羽・安藝・出雲等の各地を遊化し、淨教を宣布す。又天和の災役の際は大修行をなし、飢民救済の大活動をなす。正徳五年圓崎の草庵にて病み、六月十一日寂。壽八十二。(著書)念佛安心諸門領解・徒然要

**エンゲシヨニシヨキ** 願求上人行狀記(一卷) 祐山撰・宅亮譯補。淨全第一八卷所收。正徳四年九月漢文體にて撰述、明治五年和文に譯されしもの。その内容は、寛永十年二月誕生、正保二年出家より縁山遊學明暦大火日擊の心事、遍歴行化、母堂奉養の爲め有馬極樂寺止住、名利を厭ひ攝化利生の事蹟、門弟に示せし法語、臨終の奇瑞、六條)

**エンゲエン** 願苦緣 觀經六條の一。章提布夫人が太子阿闍世のために幽閉せられて、此の苦を厭ひしことが觀經起説の因縁となりしをいふ。↓サンジヨロクテン(三序六條)

佛傳畫の製作及その所在を記す。

エンゲシン 厭求心 厭離土欣求淨土の菩提心をいふ。イエンリネトゴングジロ

ード(厭離土欣求淨土)

エンゲイ 圓問 二二九頁 百萬遍知恩寺第

四十一代。信樂社志尊と號し、一に無爲ともいふ。京都の人。十二三歳にして父を失ひ、出離の心を發して深川靈巖寺河山の室に投じ靈巖、隨流の遺風を傳承す。元祿元年壽命により小金東酒寺より百萬遍に轉外、靈巖を感じて無爲と稱す。師日常寫經を好み、その寫すところ淨土三部經一萬三千九百五部、阿彌陀經十五萬八千五百部ありといふ。寶永三年九月十五日寂。壽七十二。

エンコー 圓光 後光ともいふ。佛・菩薩の頂上より放つ圓輪の光明。イコーミヨ(光明)

エンコージ 圓光寺 盛岡市川原町。寛永年中、本寺元臺寺第三代一白和尚この地に草庵を營んで専ら淨業を勵む。時の城主南部重直、和尚に歸依の餘り堂宇を建立して紫雲山圓光寺と號す。

エンコーダイシ 圓光大師 法然上人の號。宗祖の滅後四百八十六年、將軍徳川綱吉の奏請により、元祿十年正月十八日、東

山天皇より賜りたるもの。トホーネンシヨニンのシゴ(法然上人の號)

エンコーダイシギョーシヨエズ圓光大師行狀繪圖 ↓ホーネンシヨニンギョーシヨエズ(法然上人行狀繪圖)

エンコーダイシギョーシヨエズヨクサン 圓光大師行狀畫圖覽覽(六十卷)

圓智述・義山重修。淨全第一六卷所收。勅修御傳の註釋書。本書は、圓智和尚の上足、中阿圓智の業を編ぎ義山良賢が完成せしもの。略して御傳覽覽、單に覽覽とも云ふ。貞享の頃兩人は和尚より清淨なる法然上人行狀繪圖の參訂並に註釋書作成を依頼され、義山は諸傳の參訂に、圓智は註釋の資料集輯に従事せしが、業半にして圓智病歿せしを以て義山後を承けて遂に之れを完成し、元祿十六年末刊行せり。全編を事義(前四十八卷)・地理(第四十九卷)・寺院(第五十卷より第五十二卷)・人物(第五十三卷より第五十九卷)・書目(第六十卷)の五類に分ち、事義は本傳の各節の下に之れを註し、餘は第四十九卷以下十二卷に亘りて載録せり。本傳の註釋書中、最も該博精緻を極め且つ權威ある良書なり。

エンコーダイシゴデンズイモモンキ 圓

光大師御傳隨聞記(十卷) 義山述・素中記。本書は寶永三年二月十九日より同年五月三日迄、洛西蘇門院に於て勅傳覽覽の補遺として講じたる勅傳御傳の講録にして、弟子素中親しく座下にありて聞くに隨つて記したるものなり。

エンコーダイシゴビヨ 圓光大師御廟

宗祖法然上人の御廟。現在知恩院勢至堂の東塔上にあり。所謂、賜蓮感夢の地に在るが故に賜蓮堂ともいふ。初め宗祖滅後その遺骸をこの地に歛め廟堂を建てしも嘉祿法難に遭ひ洛西粟生野に於て茶毘に附し、宗祖の上足これを分骨して夫々四散して護持す。その中勢至房源智は文曆元年本廟の再興にかゝり、宗祖の遺骨を朱の唐櫃に納めて寶塔に安置せり。後ち慶長年中講譽堂照のとき土浦城主松平伊豆守信一の寄進を得て廟舎を改築、ついで寶永七年應譽圓理のとき修葺を施し拜堂を建立す。現に拜堂並に御廟堂共に完備して古建築の粹と四圍の林泉の美相ひ映じて莊嚴を極む。

エンザ 圓座 蒲團とも云ひ和良布太(疊蓋)とも訓ず。蒲を以て編みたる圓形扁平なる敷物にして其の厚きものを厚圓座と云ひ、著にて編みしものを菅圓座と云ふ。後世

得を蒲團と云ふは其の義を失するものと云ふべし。

エンサイ 寅哉 三三九頁 伊勢梅香寺の學僧。字は信智、法蓮社要譽と號す。奥州和馬の人。幼少の頃より出塵の志あり、寛底に就て得度し、緣山に學び、時學の譽れ高かゝりしにより破司に授けらる。關谷忍誠と交り深く、忍誠が古水靈誓論一巻を著したるは實に彼の要請によるものなり。彼はまた龍岡舎に佛學を授け神國決疑編を撰し神佛一致を唱ふ。享和六年九月二十八日寂。壽七十二。

エンザン 緣山 東京三株山増上寺の略稱。トサンエンザン(三株山)

エンジャク 圓寂 入涅槃を譯して滅度を(舊譯)、圓寂(新譯)となす。元來は諸の徳を滿し諸の惡を寂滅するの義なり。即ち生死の苦をばなれ、微妙の樂を全うせし窮極の果徳なるも、後世に到つては生死の苦をばなると云ふ義邊より、賢聖高徳の命終を圓寂と稱す。

エンジュ 延壽 二六六頁 支那北宋の淨土教の偉才。字は仲元、錢塘の人。後ち諡して

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

恩

智覺禪師といふ。初め仕官せるも官錢を以て放生をなし、高僧はれて職を追はれ、四明の樂嚴禪師の下に投じて出家し、次いで昭國師に參じて心要を得、後ち深く淨土の法門に歸して一意専心淨業を修す。宋太祖建隆元年忠懿王に請ぜられて昭國寺に住し、日課一百八常に意ることなく行進念佛す。傍人望見天樂の聲を聞けりと傳ふ。永明寺に住すること十五年、弟子一千七百、常に衆のために菩薩戒を授け、施食一生を勤め、時人號して慈氏菩薩の下生となす。傍ら詩題を愛し志操高潔、道譽四海に傳ふ。開寶八年二月二十六日衆に訣別を告げ圓寂して西化す。時に法臘三十七、齡七十二。(著書)宗鏡錄百卷・萬善同歸集六卷等。(傳)宋高僧傳卷二十七、蓮宗寶鑑卷四。

エンジュン 圓純 二四七頁 百萬遍知恩寺第五十五代。應運社要譽と號す。文化十年六月、生實大嚴寺より百萬遍住職に轉昇。文政元年十一月四日寂。壽不詳。

エンショ 圓照 遊蓮房と號す。宗祖

法然上人の門人。入道少納言通憲の三男、俗名を是憲といふ。二十一歳のとき出家して法華經を學びしが後ち法然上人に師事す。道

心堅固、厭欣の心殊の外にして西山善峰三結寺に住し、宗祖に先だつて寂す。壽不詳。

エンジョジ 圓成寺 愛知縣海部郡

永和中村一色。開創年代不詳にして往古は西方寺と稱せりといふ。慶安年中、品譽これを中興、關通これを關き幕府の允許を得て關通流の本寺となす。元文年間、寺法を改めて淨土宗律院となし、爾來今日に至るまで六時の勤行、常念佛の聲絶ゆることなし。

エンシンジ 圓心寺 岐阜縣高須町高須。要行山と號す。開山教譽及天。慶長十三年、下總國關宿の城主小笠原土佐守信之祖父の菩提のため一字を建立せしが、寛永十七年當地に移住せるに從つて轉寺せしもの。慶應三年再建現在に至る。寺寶數點。

エンセツ 圓説 二二九頁 徳川中期の人。純性又は不退と號す。近江栗太郡の人。八歳にして父の喪に遭ひ母に請ふて妙樂寺原野について出家す。十五歳にして江戸増上寺に掛錫して性相の學を究む。宗戒兩儀相承の後、諸國を遍歴し、享保二十年總里に歸り師範に置す。後ち京都正覺寺に移り、三時禮誦、日課六萬を修すること十年一日の如し。寛延二年山城島羽法傳寺に住し日課を受くるもの一

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

四七

萬五千人なりといふ。寶曆九年病あり、同八月一日正念往生す。壽四十六。淨土宗にて木魚を用ふること師に始まるといふ。

エンセン 開宣

廣徳社統傳道阿と號す。肥前國伊萬里の人。享保二年生る。父片山氏は甲州武田家の臣にして當地の大庄官たり。七歳のとき叔父に當る同地常光寺靈澤性海について出家す。天稟の資をもつて夙に内外の典籍に通じ、十九歳のとき關東に掛錫して増上寺にて宗成兩願を受く。後ち谷中の依田伊織に神道を學び亦た東叡山寛水寺に天台の部書を研鑽す。後ち京都に上り湛慈信持律師に律學の規範を學び、次いで鞍山に往きて貞現の資となり、明和八年學頭職に補せらる。同九年龍山大善寺住職を命ぜられ、安永九年新田大光院に移り更に天明四年小石川傳通院に轉じ、寛政二年四月三條山増上寺に普賢。専ら淨業を勵み子弟を養育し、同四年四月、職を辭して蘇布一本松に隱棲し、同年五月二日寂。壽七十五。〔著書〕悉曇初學抄・傳書五重辯釋・天台戒疏講錄・觀經妙宗講錄等。〔傳〕三條山志。

エンチ 開智

〔傳〕三條山志。知恩院第十代西阿の資。俗姓不詳。知恩院隱退後、京都烏羽の法傳寺に幽棲中興開山す。

後ち山科阿彌陀寺に住す。正平十二年（北朝延文二年）三月二十七日寂。壽不詳。

エンチ 開智

〔傳〕三條山志。素月房と號す。俗姓平氏、但馬の人。資性俊敏、幼にして俗事を厭ひ、父母の歿後十四歳にして黒谷光明寺に入り求道に師事し師意を繼承して祖山黒谷の開戒復興に力を盡す。三井園城寺・奈良法隆寺・京都建仁寺等に巡歴研鑽して諸史百家、諸宗に通曉す。後ち鎌倉光明寺に到り寂靈・定慧の二師について宗義の奥旨を深る。尋で京都に歸り黒谷の住職となり行化盛んたり。正安三年二月十八日寂。壽不詳。

エンチ 開智

〔傳〕三條山志。近江草津正定寺住僧。中阿と號す。大津の人。同地淨念寺開立に師事して法を承け、後ち開證に嗣法して宗要を究め、近江草津正定寺に住して道俗を化益す。嘗て開證京都寺町淨教寺に留錫せし時、一日同門の義山と共に師を訪ね、開證の指授によりて法然上人の傳記を校訂註解することとなり、義山は校訂の役を司り、開智は註解の任に當りその業當に成就せんとて寂す。依つて義山これを補成す。これ法然上人行狀畫圖寶贊六十卷なり。壽不詳。〔著書〕西方要決略註・註圓光大師行狀等。

エンチ

演習 三三三 徳川末期の人。隨譽と號す。伊勢の産。幼にして入門寺法譽に師事制變、後ち東遊して講院に掛錫、一宗の奥義を究め、殊に淨土曼荼羅研究に意を盡め撰象十四卷を著す。且つ安養山曼荼羅寺を建立しその第二世となる。常に曼荼羅に對して禮稱禮誦し、正徳二年寂。壽八十。

エンチヨ

開澄 徳川初期の人。小今阿彌陀寺住僧。武蔵の國に生れ、幡隨意に師事して門下の俊足として聲譽甚だ高し。修學後、番頭位に轉せられ、多く幕府の論議會に預るといふ。のち風雲を伴とし漂々遊化すること二十年、小今阿彌陀寺に住す。壽不詳。

エンツ

開通 三三三 三條山沙門。字は珂月、無外子と號し、又普門とも稱す。姓は山田氏。寶曆五年因幡に生る。家は代々日蓮宗なり。幼にして出家し各宗の碩學に受業す、特に曆法を研究し梵曆に通曉す。晩年請に依り鞍山に住し曆法を講ず。師に就いて梵曆を學ぶ者數百人、何れも西洋の曆法を排斥して梵曆の復興を計り、一大護法勤皇運動を興す。天保五年九月寂。壽八十一。〔著書〕佛國曆象篇・須彌山儀圖・縮象儀・梵曆策進等あり。

エンツジ 圓通寺

〔傳〕三條山志。名越檀林の一。應永年中、名越派碩學長發理本草創。爾來同派の道場として寺蓮隆昌、天正二年、正親町天皇より勅願所の給旨及び勅額を賜ふ。明治維新後漸く衰頽せるも目下復舊の氣運著し。

エンツジ 圓通寺

〔傳〕三條山志。旭光山退照院と號す。もと當地の城主石川長門守の菩提所たりし寶珠院の舊址にして、寛永十二年尼ヶ崎圓通寺の專養再興して中興開山となる。のち代々戸田氏の香華院となれり。

エンツジ 圓通寺

〔傳〕三條山志。もと檀林深川靈巖寺の學寮なり。明治十年八月許可を得て現在の寺號を公稱す。

エンツジ 圓通寺

法華經の妙旨に範り梵網經所説の十重四十八輕戒を授くる戒法にして小乘戒に對して大乘戒といふ。この戒は古來種々の名を以て呼ばれ、圓戒・圓教頓制戒・圓教菩薩戒・一心全剛戒・一心戒・菩薩金剛寶戒・圓頓無作戒・一乘圓頓戒・一乘圓戒等といはれる。この戒法は傳教大師最澄が南都に於ける大小兼學の戒法に對抗して北嶺に一乘戒壇院を創設し、法華圓頓の根本精神に立脚して純大乘菩薩の戒法を確立せしものなるも、その思想の淵源するところ

は遠く支那天台の南岳大師・天台大師に遡るべきものなり。この戒の特色とするところは小乘律が團體生活の規律を主眼となせるに對して、利他を眼目とせる自律的律法たるにあり。又圓頓一實の妙戒として著しく國民道德的色彩を持ち、その戒體は性無作の假色を以て體となし一得永不失をその特色とす。戒法は大乗の三聚淨戒に立脚して法華の戒法を説くも、法華經には戒法の規範なき故傍らに梵網經に説く十重四十八輕戒による。この戒法は最澄—圓仁—長意—延昌—尋禪—源心—禪仁—良忍—假空と次第し、假空はこれを宗祖法然上人に傳ふ。法然上人は實に慈覺大師より九代、南岳大師より十八代の法孫に當る。爾來淨土宗に於ては傳々相承、戒法は宗派と並傳して今日に至る。古來この戒に關する著作尤だ多く枚擧に遑あらず、以てその如何に盛行なりしかの一斑を窺ふに足る。↓ジュエー ジュエー ジュエー ハツキョーカイ (十重四十八輕戒) サンジュエーカイ (三聚淨戒)

エンドンカイガイロン

圓頓戒概論 (一卷) 惠谷隆成著。本書は、著者が圓頓戒は淨土宗に於ける重要なものなるにも拘らず從來これが手頃なる解説書をきを愾きその多年の蘊蓄を傾倒してその概要を記述し、殊に

エンドンボサツダイカイ

圓頓菩薩大戒 圓頓戒のこと。この戒は聲聞・緣覺等の小乘人の受持する戒に非ずして菩薩の受持する大乘戒なるが故にかくいふ。↓エンドンカイ (圓頓戒)

エンドンムサのダイカイ

圓頓無作大戒 圓頓戒のこと。この戒の戒體は非色非心に於て受者の身中に在住し、防非止惡の功能を有し、造作發動すべき法にあらざるが故に

エンツジ 圓通寺

圓戒の流通史特に大乘戒の起源及び發達に就きて詳述せしもの。内容は、(一)戒の意義・(二)大乘戒の起源及び發達・(三)圓頓戒成立への推移・(四)圓頓戒の成立・(五)慈覺智證安然の圓戒顯揚・(六)安然以後の圓戒傳通・(七)法然以後の傳戒・(八)徳川時代の戒法興隆・(九)圓頓戒とは何ぞや・(一〇)所依の經疏・(一一)圓頓戒の相承・(一二)戒行・(一三)戒體・(一四)持戒の規範、及び附録として圓頓戒相承血脈譜を掲ぐ。

エンツジ 圓通寺

圓頓菩薩戒序辨 (一卷) 正念述。續淨第九卷所收。本書は、圓頓菩薩戒序説の意にして圓頓戒の主要なる項目について論述せしもの。

かくいふ。エンドンカイ(圓頓戒)

エンネゴンジヨ 厭穢欣淨 厭離穢土欣求淨土の略。エンリエドゴンダジヨ(厭離穢土欣求淨土)

エンノコーブツ 炎王光佛 十二光佛の一。阿彌陀佛の光明は、自由自在にして十方を照耀するが故に、阿彌陀佛を炎王光佛と尊稱す。

エンブクジ 圓福寺 佐賀縣神埼郡神時町。開山夢忍。明治七年、佐賀縣亂の際堂宇悉く焼失、同十年より十六年に亘つて再建落成現在に至る。

エンブケンシヨ—キナラビニヨセツ

圓布願正記並餘説(三卷)大支連。續淨第一五卷所收。本書は豊川中期本宗の傳法混亂せる折納、著者大支が淨土宗に傳ふる圓頓戒と布薩戒との邪正を論じ、圓頓戒が正傳にして布薩戒の妄傳なることを述べ、以て圓戒復興の烽火をあげしもの。餘説には、布薩戒停止に對する宗門の非議並に其の答辯を記述せり。

エンブダハノン 圓浮檀金 Jambhara

At. d. anuvana 圓浮那提金とも作る。圓浮那提河より産する沙金にして三界中に於て之れ

天帝釋に當り、心に生滅なきが故に延命と名づく。時に二童子、左右に侍立す。一を常悲と名づけ左に在り、法性を調御す。一を常慈と名づけ右に在り、無明を降伏す」と云へるものこれなり。

エンヤ 圓也 二四四 足利末期の人。

増上寺第十一代。秀蓮社僧と號す。筑後國柳川の輩。俗姓菊池武俊の後裔中西氏なりといふ。幼にして法器卓英よく道俗を化し諸國に遊歴して且つは名匠を訪れ且つは化氣熾まらず。のち伊勢悟眞寺第六代となりしも幾ばくもなくこれを辭し、又遊化にいそむ。關東の地に移り來に推されて永祿九年十月相國大長寺より増上寺に晉む。天正十年十一月火災に罹り堂宇炎上、厭心いよゝゝ篤く、同十二年八月職を辭して普光觀智園師に讓り、山下に天光院を開きこゝに隱棲、同十二年九月五日寂。壽不詳。

エンユ 圓融 二四〇 徳川中期の人。

字は惠昌、西國社東叢と號す。江州彦根に生る。俗姓は八木氏。天應聰明、二十歳にして同地宗安寺に入つて出家し、後ち江戸に下り増上寺派譽存應、傳通院了的等に歷事して宗要を究め、編綴の正念寺に住して他力法門の傳弘に盡瘁す。慶安二年六月十三日寂。壽六

に勝るものなしといふ。圓淨といふは樹の名。那提とは河の意、故に圓淨那提とは圓淨樹の間を流るゝ河のことなり。この金は觀經定壽第七觀に於て無量壽佛の光明に對比して引用さる。

エンマオー 圓魔王 Yama 夜摩・焰摩・阿摩等に作り、雙・雙世・遮止・靜息・持・平等と譯す。圓魔王は地獄の主、冥界の支配者にして、衆生の罪を監視し惡の恐るべき事を知らしむる人間行爲の審判官なり。もと吠陀時代の夜摩(Yama)神より、又蘇の Yami との俱生神より轉化せるものにして、或は俄鬼等の主なりと云ひ、地獄の主なりとも云ひ又人類中の最初の死者なりと説き、惡業所感の身なりとも説き、更に地藏菩薩の化身なりと説く等諸説の新説一準ならず。支那に來りて圓魔王思想は道教の迷信と混淆し、五官王八王十王等の説を生ぜり。又密教にては娑摩天と稱し、金胎兩部曼荼羅中に圓像を現はし護世八方天等の一とせり。我國に行はるゝは支那道僧間に流布せる信仰を繼承せるもの、如く、多くは十王經に依り、形像は支那の形式に依用す。今日到るところに圓魔王ありて毎年正月十六日及び七月十六日は圓魔王の齋日と稱し、その堂を開帳し、地獄變相・十王圖

等を掲ぐることに世に行はる。  
エンニョージ 延命寺 (1) 東京市蒲田區今泉町。開山白旗聖良。正平十三年、新田義興公、矢口渡船に戰死の際焼失して縁起變遷等不詳。  
(2) 三重縣飯沼郡和村。天平年中行基菩薩開基。元來無本寺にして大伽藍・塔頭二十四坊・末寺百餘ヶ寺・地領百貫文の大寺院なりしが、後ち天明六年光譽代に淨土宗に改め知恩院本となる。元龜元年繪田信長のために焼拂はれ、正保二年、中興然譽再建。

エンニョージ 圓明寺 茨城縣北相馬郡文間村。長根山と號す。開基名越派本寺圓明寺開山良榮理本。明治維新前後數回の火災に罹り後ち再興す。寺寶、大小曼荼羅及び大涅槃像等。

エンメイジ 延命地藏 衆病を除き、壽命長久をつかさどる地藏菩薩をいふ。延命地藏經に「時に佛、法華陀山に住す。帝釋に告げて曰く、一の菩薩あり、名づけて延命地藏と云ふ。此の菩薩の體を見、名を聞けば衆病を除き、壽命長遠なり、他國より起らず、自界版かず。彌時帝釋、佛に白して曰く世尊何が故に名づけて延命地藏と曰ふや。佛

に勝るものなしといふ。圓淨といふは樹の名。那提とは河の意、故に圓淨那提とは圓淨樹の間を流るゝ河のことなり。この金は觀經定壽第七觀に於て無量壽佛の光明に對比して引用さる。  
エンマオー 圓魔王 Yama 夜摩・焰摩・阿摩等に作り、雙・雙世・遮止・靜息・持・平等と譯す。圓魔王は地獄の主、冥界の支配者にして、衆生の罪を監視し惡の恐るべき事を知らしむる人間行爲の審判官なり。もと吠陀時代の夜摩(Yama)神より、又蘇の Yami との俱生神より轉化せるものにして、或は俄鬼等の主なりと云ひ、地獄の主なりとも云ひ又人類中の最初の死者なりと説き、惡業所感の身なりとも説き、更に地藏菩薩の化身なりと説く等諸説の新説一準ならず。支那に來りて圓魔王思想は道教の迷信と混淆し、五官王八王十王等の説を生ぜり。又密教にては娑摩天と稱し、金胎兩部曼荼羅中に圓像を現はし護世八方天等の一とせり。我國に行はるゝは支那道僧間に流布せる信仰を繼承せるもの、如く、多くは十王經に依り、形像は支那の形式に依用す。今日到るところに圓魔王ありて毎年正月十六日及び七月十六日は圓魔王の齋日と稱し、その堂を開帳し、地獄變相・十王圖

ものにあらざ、穢土を離れて淨土なく淨土を離れて穢土あることなき言はゞ現實と次元を異にする彼岸を意味すべきものにして現實の世界が夢幻であるに對して眞實の世界を淨土といふ。然し有相の立場に依據して無相の理を獲得せんとする淨土教的立場に於ては穢土とは捨つべきもの、淨土とは求むべきものといふ關係において二元的に説かれる。然しこの二元的説相たるや素より一往のものにして永く對立すべきものに非ざるや勿論なり。  
エンリンジ 圓輪寺 名古屋市中區寶町。究竟山法王善住持院と號す。もと眞言宗なりしが、延享二年山田圓輪その父母及び子女の菩提のために中興して淨土宗に改む。依つて照譽を請して開山となす。寺寶數點。

十九。

エンヨ 圓譽 二二六 京都八幡正法寺の住僧。相模の人。惠慈天然、書畫に長ず。はじめ和泉三輪山に住せしが、後ち山城梅尾に移り一字を建立して石雲庵と號す。後ち八幡正法寺に入り、天正十二年十一月六日寂。石雲庵に葬る。壽八十一。

エンリ 圓理 二二八 知恩院第四十三代相國眞阿彌覺實空と號す。寶永十四年生る相國の室に入つて剃染受法。館林善導寺第十七世・瓜連常福寺第二十八世・鎌倉光明寺第五十二世等に歴任し、寶永四年三月、知恩院住職に任命され、同年八月大僧正に任ず、これ當寺に職にして大僧正に任せられし囑矢となす。在職八年餘、正徳五年五月職を辭し洛中富小路五條新善光寺に隱棲、享保十年九月五日寂。壽八十九。

エンリエドゴンダジヨ 厭離穢土欣求淨土 略して厭穢欣淨又は厭欣ともいふ。差別動亂の現實(穢土)を厭ひ、平等一如、寂靜の彼岸(淨土)を求むること。元來穢土と淨土とは二元的に考へられ勝ちなるも、實は平等一如の彼岸の淨土たるや現實の完成されしもの、又は理想の世界と云ふべき

ものにあらざ、穢土を離れて淨土なく淨土を離れて穢土あることなき言はゞ現實と次元を異にする彼岸を意味すべきものにして現實の世界が夢幻であるに對して眞實の世界を淨土といふ。然し有相の立場に依據して無相の理を獲得せんとする淨土教的立場に於ては穢土とは捨つべきもの、淨土とは求むべきものといふ關係において二元的に説かれる。然しこの二元的説相たるや素より一往のものにして永く對立すべきものに非ざるや勿論なり。  
エンリンジ 圓輪寺 名古屋市中區寶町。究竟山法王善住持院と號す。もと眞言宗なりしが、延享二年山田圓輪その父母及び子女の菩提のために中興して淨土宗に改む。依つて照譽を請して開山となす。寺寶數點。



オ

オーカドリヨコー 大門了康

近世の布教。嘉永四年五月生る。京橋元二階町大江河内守成宜の子。幼にして大阪福淵寺大門了成に就て出家し後同寺を嗣ぐ。福來慈善堂教學修練に努力し宗門の公私に參畫して首座する所少なからず。又宇治平等院・京極小松谷松林寺等に歴住して寺門の恢興に力を致し、後年櫻林講舎光明寺に轉じ、在住八ヶ年全力を光明寺の經營に盡す。この間不幸にも關東大震災に遭遇したるも志願倦まず。晩年は信州岡谷に遷居し常に道俗を化益す。師は終始一貫平生業成の聲の念佛を主張し、又其の氣骨慷慨にして世人これを大門式と稱せり。昭和四年歿。壽七十九。

オカヘガクオー 岡部學應

味開教の貢獻者。周防國玖波郡余田村福樂寺住僧。感應社功譽阿彌尊と號す。慶應二年十一月生る。周防國玖波郡井町常勝仲藏の三男。明治十一年同國大野村常勝寺開教或應に就て出家し次で聖年山口教校及び京都教校に學ぶ。同二十年師範常善寺に董し、同二十

五年同國屋代西蓮寺に轉ず。佛來布教を以て己が志とし同二十七年海外布教の重任を帯びて布哇に航しパウハウに佛教會堂を創設し松屋定壽と共に布哇開教の先驅をなす。その後轉じて朝鮮開教使となり釜山知恩寺を改築する等海外布教に盡すこと少なからず。大正十一年十月七日歿。壽五十七。

オカミソリ 御剃髮

在家の男女が佛門に入るとき、佛前に於て行ふ儀式。身を清め鬘髮を除きて出家の相となり、慍慢自恃の心を去り、以て法名を授くるを常とす。トテイドンキ(剃度式)

オーキ 横機

聖徳の對。淨土宗安心たる三心を具足する場合に、一者至誠心、二者懇心、三者廻向發願心、等といふ説明を聞かざるも、自然に三心を具備する機をいふ。然してかゝる機願の具足する三心を横の三心と云ふ。

オキキヨウセイガクエン 隠岐共生學園

島根縣周吉郡西郷町。大正十二年創立。總合的兩性事業として名越隆成の經營する所なり。先づ西郷幼稚園を興し次で昭和二年四月八日共生夜學校を起せるも、その中心事業は大正十三年四月八日開校の隱岐華頂女學院

にして教育方針は人格・陶冶・家庭社會生活に對して努力的精神感思家仕の人ならしむるにあり。専ら大乘佛敎の眞精神に則り、特に共生主義に基き朝夕本堂前に禮拜し、時に宗敎上の調育をなし又別時授戒を修する等を特色とす。

オキハラウンライ 萩原雲來

近世佛敎の權威者。東京淺草寶願寺住職。明治・年和歌山縣に生る。正僧正・勸學・文學博士・ドクトルファイロソフイニ。明治三十年宗學本校卒、同三十二年淨土宗第一回海外留學生として獨逸國ストラスブルグ市カイザークリヘルム第二世大學に入りロイマン氏につき六年間佛敎研究、同三十八年より宗敎大學教授・芝中學校長・淑徳女學校長・東京帝國大學講師・豊山大學教授・立正大學講師・大正大學教授を歴任、大正九年淺草寶願寺住職となる。獨逸在留中より晩年迄英・獨・邦文に依る論文著書、梵文經論の校訂出版・梵・巴・藏文經論和譯、梵和辭典の製作等の作品事業は百を超ゆ。昭和十二年十二月二十日歿。壽六十九。萩原雲來全集、獨有雲來師餘影等にその著作並に行蹟を載せり。

オーグ 廣供

十號の一。佛は萬行圓備し、福慧具足して天上人間等の供養を受くる

に足り、有情を饒益するが故に應供といふ。

オーグーエ 王宮會

觀經五分の中の前四は王宮會に當る。觀經は佛が阿難・目連等を隨へて草提希夫人のために王舍城の宮庭に於て正法を説かれしもの。然るに觀經の末尾には下宮に於ける説法終了後、阿難は善闍闍山に還り、其處に於ける聽衆のため並に末代流傳のためにその教説を復説せりと説く。觀經の末に「爾時世尊是步虛空還善闍闍山等」と言へる文是れなり。この善闍闍山に於ける阿難の復説を善闍會といひ、前の王宮に於ける佛の説法を王宮會といふ。善導の觀經疏によれば兩會を正説と稱せり。此の兩會中、もし王宮會を主とすれば善闍會は其の流通となり、善闍會を主とすれば王宮會は其の序分となるべきも、本經は王宮會を主とするものなるが故に、善闍會は之を傳持せんとする流通と解される。又善導の觀經疏散善義には、流通を分つて王宮流通と善闍流通との二となし、王宮流通とは王宮會に於ける流通分、善闍流通とは善闍會を指す。この解釋によれば善闍會は觀經の流通分に過ぎざるが如きも、善闍會と王宮會とは時處を異にして各の序・正・流通の三分を具するが故に別立して各の一會となせるものなり。

オクザワシヨ 廻澤鈔

傳記選澤鈔・寂慧見聞ともいふ。本名は傳記見聞なるも良榮の見聞と區別して、寂慧が著作當時の住處たる甲斐の國選澤の地名に因んで、普通選澤鈔といふ。

オクシセツシュ 抑止攝取

抑止と攝取の併稱。抑止は制遏の意味、攝取は受容の意なり。即ち大經の第十八願の終には「唯だ五逆と正法を誹謗する者とを除く」と説き、五逆と正法を誹謗する者は、往生は出来ないと制止されてあるも、觀經の上下品には、五逆の者も往生すると説く。これは一應矛盾の如くに思はるゝ實際は、大經の時には未だ五逆を犯し正法を誹りし者なかりしを以て其の重罪を犯さざらしめんがために智慧門に依て之を制して往生を許さずといふ、是れを抑止門といふ。然るに觀經の時は既に五逆を犯せるものありし故に、斯る罪人をも救ふべく慈悲門に依つて之を受容して往生することを得といふ。是れを攝取又は攝取門といふ。

オクシモン 抑止門

前項を見よ。

オクズ。デン 奥圖傳

淨土宗口傳の一。これ蓮西の授手印に一環して曰く、我が法然上人の言たまはく、善導の御釋を拜見す

るに、源空が目には三心も五念も四修も皆な俱に南無阿彌陀佛と見ゆるなり」と言へるに基つて、三心・五念・四修・三種行儀皆な南無阿彌陀佛に結歸すると説く、所謂、結歸一行三昧の奥義を口傳するものにして總別合して十九箇條あり。一々の傳目については口授に俟つべきものなり。

オクソーケンダン 憶想間斷

極樂淨土に對する想念の間斷するをいふ。選擇集第二章に難行の十三失を數ふる中の第六にこの憶想間斷の失をあぐ。決疑鈔第二に憶想間斷とは、若し正行を修すれば彌陀を行ずるが故に想を淨境に留めて憶想斷せず、今難行を修し餘法を行ずるが故に其の想間斷して極樂を想はず、故に憶想間斷といふ」と説けるが如き是れなり。

オクネン 憶念

憶は憶持、念は明記不忘記憶して忘れざるの意。論註卷上に「此の中に念と云ふは此の時節を取らず、但だ阿彌陀佛を憶念するを言ふのみ」又、善導の觀經疏散善義に「心常に觀近して憶念斷せざるを名づけて無間となす」と云へる如きは、何れも心に佛を明記して常に忘れざるを言ふ。

オーグノサンジン 横具の三心

ンジンノオーヂユ(三心の精義)

オクモン 屋門 一五門の一。イエン(五門)

オクリゴジュー 贈五重 本宗で、先亡者の父母妻子等が、死者に代つて五重相傳を受け、死者を佛祖歴代の血脈相承の人として成名に尊號を加へ、その功德によつて追善の利益を得せしめんとする法をいふ。イゴジューソードン(五重相傳)

オクリビ 送火 (1)迎火の對。孟蘭盆の行事の一。孟蘭盆の最終日十六日の夕に精靈棚に祭りし祖先の精靈を送るために門口にて焚く火。(2)葬式の時、出棺に際してその亡骸を送るために門口にして焚く火。

オーゲシン 應化身 ↓オージン(應身)

オーゲド 應化土 ↓オード(應土)

オーゲドージョー 應化道場 眞實道場の對。佛菩薩が衆生濟度の爲めに種々に化現して八相を示現し成道する中、應化身たる釋迦佛が八相成道したまひし印度摩訶訶國菩提樹下の金剛座上を云ふ。

オーゴジュー 大五重 簡條傳法の略式なるに對して聖附の五重指南目錄に準ずる本格的傳法をいふ。淨土宗に於ける傳法は宗祖

より聖間に至るまでは唯授一人の傳法にして口傳と書傳(論註・安樂集・五部九卷・選擇集・授手印等)との二あり。然るに聖間に至つて祖々相承する度に書傳の増加を見、傳書漸く繁雜となるを憂へ遂に五重指南目錄を制定して五重の傳書(往生記・末代念佛授手印・通解末代念佛授手印・決答授手印・問答・往生論註・十念傳)を制定し、口傳として初重に四箇條、二重に三十七箇條、三重に一箇條、四重に二箇條、五重に六箇條總計本傳五十五箇條、末傳二十八箇條の口傳を指南し、この外に三卷七書を編定して重要な傳書と定め傳法様式としては一百十四日の加行を設け、この間如法に修行して三卷七書の傳授並に五十五箇條の口傳をなし以て宗要を相傳し付法を許可する制度を設けたり。普通これを五重相傳といふ。この傳法形式は西晉聖德を経て晉聖觀出づるに及んで戰國時代の世情に制約せられ、百十四日の行を修すること困難となりしが故に略作法を設け百日の前加行を平生の修學に譲つてこれを省略し、十四日の正行のみを行ひ、この間に三卷七書の講傳並に五十五箇條の口傳の全分を授くること、改む。この様式は以後凡そ一百年間に亘つて繼續されしが足利末期に至つて道譽貞徳・感譽存貞二師の簡條傳

法が時代の要求として斷行さるゝに至れり。道・感二師により主張されし簡條傳法は五重自證門傳(淺學相承)、宗脈化他門傳(碩學相承)の二に分れ、五重は愈々簡單略式化され、やがてこれは元和條目によつて傳法條令の基礎となり後世傳法形式の規範となりしが、かかる傳法の簡略化の流行に對する反動として古式に則る傳法すなはち、聖間の制定せし本格的傳法に對する仰望擡頭し三年に一度位の割合にて時折りこの本格的傳法が行はるるに到れり。これを簡條傳法に對して大五重又は總五重といふ。この大五重は道・感二師直後より徳川中期に到るまで旺んに行はれたるも後ち漸く流行を失ひ近時は殆んど之れを見ず。明治年間清淨宗院本山白蓮宗大正年間土川善誠これを講せしことあり。

オーゴジューセンジョーリヤクシヨ 大五重選定略鈔(一卷) 在禪撰。淨土傳燈綱要卷下所收。本書は増上寺第五十五世傳燈在禪が、天明・寛政・文化の頃、江戸崎・飯沼・鎌倉等の諸檀林にて、宗脈を傳授せし時の筆録なり。かの觀徹の總五重法式私記に比して頗る簡明に記述され、靈頭にある短評は、恐くは師が増上寺へ轉昇して後に書き加へられたものならん。イゴジューホツシキヤ

(總五重法式私記)

オーゴジューゲサ 大五條表姿

オーゴノコシロータカヨシ 大胡小四郎隆義 宗祖の歸依者。上野國の御家人にして在京の時宗祖の勸化を受け、深く念佛の法門に歸す。下國の後裔は不審なることありて宗祖給仕の弟子淺屋七郎入道道通の許に尋問し、宗祖は之れに對して三心に就いての消息を記して與へられたりといふ。説不詳。

オーゴノシヨソク 大胡消息 宗祖が大胡太郎實秀の間壽に對して返書されしもの。その内容は、三小具足して往生すといふ安心に就て經文釋疏の文を引て懇切に示説せり。

オーゴノシヨソクコーゼツ 大胡消息講説(二卷) 法洲編。本書は、大日比西圓寺の清僧法洲が大胡の太郎へ遺はしたる宗祖の消息を講説したるもの。その内容は、はじめに本文を擧げ、次に隨文解釋を施す。

オーゴノタローサネヒテ 大胡太郎實秀 宗祖の歸依者。大胡の小四郎隆義の子。上野國の御家人にして在京の時宗祖の教化を蒙り、下國の後裔念佛の安心に就て

不審あり、小屋原の選性を便として宗祖に問尋す。依つて宗祖は之れに對して返信をせり。此れ世にいふ大胡消息なり。寛元四年寂。

オーサカヨシヨネホゴシヨ 大阪幼少年保護所 大阪市天王寺區東高津北之町一。所長田尻龍道。その起原は大正十四年八月司法省の認可を得て司法保護少年高津學園を設立せしに始まる。昭和六年四月大阪朝日新聞社社會事業團の後援を得大阪幼少年保護所と改稱。少年教護法に依る教護、幼少年の保護を目的として創立以來の收容人員四百餘名に及ぶ。

オーザワケンモン 大澤見聞 良榮見聞、榮見聞ともいふ。大澤圓通寺良榮の著せる註釋書に對する呼稱。即ちその著たる論註記・傳通記・法事記・觀念法門・往生論註・東宗要・決疑録等の諸書に對する見聞を皆なその住地に因んで大澤見聞といひ、その著者名に因んで良榮見聞(寂靈の坂下見聞に對す)といひ略して榮見聞ともいふ。

オーザワリユ 大澤流 淨土宗名越流の一派。名越流第五世良榮理本を祖とす。彼は應永九年下野芳賀郡大澤村に圓通寺を開創して、下野に於ける名越派の本山となし、大

澤檀林の基を開き、その所説の義を弘めしを以てこの門流を後世其の住地に因んで大澤流と呼ぶ。イナゴエリユ(名越流)

オーシカミンシヨ 大鹿啓成(二五八七) 明治大正に亘る淨土宗の學匠。愛知縣海東郡越治村宇治の人。安政四年六月二十三日大鹿良邊氏の三男として生る。同縣岡崎市隨念寺加藤亮慈に就いて出家得度し、爾來修學懋むことなく受學甚だ努む。後東西の學匠領袖の門を叩いて性相の支底を究む。明治六年増上寺石井大宣大僧正に就き宗成兩派を承承し十二年淨土宗本尊教授、三十一年眞門學院教授、三十八年淨土宗大學教授となり、四十四年には宗教大學校長兼教授となり、専ら高等教育の任に當り、明治三十九年勸學となる。滋賀縣蒲生郡安土淨觀院より一宗の復興を擔ふて大正七年八月大本山金戒光明寺に置す。唯識華嚴の遺奥は自他宗の學匠の共に景仰する處にて、特に知識階級の歸仰者多し。大正十四年十一月寂。壽六十九。

オーシヤジヨ 王舍城 王舍城 往古の中印度摩揭陀國の首府名にして釋尊行化の中心地。現今のバトナの南方ビハル地方のラジギルは其の舊跡に當る。摩揭陀の王都はもと上茅宮城 Kusinagara に在りしを類

婆娑羅王の時、新に此の地に遷り、後阿育王の波吒釁城に遷都し、此の地を婆娑羅門に施すまで摩揭陀の王都たり。

オージユノアンジン 横堅の安心 安心の積聚ともいふ。横の安心と堅の安心と言ふ意。安心は本宗に於ては三心の意なれば、横堅の三心といふも同義。横とは空間的同時にして次第前後なきを言ひ、堅とは時間的異時にして次第前後あるを言ふ。即ち横の安心とは三心即一心、堅の安心とは一心即三心に名づけたる語なり。↓サンジンノオージユ(三心の積聚)

オージユノサンジン 横堅の三心 ↓サンジンノオージユ(三心の積聚)

オショイ 和尚 nashōwa 僧侶に對する敬稱。又、和上とも云ひ、天台宗にては「タワシヨ」と呼び、法相宗及び律宗にては「ワジヨ」と云ひ、禪宗にては「オショイ」と稱す。又、律宗にては「上」の字を用ひ他は「尚」の字を用ふ。印度の俗語に師匠を呼ぶに烏和と云ひ、于闐國にては和社なども稱せり。和尚はその轉訛せしものなり。羅什は譯して力生とす。師に依つて弟子の道力を生ぜしむるが故なり。

オージョー 往生 (1) 往いて浄土に生るる意にして浄土教徒の究竟目的。宗祖はその著往生要集大綱に於て「往生といふは此を捨て、彼に往き蓮華に化生するなり。轉庵目を厭するるとき便ち是れ蓮華に映を結ぶの時なり聖衆の後に從て一念のあひだに西方極樂に生ずることを得、故に往生と言ふなり」といふこの語はもと十方・兜率・諸佛浄土等の諸の浄土に受生するに名づけたるも、彌陀浄土信仰の旺盛なるにつれて後世(宗祖以後)専ら西方浄土往生を意味するに到れり。然しこの往生とは往生論註卷下に「彼の浄土は是れ阿彌陀如来清淨本願無生の生にして三有虚妄の生には非ざるなり」と言へるが如く、所謂、實生實滅の生にはあらずして、その實は無生の生なり。是れを直截に言へば佛の大願業力に生さゆこと、法性無生の眞理を顯顯することとなる。古來この往生について三義あり第一には無生而生の往生にして、無生の理を體得せる善業かその理想實現のため(善實行願の満足のため)彌陀の浄土に往生するをいふ。第二には見生無生の往生にして、此の世を去つて浄土に生れ永遠の生命を獲得しうるとの想定の下に(見生)實生實滅の見地に立つて浄土を願ふも、一たび往生してみれば浄

土は元來無生の國にして彌陀清淨願心の妙用により自然に無生を證得するをいふ。これ通常凡夫といはるゝ吾々の往生なり。第三には現世證得の往生にして、他力本願の利益を信じて疑ふことなく現世に於て無生を證得するものなり、觀經所説の掌提の得忍の如き正しくこれなり。これらの三は何れも機根の相違によるものにして一度往生を得れば、何れの往生によるも總べて彌陀如来の住持力に助成され十地の願行を自然に成就し無上佛果にすゝむことを得ると解するを正流の意となす。☞轉じて人の死するをいふ。

オージョーイタイ 往生爲體 觀經一部の經體は往生浄土にありといふ意。善導の經疏支義分に「觀經は即ち觀佛三昧を以て宗となし亦た念佛三昧を以て宗となし、一心に迴顯して浄土に往生するを體となす」とあるによる。曇鸞は論註に於て三經の所説は佛名を明すにあるを以て名號を三經の體となせるに對して、善導は觀經の宗たる念佛三昧・觀佛三昧兩宗の所趣は畢竟往生浄土にあるを以て往生浄土を觀經の體となせるものなり。この兩者の所説は言説の異ありと雖もその意相同じ。

オージョーイ 往生院 (1) 熊本縣熊本市京町口。無量壽山泰安寺と號し、俗に古往生院と稱す。行基菩薩の創建と傳へ、初め同縣飽託郡大江村白河川の邊りにありて、二祖辨長が末代念佛授手印を製作したるを以て開え、開山として尊崇す。元龜、天正の兵變に罹り荒廢せしを應長七年善譽了心は、領主加藤清正の許可を得て熊本古町に移轉す。元和三年八月備生秀行の室(徳川家康の八女加藤忠廣の姑)遷去して當寺に葬り、忠廣は寺領百石を寄進す。又徳川家代々の靈牌を安置せしを以て茶湯料二百二十八俵を受け、山門頗る興隆せしが、十一世證譽の代に寺地改正ありて、元禄年中飽田郡古町村に舊地を賜ひ、未だ移建ならざるに享保九年改めて、同郡池田村に舊地を賜ひて本堂を移轉す。本尊阿彌陀如来は清正の寄進せしものにて安阿彌の作と云ふ。白河川の邊りなる古地には今小堂を存す。寺寶、授手印一卷等。

オージョーイキ 往生記 (一卷) 源空撰。五重傳書の初重。三卷書の隨一。又往生得不得の記といふことあるも元來は無題なり。内容には四節より成る。第一節は難逢往生機、これに十三人を擧げて分類すれど要は三心を具へざる人を往生不得の人と稱す。第二節は四障四礙、所謂、難逢往生の機を總めて四人を擧げ、次に種々往生の機を總めて四人を擧ぐ、

本市京町口。無量壽山泰安寺と號し、俗に古往生院と稱す。行基菩薩の創建と傳へ、初め同縣飽託郡大江村白河川の邊りにありて、二祖辨長が末代念佛授手印を製作したるを以て開え、開山として尊崇す。元龜、天正の兵變に罹り荒廢せしを應長七年善譽了心は、領主加藤清正の許可を得て熊本古町に移轉す。元和三年八月備生秀行の室(徳川家康の八女加藤忠廣の姑)遷去して當寺に葬り、忠廣は寺領百石を寄進す。又徳川家代々の靈牌を安置せしを以て茶湯料二百二十八俵を受け、山門頗る興隆せしが、十一世證譽の代に寺地改正ありて、元禄年中飽田郡古町村に舊地を賜ひ、未だ移建ならざるに享保九年改めて、同郡池田村に舊地を賜ひて本堂を移轉す。本尊阿彌陀如来は清正の寄進せしものにて安阿彌の作と云ふ。白河川の邊りなる古地には今小堂を存す。寺寶、授手印一卷等。

オージョーイキ 往生記 (一卷) 源空撰。五重傳書の初重。三卷書の隨一。又往生得不得の記といふことあるも元來は無題なり。内容には四節より成る。第一節は難逢往生機、これに十三人を擧げて分類すれど要は三心を具へざる人を往生不得の人と稱す。第二節は四障四礙、所謂、難逢往生の機を總めて四人を擧げ、次に種々往生の機を總めて四人を擧ぐ、

これを四障四礙といふ。第三節は種々往生の機を五分し(一)智行兼備念佛往生機(二)義解念佛往生機(三)持戒念佛往生機(四)破戒念佛往生機(五)愚鈍念佛往生機とし、その各機に二・三の種類を擧ぐるも、就中第五の愚鈍念佛往生の機を當機としこれを第一の機といふ。浄土の正機の意なり。第四節は和字段、即ち宗祖の一紙小消息の文を擧ぐ。

オージョーイキ 往生機 極樂浄土に往生する機根。宗祖述作と傳ふる往生記には難逢往生の機根十三をあげ、次に種々念佛往生機の下に五種の往生機をあぐ。即ち(一)智行兼備念佛往生機(之に三種あり)、(二)義解念佛往生機(之に二あり)、(三)破戒念佛往生機(之に二あり)、(四)愚鈍念佛往生機(此に十六あり)なり。大別して五種、細別して二十六種、更に細別して三十一種となすもこれらの中、浄土の正機となるところは愚鈍念佛の機根なり。

もの。  
**オーシヨキヨイン** 應隆教院 壽岡縣小笠郡中内田村。松風靈山と號す。文徳天皇の勅願所にして齊衡二年蘇覺大師草創。もと天台宗にして大岳院と稱せしを、治承元年法然上人櫻ヶ池參詣の勸念佛弘通の道場として淨土宗に改む。寺寶、法然上人所持の足耳なしの伏誼・上人眞筆紺紙金泥御名號、阿彌陀經・熊谷御意見書・皇間阿闍梨の笠・杖等。

**オーシヨゴクラク** 往生極樂 極樂淨土に往生するといふ意。→**オーシヨ**(往生)

**オーシヨコシキ** 往生講式(一卷) 永觀撰。淨全第一五卷所收。本書は、毎月十五日に修する往生講會の儀式作法を記したるもの。述作年時未詳。内容は、往生淨土を講讀せしものにして、西壁に阿彌陀佛の迎接の像を安置し、香華等を備へ、歌頌を唱へて著座・法用・表白・遍分・勸請、次に講讀に七門を設く。(一)發菩提心門(二)懺悔業障門(三)隨喜善根門(四)念佛往生門(五)讚歎極樂門(六)因圓果滿門(七)迴向功德門なり。各門の終りに無量壽經下卷の稱數偈、または善導の往生禮讚偈の一部を採用したる歌頌を附し一兩無

西方極樂化主大慈大悲阿彌陀佛と三禮し、十念を唱ふ。講終つて釋尊の遺教に遇ふて往生の業を修し得たることを喜び、その恩徳を報謝する歌頌を唱へ、最後に迴向の偈を擧ぐ。

**オーシヨサイホーシヨドズイオー** **サンデン** 往生西方淨土瑞應傳(二卷)

唐文徳・少康共撰。續淨第一六卷所收。略して西方往生瑞應傳・西方瑞應傳・瑞應傳・瑞應傳ともいふ。本書は東晉慧遠より唐邵願保に至る四十八人の西方願生者の事蹟を集録せしもの。著者文徳の事蹟は詳ならざるも、少康は唐の貞元年中の人なれば、其撰述年代は貞元年間と推定さる。その奥書に依るに五代の頃、吳越國沙門遺法なるもの、本書を上梓し頒布したるを知る。尋で天徳二年四月延曆寺沙門日延之を本邦に請來し、後貞永元年三月釋子人眞印刷せしことあり。

**オーシヨジ** 往生寺 長野市西長野町菩提心院刈萱堂と號す。かの刈萱道心入寂の靈場なりと傳ふ。現在の寺は長野市西北山上に位し眺望絶佳の淨刹なり。

**オーシヨシゴネンブツイセン** 往生之業念佛爲先 選擇集卷頭に於ける結前行を以て等しく正因とする事は勿論なるも、本願の行に五種の正行ありとし、所謂讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養の五種の中、前三後一を助業とし、第四稱名正行を以て別して正定業と稱す。宗祖は選擇集に稱名を以て正因とする所以を明らかにし、三經悉く念佛であり、本願の正行はまさしく念佛にある故に偏依善導の立場より稱名正因説を主張せらる。然るに諸師の説必ずしも一様ならず。曇鸞並に惠心は菩提心正因を説き、淨影は修觀・修業・修心・歸向の四正因を掲げ、迦才は念佛・禮拜・讚歎・發願・觀察・回向の六因を述べ、西山は三心を以て行者領解の安心としてこれを正因とし、眞宗は信心を以て正因となす等諸師諸説に異説あるも、要するに彌陀の願意にかなへる行を以て正因とすべきなり。

生後の女。即ち同書の文前禮示として、兩無阿彌陀佛(往生之業)の十四字を掲ぐ。即ち往生淨土の行業に念佛・諸行の別ある中、兩無阿彌陀佛の口稱名號を以て第一の行業となすとの意なり。爲先は時間の前後を示すものにあらずして吾が宗義に於ては最も重要なもの、根本となるもの義に解される。

**オーシヨシユ** 往生集(三卷) 明釋宏觀撰。續淨第一六所收。印度支那に於ける西方往生人の事蹟を集録せしもの。萬曆十二年法安五十歳のときの撰。その内容は、九類に分つ。

第一卷には(一)沙門往生類、東晉慧遠より明實珠に至る九十八人、第二卷には(二)王臣往生類三十二人、(三)處士往生類二十八人、(四)尼僧往生類五人、(五)婦女往生類三十二人、(六)惡人往生類八人、(七)畜生往生類三種、讀録として別に二十人を收め、第三卷には(八)諸聖同歸(九)生存在感應類、を收む。終に感覺の跋を附す。

**オーシヨジュイイン** 往生拾因(一卷)

永觀撰。淨全第一五卷所收。本書は著者が東大寺にありし頃即ち康和三年頃の作なり。略して拾因ともいふ。その内容は念佛の一行には拾種の因由がある故に、一心に阿彌陀佛を

稱念すれば必ず往生を得ることを明かしたるもの。拾因とは一に廣大善根の故に、二に業罪消滅の故に、三に宿善深厚の故に、四に光明攝取の故に、五に聖衆護持の故に、六に極樂化主の故に、七に三業相應の故に、八に三昧發得の故に、九に法身同體の故に、十に隨順本願の故なり。道綽・懷感の舊儀に順じて勸導念佛をすゝめ字句極めて懇切なるも、未だ本願の行の俾力を發揮せざるものあれば、宗祖はこの書を依用されしことなし。註疏に私記三卷(了惠)・直談鈔十五卷(了意)・見聞一卷(聖應)等あり。

**オーシヨジュイインシキ** 往生拾因私記(三卷)

聖西樞了惠述。淨全第一五卷所收。永觀の往生拾因の註釋書。述作年時未詳。その内容は第一大意、第二釋名、第三消文の三門に分つ。懇切に永觀の本懐を顯はさんとし、また高祖の拾因の取扱を論じ、註釋するところ頗る詳密なり。

**オーシヨのシヨイン** 往生正因

淨土に往生する正しき原因の意。これに就いて觀經には三種の淨業(三福)を以て正因とし善導は、の外三心正因の義を立て、就中稱名正因説を嚆矢せり。即ち善導によれば本願の

行を以て等しく正因とする事は勿論なるも、本願の行に五種の正行ありとし、所謂讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養の五種の中、前三後一を助業とし、第四稱名正行を以て別して正定業と稱す。宗祖は選擇集に稱名を以て正因とする所以を明らかにし、三經悉く念佛であり、本願の正行はまさしく念佛にある故に偏依善導の立場より稱名正因説を主張せらる。然るに諸師の説必ずしも一様ならず。曇鸞並に惠心は菩提心正因を説き、淨影は修觀・修業・修心・歸向の四正因を掲げ、迦才は念佛・禮拜・讚歎・發願・觀察・回向の六因を述べ、西山は三心を以て行者領解の安心としてこれを正因とし、眞宗は信心を以て正因となす等諸師諸説に異説あるも、要するに彌陀の願意にかなへる行を以て正因とすべきなり。

**オーシヨのシヨキ** 往生正機

正しく阿彌陀佛の極樂淨土に往生することを得る機根を云ふ。即ち彌陀四十八願中、第十八念佛往生の願に定められたる心行具足の念佛を稱ふるものは、佛の本願力に乗じて淨土に往生することを得べし。従つてこの種の機根を往生正機と云ふ。即ち單直仰信、結歸一行三昧の人を以て正機となす。故に往生記には愚鈍念佛を以て第一の機となし、往生の正機

を評述す。

**オーシヨのシヨギヨ** 往生正行

往生淨土の正しき行業を云ふ。觀經疏散善義には三福を正因となし、九品を正行となせり或は三心(至誠心・深信・回向發願心)を以て正因となし、五種正行(讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養)を以て正行となし、特に稱名の一行を以て彌陀の本願に順ずるが故に往生のための正定業なりとなす。→**シヨイン** **シヨギヨ**(正因正行)

**オーシヨシヨケツ** 往生至要訣

(二一卷) 向阿證賢述。宗祖の一枚起請文に依つて、經義の骨目たる安心起行について、相傳の奥義を述べんとせしもの。一條流の繼承者證賢は、派祖禮阿の滅後、邪義を説くものあるを見て、之を防がんが爲、法然・聖光・良忠・禮阿・證賢と五代相傳の法を顯彰せんが爲、延慶二年四月佛滅の日にこれを記述し五代相傳の血脈を附し、弟子玄心に本書を授けたりといふ。末書に滿澄の略解一卷あり。

**オーシヨジヨド** 往生淨土 極樂淨土に往生するといふ意。→**オーシヨ**(往生)

**オーシヨジヨドケツギキヨガン**

ニモン 往生淨土決疑行願二門 (一卷) 宋蓮式撰。本書は、著者當時の學者が淨土の法門を小教とし權乘となすに對抗して述作せるもの。撰時未詳。内容は、第一決疑門、第二行願門とに分ち、決疑門に疑論・疑法・疑自の三を分ち、行願門に禮懺門・十念門・聖賢門・衆福門の四を分つ。卷末弟子正知の跋文あり。

オージョーデノシュルイ

往生淨土十願文 趙宋の桐江法師撰。著はしたる淨土往生を希ふ十句の願文。「願我永離三惡道 願我速斷貪瞋癡 願我常聞佛法 願我勤修戒定慧 願我恒隨諸佛學 願我不退菩提心 願我速見阿彌陀 願我決定生安養 願我分身遍塵刹 願我廣度諸眾生」

オージョーデノシュルイ

往生淨土の法門の意。單に淨土門といふこと多し。↓ジョーデノシュルイ (淨土門)

オージョーデノシュルイ

往生淨土論註概説 (一卷) 千葉良雄著。昭和八年刊。本書は往生淨土研究の初學者のために論註一部の大要を平易且簡明に叙述し以て關西白旗正流の義解を鮮明にしたるもの。その内容は序論と本論とに分れ、序論に於て

は論註並に著者善覺思想の梗概を述べ、本論に於ては論註所説の教義について説述せり。本書は初めて論註を學ばんとするものに取つては必ず一讀すべき好指針なり。

オージョーソウ

往生想 三想の一。↓サンソウ (三想) (3)

オージョーソクケン

應聲即現 彌陀の名號を唱ふる聲に應じて、彌陀がその身を顯現し、念佛の行者を導くを云ふ。善導の觀經疏定善義第七華座觀の文を釋する中に於て「彌陀應聲即現」とあるは正しく是れなり。

オージョーソクジョーブツ

往生即成佛 往生即ち成佛の意にして、往生と成佛との兩者別異することなきを云ふ。主として眞宗に於て説く所の法義なり。教行信證第三に「大願淨土の報土には、品位階次を云はず、一念須臾の頃に速疾に無上正眞道を超證す」と云へる如く南無阿彌陀佛の妙行を信受する一念に正定聚の位に住し、更に命終の刹那に於て眞實報土に往生する時、即ち大般涅槃を超證すとし、他方化土には品位階次の差別あるも、彌陀の眞實報土は平等一如にして差別なきが故に往生と同時に即ち成佛となすなり。

り。正流の意は往生そのまゝが成佛なりとなすには非ざるも、一度往生せし以後は彌陀の大願業力の妙作用に助成され、善導の往生禮讚に「彼に到れば華開き妙法を聞き十地願行自然に成ず」といへる如く、三賢十聖の行業は任運無功用の間に成就され隨て佛果を證得するものと解せり。

オージョーダイヨウシヨウ

往生大要抄 (一卷) 源空述。和語燈錄所收。著作年代不詳。本書は、聖道淨土の二門の分類並に難行易行を二道と名づけたる旨を説き、善導の意により安心起行を必要とする所以を述べ、更に觀經によつて安心を三心となしその教旨を詳説せり。その文整然よく淨土の教旨を闡明せし好資料なり。この書の終りに「惠が」この文に下巻にあるへしとみゆるが、いづくにかかれて侍るにか。いまたたつねえず。もしたつねゆる人あらはこれにつけ」とあるより見るも元は二卷本なりし如く思はる。これ三心の解説のうち廻向發願心の説明なき故にそれが下巻に當るべしとなすものゝ如し。

オージョーデンノシュルイ

往生傳の種類 古來本朝に六家十一卷の往生傳有りとなす。一には慶遠保胤の日本往生記一卷、二

オージョーフオン

往生不遠 十萬億の佛土を經過せる處にある極樂淨土を觀經には去此不遠と説けるにつき、諸師各々之れに就いて論あり。諸師は理に約して釋するも、今家は事に約して三不遠を以て釋するを經意に契ふとし、義山は之れを事不遠と稱し、(一)分齊不遠、(二)往生不遠、(三)來現不遠と云ひ、觀經疏序分義、傳通記の說に據る。往生不遠とは觀經疏隨講義卷上に依るに「往生不遠とは、謂く道理遙かなりと雖も、去時一念に即ち到ると、此れ十一門義の中の第九門(九品十一門科の第九)去時の運疾に約す。或は須臾と云ひ、或は彈指と云ふ豈に是れ近きに非ずや」とあり。

オージョーベツジイ

往生別時意。↓イガンベツジイ (唯願別時意)

オージョーホニイ

往生品位 念佛行者が極樂淨土に往生すべき階位を云ふ。念佛行者すなはち往生人の機根難多にして信心行業等千差萬別なれば各人の往生に階位の生ずるは蓋し止むを得ざるところなり。無量壽經には三輩を分ち、觀經には九品の差別を説ける是なり。この三輩(上・中・下)と九品(上・上中・上中下・中・中下・下上・下中・下下)とはその名數は異なるも實は開合の異に

すぎず、三輩の各に三品を分つて九品となせしものと解するが正流の意なり。又この九品の機類についても古來諸師の間に異説あるも善導の解釋によれば、上品三人は遇大凡夫、中品三人は遇小凡夫、下品三人は遇惡凡夫となす。かく經文によりて三輩九品の別ありとなすも、これらは善導が觀經疏支義分に「遇緣に異なるを以て九品をして差別せしむることを致す」といへる如く、元來本質的な差別にはならず、唯だ條件環境の異によつて別説せしものすぎず。總體的に言へば是れらすべては罪惡生死の凡夫にして何れも淨土往生の機根たるべきなり。↓サンバイタホシ (三輩九品)

オージョームシヨウ

往生無生 ↓ムシヨウ (無生往生)

オージョーシヨウ

往生要集 (六卷) 源信撰。本書は阿彌陀佛の極樂淨土に往生する要文・要法を集め、往生之業念佛爲本の教旨を鼓吹せしもの。總じて十門あり、一に厭離穢土、二に欣求淨土、三に極樂證據、四に正修念佛、五に助念方法、六に別時念佛、七に念佛利益、八に念佛證據、九に往生諸業、十に問答料簡。此の中四・五の二門が全篇の骨子なり。その所説は要するに普

には大江匡房の新修往生傳一卷、三には三善爲康の拾遺往生傳三卷、四には同人の後拾遺往生傳三卷、五には蓮禪の三外往生傳一卷、六には藤原宗友の本朝新修往生傳一卷、七には證眞の今選往生傳一卷已上六家十一卷これなり。この他支那撰述にして印度・支那の高僧傳より淨土往生の事蹟を集録せるものとて、即ち明雲栖株宏の往生集三卷、戒珠の淨土往生傳三卷、宋王古の新修淨土往生傳三卷、宋陸師壽の新編古今往生淨土寶珠集卷八の内の第一卷、唐文驗と少康共撰の往生西方淨土瑞應圖傳一卷等の數書あり。本邦に於ても六家十一卷の外に淨土宗の往生傳として了吟嶽の新撰往生傳八卷を初めその數冊からず。各項參照。

オージョーナンイ

往生難易 淨土往生のための難行と易行といふ意。諸行往生は難く、念佛往生は易し、何んとなれば、諸行は本願の行にあらず、念佛は本願の行なるが故に。即ち諸行は難きが故に諸機に通せず、念佛は易きが故に通ず、彌陀が一切衆生を平等に往生せしめんが爲に難きを捨て、易きを取り給ひしが正しくこの本願の行なり。

オージョーニン

往生人 極樂淨土に往生する人。

提心を發し戒を持して惡を止め、三心具足して以て無陀を常念すべきことを説くに在り。永觀二年十一月、横川首楞嚴院に於て筆を起し、明年四月脱稿す。尋いで之を宋に送るに、發の國人亦深く之を珍重し、争うて捧讀せりと云ふ。末書、大綱一卷(源空)、料簡二卷(同上)、勘文六卷(平甚親)、記八卷(良忠)、指磨録三十卷(龍峯)、直談十八卷(平步)、和解八卷(澤了)等。

**オージョーヨーシューシヤク** 往生要集(一巻) 源空述。往生要集の註釋書。延寶三年刊。本書は、宗祖源空が、惠心僧都の往生要集を讀せられし手控なりしもの、如く推察せる。

**オージョーヨーシューセンヨ** 往生要集註要(一巻) 源空述。往生要集の註解書。漢語燈錄所收。本書は、宗祖源空が、往生要集を解するに當つて隨文解釋を避け、宗祖獨自の立場より總論的概括的に本書に論及しよく惠心僧都源信の深意を探り、往生要集一部悉く念傳なることを主張せるもの。

**オージョーヨーシュータイコ** 往生要集大綱(一巻) 源空述。往生要集の大綱書。漢語燈錄所收。本書は、宗祖源空が往

生要集の大綱を記述せしもの。

**オージョーヨーシューノネンブツ** 往生要集の念佛 往生要集の中に於て著者源信の説く所にして、往生の業には念佛を本とし、念佛を主要の正行なりとなせるもの。この説は善導の念佛によく類似せる如きも詳細に觀察すれば廣く五念門に於たり、觀念・稱念に通じ、而も觀念を主となし、之に堪へざる者に稱念を勧めたるものにして要は觀念の念佛即ち佛の相好を觀する念佛を重要し且これを勧むるにあり。

**オージョーヨーシューヒコノミエ** 往生要集披講の御影 宗祖源空の一。墨染衣の法然上人の前に帖本(往生要集)が置かれてあるもの。現在知恩院所藏右京權大夫藤原隆信筆は現に國寶に指定され宗祖畫像としては最秀且代表的のものなり。

**オージョーヨーシューリヤクリョク** 往生要集略料簡(一巻) 源空述。往生要集の註釋書。本書は宗祖源空が往生要集を廣・略・要の三方面について料簡せられしもの。

**オージョーヨーシ** 往生用心(一巻) 源空述。拾遺集谷語燈錄卷下所收。往生淨土

用心ともいふ。この書は、宗祖源空が、念佛行者の用心として六ヶ條をあげ之れを評説せしもの。

**オージョーライサン** 往生禮讚(一巻) 唐善導述。五部九卷の一にして三種行儀の中、尋常行儀を明す。往生禮讚偈又は六時禮讚偈ともいふ。本書は六時すなはち辰・初夜・中夜・後夜・黎明・日中、各時に書方・樂流界の阿彌陀佛に生ぜんとして禮・讚・誦する法を説けるもの。その内容は、前序、六時禮法、發見佛願、後序の四段より成る。↓  
クジョーライサン(六時禮讚)

**オージョーライサンキガキ** 往生禮讚問書(一巻) 良忠撰・良聖記。金澤文庫藏。本書は、良忠が講せし往生禮讚の稿本にして、門弟聖忍房良聖が、康元年、上總國伊南宿禰常樂寺に於て書寫せるものなり。同じく良忠著たる往生禮讚私記と合せ見らる可き貴重なる資料なり。

**オージョーライサンコーミョーシヨ** 往生禮讚光明抄(三巻) 長西探・水源寫。金澤文庫藏。鎌倉時代の古鈔本。本書は、覺明房長西の講せし往生禮讚の講本にして永源の書寫になる。全三巻の中現存するものは

第二、第三の兩巻のみ。觀經疏光明抄と共に長西教義研究には缺くべからざる資料なり。

**オージョーライサンシヤク** 往生禮讚(五巻) 懷善撰。往生禮讚の末書。實永七年作。往生禮讚偈寫本ともいふ。本書は、玄阿懷善が、往生禮讚の註釋を試み、良忠の私記を本となし傍ら諸家の説を参考し且つ自らの憶説を附加せるもの。内容は、文前支談として七項を挙げ次に入文解釋をなす、その文懇切丁寧を極め、專修念佛の高調に力を用ひし點に注目さるべきなり。

**オージョーライサンシキ** 往生禮讚私記(二巻) 良忠撰。往生禮讚の末書。往生禮讚記・禮讚記ともいふ。本書は、善導の五部九卷の一たる往生禮讚に對して、記主良忠が詳細に調詰の註釋を試みたるものにして、往生禮讚研究或は淨土宗義を知る上に於て必携すべきもの。現行の流布本は良仰の校訂によれるもの。

**オージョーライサンシキカンチユ** 往生禮讚私記冠註 本書は、往生禮讚研究のための權威書たる良忠の往生禮讚私記の冠註にして極めて丁寧なるものなりしを淨土宗全書刊行の際別行せしものにして、本書研究

の好指針なり。

**オージョーライサンシキケンモン** 往生禮讚私記見聞(一) 聖圓撰(二巻) 往生禮讚私記の末書。本書は、了譽聖圓が、その獨自該博なる學識を以て記主良忠撰往生禮讚私記について自らの見聞を記述せるものにして、本書研究上重要な參考書の一なり。

**オージョーライサンシキシユイシヨ** 往生禮讚私記拾遺鈔(二巻) 加祐撰。往生禮讚私記の末書。往生禮讚偈拾遺鈔ともいふ。本書は、南紀藤代山水正寺住僧加祐が、寛文元年、良忠の往生禮讚私記に對して自らの見聞を追加述作せしもの。

**オージョーライサンノマツシヨ** 往生禮讚の末書 善導五部九卷の隨一たる往生禮讚は行儀分中特に尋常行儀を明すものとして古來愛讀・味讀され、その研究されしこと亦た尠からず。今、正流に關する主なるものを

列挙すれば、往生禮讚私記二巻(良忠)・往生禮讚私記見聞二巻(聖圓)・往生禮讚私記拾遺鈔二巻(加祐)・往生禮讚私記見聞三巻(良榮)・往生禮讚寫本五巻(懷善)等あり。各項参照。

**オージョーライサンヨリヤツキ** 往生禮讚要略記(二巻) 入阿述。金澤文庫藏。往生禮讚の註釋書。本書は、鐘西門下敬蓮社入阿入西が往生禮讚の要文を抜粋して略釋を施せるもの。その首尾に多少の缺了あり。鐘西門下に於ける五部九卷の研究書の一として記主の往生禮讚私記と並べ見らるべき新資料なり。

**オージョーロン** 往生論 淨土論ともいひ、具名を無量壽經優婆塞會願生偈といふ。↓ムリョーゴキョウウバダイシヤガシヨ(無量壽經優婆塞會願生偈)

**オージョーロンチユ** 往生論註(二巻) 北魏曇無讖。天親の往生論の註釋書にして三經一論と共に淨土教義を闡明せる重要論書なり。無量壽經優婆塞會願生偈發願偈著薩婆並註・無量壽經論註・淨土論註・往生淨土論註・論註・註論等ともいふ。本書は天親造・善提流支譯の往生論に對して曇覺が註解を試みたるものにして往生論の本旨を顯彰するこ

と極めて恰當を得、その論述・思辨の方式は多く四論の教相を採用せり。上下二巻の中、上巻は専ら往生論の偶頌を註し、下巻は一に往生論の長行を釋せるものなるも、これらは單なる字解訓詁の註釋に非ずして、その註釋態度は偏に論の奥旨に徹し曇覺獨日の創見に立脚して如來淨土の因果を説き、衆生往生の因果また如來の本願力によるものなることを高調せるものにして、古來、論註の十四件として擧げらるゝもの亦た此の意を示すものなり。開卷第一の難易二道の教判に於て、信佛の因縁による願生淨土の易行道を説いて上衍の極致、不退の風航となし、その教義の他力的色彩を明瞭にし、次に起觀生信の下五念門を明して往生業因となし、稱名相續して十念するを業事成辨となし、名義相即の名號を高調す。この論書の影響感化は尤だ著しく、その他力本願思想は善導によつて採用大成せられ、今日の日本淨土教にして直接間接の思想の影響を受けざるものなし。従つてその末書、註釋書も古今に亘つて勝からず、淨土宗關係のものにても、論註記五卷(良忠)・同記見聞十卷(聖德)・同記見聞五卷(良榮)・同私鈔一卷(聖德)・同補鈔十二卷(淨音)・同略經二卷(了慧)・同拾遺鈔三卷(同上)・同

字誤二卷(輪超)・同拾遺書二卷(輪超)・同正義二卷(亮徹)・同正義叙説二卷(雲河)・同音釋二卷(湛英)・同研機鈔二卷(賢洲)等あり。  
オージョーロンチユーキー 往生論註記(五卷) 良忠述。淨土第一卷所收。弘長三年草稿弘安九年重訂。本書は記主良忠が高祖の識見を以て往生論並に曇覺註の註釋を試みたるものなり。その内容は、第一卷に首題撰義・教相・大意並に論註に就いて論日・撰義・願生偈を解し、第二卷に觀察門より十七種莊嚴功德、第三卷に願生偈、論註上卷、第四卷に願生偈優婆塞舍の器體十六句、論註披土無量界まで、第五卷に論並に註の卷末に至るまでの詳解をなす。その懇切なる訓詁釋は該博なる所引と精密なる考證と共に宛に論註一部の末釋中の白眉として恥ぢざるも、その所説訓詁に傾きよく曇覺の思潮を關示せるものといふを得ざる憾あり。  
オージョーロンチユーキーカイ 往生論註疑芥(二卷) 金澤文庫藏。鎌倉時代の古寫本にして其の内容より九品寺長西の撰と推定さる。本書は、曇覺の往生論註の註釋書にして諸行本願義の立場より論註の註釋を試みたるものとして珍重に値する。

オージョーロンチユーキーケンモン 往生論註記見聞 (1) 聖德太子撰。往生論註記の末書。淨土第一卷所收。論註記見聞・註記見聞・西譽見聞ともいふ。本書は著者西譽聖德が、その註博の見聞と卓絶の識見とを以て、記主良忠の往生論註記を詳解細釋せるものにして、該書研究の良書なり。  
(2) 良榮述(五卷)。往生論註記の末書。淨土第一卷所收。論註記見聞・良榮見聞ともいふ。本書は大澤良榮が記主良忠の往生論註記の註釋をなせるものなるが、その當を得ずと思はるゝものに對しては校訂加筆をなし以て文義を明瞭にせんと努めたる要書なり。  
オージョーロンチユーキーゼン 往生論註字選 ↓ロンチユーゼン(論註字選)  
オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註拾遺鈔(三卷) 了慧述。往生論註の末書。淨土第一卷所收。嘉元四年作。論註拾遺鈔・淨土論註拾遺鈔ともいふ。本書は往生論註の文を抄出細釋を施せるもの。初め論一部の大意をのべ、次に四科に分つて解説す。本書は了慧の作なりやについて古來疑義あり、同じく了慧作論註拾遺鈔とは大いにその趣を異にするが故に、蓮門經釋錄の如きは良

然の作かといふ。眞偽不明なる上、末流としての價值少し。

オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註正義(二卷) 亮徹述。往生論註の末書。淨土第一卷所收。論註正義・淨土論註正義ともいふ。本書は往生論註正義叙説と相よつて一部をなすべきものにして、上下二巻に分つて、往生論註の要文の正義を顯明し、博引傍證、詳細に亘つて論述せるもの。

オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註正義叙説(一卷) 亮徹述。淨土第二卷所收。本書は往生論註の正義を記述せる文説なり。論註正義叙説ともいふ。本書は往生論註正義と相よつて一部をなすべくものにして、往生論註の隨文解釋に先だつて往生論註一部の大意・文説を四科に分つて詳説し、終に本邦傳來の論註の末疏三十四種をあげ、

オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註正義叙説(一卷) 亮徹述。淨土第二卷所收。本書は往生論註の正義を記述せる文説なり。論註正義叙説ともいふ。本書は往生論註正義と相よつて一部をなすべくものにして、往生論註の隨文解釋に先だつて往生論註一部の大意・文説を四科に分つて詳説し、終に本邦傳來の論註の末疏三十四種をあげ、

オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註精華集 ↓ジョードオージョーロンチユーシーイジョー(淨土往生論註精華集)  
オージョーロンチユーシーイジョー 往生論註の末書 ↓ロンチユーシーイジョー

(論註の末書)

オージョーロンチユーリヤクシヨ 往生論註略鈔 ↓ロンチユーリヤクシヨ(論註略鈔)

オージン 應身 三身の一。衆生の機感に應同して現はれたる佛身。應身佛ともいふ。地前の菩薩・二乘の人・凡夫等が見ることを得る佛身にして淨土に出現して八相成道をなしたまへる釋迦牟尼佛の如き正しく是れなり。↓サンジン(三身)

オージンブツ 應身佛 前項に同じ。

オーセツゴアクシユ 横截五惡趣 念佛行者の得證過程をいふ。横に五惡趣(地獄・餓鬼・畜生・人・天)を截るの意。無量壽經に「横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ」と説く。善導はこの意を觀經玄義分に「横超斷四流」と云ふ。↓オーチヨードンシル(横超斷四流)

オーソーエコー 往相廻向 還相廻向の對。自己所修の功德を一切衆生に廻施して共に淨土に往生せんと願するをいふ。↓エコー(廻向)

オータニ 大谷 京都東山にあり。宗祖晩年の常在地にして大谷禪房のありしところ

なり。現在の圓山の西北祇園附近より栗田口に至る一帯の地を云ひ、現今の知恩院の所在地附近をいふ。

オータニジ 大谷寺 知恩院の寺號。

オータニシヨニ 大谷上人 宗祖

法然上人の異稱。宗祖は淨土開宗以後殆んど生涯を通じて洛東大谷禪房に居住し、自行化他、専心に口稱念佛を勵み、念佛の法門を宣布せられしが故に大谷上人といふ。↓ゲンタ(源空)

オータニゼンホー 大谷禪房 宗祖法然上人が京都東山大谷の地に設けられし庵室。吉水の禪室ともいふ。宗祖は立教開宗以後殆んどこの地に住居し、且つは念佛の法門を説き且つは自行を勵み、二祖聖光房禪長以下多くの門弟はこの禪房を訪れて宗要を聽聞せり。

オータニミンジヨ 大谷愍成 二五三〇—東京芝天徳寺住僧。檀蓮社成譽忠阿精進と號す。明治四年三月愛知縣蟹江に生る。八歳にして京都西方寺奉大成に就て出家し、同三十二年淨土宗大學を卒業す。爾來諸方に教職を取り同三十六年龍山大善寺に董す。後ち更に

同三十八年轉じて天徳寺に住し、宗務の要職にありて宗務の運用に盡す。昭和三年七月十一日没。壽五十八。

**オタマヤ 御靈屋** 東京芝罘上寺に於ける徳川家の靈牌殿をいふ。明徳四年、さきに浄土宗第八祖西譽聖體武藏國具塚に一字を創立して關東に教線を張り、後ち普光親智國師慈昌出で大いに正法を宣揚せり。徳川家康關東に下るや師に歸すること厚く、永く師禮の約束をなし、由來増上寺は徳川一門の菩提所として、その山内に歷代將軍の靈牌を安置する靈殿を創設し、これを御靈屋と稱せり。

**オータミツド** 太田密道 二五〇八 神戸生田町極樂寺住僧。顯蓮社貫譽敬阿と號す。安政五年三月福岡縣遠賀郡島門村大字鬼津に生る。資性温良、梵行清慎にして幼より信佛の念篤くしばしば奇行あり。明治七年同縣廣長岸寺の念覺に就て出家し、同九年知恩院にて齋齋微定に宗戒を受く。爾來大學林に學ぶ傍ら洛東泉涌寺佐伯旭雅に俱舎を受く。同十六年神戸元町極樂寺に董し、爾來廿有八年寺門の經營に務め極樂寺中興開山の號を受く。其の間本宗制度の革新に赤誠を獻げ兵庫大教會長・公會議員・知恩院顧問等の

重職に就き宗風宣揚と制度確立に務む。晩年知恩院山内入信院に入りて遺業を策勵し、又出でては故郷の先蹤を探り、近世の徳僧として道俗の歸依厚く解行その名高かりしが、遂に大正九年十一月十八日没。壽六十三。

**オチセンミヨ** 越智專明 二五二〇 近世の浄土宗史學者。東京府玉川淨眞寺學僧心蓮社一譽念阿珂香と號す。嘉永三年十月生る。伯耆國東伯郡榮村河上庄左衛門の二男。幼にして同郡赤坂専稱寺隨譽に就て出家し、明治元年増上寺にて宗戒を受く。師資性豪放謹嚴にして其た學才あり。具に諸名匠を歴訪し又福田行誠に就て學を受く。明治二十六年淨土宗高等學院教授となり、次いで第一教學校長・宗教大學教授等に歴任し前生を教育に捧ぐ。後ち増上寺執事として護法愛山の實際運動に當り藤山興隆會を組織する等大いに寺運隆昌につとむ。兼山大巖炎上に際し責を負つて引退し、爾來九品佛淨眞寺に隱棲し學徒の教養、宗史の研究に力を致す。大正十一年九月十四日没。壽七十一。(著書)淨土宗年譜一卷。

**オチヨウダンシル** 横超斷四流 念

佛行者の得證過程をいふ。横に四流(欲流・有流・見流・無明流)を超斷すること。四流を斷する場合は、聖道門により漸次に(堅に斷ずるには三大阿僧祇劫を要するも、淨土門の念佛行者は彌陀の本願力によつてこれを横に超斷して速疾に無生を證得することを得るといふ意。觀經疏玄義分には「横超斷四流、願入彌陀界」とあり。

**オトキ 御齋** 元來は正午以前になす僧家の食事のことを云ふ。但し後に一般に寺院中、或は法會の際に取る食事を指して云ふ。蓋し齋は時と作り、齋食・時食のことなり。齋とは「不過中食」とし、必ず正午以前になす食事なり。律には食につきて、時・非時を分かち、正午以前を正食とし、以後を非時食とす。依つて正午以前(時中)の食を齋食とし「トキ」と訓ず。食すべき時になす食なればトキなり。然るに後には、一轉して肉食をせぬ事に用ひ、遂に持齋と云へば、肉食を禁ずること、精進と云へば肉食せぬ事のみを意味することとなれり。

**オドリネンブツ** 躍念佛 一ターヤネンブツ(空也念佛)

**オーニツキユ** 王日休 一〇七三 南宋の人。姓は王氏、字は虎中又日休と號し、地名に因みて龍舒居士とも稱す。高宗の時國學進士となり、後には専ら淨業を修し、日課千拜す。南宋紹興三十年大阿彌陀經を校合す。乾道九年没。壽不詳。(著書)龍舒淨土文十卷。

**オーノクホン** 横の九品 一タホンノオリヂユ(九品の横堅)

**オーノケンミヨ** 小野玄妙 二五九四 近世の佛教學者。明治十六年二月福清小野兼吉の男として生る。俗名を金次郎と云ひ十六歳の時鎌倉光明寺古水大智に就て出家し玄妙と改む。爾來苦行佛教學の研鑽に勉め著書亦た夥なからず。師は學歴殆んどなく、而もよくその不撓の努力は功を奏し、昭和七年文學博士の學位を得。其の間學の爲め東洋西走し遠く足踏支那朝鮮に印し學會に裨益する所尤だ多し。又大正新修大藏經の出版計畫なるやよく高楠順次郎、渡邊海旭を補け編輯長として出版の大業を成就し、次いで佛書解説大辭典十二冊の編輯出版を完了す。その功や

寔に滅すべからざるものあり。而して佛教學術の研究の權威者にして文部省國寶調査委員となり斯界の重鎮たり。晩年四庫全書の出版を計畫すれども事ならざるに先だつて逝く。時に昭和十四年六月二十七日。壽五十七。(著書)佛敎年代考・佛敎の美術と歴史・佛敎美術講話・佛敎の研究・大乘佛敎藝術史の研究・佛敎文學概論各一卷等。

**オーノサンジン** 横の三心 一サンジンノオージヨ(三心の横堅)

**オーノホーオン** 大野法音 二五九六 清淨華嚴第七十一代。宜蓮社禪譽廣阿無礙と號す。安政三年十月生る。尾張國海西郡市原村大字東保大野利左衛門の次男。慶應二年十一歳にして伊勢國田丸大得寺西山白道に就て出家し、十八歳増上寺溫覺大宣に宗戒を受け、後ち上洛して岸上恢嶺に就き宗餘業を研む。二十五歳三重縣鳥羽清覺院に董し、明治二十九年四十一歳にして同縣松坂樹敬寺に轉ず。爾來同寺經營に力を致し本堂庫裡を再建し中興業を勵られ、又徒弟教養に盡力するところ少からず。大正十三年七月一宗の興望により清淨華嚴七十一代となり専ら淨山の恢嶺につくす。師は資性温厚、近世に於ける布

教界の權威にして、各地を周遊して化益を垂る。昭和六年十二月七日没。壽七十六。

**オーハラ** 大原 大原問答の舊蹟。京都府愛宕郡。もと大原莊・大原郷と云ひ、又小原とも書く。現今大原村に五字ありて、中に大字大原あり。河を境として西を小鹽山、東を小野山と云ふ。古來幾多の名山互利あり、且忍の遺跡たる魚山來迎院、大原問答にて名高き勝林院、延曆寺三門跡の一たる三千院(梶井殿)等此の地にあり。大原の名は支那天台山の乾に大原山ありしに象り、觀山の乾の地を大原と云へる旨を覽讀は傳へ、往昔四十八の別院ありしと云ふ。

**オーハラダンキキガキシヨ** 大原談義問答鈔(一卷) 本書は又大原十二問答或は大原問答と云ふ。著者は聖覺法印と傳ふるも、古來異説ありて眞偽未詳なり。内容をみるに序説・本論・餘論より成り、序説は宗祖述懐の辭として淨土の宗要を述べ、餘論は大原に於ける談義の緣由及びその後念佛の興隆、宗祖遺蹟の事實を述べ、本論は十二の問答に分れ、各問答の名及びその質疑の大意と宗祖の之れに對する解答を出す。第一・第八・第十一は顯眞、第二・第十二は永辨、第三は



智海、第四は譯載、第五は明通、第六は眞覺、第七は證眞、第九は滿發、第十は重源が質疑者なり。此等に對し宗祖は明答を與へ以て淨土教義の理論と實踐の要諦を示せり。(末書)見聞一卷・選要鈔一卷・辨釋一卷・編書一卷・纂述鈔二十卷、頭書一卷等。

オーハラダンギキガキシヨウケンモン

大原談義開書鈔見聞(一卷)聖德述。大原談義開書鈔の末書。淨全第一四卷所收。大原談義見聞ともいふ。本書は文體内容等よりして著者が西譽聖德なりや疑はし、或は後人の偽作に成れるものか。

オーハラダンギキガキシヨウノマツシヨ

大原談義開書鈔の末書。大原談義開書鈔は、宗祖法然上人の對佛教學的、對餘宗の立場を明確にせるものとして、古來の諸師中これを研究せしもの諺からず、從つてその末書の現在せるもの亦た多し。今その主なるものを列擧すれば、大原談義開書鈔見聞一卷(聖德)・大原談義纂述鈔二卷(無絃)・大原談義選要鈔二卷(覺譽)・大原問答辨釋一卷(開證)。これらの外諸多の註書あるも今はその重なるものを擧ぐるのみ。各項参照。

オーハラダンギサンジツシヨ

原談義纂述鈔(二卷)無絃撰。大原談義開書鈔の末書。本書は、淨全第一四卷所收。徳川初期の學僧無絃が、大原談義開書鈔に對して諸説を纂輯し、經論章疏を引用參考して、これが詳細なる釋釋を試みたるもの。

オーハラダンギセンヨウシヨ

談義選要鈔(二卷)覺譽述。大原談義開書鈔の末書。選要鈔ともいふ。本書は、從來の大原談義の末書たる聖德の見聞、無絃の纂述鈔等の解釋が粗荒なるを厭ひ、大原談義開書鈔の要領を撰述して傍ら私見を記述せるものにして本書研究の良書といふに足るものなり。著者について聖門釋釋録には覺譽となす。

オーハラモンドー

大原問答(1)大原談義とも云ひ、宗祖が顯眞の請に應じ洛北大原に於て淨土宗義を説せしを云ふ。初め顯眞は決定出離の路に思ひ悩み宗祖に質すも疑團氷解せず、百日大原に籠居し淨土の章疏を披見し、其の要旨を宗祖に請決せんとし、文治二年秋大原辨林院丈六堂に請す。淨教を聽聞せん爲め會する道俗中重なるは重源と其弟子三十餘人、明通・證眞・貞慶・智海等にして論談往復一日一夜に涉り、宗祖は機教相應、易行易修の彌陀本願の妙旨を開闡す。滿座の道俗

悉く歸依し、顯眞をはじめ大衆の高聲念佛すること三日三夜なり。重源は阿彌陀佛名を附する端を開き、顯眞は行業を更めて淨土門に歸し、辨林寺に不斷念佛を初めたりといふ。(2)オーハラダンギキガキシヨウ(大原談義開書鈔)

オーハラモンドーベンシヤク

大原問答辨釋(一卷)開證述。大原談義開書鈔の末書。大原談義辨釋ともいふ。本書は、東暉門下の開證が、大原談義開書鈔の末書たる聖德の見聞、無絃の纂述鈔、覺譽の選要鈔等の不備を辨じ、大原談義開書鈔の奥示を釋出せんとせしもの。

オーヒビ

大日比 山口縣大津郡仙崎町安永年間より文久年間の約百年の久しきに亘つて清僧法岸・法洲・法道の三師相繼いでこの地に化を布き、西園寺に住して持律堅固の念佛を囑み道風を興せしによりその功大いに擧りて、清龍の氣今日に至るも衰へず、道譽一世に高し。

オーヒビサンシ

大日比三師 光譽法岸・承譽法洲・元譽法道の三師をいふ。この三師は、捨世派關通の道風を傳承し、相繼いで長門國大日比西園寺に住し、四方に化

を布き、その益、周防・長門の二國を風靡し道譽一世に高く、その道風は今日に至るまで傳持され所謂大日比一派の捨世流を形成する因由をなせしが故に、後世これらの三師を稱して大日比三師といふ。三師の傳は各項参照。

オーヒビサンシコーゼツシユ

大日比三師講説集(三卷)世良壽元編。明治四十三年刊。本書は長州西園寺の大日比三師すなはち法岸・法洲・法道の三師が宗書の各方面に亘つて講述せしところの遺稿を集録したるもの。その内容は何れも唱喩的に平易を旨として記述し、布教傳道の好資料となるもの多し。

オーホーシヨ

大方丈 知恩院伽藍の一。桃山式建物にして入母屋造檜皮葺、寛永十年の創立なり。舎内を多數の室に仕切り歴代天皇尊儀、知恩院宮門跡歴代尊牌、徳川家一門の靈牌等を安置す。室内を仕切る櫓、枝戸等の繪は總べて狩野派の巨匠尚信、信政定信の筆になり、豪華麗麗を極む。現に國寶なり。

オーホーミヨブク

應法妙服 如法の三衣、即ち袈裟のことを云ふ。無量壽經卷上に「佛讚する所の應法妙服の如き自然に身

に在り」といへるより出づ。轉じて現今にては五重相傳の際、受者の道衣にこの文を記すること専ら行はる。

オーホンガン

王本願 無量壽經所説の阿彌陀佛四十八願の中、第十八念佛往生の願の異名。四十八願中に於ても重要なことを國王に喻へて王本願と名づく。蓋し宗祖源空の創稱にして、選擇集第六章段に「四十八願中すでに念佛往生の願を以て本願中の王となすなり」とあり。又大經釋には「凡そ四十八願皆本願にあらざることをなし、而もひとり念佛往生の願を以て規模となす。故に善導釋して云く、弘誓多門四十八願念佛最爲親人能念佛佛還念專心想佛佛知人と。故に知んぬ四十八願中唯た念佛往生の願を以て願王となすことを」といへるより出で、爾來宗門學者の常に用ふる語となれり。

オミヌグイ

御身拭 儼身を拭ふ行事にて、もと嵯峨清涼寺に於て毎年三月十九日木尊釋迦佛像を拭ひ奉つりしによる。後ち此のことは諸宗に於ても行はれ、本尊又は祖師の像を掃拭し又は衣を取換る等のことを行ふ知恩院にては毎年十二月二十五日御身拭と稱し祖像を掃拭し、本派本願寺は一月八日法主

自らこのことを行ひ大御身と云ふ。

オミヨゴ

御名號 阿彌陀佛の名號の尊稱。

オユミ

生實 千葉縣千葉郡蘇我村。關東十八檀林の隨一たる生實大嚴寺の所在地なり。

オユミダイガンジシ

生實大嚴寺志(一卷) 攝門撰。淨全第二十卷所收。檀林生實大嚴寺志ともいふ。文政天保年中、攝門晚年の著にて未定稿本なり。本書は淨土宗關東十八檀林の隨一たる大嚴寺の寺志を記述せしもの。内容は創立正傳・朱應寶章・道場造建・什寶類員・原氏廢亡・世代略傳・上足鴻漸・席中俊鳳・支談寺院・配屬二箇の十項に分つ。

オーヨ

雄譽 トレイガン(靈巖)

オーヨミヨリユ

王譽妙龍 攝隨意自道の化益したる龍女の法號なり。即ち傳に云ふ。攝隨意上總國館林の善導寺に住せし時近邊に龍潭池と稱する龍潭あり、一夜女子來り西方を回顧し受戒を請ふ。攝隨意其の志に感じ五重相傳して王譽妙龍の法名を授與せりと。

オリゴシヨ

折五條 疊五條とも云ふ。ゴジヨゲサ(五條袈裟)

オーワクネンブツ 誑惑念佛 いつはりの心を以て人を惑はす念佛の義。貪欲の念、利義の念、難得の念、虚假の念、佛とも云ふ。内心には往生の心なく名聞利養慢貪欲の心を持ち、外相のみは頭燃を拂ふが如く晝夜六時に勇猛精進に念佛するが如きをいふ。

オンキ 遠忌 遠年忌とも云ふ。五十年又は百年以上の年忌を云ふ。↑ネンキ(年忌)・キニチ(忌日)

オンゲイ 恩問(恩計) 泉州惠田院住僧近江甲賀の人。俗姓佐々木氏。性頭院行に長じ、五畿七道にその名聞ゆ。天文年中和泉國丹波に遊化し、阿彌陀經十萬巻を宣讀し、世人呼んで十萬上人と稱す。亦た常に貧者病人を養ひしが故に、惠田院ともいふ。後ち豊臣秀吉より寺領五十石を賜ふ。寂年不詳、壽八十二。

オンゲイ 櫻岡 二三四五 字は性明、在蓮社と號す。三河の人。九歳鷲峰遍照院齋譽に就き出家、十八歳叡山に修學、覺登に付法相承す。寶曆年中西尾縣心寺、鷲峰遍照院に住し、又中山貞照院に住す。同院は曾て元禄年中忍波の中興にかゝり、鹿ヶ谷の規矩を移し

風儀嚴整の捨世地なりしが、師は此に住すること廿有五年、大いに古風を樹起す。寛政元年居士片山某の請によりて導智寺に住せしが同年七月示寂、壽七十。師の歴住の四ヶ寺院其他高濱蓮雲院、名古屋阿彌陀寺何れも捨世の道場たらしめ、三河地方に牢として抜くべからざる宗門信仰の基礎を定む。

オンコー 遠公 廬山慧遠の異名。↑エオン(慧遠)(1)

オンゴーニン 普賢忍 ↑サンゴーニン(三法忍)

オンジュカク 飲酒戒 四十八輕戒の一切の酒を呑むことを戒めたるもの。

オンチヨウ 音徹 二三四七 京都御々谷金毛院の學僧。德川末期の人。梵蓮社忍覺淨阿と號す。三河に生れ同國遍照院歸阿を師とす。寛政元年京師に上り華頂山内既成院に寓す。師は餘業に通じ、専ら講學を事とし洛西西光院、京極轉開寺、御々谷金毛院等に往返して、俱舎・唯識・起信・華嚴等を講ず。特に興壽と大藏對校儀を校正し、文政元年六月には興壽の業を繼ぎ傳通記を校讐上梓せし等要貫すべき點多し。文政十三年常願寺内に松蔭院を營みて隱棲し、天保四年十月寂。壽七十七。

オンヨ 普賢 ↑ンヨーカーン(聖觀) オンリンユーゲジモン 園林遊戯地門五門の一。↑ゴモン(五門)

カ

カイ 戒 三學の一。↑サンガク(三學) カイエシキ 開衣式 淨土宗僧侶が香衣輪首を頂戴せしときこれを被着する儀式にして知恩院に於て舉行せり。香衣被着は必ず開衣式を要せしも、享保十二年以後はその要なしとされたり。

カイエン 快圓 淺草誓願寺住僧。信州の人。幼にして出家し、諸檀林に掛錫す。後ち木曾の深谷に坐禪すること十有餘年、禪妙を悟れりといふ。ついで三條山増上寺三嶋谷に講席を設け、殊に碧巖録に通ず。日頃名利を銜はず、淺草誓願寺に住して法輪を轉じて聽聞するもの夥からず遂に怠むことなしと傳ふ。壽不詳。

カイキ 開基 寺院を創建すること。轉じて寺院を創建して始めて住持せし人を云ふ。

カイギ 戒儀 受戒の儀則作法。この授戒の方軌については天台戒疏によるに天台大師以前既に六本の戒儀世に行はる。即ち(一)梵網本、(二)地持本、(三)高昌本、(四)瓔珞本、

カイ—カイキヨク

(五)新撰本、(六)制旨本の六これなり。この外安然の普通廣釋には、達摩本・明曉本・妙樂本・和國本の四本を加へて十本の戒儀ありと説く。この中、和國本といふは恐らく傳教大師の授菩薩戒儀を指すものと思はれる。これらの諸戒儀の外に、南岳の授菩薩戒儀、黒谷の古本戒儀、同新本戒儀、机上の法式、懸亮説戒の舊儀及び傳信・隆禪再興の机受戒儀等あり。これらの諸戒儀ある中、天台宗に於ては主として妙樂の十二門戒儀を用ひ、法然上人の戒系すなはち淨土宗・淨土宗西山派・黒谷流・元應寺流・法野寺流・三結寺流・廬山寺流等に於ては、黒谷の古本並に新本の兩戒儀を中心として使用せり。

カイキヨーン 開教院 本宗開教區の本部にして開教院の寺號公稱を有するもの四箇所あり。開教年次により布哇・臺灣・朝鮮・樺太と順序す。今その各について概説すれば、(一)布哇の開教院。所在地ホノルル市マキヤ。その現在建物は福田關正が昭和十一年移轉新築せしものなり。↑ハワイカイキヨータ(布哇開教區) (二)臺灣の開教院。所在地臺北市神山町。明治二十八年開教當初より、臺北城外舊公園地にありしものを、大正五年現在の地に移し昭和十二年田村智學によ

りて、本堂新築成り附屬國語學校、幼稚園ありて名實兼備はるに至る。↑タイワンカイキヨータ(臺灣開教區) (三)朝鮮の開教院。所在地京城府本町三丁目。明治三十三年同府明治町に創設せられ、明治四十年井上支眞が現在の地に移轉新築したるも、昭和八年更に裏通の道路擴張に伴ひ、入口を大和町に改め、大改築を行へり。↑チヨースンカイキヨータ(朝鮮開教區) (四)樺太の開教院。所在地豊原市東二條南二丁目。明治四十年建設以來屢々改築を行へり。↑カラフトカイキヨータ(樺太開教區)

カイキヨーク 開教區 本宗の開教區は、我が國の新領土、若しくは海外に於ける本宗寺院教會所の自治行政區劃の名稱にして、内地に於ける教區制度と略ぼ同じ。ただ開教區寺院の資格は一等より十五等までとし、その餘を等外とすること、寺院の住職及び教會所の主任、其他一切が宗務所の職制によりて進退すること、が特に異り、自然開教區長を監督、住職主任を開教使・開教副使、其他妻女に至るまで開教助員の名稱に包含する等、教區との相違の主なるものなり。早きは明治廿六年の布哇開教區、日清戰役後の臺灣・朝鮮、日露戰役後の滿洲・樺太、最近に於ける南洋、

支那・アメリカの諸開教区ありて、現に一百三十三箇所の寺院教會所と、數百人の開教員とによりて著々教權擴張に努めつゝあり。明治三十八年より昭和元年まで、北海道旭川以北を北海道開教区と稱し、或は鹿兒島・沖縄・伊豆等に別教區を設けしことありき。その詳細に至りては各開教區參照。

**カイキョークチヨー** 開教區長 開教區長は各開教區の監督者の名稱にして、普通の教務所長とその職務を同じくす。布哇開教區のみは昭和年代に、各宗に倣ひ開教監督の名稱を用ひ、朝鮮開教區に於て大正初頭より十年まで、開教區長の上に開教總監を置きしことあり。一任期は四箇年とし、重任を妨げず、開教事業に堪能なるものにつき、特に分限資格三級以上のものを管長これを選任す。

**カイキョーゲ** 開經偈 凡て經文を講誦する最初に唱へる偈文を謂ふ。古來より「無上甚深微妙法 百千萬劫難遭遇 我今見聞得受持 願解如來真實義」の四句の偈文が最も多く用ひられ、此の偈文の出處は明かならず、恐らくは無量壽經より出づるものならん。特に本宗に於ては法事讃の「念念思聞淨土教 文文句句皆當勳 憶想長時流淚

苦 專心聽法入眞門」の文を以てこれに代へ用ひることあり。然し此の偈は普通教經偈と名づけらる。

**カイキョーシ** 開教使 開教使は各開教區に駐在する上級主任の名稱にして、僧階權大僧都、學階提議、教階准讚教以上に相當するものにつき選定せられ、一任期を四箇年とし轉任重任を妨げざるものとす。

**カイキョージョイン** 開教助員 開教助員は各開教區に駐在する下級役員即ち普通役僧級の名稱にして、講家・權律師等の教師補級のものより選定す。一任期を四箇年とし、主任級の命令の下に開教事務に携はる。轉任重任を妨げざるものとす。又各主任の夫人を開教助員と云ひ、その待遇を同じくす。

**カイキョーフクシ** 開教副使 開教副使は各開教區に駐在する中級主任の名稱にして、學階得業、教階准輔教以上を有する律師以上のものについて選定せられ、一任期を四箇年とし、轉任重任を妨げざるものとす。

**カイケン** 快玄 一ツクチユ(期中) **カイゲン** 開眼 新に佛像・曼荼羅・塔婆等を新造し、又は古像を修葺した時、これを供養して、開光臨観するをいふ。その意味

は智慧の眼を開く(佛眼を開くに自ら入魂の意となる)ゆへに開眼といひ大經上卷の「開彼智慧眼」と云ふ文が類される。説法明眼論開眼品には入理・平等・絶想・圓通・種子の五種の開眼を明し、和語燈錄卷五には事理の二開眼を説く。即ち「開眼と申すは、本體の佛師がまなこをいれ、ひらきまいらせ候を申候也、これをば事の開眼と申候也、つぎに僧の佛の眞言をもて、まなこをひらき、大日の眞言をもて、ほとけの一切の功德を成就し候をば理の開眼と申候也」とあり。現今では灑水作法の後も、三度點睛するを口傳となす。因に開眼の式は、大體左記の差定に仍る。無言三拜・四奉請・開眼疏・灑水作法・開經偈・誦經・攝益文・念佛會・讚佛偈・十念・三唱禮。

**ガイコクリユーガクセイ** 外國留學生 一ジョードシユ(留學生) **ガイコクリユーガクセイ** (淨土宗外國留學生) **カイサン** 開山 寺院を開創せし僧を云ふ。古は山谷を刈り開きて堂宇を建設せし故かくいふ。又轉じて一宗派の開祖をも開山と稱す。

**カイサンキ** 開山忌 開山の祥月に修す



云ふ。禮經の時打ち又授戒の時式の序次を規律する爲めに用ふる爲の用ふる物

**カイシュデン** 戒珠傳 宋飛山戒珠撰淨土往生傳三卷の異名。該書を諸他の往生傳と區別するため著者の名に因んで戒珠傳と稱すること古來廣く行はれたり。一ジョードオ

**カイジョーエ** 戒定慧 一サンガタ(三學) **カイジョーガクド** 開城學堂 朝鮮開城府、開城商業學堂の略稱。明治三十四年四月の創立、鮮人子弟の實業教育機關。その沿革は、明治三十年三岡田持門の單身釜山に開教せるに刺戟せられたる宗會は、三十一年五月第二臨時宗會に於て布哇を第一、臺灣を第二、韓國を第三開教區として開教費支出を決議せしを以て、同年開教使として京城に渡りし伊藤祐兵は、三十三年初代開教監督廣安眞隨の京城に來るを待ち、鮮人教化を協議し

る法會。この法會は古く支那以來行はれたるものにして、本邦にても禪の傳來と共に諸寺に於て行はる。但し開山忌の稱は開山開山の祥月に修する法會に限る。  
**カイサンドー** 開山堂 一寺の開山又は一宗の開祖の像を安置する堂。後義の場合には祖堂・祖師堂・大師堂・御影堂等とも云ふ。  
**カイシ** 戒師 戒を授ける師匠のこと。戒和尚・傳戒師とも云ふ。授戒會・得度式・佛式結婚等の時、三歸戒・五戒・十戒・三聚淨戒等を授ける師匠を云ふ。  
**ガイジゴ** 孩子號 嬰女號の對。孩とはみとりこ、幼稚な子、いとけなき子の義。生れて間なき男兒のこと。戒名にこの號を付すは大體生れてより二・三歳の男子に附すを常とす。二・三歳の女の死せる女子に嬰女の號を附すは不可なり。

**カイジゴクインコーダラニ** 開地獄唱喉陀羅尼 施餓鬼會の時用ふ。普集せる餓鬼の咽喉を開かんと念じて誦する陀羅尼をいふ。  
唯 歩布密哩 迦多哩恒他釁多也  
**カイシヤク** 戒尺 次項に同じ。  
**カイシヤク** 剃髮(戒尺) 拍子木とも

カイサンドー 一カイジョーノシヨ

たる結果、三十四年開城に轉じて開城學堂と稱する日語學校を始め鮮人教化に着手せしに端を發せり。三十七年伊藤歸國したる後松尾眞善來任し鮮語に巧みなるを得て専ら地方開拓に任じ、明治四十年井上玄眞開教監督として宗務所亦助成金を惜まざりき。然るに世界戦後の大正初頭は實業教育の一大發展期に際し總督府より屢々校舎設備を完全にすべしと督促せられたるもその資金に窮したる時、大正五年廣安眞隨再度開教監督として來任の後、同八年には釜山知恩寺裕垣眞我はその篤信者高瀬合名會社編永政治部長より金一萬圓の喜捨を受けて松尾學堂長に助成せり。こゝに開城商業學堂と改稱の認可を得て商業學校とし夜學部を併置、松尾は宗務所の諒解を得東奔西走全國を行脚し淨土宗寺院有力者より數千金の淨財を得て大正九・十年新校舎新設備を加へたるも尙及ばず、會々總督府がこの地に公立開城商業學校を經營するに遇ひ、校運利あらず戦後不況と共に負債を生じ、昭和二年には松尾山口縣に引退し萩野順導之が整理に任せしも遂に昭和四年全く閉鎖の止むなきに至れり。  
**カイジョーノシヨ** 楷定疏 善導の四帖疏の異名。一シジョーノシヨ(四帖疏)

カイズカ 貝塚、東京市麹町區。明徳四年浄土宗第八祖西譽聖師が此の地にはじめて現在の三條山増上寺を創設せしところなり。

ガイセツジヨードシユージ 概説浄土宗史(一卷) 惠谷隆成著。昭和十一年刊。

本書は、著者が従来浄土宗の史的研究書無なるを嘆き、その多年の研究と豊富な識見を傾注して以て浄土宗史の輪廓を明にし併せて新宗學建設の資助に供せんとせしものにして昭和九年刊行の略述浄土宗史の改訂増補なり。その内容は、序論と本論とに分れ、本論にては宗史の區別を開創期・持統期・大成期・革新期の四期に分ち詳細に説述し、末尾に浄土宗略系譜と浄土宗各本山住持次第を載す。著者の言を精れば、本書は初學者に宗史の梗概を會得せしめんことを主眼とせしものなるも、その各章節の終に擧げられたる豊富詳細なる註記は亦た以て宗史研究者に對する好箇の資料たり。

カイゼン 戒書 三編の一たる戒編に同じ。イサンブタ(三編)

カイタイ 戒體 戒の體性の意。即ち作禮乞戒等の表業に由りて獲得する無作にして、所謂止惡修善の道德的行爲を引き起して

来る根本原動力を戒體と云ふ。古來より戒體について異説あるも、大別して心法説・色法説・非色非心法説の三種となすことを得。かの宗祖源空と慈覺房願空との戒體論のありし際、願空は心法、宗祖は色法の戒體を主張し、遂に宗祖の勝利に歸せしことは普く知らるゝ所なり。宗祖の流れを汲む西流に於ては、その所説を固守して性無作の假色を即ち生れつきのまゝの身體を以て戒體となす。

カイダイコーモンシヨ 開題考文抄(三卷) 良山妙觀述。續淨第一四卷所收。本書は名越派第三代良山がその師良慶明心の口傳題下の註釋を施せしもの。その内容は、上・中兩卷に於て聖道門雜説の義を詳説擴張し、下卷に於て淨土門先德相傳の説をあげ、口傳題下の文を詳解せり。

カイダイコーモンシヨキキガキ 開題考文抄開書(三卷) 良山聖觀述。續淨第一四卷所收。本書は、名越派第四代良山妙觀の開題考文抄を註釋せしもの。その内容は、はじめ良慶明心の口傳題下の文を擧げ讀いて開題考文抄の文を逐次に解説せり。

カイダイコーモンシヨクヒツ 開題考文抄口筆(一卷) 良山妙觀述。續淨第一

四卷所收。本書は、名越派第三代良山が自著開題考文抄述作後、更に聖淨二門の諸家が秘傳の義と解説する法を諸宗について説述せしもの。

カイダン 戒壇 授戒の壇場。即ち戒を授くる爲に戒壇中に於て別に土を高く壇となせるものを云ふ。蓋し往古は別に壇所なく、多くは露地に於て羯磨を乘したる如し。我が國に於ては、天平御寶六年四月東大寺大佛殿前に戒壇を立て、天皇皇后以下、鑑眞に就き菩薩戒を受け給ひしを嚆矢となす。其後、筑紫の觀世音寺、下野の藥師寺に戒壇を設け、東大寺の戒壇と合せて天下の三戒壇となす。平安の初、傳教大師最澄は比叡山に圓頓戒壇の設立を發願せしが、南都の抗訴に遭ひてその志を果さざりしが、尋いで最澄の資養眞は終に勅許を得て天長五年始めて一乘戒壇院を叡山に創設し、以て圓頓戒を弘布せり。其の後三井寺・元應寺・法野寺等に戒壇を設けて登山受戒すること能はざる者に便せしのみならず、同時に遠國各地にも戒壇を分置せしかば、圓頓戒の流布に資せしこと渺ならず。本宗にては叡山の戒壇を摸し、本尊前に安置して授戒を行ひ、これを戒壇と呼ぶ。この戒壇には壇の中央に多寶塔を安置し、傍らに一二

の正經兩卷の秘要を置き、壇の四方の角並に中央に五瓶を置き、正面に火車・六器等を置くを普通とす。

カイダンイン 戒壇院 比叡山の東塔にあり。弘安十年三月傳教大師最澄は菩薩戒壇の建立を發願せしが南都の僧制に排訴されその素志を遂げず示寂せしにより、天皇深くこれを悲み給ひ、藤原冬嗣公を勅使として弘仁十三年六月最澄の初七日に當り圓戒允許の詔を下したまひ茲に最澄の遺業成る。明年四月十四日根本中堂に於て始めて大乗菩薩戒編磨を行ふ。天長五年天台座主義真勅を奉じて圓頓戒壇を叡山に設く。今の戒壇院これなり。戒壇の構造は三重土壇より成り、上壇に釋尊・文殊・彌勒の三聖の像を安置す。最初に建てられし戒壇院の建築は、五間四面の戒壇堂が中央にあり、その後、五間の看衣堂あり、周圍に迴廊あり正面に中門ありしも中古焼失し、現今のものは徳川初期に建築されたるものにして寶形造椽皮葺の堂のみあり。

カイチヨ 戒牒 戒を受けし證書(公驗)のこと。もと支那に於てもこの制の行はれしことあるも、我が國に於ては、天平御寶の頃より既に十師(三師七證)の戒牒を受戒者に授けて、以て受戒の公驗となしたるもの

の如し。往古は其の授受は甚だ嚴格なりしが其の後登壇受戒の漸く衰頹すると共に公驗の制も弛緩し、現今に於ては各宗各様の規則を設けて、之を受者に授くるものとせり。淨土宗戒牒については淨土宗制に特定の規程あり。

カイド 戒度 支那南宋代の人。字は拙菴、靈芝元照の弟子にして特に四分律に造す。晚年餘曉の極樂寺に住し一意西方に歸す。詩不詳。(著書)觀無量壽經正觀記三卷・觀經扶新論一卷・阿彌陀經開持記三卷等。

カイドー 戒堂 三編の一。黒谷金戒光明寺第四十八代。妙蓮社承阿彌陀樂雲と號す。文化元年、江戸本所靈山寺より、黒谷に轉住翌二年九月九日寂。壽五十八。

カイドー 開導 十二門戒儀即ち圓頓菩薩戒を授くる時の十二作法の中の第一。略して圓頓戒の大意を述ぶるをいふ。

カイビヤク 開白 (1)法會・修法を始める時、表白文を誦してこれを本尊に告白する儀式を云ふ。(2)結願の對。一般に法會を開始することを意味す。法然上人行狀繪圖卷十に「但し開白の時念佛以後の讚歎を略すべし、又開白以

後は總禮の伽陀を略すべし」とあるは正しく速座の法會の最初の時を言へるものなり。

カイフク 戒福 三編の一。イサンブタ(三編)

カイホー 戒法 佛の制せられたる律法にして衆生の規範となるべきもの。即ち五戒八戒・十戒・具足戒又は三聚淨戒、十重四十八輕戒等の律法を戒法と稱す。

カイホン 戒本 授戒の儀軌即ち授戒の作法次第を記せるものを云ふ。これに小乘大乘等の種類あり。淨土宗にては圓頓戒の戒儀を指す。イカイギ(戒儀)

カイミヤク 戒脈 戒法を傳持し來れる系統脈譜。佛より展轉相承、師資相傳して現在の受者に至るまでの脈絡をいふ。圓頓戒についていへば最澄がその血脈譜を作り、廣舍那佛・阿逸多菩薩・羅什・慧思・智者・灌頂・智威・慧威・玄朗・湛然・道慈、次いで最澄・義真これを我が國に傳へ、爾後、師資相傳するが如き是れなり。淨土宗に於てもこの戒脈は宗祖法然上人が報空より相承あつてより歴代の祖師相承して今日に至り、現在にては宗規により戒脈は宗脈と共に淨土宗僧侶の必ず允可を受くべきものとして重要視せり。イシニユーカイリヨミミヤク(宗戒兩脈)

カイミョー 戒名 本来は戒をうけたるものに授くる法號なるも、後世には亡者に附する法號をも戒名と稱するに至れり。もと印度に於ては佛門に入つて出家せしものは皆な釋氏又は沙門と稱して別に法號を用ひず、支那に於ては古くより戒名の制行はれ、我國に於ても亦た佛教傳來の當時より此の制を採用せしもの、如し。戒名には、信士・信女・居士・大徳・禪室門・禪室尼等の別あり高貴の場合には法號を附することあるも、本宗にては五重を受けたものには法號を附與するを例となし高貴又は寺門功勞者に對して法號を用ふること多し。近時に到つて戒名の附け方は頗る亂雑となりつゝあるは好ましからざる傾向といふべきなり。

カイメイ 改名 僧侶が得度する場合、俗名を改めて僧名を附するをいふ。淨土宗制規にては度牒授與、僧號登錄、改名の三は同時に付ふべきものと定められ、管長の添書を附して地方長官の許可を得るものとす。

カイリツ 戒律 (1)佛所制の禁戒にして佛徒の邪非を防止する律法を云ひ、五戒十戒乃至二百五十戒等あり。(2)戒と律との意。戒はミツ戸羅の意譯、律

は Vinaya 毘奈耶の譯。律は經藏に對する一部の總稱、戒はこの律中の一々の戒を云ふ。カイリユ 快龍 三三九 清淨華嚴院第四十六代。勝鬘社超譽照水と號す。泉州大鳥の人。俗姓沼氏。九歳にして同地波手寶圓寺に入つて出家、後ち水戸中納言に請せられて常陸に至る。元祿六年十月、奉命によつて清淨華嚴院に普賢、水戸中納言崇敬の餘り五十石を寄附す。同十一年九月十日寂。壽八十。

カイリン 快麟 二四八 京都一心院の學僧。毘羅社國譽と號す。俗姓不詳、初め清淨寺靈應の資たりしが後ち知恩院六十二世聖覺大僧正の弟子となる、天資穎悟にして衆人を抜く。一時増上寺の學席の主たりしが當時宗學者なきを憾き、入洛して智積院の海應深慧に性相學を學ぶ。唯識三家疏を上梓したる最初の人なり。文政七年正月三十日寂。(著書)法相伊呂波名目四卷等。

カイレイ 快嶺 一キンガミカイレイ (岸上快嶺) カイロー 戒臘 戒臘とも書し、又は法臘・夏臘・坐臘ともいふ。具足戒を受けたる以後の法歲(年數)を云ふ。釋氏要覽卷下に

「夏臘は即ち釋氏の法歲なり。凡そ長幼を序するに必ず夏臘を問ひ、多き者を長となす」とある如く僧臘に於ける席次は戒臘の多少によつて定むるを佛制となす。

カイワジヨ 戒和上(戒和尚) (1)戒を授くる和上の意。大乘戒・小乘戒を通じて授戒三師の一。大乘戒に於ては眞佛、若しくは像佛、眞聖(十地證の菩薩)若しくは像聖凡師を以て戒和尚となすべく、その凡師は必ず出家の菩薩にして、五徳即ち(一)持戒、(二)十願、(三)律藏を解す、(四)禪思に通ず、(五)慧眼を寫む、を具せざるべからずとなす。(2)圓頓戒にあつては釋尊を戒和尚となし戒師と區別す。即ち滿然の授菩薩戒儀に「次に衆聖を請して授戒の師となす。先づ和尚を請す。詞に云はく、弟子某甲等、奉請釋迦如來應正等覺爲戒和上、我依和上故得受菩薩戒慈愍故」と云へり。即ち圓戒に於ては普賢觀經に説く不現前の五師を請して授戒する故釋尊を戒和上とす可きなり。圓戒は菩薩戒に非ずして佛成なれば釋尊より直接に授戒するに擬へてかく戒和上を請するの文を稱ふるなり。

カクク 覺阿 宗祖の直弟にして、嘉祿の法經には信空と共に宗祖の遺骸を京都西郊に移し障難を避け、後ち關東鎌倉に移住してひのすら念佛宣揚し、榮西の我宗に對してなせし謬難を破責し、破邪顯正に盡精進せし功勳者。壽不詳。

カクエイ 廓榮 一ユープン(遊安) カクエ 覺榮 二四二 増上寺第四十四代。教蓮社門譽弘願普業と號す。江戸番町の人。俗姓不詳。初め小石川傳通院意哲に師事して寛哲と名づく。解行秀逸、論議衆僧に長ず。元祿十一年八月増上寺にうつり幾程もなく學頭に補せらる。享保年中、生實大藏寺に入り、後ち新田大光院、鎌倉光明寺等に歴任、寛延三年二月台命により増上寺に召み、大僧正に任官。在住四年、この間一山の教學振興、調和善正に努力して道俗に仰がる。寶曆三年、病のため職を辭し一本松の隱室に入り世俗を遊離して一行三昧を事とし、同四年十一月六日寂。壽不詳。

カクエン 廓圓 三三〇 小石川傳通院の住僧。直譽と號し一には急水ともいふ。相模の人。はじめ普光觀智國師に師事し後ち鹿

山に嗣法す。瓜通當禪寺に住し慶安三年幕府の命により傳通院に轉す。同四年四月徳川家光薨去し上野寛永寺に葬る。師は増上寺眞主位蓮と謀り増上寺に葬ることを請願せんとせしに位蓮諾せず、師痛憤の餘り同二十五日舌を咬んで寂す。有道の士これを憐愍せざるなしといふ。壽不詳。

カクク 覺空 鎌倉末期の人。天台の學僧にして京都萬壽寺に住す。天台を修學してより泉涌寺に於て南山律を學び、のち嵯峨二尊院正信房湛空より圓頓戒を受く。聖西樓了慧は師の口授により天台菩薩戒義疏見聞七卷を著す。師は圓戒研究の權威者にして著書多し。即ち顯揚大成論抄・大小律儀各別抄等もあるも現存せず。

カクゲイ 覺開 一ゲンコ(還故) カクゲのシューフー 格外宗風 淨土宗の宗風をいふ。佛教通途の常格を超ゆる處の宗風にして、淨土の教門は上智の極致と稱せられ、別途の教門として一般佛教學の範疇を以て論じ得べからざるをいふ。

カクケン 廓源 三三〇 知恩院第三十三代。本蓮社圓譽欣心と號す。武蔵川越の人。天正五年生、川越蓮華寺開山感譽存真に嗣法

し、三學習讀、關通を訪ひて省覺する所あり爾來宗意を傾け念佛を事とす。壽不詳。カオク 珂徳 二二五 超蓮社勝覺圓心と號す。俗姓・生國不詳。珂嶺に、師事して法を嗣ぎ、河内玉手山安禪寺の中興となる。壽不詳。

カガミノミエ 鏡の御影 宗祖影像の一。宗祖が弟子勝法房の畫ける眞影を二面の鏡と水鏡とを用ひて、自ら訂正されしものと傳ふ。

ガキエコーモン 餓鬼回向文 施餓鬼會の時唱ふる偈文。現行の偈文は願諸善者一切餓鬼 罪障消滅 離苦得樂 發心修行 臨終見佛 超生淨土 究竟成佛」といひ、從來の偈文は「願諸善者 一切諸鬼神 罪障皆消滅 離苦得樂 超生安樂界 速滿菩提行 悉入無上智 究竟成佛道」といふ。これ法寶の功德を以て、一切餓鬼に回向して淨土に住生し成佛を遂げしめんことを念ずる意なり。

ガキザラ 餓鬼皿 施餓鬼會の際、餓鬼壇の三聖萬靈牌の前に淨飯を盛つて供へる器をいふ。

ガキダン 餓鬼壇 施餓鬼會の時餓鬼を



け、四十餘歳にして出雲路、京都市上京風寺町今出川上ル毘沙門堂町の邊りに庵居し、諸行本願義を唱へず。九高寺の覺明房長西は師の門下なり。善導大師傳、十智識各一巻の著書ありしと。天福元年没。壽七十六。

カクユー 覺融 一八九〇 西山齋禪林寺第十九代。字は行觀、武藏の人。觀智の門に入り西山義を研ぎ、仁和寺西谷光明寺二代となる。中年東國に行き武藏鶴木郷の山中に庵を結び自行を事とす。後再び京都に來り東山禪林寺第十九代となり、宗圓の宣務に劣む正中二年九月五日没。壽八十五。著書 觀智私記三十卷・同且論私記十卷・選擇集私記五卷・觀經秘記十四卷・觀念法門秘要抄三卷・無量壽經鈔・般若論鈔・往生禮讚鈔・法華禮讚鈔等。

カクリヨ 學寮 徳川時代の浄土宗檀林に於ける宗侶の學問所。この學寮は學徒の學問所たると共にその宿泊所も兼ね、一宗々學の中樞をなし學に志すもの多く此の處に錫を留め、所定の檀林課目九部を學習し、宗乘餘業等を研讀せり。この學寮には學寮主(寮坊主・寮主ともいふ)學寮生(同寮ともいふ)とあり。學寮主は學寮生を統率且教育する役

にして高徳碩學の人にのみ限り(元和條目には碩學十人衆以上となす)この任に當ることを得、學寮生には種々の護衛すべき法風が作成されてあり、この法風は時代により或は各檀林によつても多少の出入あり。元來この學寮は何處の檀林に於ても開設されしもの隆盛一様ならず、中には廢滅せるものすらあり。この中、増上寺に於ける學寮は何の時代に於ても隆盛にして時には學寮の數百二十を算し又學徒三千を數へしことありといふ。

カクルハンザ 各留半座 極樂に往生したるものが後の往生人の來生を待つとて蓮華座を半ば殘すこと。この文、善導の般若舟讀に出でたり。

カゴ 果號 果位の稱號すなはち佛名のこと。因位の萬行所修の功徳に依りて得たる果位(成等正覺位)の名號との意なり。法藏比丘の果號を阿彌陀といふが如し。

カコチヨ 過去帳 過去帳は現在帳に對した語で、古く徳川時代には此の兩者が各家毎に備へ附けられ、その現在帳には生れし人の名を記し恰も現今の戸籍名簿の如きものの役を檀名家簿が兼ね、過去帳には、死亡者の戒名・俗名・死亡の年月日・世壽等を記するも

のとされ、亦往々生前申逆修の爲めに豫め之れを記すことあり。元來、過去帳とは俗語にして、本來は靈名簿・靈簿と稱すべきなり。

カザイ 迦才 淨土論(三卷)の著者。唐代の人。貞觀の頃、長安の弘法寺に住して淨土の業を修し、その著淨土論三卷現に行はる。その他の傳歴並に詳不詳。

カザイジョードロンヨキシヨ 迦才淨土論餘輝鈔(五卷) 知俊述。迦才の淨土論の末書、續淨第七卷所收。淨土論餘輝鈔ともいふ。本書は、愚谷金成光明寺第四世法譽知俊が迦才淨土論の奥旨を發揮せんと試みたるもの。内容は、一部五卷の中第一卷は玄義(大意)、第二卷以下は文句(隨文解釋)に當り、靈明に文々句々の詳解を施す。

カザン 珂山 深川靈巖寺第二代。和泉の人。俗姓駒井氏。幼にして塵俗を厭ひ、同國智惠寺に入つて出家し、後十五歳のとき雄嶽靈巖に歸法す。天性頓悟なるも學資乏しかりしかば靈巖その才幹を愛してこれを授け後深川靈巖寺に住せしむ。壽不詳。

カシマモンド 鹿島問答(二卷) 聖阿闍梨破邪顯正義の異名、ハジヤケンシヨ

イギ(破邪顯正義)

カジヨ 呵成 ヲシオカカジヨ

(吉岡呵成)

カジヨ 嘉祥 キチゾ(吉藏)

カジヨテンポ 簡條傳法 足利末期制定の浄土宗傳法形式。古來我宗の傳法は時代の推移に順應して凡そ三轉せり。第一期

往古の傳法は、加行の期間は前後合せて二百十四日間にして、晝夜六時に禮懺懺悔念佛誦經し、初の七日は前行、後の一百七日は正行なり。二百七日の中、初の七日が五重の傳法にして毎日晨朝・日中・初夜の時三卷七書を講讀し、その要所に方つて五十箇條の口傳を傳へ、この後一百日の間に三經・論註・安樂集・往生要集・選擇集・東西宗要等を講讀し、この間に列祖著作の秘書を參考して正流の正義を傳へ本口傳の外の末傳をも傳へ、最後の夜半に本口傳の中の知り残し、言ひ残し等の五箇の口傳を傳へ、即ち五十五箇條の口傳を悉く相傳せり。第二期中古の傳法は、増上寺の第三世普賢のとき、時勢に鑑み(文明元年頃)傳法の方法を改革す。即ち一百十四日の中、一百日の正行を轉じて前行とし、三經・論註等は平日に讀つて省略し、残りの十四日を正行と

し、其間に三卷七書を講讀し、五十箇條の本傳、二十八箇條の末傳を口授し、第二七日の夜半に知り残し等の五箇の口傳を相傳するものにして、この傳法は増上寺の第十世感譽・永祿六年の頃まで約九十年間繼續せり。然るに感譽の頃に至り足利時代の末期に屬し、國內平穩ならざりし爲久しく關東に留まつて學業を修する暇なく、淺學未熟のままに歸國せんとする者少からざりしため、感譽・道譽等が相謀りてこゝに略式の傳法を案出せり。即ち中古以來一度に修めし二七日の加行を七日間つゝ、二回に勤め、前年後年の兩期に分ち、前期を五重(自證門の傳)とし、その後、年限を経て學業の大に進みし時宗脈(化他門の傳)戒脈を相傳することとなし、その傳法は八十三箇條の中より最も必要なものを選んで、感譽は五重を九箇條、宗脈を五箇條、附屬三箇條とし、道譽は五重を八箇條、宗脈を十一箇條と定む。これ即ち簡條傳法にしてこの後永く行はる。かの潮音の切紙傳法も此れと大差なし。感譽流五重九箇條とは、(一)觸香傳(檀香・燒香)、(二)座具傳、(三)五重自證門傳、(四)授手印傳、(五)五通五箇條傳、(六)面上傳、(七)三種病人傳、(八)未回心聲聞傳、(九)氣息傳。又宗脈五箇條とは、(一)宗脈以上化他門

傳、(二)都部傳、(三)授手印傳、(四)口傳、(五)凡入報土傳、(六)附屬三箇條傳、(一)引經傳、(二)酒水傳、(三)三眼發覺傳これなり。以上の外圓顯戒三箇條即ち(一)名字傳、(二)明文傳、(三)傍正傳の傳法あり。次に道譽流五重八箇條とは、(一)鈴香觸香傳、(二)燒香傳、(三)座具傳、(四)五通五箇條傳、(五)三國傳來口授心傳、(六)三國三代三國二代傳、(半金色傳)、(七)助證傳、(八)授手印傳。又宗脈十一箇條とは、(一)都部傳、(二)宗脈化他門傳、(三)形狀形名傳、(四)凡入報土傳、(五)傍人傳、(六)氣息傳、(七)三種病人傳、(八)引導傳、(九)助證傳(附山王七社口傳)、(十)後夜念佛傳、(十一)授手印傳これなり。尙この外隱隨意は五重十三箇條・宗脈十箇條、雄嶽靈巖は五重八箇條宗脈十一箇條、大巖寺は五重五箇條、或七箇條、或八箇條、宗脈八箇條、或十一箇條、或十三箇條、傳會光明寺は五重九箇條、宗脈七箇條等の箇條傳法あり。此等は何れも師家の意業に従つて箇條に差違あるも就中感譽流最も盛行す。

カズキケイフ 香月系譜 チンゼイ

カズキノシヨ 香月庄 イクスハシム

ラ(稱橋邑)

カセイジヨガツコー 家政女學校

家政高等女學校の略稱。京都市東山区仁王門東大路東入ル南。その沿革を尋ねるに、明治三十七年四月彌々谷佛定が九州布教の途次、青年女子の歐化に公憤を覺え、坂根彌兵衛、井上治兵衛に謀りて家庭婦人の養成を志し、鳥丸通、いなば藥師内に、家政裁縫女學校を開設し、勝義賢學監たりしが、後現校長大島徹水請はれて學監を交代し、僅か四五十年より漸く生徒の増加を見、校舎を寺町四條大雲院境内に新築移轉し、長くも久瀨宮故多嘉王妃静子殿下が教鞭を執らるゝ等、京洛に於ける女子教育機關として盛名を博し、土川善藏校長となる。時に明治四十年なり。苦心經營は後援者を奮起せしめ、大正十三年四月高等女學校令により家政高等女學校と稱し、家政裁縫女學校と併置することとなり、全盛期を迎ふると共に、現在の地に三十萬圓を投じ、鐵筋建校舎を新築し移轉せしは實に昭和九年の事なり。毎年卒業期の學級は講堂に於て授戒會を行ひ、質素堅實なる信念を校風とし、京都女子教育界に特色を發揮しつゝあり。

カセキ 珂碩 武藏淨眞寺の開山

俗姓野村氏、元和四年正月一日生る。十八歳にして大巖寺瑠山について出家す。寛永十三年珂山靈巖寺の二代となる。師之れに隨從す。嘗て一日鏡三文づゝを積んで造佛の資とし、寛文四年丈六の佛像一軀、同七年九品の佛像九軀、丈六の釋迦像を成就す。延寶六年師六十一歳の時武藏世田谷奥澤村の村民の招請に應じて此地に移り、堂を造つて九品佛を移置して、九品山唯在念佛院淨眞寺の基を開く。元禄八年寂。壽八十歳。

カセキシヨールニキヨールキ 珂碩 上人行業記(一卷) 珂然撰。淨全第一七卷所收。元禄十一年編。その内容は、法孫珂然が師の出生、出家の動機、及び師の靈巖寺殿堂建設の功績、九品佛造立の發願精進、釋尊像の造立安置、佛寺創建、念佛利生、入滅等の詳傳を漢文を以て綴れるもの。

カセリンダ 迦旃闍陀 Kāśhinidā

迦旃闍陀、迦止栗那、迦旃闍提に作り、實可愛鳥と譯す。水鳥の一種にして羽毛の柔軟微細を以て聞ゆ。この鳥の羽毛は事物の柔軟なるを喻ふるに引用さる。往生論に出づ。

カソール 火葬 四葬の一。亡者の屍體を焼却する葬法にして、土葬と共に現今一般に行はるゝものなり。

行はるゝものなり。

カチオデラ 勝尾寺 法然上人二十五

靈場の一。大阪府三島郡豊川村大字聚生。應頂山善提院と號し古義眞言宗に屬し西園三十三所第二十三番の靈場なり。神龜四年攝津守藤原致房の男壽仲・善算が當山に入り清修せしに創り、光仁天皇の皇子入山して二師に就き受戒し給ひ開成と稱せらる。寶龜六年開成道場を建立し彌勒寺と號。時に 光仁天皇攝津國豐島郡稻一千東の官租を施入し、更に島下郡水田六十町を寄進し給ふ。爾來歷代皇室の御歸仰厚く、源平亂の時堂宇燒失せしも源頼朝その再興を授く。寺域内に本堂(講堂)・開山堂・藥師堂(如意堂)・二階堂・輪藏・六角堂(奥ノ院般若堂)・仁王門・庫裡・荒神堂等完備す。この中、二階堂は證如の創庵にして、宗祖配流を免せられて境内に入るを許されしも尚洛中に入るを得ざりし爲め當寺に來住せられし遺跡にして、宗祖二十五靈場の第五番に數へらる。

カチヨールカイカン 華頂會館 京都市

東山区林下町。大正末年、會館流行の波に乗る、開宗七百五十年を記念として華頂婦人會が發起し、十數萬の巨費を投じて設立せしも

の。昭和三年落成。位置は知恩院山内にして景勝且至便現に一般の使用に提供され、利用するもの尤だ多し。

カチヨールザン 華頂山 淨土宗總本山

知恩院の山號。知恩院の寺號は大谷寺なれば具名を華頂山知恩院大谷寺と呼ぶ。チオンイン(知恩院)

カチヨールサンチヨクガク 華頂山勸額

知恩院三門樓上に掲ぐる「華頂山」と記せる額。元和五年、徳川秀忠が知恩院三門を建立するや、靈元上皇は寛永七年十一月二十三日宸翰「華頂山」の勅額を賜ひ、同八年正月十三日之れを山門に掲げしもの。

カチヨールジ 華頂寺 朝鮮平壤府南門

通三丁目。明治三十五年三月佐和岡眞富地に來つて開教に従事す。同三十九年十月雄谷俊良會堂を建設、同年飯尾辨重後任となり、同四十一年九月上島義爾就任するや大和町に現堂宇を再建せんことを訓し、同四十四年神林周道・大谷清教社任するや寺門の面目を一新現建物を竣工し鮮人布教の道場となる。附屬として平壤語學校・華頂幼稚園・華頂女學院等あり。

カチヨールシヨール 華頂誌要(一卷)

カチヨールザン——ガツカイ

護井法順編。淨全第一九卷所收。明治四十四年、宗祖法然上人七百年遠忌法要記念に出版せる知恩院誌なり。華頂とに知恩院の山號。單行本は四六倍版口繪に所載の國寶、什寶物並びに境内の寫眞を掲ぐ。本書の内容は、(一)開創緣由、(二)開創略傳、(三)祖德顯彰、(四)祖忌報恩、(五)歴代略譜、(六)寺門沿革、(七)知恩院宮、(八)門葉廣繁、(九)古文書類、(十)伽藍興隆、(十一)靈寶什器に分つ。本書の作成は、知恩院書庫に明治初年に調査編纂せる華頂山古記録抜萃、知恩院由緒記等の寫本あり、是等を参照して補訂せるもの。

カチヨールジヨガツコー 華頂女學校

華頂高等女學校の略稱。所在地京都市東山区林下町四五六。その沿革は明治四十四年九月宗祖七百年遠忌記念事業として、總本山知恩院の創立する所にして、大正八年四月より華頂裁縫女學校を併置す。初代校長福原隆成が創立に努力し、久松留瑞・前田聰瑞校長たり。元第五教授なる華頂宮御殿の建物なりしが昭和十一年現校長水野隆樹門末會に建議二十萬圓を投じて、三上人遠忌記念として、風致建築物として雅致に富む校舎成り、京都女子教育界に漸く頭角を表はし、入學志望者多く満員の狀を呈す。殊にその特色とする所は、

宗教精神豊かなる教育を施し、毎月二十五日宗祖聖日に本山に參拜し、一同合掌稱名讀經し、又卒業期には最終行事として、知恩院勢至堂に於て授戒會を執行するなど、社會・家庭に喜ばるゝのみならず、子女に卒業魂を授くるに等しく、總本山知恩院立たるに背かず、名實兼備はるものといふべし。

カチヨールソンジヤ 華頂尊者 法然上人

の諡號。上人滅後二十三年、勢觀房源智上人が東山大谷の舊蹟を再興するや、人皇八十七代四條天皇より下賜せられたるもの。

カチヨールノミヤ 華頂宮 チオンイン

カチヨールチエン 華頂幼稚園 總本山立。知恩院山内に在り。昭和十一年三月開設。現在二百名の園児ありて、京福幼稚園界の最も完備せる隨一なり。その設立は宗祖降誕八百年記念事業として、華頂婦人會の出資により、總本山の經營する所なり。

ガツカイ 學階 本宗教師の學位。その

學位に下より得業・擬講・編講・請師・已講・勸學に至る六階級あるをいふ。得業は佛敎專門學校本科卒業者、大正大學專門部佛敎科の淨土宗學卒業者に授け、擬講は大正大學本部卒



柔生にして所定の佛教學過程を終了せる者に授け、副講は履講所有者が宗令により研究を修了する時授けらる。この外宗學校に於ける宗學佛教學を多年講授するもの、一定指導者につき研究の結果、論文を提出するものが、審査を通過し、審議院の議考に入るものは、相當學階を授けらるるものとす。但し講師以上、論文に依らず、全く宗學佛教學の教授として、多年研鑽成績成果の見るべきものありて一宗の師表的地位あるものに限り授けらるゝを常とす。

ガツキ 月忌 月々の死者の忌日をいひ現今ではその忌日に追善供養する法をも月忌といふ。この月忌は既に藤原時代より修せられしことを當時の記録に見ることを得。月忌を修するためには施主家に参詣するを一月忌参り又は「建夜参り」といふ。尚ほ新亡者の初めての月忌を初月忌と稱し、中陰中可なり無量に供養を修するを例となす。

ガツコイダイジン 月光大臣 印傳摩訶陀國王親遠遷葬の時の大臣。かの太子阿闍世が王位を宣し父王に對して暴逆をなし、更に母を弑せんとせしとき、善婆と共にこの逆惡を諫止せること觀經に見ゆ。

ガツシヨ

合掌 *anjali* 合掌又手とも云ふ。兩手の掌を合することを云ふ。印度に於ける敬禮法の一様なり。法華經第一方便品に「恭敬合掌して禮す」と云ひ、觀無量壽經には「合掌文手して諸佛を讚歎す」と云へるはその例なり。觀音菩薩卷上に依れば「合掌とは、此の方に拱手を以て恭となし、外國には合掌を以て敬となす。手はもと二邊なり、今、合して一となすは、敬て敬遜せず專至一心なるを表す。一心相當るが故に此を以て敬を表す」と云ひ、西域記第二には、印度の禮法に九種ある中、合掌拱手を以て、第四位に置けり。密教にては十二種の合掌法を説き、この中第七に最も普通行はるゝ金剛合掌あり。淨土宗にてはこの金剛合掌を正となし正しく兩手の掌を合せしめ、指のみ合して掌の離れたるは、心慢にして情散するに由るとして之を非とせり。

ガツハイ 月牌 詳しくは月牌供養といふ。毎月死者の忌日にその位牌を祀り、讀經供養して廻向するをいふ。昔は可なり重要視せられ、月牌の料金を納め、その月牌の供養を懇ろに營めり。

カツマアジャリ 鷄磨阿闍梨 *Arhat* *Arhat* と云ひ、禪師とも云ふ。授戒の時の作法をする師匠のこと。圓頓戒にては文殊菩薩を禪師阿闍梨となす。

カツマシ

鷄磨師 前項に同じ。

カツリンジ

月輪寺 京都市右京區嵯峨町。人皇四十九代光仁天皇の御宇、慶俊僧都開創。後空也之を中興し、更に建仁二年九條實公この地に遷徙せりといふ。現在は眞宗に屬し、本堂に圓光大師・空也上人・見眞大師並に實公の像を合祀せり。

カテイ

花亭 花御堂とも云ふ。四月八日の灌佛會の時誕生佛を祭る爲めに種々の花を以て莊飾せる御堂を云ふ。これ釋迦のルンビニ國誕生に擬して特に花を以て堂を飾れるものなり。

カテン

珂天 *三三三* 増上寺第二十七代靈源社禪院草風と號す。相模國筑井郡の人。俗姓淺野氏。幼にして厭離の心厚く、十三歳のとき龍山大善寺に入つて修學し、後芝増上寺に掛錫し研鑽をこころを盡さず、學行すすみ精誠弘經寺に住す。幾時もなく飯沼弘經寺に轉じ、後更に鎌倉光明寺に著む。延寶元年十二月壽命により増上寺に轉身。同三年四月辭山して麻布一本松に隱棲、同四年六月十三日寂。壽七十。

カドキヨ

門經 葬送の際、棺を戶外に出さんとする時屋前にて經を讀むこと。門出講經の意之れ生死の家を出て淨土の門に入り佛の來迎引導を得んとの意なり。その作法は通常講經の時に做らふ。

カトシユキヨク

加藤秀旭 *二五八七* 北海道訓路郡米町大成寺住僧。昇譽と號す。資性俊敏、學徳並に高く近世の宗學の權威者として知らる。安政四年六月生る。愛知縣海西部東市江村加藤小七の二男。大阪市下寺町光明寺龍川秀學に就て出家し、明治十五年知恩院にて宗戒を受く。後浄土宗高等學院に學ぶ傍ら大和明教寺鈴木亮慧に俱舍唯識を受く。明治三十二年專門學院教授より轉じて高等學院教授となり性相學を以て人に知らる。後病を得て一時北海道に退きしが大正四年再び宗教大學教頭となり幾多の英才の養成に力を盡せり。大正十四年六月十六日寂。壽六十七。(著書)浄土宗綱要一巻。

カドヒ

門火 浴華又は盂蘭盆に門前に火を焚くを云ふ。支那・日本に於ける古俗にして穢を拂ひ除く意なり。

カナダカイジヨ

金田戒定 *二五九* 近世の布道家。京都府觀喜郡八幡町青林庵住

カネクヨ

鐘供養 又は鐘樓落成式、鐘初式とも云ふ。鐘樓の新築成り初めて鐘を撞く儀式にして古來各宗を通じて旺んに行はれたる行事の一なり。

カネザネ

鐘實 *トナヅラ* カネザネ (藤原實實)

カネモトボ

鐘本房(鐘下房) 一念義創唱者成覺房幸西の別名。トヨサイ(幸西)僧。字は直阿、寒更。號す。俗姓松井氏、大阪の人。大阪玉手山阿彌に就て得度し、後東國に遊び増上寺に寓す。鹿野に謁して一宗の奥義に徹し、解行秀逸、後大阪生玉法泉寺に住し、日々講書に勤む。院を大藏轉經院と號し、室を偕史室と云ひ、佛敎の史傳編輯に

カネンオシヨ

カネンオシヨ *ゴリヤク* *カテン* 阿然和尚行業略傳(一巻)。隆圓記。近世住生傳所收。本書は、近世住生傳第三編より採られたるものを、天保十二年に阿然和尚の住寺大阪生玉法泉寺の第十四代攝譽が報恩のため和文體を以て印行せしもの。その内容は、阿然の生ひ立ち、修學・化他・著書等に關してかなり詳述をなし、終りに報恩の策により阿然の遺業に就いて見聞を附し記念報恩の爲に出版せし所以を附録に記す。カネン(阿然)

カブラキ

鐘木 下總國匝振郡鐘木(千葉県香取郡古城村鐘木)三祖良忠の檀越鐘木九郎の住地にして記主の教學傳通講布の講蹟なり。次項參照。

カブラキクロ

鐘木九郎 三祖記主阿良忠の大檀越。千葉の豪族にして其には鐘木九郎胤定といひ出家入道して三祖に

備伏す。記主師が彼の請に應じて撰撰傳弘  
決疑鈔五卷を著はされしこと決疑鈔直譯卷一  
に見ゆ。現在、千葉香取郡古城村鑿木にあ  
る鑿木山風定院光明寺は鑿木九郎の開創せし  
ところなりといふ。

カブンコーモンシユースエガキリガ

ミ 果分考文集末書切紙(一卷) 良天聖  
觀述。續淨第一四卷所收。本書は、名越派傳  
書の一たる良勝明心の果分不可説について良  
天が六段に分けて註釋せしもの。

カブンコーモンシヨウケンモン

果分  
考文抄見聞(一卷) 良天聖觀述。續淨第一  
四卷所收。本書は、名越派傳書の一たる果分  
不可説について良山妙觀が談義せしものをそ  
の資たる良天が筆記せしもの。その内容は果  
分不可説に關する重要事項を抽出して以て註  
釋を施す。

カブンコーモンシヨウシヨウ

果分考文  
助證(一卷) 良山妙觀述。續淨第一四卷所  
收。本書は、名越派良山が同派の傳書の一た  
る果分不可説を論證するためにその助證とし  
て華嚴・三論・法相・密教・天台の五個大乗の因  
分果分の説明を擧示せしものにして、終りに  
門下の疑問に備へて良山が壯年時代に懸念せ

る果分不可説に關する會通を説示せり。

カブンジユツデンシユウナラヒニウラ

ガキ 果分述集兼裏書(一卷) 良山妙  
觀述。續淨第一四卷所收。本書は、文和二  
年、名越派僧良山妙觀が淨土の法門に果分  
不可説の意義を相傳せる旨を記述せしものに  
して名越派付法傳持の書なり。その内容は六  
項より成る。裏書は、本書を果分述傳と題す  
る意義と此書の密號を留論といふ理由等を擧  
ぐ。

カブンフカセツ

果分不可説(一卷)  
良勝明心述。續淨第一四卷所收。名越派傳書  
の一。果分考文抄ともいふ。本書は、正中二  
年名越派祖良勝明心の意により地論の果分可  
説・果分不可説の文を取り淨土の經論釋に果  
分不可説の深意あることを主張せしもの。

カマクラコーミヨージシ

鎌倉光明寺  
志(一卷) 橋門撰。淨全第一九卷所收。續林  
鎌倉光明寺志とも云ふ。續林志の一、本書は  
淨土宗大檀林光明寺(神奈川県鎌倉市町木  
座)の寺志なり。内容は、山門來歴・伽藍敷所・  
寶器什具・開祖行實・同師創寺・二世傳略・同  
師系統・開師資名・累世實主・境内所在・詠唱八  
景・北條系譜・内藤氏統・會下清徳の十四項目

に亘りて叙述せり。

カマクラシユウヨ

鎌倉宗要 三祖  
良忠の撰述になる淨土宗要集五卷の異名。二  
祖辨長の淨土宗要集を逸作地名に因んで鎌西  
宗要といひ又鎌西に於ける作なる故に西宗要  
といへるに區別して、良忠撰述の淨土宗要集  
を逸作地名に因んで鎌倉宗要といひ、又關東  
に於ける作なるが故に東宗要といふ。イジョ  
ードシユウヨシユウ(淨土宗要集) ②

カマクラダイブツ

鎌倉大佛 神奈川  
縣鎌倉市長谷高徳院にあり。阿彌陀佛像とし  
ては日本最古の銅像なり。坐像、總高五丈・  
周圍九丈八尺・面長八尺五寸・白毫周圍一尺三  
寸・眼巾四尺・身長六尺六寸・肉髻は銀製高さ  
八寸・三翼六百匁・口中三尺二寸五分・大指周  
圍三尺餘。建久年間源朝造立志願し、其の  
後后夫人政子、侍女稻田局は僧淨光を勸進に  
藤原經頼同頼剛を外援として、暦仁元年初め  
鎌倉郡深澤村に八丈の木像を作り、ついで建  
長四年八月現在の地に金銅を以て鑄造。鑄工  
は上總國聖徳郡穴名村大野五郎右衛門。初め  
禮堂ありたるも建武二年、應安二年の兩度の  
火災に遭ひ明應四年地震海嘯の難に依りて流  
失す。再東露佛となり、呼んで彌佛となす。

カミヤダイシユウ

通谷大開 二五〇〇  
清淨華院第六十五代。明治より大正初年に涉  
つて活躍せし人。圓通社齋譽聖阿善談と號す。  
天保十二年正月生る。名古屋市永安寺町神谷  
專一の子。嘉永二年六月、同地建中寺大基につ  
いて出家修學す。安政元年東遊して三條山増  
上寺並に小石川傳通院に留錫、特に福田行誠  
の灌漑を受けて宗除業を研精す。明治十二年  
深川靈巖寺に住職となり、同二十年五月京都  
清淨華院に重職せらる。同二十五年壽山・靈巖  
寺に歸る。明治二十六年宗學本校に教鞭を執  
り同三十一年専門學院教授となり、更に推さ  
れて傳道講習院長となる。同四十五年宗教大  
學講授となり、爾來二十四年間一日の如く育  
英の業に盡瘁し、傍ら布道家として東奔西走  
眞に席温まる暇なし。明治初年傳法問題發り  
し時、福田行誠を援けて大いに自説を固執す。  
師は常に愛宗護法の熱意を以て教界に飛躍し  
宗門に盡すところ勝からず。依て大正二年大  
僧正に叙任さる。學者布道家として令名を顯  
し、大正九年二月寂。壽八十。(著書) 結縁  
五重茶歸・傳法沿革依西茶考各一卷等。

ガヨ

賀譽 三三〇 百萬遍知恩寺第二  
十六代。明蓮社と號す。傳記不詳。天文二十

三年正月二十五日寂。壽七。

カラフトカイキヨウク

樺太開教區  
本宗の樺太開教は、明治三十八年日露戰役の  
際、軍隊附隨使花軍團瑞が樺原の官宅に留錫  
して、開教に着手したるを以て嚆矢となす。  
次で深谷哲玄がこの地に着任し、監督として  
現在の開教院の堂宇を新築せり。明治四十二  
年樺太大泊に、翌年増川龍音眞圓に開教す  
る等、開教使陸續派遣せられ、現に樺太開教  
院・知取知恩寺・元泊基町寺・落合東迎寺・本斗  
教會所・惠須取教會所・長濱教會所・野田教會  
所・留多加大光院・大泊明照寺・泥川教會所・眞  
圓教會所・廣地教會所・小田洲教會所・茶々教  
會所・保惠教會所・新聞教會所・唐松教會所・千  
歲教會所・帆寄東光院・落合大廣院・泊岸教會  
所・内堀教會所・近嶋教會所・敷香源空寺・眞圓  
大音寺・湖泊光明寺・珍内教會所・泊居三條寺  
の二十九箇の寺院教會所ありて、北端開教の  
氣焔を擧げ、百名に近き關係者枚々として盡  
瘁しつゝあり。

カリヨウビンガ

迦陵頻伽 Kalavinka  
極樂の鳥の名。迦陵頻・迦樓頻・迦蘭加に作  
り、好摩・妙摩・美音等と譯す。聲中に在つて  
既に能く聲を出し、其の聲微妙莫難にして聞

くものをして厭ふことなからしめ、如來の音  
聲を除きて以外は天人等も能く及ぶものなし  
といふ。淨土學茶羅等には人頭鳥身の形にて  
寫され、阿彌陀經に其の名見ゆ。

カルクノホーナン

嘉祿法難 嘉祿三  
年(一八八七)、念佛教團の擧りし法難。宗祖  
法然上人が専修念佛を唱導し、その教は都  
鄙に遍ねく、貴賤男女その化を蒙らざる者無  
かりし爲め、念佛弘通を嫉視せし南都北嶺の  
舊佛教徒が論難迫害を加へしこと屢々なり。  
念佛停止運動は宗祖の生前にも行はれたるも  
嘉祿の法難は滅後に於ける法難中最も大なる  
ものなり。直接原因は隆寛が顯撰撰を著して  
非難の空想の彈彈論を論破し、彼の彈劾の當  
らざることは晴天の飛鶴の如しと嘲笑せし爲  
め、山門の衆徒一時に蜂起し、貫首淨土寺僧正  
圓基に訴へ奏聞を経て隆寛幸西を流し、宗祖  
の靈廟を破却し遺骸を鴨川に流さんと企て、  
嘉祿三年六月二十二日襲撃し來れり。依て門  
弟等は妙香院良快僧正の許可を得て墳墓を發  
掘し、改葬を謀り、石棺を奉じて嵯峨に移る。  
山徒未だ本意を遂げざるを以て尙遺骸を索め  
しかば、二十八日これを太秦の來迎房圓空の  
許に移置し、翌年正月二十五日粟生野に於て  
茶毘に附せり。

カワイリョージョー 川合榮定 二三四五
近世の布教家。迅阿所翁と號し、又本葉散人といふ。安政六年七月生る。大阪市心齋橋通安堂寺町川合市郎兵衛の四男。明治二年京都北野西正寺普賢講堂に就て出家し、後ち東京深川靈巖寺普賢講堂に就て修學す。同九年西正寺に董し、後ち轉じて敦賀西福寺に普山す。其の間、關宗公會議員、本部總務長、軍除布教使等に歴任し、布教傳道に盡す所少なからず。晩年は師範西正寺に隱栖し、一切の公職を斷ず布教に専念し、幾度か本山法主候補に擬せられたるも固辭して受げず、布教界の元勳として教界に主きをなす。昭和七年四月一日寂。壽七十四。〔著書〕淨土三部經講義一卷。

カワゴエレンケイジシ 川越運馨寺志
(一卷) 撰門撰。淨土第二卷所收。檀林川越運馨寺志ともいふ。文政天保年中。本書は關東十八檀林の隨一たる川越運馨寺(埼玉縣川越市)の寺誌にして檀林志の一なり。その内容は、寺縁運、堂宇數柱、彫像畫像、新古什具、歷祖法位、門下傳名、大家起寺、所賜朱堂、拾八末寺等の九項を分つて詳述せり。

カワセガキ 河施餓鬼 水死せるもの、

或は毒死せるもの、ために、川中に舟を浮べ時には川岸に堰を設けて、施餓鬼を修し、塔婆を水中に建て、或は河流に投じて、亡者の遺骸をなすをいふ。その由来は、淡路島と施餓鬼とを合せたるもの、如し。又漁師が魚類廻向のために海上に船を浮べて行ふことあり。イナガレカンジョー(淡路頂)

カン 龍 龍とは、本来岩窟を窟窟して室となし佛像等を安置する場所を云ふ。後ち佛像のみならず開山・祖師等の像を安置するに到り、更に轉じて死屍を納る柩をも稱するに至れり。龍棺・龍子・龍柩・龍船等といふが如し。龍の前に假屋を設くるを龍廳堂・龍堂と云ひ、後世これに四門を設くること行はる。その形式は各宗に依り又地方に依り多少の相違あり。

カンエイ 感榮 三三七七 知恩院第三十九代。正運社信阿直譽と號す。慶長十六年生る。嗣法不詳。飯沼弘經寺、新田大光院等に歴住し、延寶九年八月知恩院住職に任命さる在任六年餘、貞享四年十二月一日寂。壽七十七。

ガンオージョー 願往生 願生ともいふ。淨土に往生せんと願するの意。

ガンオージョーゲ 願往生偈 淨土への願生心を告白せる偈頌。由來淨土一門に於て淨土に往生せんと願するの心、重んぜらる。即ち世親が無量壽經優婆塞供養願生偈を作り、又龍樹・彦殊及ひ善導等の諸師が各の願生禮讚偈を作り、善導が淨土法事讚・般舟讚を法照が五會法事讚等を作つて各の淨土往生を欣慕希念せる如きこれなり。

ガンオージョーシン 願往生心 願業淨土往生を願ふ心。

カンカイシ 勸誡師 五重相傳會又は授戒會等の法會の際勸誡をなす人。乃ち受者をして佛法又は正授戒を受くるに足る心的準備を會得せしめるため、或はその行儀作法を説明し、或は法語をなして受者を指導する人をいふ。元來は佛燈師自身がこれに當るべきも、近來種々の理由により佛燈師の外にかゝることに堪能なる人を勸誡師として依頼すること多く行はる。

カンカイニモン 勸誡二門 勸門と誡門。勸門とは善行を勸むる教、誡門とは諸惡は作すこと勿れと誡しむる教を云ふ。

カンガク 勸學 學府第一級の名稱。イガツカイ(學階)

カンガク 觀覺(寬覺) 一八〇 宗祖

法然上人入門の師。字は智鏡。又觀學得業とも云ふ、美作の人。宗祖の母なる泰氏の弟なり。出家して叡山に登り天台を學び、又南都に遊び法相を學し得業の位を得。後ち美作菩提寺に住し俗男勢至丸(源空)の非凡なる才を認め叡山遊學をすゝめし人。晩年源空の高風を慕ひ却つて弟子の禮をとれりといふ。寂年不詳。

カンガクコイーン 勸學講院 淨土宗學校の濫竽にして、略して通稱勸學院。その創立は慶應四年七月の事に屬し、當事僧侶は一般に維新の波瀾にその進退さへ決し得ず、子弟教育の如き思もよらぬ時、増上寺六十八世明賢は淨國寺撤定、無量覺院大雲に命じて、増上寺山内源興院に「興學所」を設けせしめ、決然宗門青年子弟の教育を始め、義題、觀成その講師となる。後ち勸學講院と公稱し、次で明治三年二月知恩院にも設置せられ、東西兩勸學院の對峙を見るに至りたるのみならず、同年五月山口にも講學道場設けられ、餘所よりは撤定・現有・快嶺等を派遣し獎勵これつとむ。前二者は後に東部西部大學林と改稱せられ、明治十二年には東西管長の分離に伴ひ東部西部教授を始め、これを大

教授と呼びしことあるも、明治二十年七月の宗制更生により本校・支校の制度となるまでの宗學唯一の學園にして、實に明治宗學指導者の輩出淵藪たり。勸學院創立當時の學則は不明なるも、明治九年淨土宗規則に掲ぐる所を擧ぐれば次の如し。

- 學科正則 (講義) (論題)
- (初課) 選擇集 宗義開出 聖淨二門
- (二課) 往生禮讚 法 正勝二行 總別安心
- (三課) 事讚 般舟讚 治國利民
- (四課) 觀念法門 決 四修大綱 一行三昧
- (五課) 三經合讚 機法二信
- (六課) 四帖疏 十念集解 來迎引接
- (七課) 傳通記 超世發願 萬德所歸
- (七課) 論 註 念聲是一 出世本懷
- (七課) 論 註 付屬佛名 凡入報土
- (七課) 論 註 三聖淨戒 凡入報土
- (七課) 論 註 入一法句

○學科雜則  
古事記・日本書紀・日本政記・日本外史・原人論・善隆戒疏・起信論・成唯識論・萬國新史・國法汎論・佛國民法・海國圖志・論語・文章軌範・綱鑑易知錄・左傳。

寺村。久保山と號す。開山鎮西國師。建久二年草創。明治初年大破して殆んど廢寺に等しかりしが松本益田、櫻頭久保山虎吉の喜捨により堂宇を改築して舊觀に復す。

カンギョー 歡喜光佛 十二光佛の一。阿彌陀佛の慈悲の光明は、到る所に法喜を得せしめ、この光を以て念佛の衆生を照すとき、行者の曠志興盛の心を除いて彼の極樂國土に生ずることを得しめ歡喜の心を起さしむるが故に、阿彌陀佛を歡喜光佛と尊稱す。

カンギョー 寒行 寒修行ともいふ。嚴寒三十日の間、毎夜寒氣を忍び、困苦に堪へて誦經分衛を行ふことを云ふ。これ寒中に苦行を修するの意にして、其の功徳は他の季節の平易なるに勝るとの信より起るものなり

就中、証を扣き、佛名又は和讃を唱ふるを奉念佛と云ひ、多く僧侶の間に行はる。禪行跣足にて鉢をならし、神社佛閣に参詣するを参り、寒詣でと云ひ、これ多く在家の者がその技能を進歩せしめんと祈念するにあり。

**カンキョー** 觀經 淨土三部經の一たる觀無量壽經の略名。→カンムリヨージュキョー(觀無量壽經)

**カンキョー** 願行 (1) 一カキ 隆寛 門下の俊才。諱は憲靜、圓通ともいふ。鎌倉に遊化し理智光寺、並に安養院を創建し、更に常陸國阿彌陀山に住して念佛を弘通し、後ち上洛して東寺並に高野山の復興事業にも從事して偉功あり。永仁三年四月七日寂。壽不詳。

(2) 淨土往生のための願と行。即ち淨土往生を願求する心とそこに到達するための行たる稱名念佛とをいふ。正流にては稱名念佛の一行に淨土往生の願と行が具備せりと解す。即ち善導の觀經疏第一に「今此の觀經の中の十願稱佛は、即ち十願一行ありて具足す」と云ひ、淨土に往生するには、必ず願と行を足すべく、唯願、若しくは唯行にては往生を得ずと云ふ。→カンキョーグツク(願行具足)

**カンキョーオージヨ** 願行往生

願と行とが具はつて往生するといふ意。淨土念佛の教意は、願と行とが具はつて、而して後に淨土往生が可能であり、唯だ願のみでは往生は出来ず。又それと同じく行のみにては往生は不可なり。恰も鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如く願と行とが具足して以て往生を得るとなり。即ち吾人が淨土の教法を信じ、極樂に往生せんと願ひ、其の願望の發露として念佛の實行を必要とする。その願望と實行とが缺くることなく具はれば、願行共に具足して必ず往生が出来るを願行往生といふ。→カンキョーグツク(願行具足)

**カンキョーキタイジタイニ** 觀經義大

事第二(一卷) 著者不詳。續淨第一四卷所收。名觀經傳書の一。本書は作者未詳の殘缺本にして第二卷のみを存す。その内容は觀經序分の禁父縁の「國大夫人名草提希より「自經要路に至るまでの文義に、獨特の説明を施し口傳となせるもの。

**カンキョーグツク** 願行具足

願と行とが具足するの意。行願具足とも云ふ。正流は稱名念佛に願と行と具足すと説く。即ち善導の觀經疏玄義分に「十願稱佛は即ち十願」と云へるもの是なり。

**カンキョーサンジヨ** 觀經三序

善導は序分表の始に於て、「前の序の中復た分つて二となす、一に如是我聞よりの一句を名づけて證信序となす。二に一時より下、云何見極樂世界已來は正しく發起序を明す」と謂つて、證信・發起の二序を擧ぐるにも關らず、又この序分表の最後には、「初に證信序を明し、次に化前序を明し、後に發起序を明す。上來三序の不同ありと雖も、總じて序分を明し竟んぬ」といつて、三序を示し、その中間の本文は始に證信序、次に發起序を明し、その發起序の下で化前序と六縁とを明す。然るに若し初の説に隨つて二序と見れば化前序は他の六縁と同一と見て二序七縁と見ることを得。又若し後の説に従て三序と見れば三序六縁と見ることを得。これ即ち二序七縁と三序六縁との兩説ある所以なり。然しこれは序と縁とはその實大した差別なき故に序即縁と見て善導は、斯かる共通的の説明をなせしものと思はれる。その中、二序七縁とは序分全體を二段とし、如是我聞を證信序とし、一時以下を發起序とし、發起序の中を七縁に分け

十行ありて具足す。云何んが具足する、南無と云ふは即ち是れ壽命、亦是れ發願回向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に必ず往生を得」と云へる如く十願稱佛すれば十願十行を具足すといふ。而して淨土各派の間に於て願行の取扱一準ならず。本宗にては願は總じては三心、別しては回向發願心を指し、行は念佛及び諸行に通ずと解す。即ち願生彼國の願を起し、念佛又は諸行を行するを願行具足の義とし、之を行者の所發所行とす。眞宗及び西山派に於ては、願行共に南無阿彌陀佛の法體の上に具足せられたりとし、機所の發となさず。特に西山派は願行共に彼の佛體に成せられたりとする所を願行具足とし、眞宗は名號の法體に願行具足となすが故に行者が他力回向によりて信の一念に此の名號を獲得する時、亦自ら願行具足の義ありとなす。

**カンキョーゲンギブン** 觀經玄義分

善導の觀經四帖疏四卷中の第一卷。觀經の要義大綱を概説せし部分なり。→シジヨノシヨ(四帖疏)

**カンキョーゲンギブンチヨモシヨ**

觀經玄義分總開抄(一卷) 崇願記。金澤

文庫藏。本書は、善導の觀經疏玄義分に就て九品寺覺明房長西、小坂善惠房澄空、長樂寺隆寛、筑紫聖光房辨長等の所謂法然門下の四流の異説を辨じたるもの。撰者名を缺き、且つ後半を失す。恐らくは長西系人師の撰ならんと推定さる。門下四流の教義研究上古き資料として興味あるものなり。

**カンキョーゴシヨ** 觀經御疏

四帖疏の異名。→シジヨノシヨ(四帖疏)

**カンキョーゴシヨシジヨノシヨ** 觀經御疏四帖疏

四帖疏の異名。→シジヨノシヨ(四帖疏)

**カンキョーゴボン** 觀經五分

觀無量壽經に於ける五段の科節を云ふ。即ち(一)序分、(二)正宗分、(三)得益分、(四)流通分、(五)普開會分なり。此れ善導が觀經を釋するに當り、序・正・流通の三分説の外に特に設けたる善導独自の科判たり。觀經疏序分義に「一に如是我聞より下至苦所過云何見極樂世界に至る已來は其の序分を明す。二に日觀の初句佛告提希及衆生より下、下品下生に至る已來は正宗分を明す。三に説是時時より下、諸大發心に至る已來は正しく得益分を明す。四に阿難白佛より下、草提等歡喜に至る

しものなり。その七縁とは、(一)化前序、(二)禁父縁、(三)禁母縁、(四)厭舌縁、(五)欣淨縁、(六)敬善願行縁、(七)定善示觀縁をいふ。三序六縁とは、一に證信序、二に化前序、三に發起序の三序を分つ中、發起序について(一)禁父縁、(二)禁母縁、(三)厭舌縁、(四)欣淨縁、(五)敬善願行縁、(六)定善示觀縁の六縁を分つをいふ。

**カンキョーサンゼンキ** 觀經散善義

善導の觀經四帖疏四卷中の第四卷。觀經の三輩散善往生の文を釋せる部分をいふ。→シジヨノシヨ(四帖疏)

**カンキョーサンゼンチャク** 觀經三

選擇 選擇集第十六名號付屬章に出づ。宗祖法然上人は觀無量壽經一部の眞意は諸善萬行の中に於て念佛を選択するを旨歸となすものと解して三の選擇を擧ぐ。(一)選擇攝取、(二)選擇化讚、(三)選擇付屬これなり。はじめに選擇攝取とは、觀經の中には定散諸行を明すと雖も彌陀の光明は唯だ念佛衆生のみを選択して攝取するをいふ。次に選擇化讚とは觀經下品下生の中に於て聞經と稱佛との兩行を明すと雖も彌陀の化佛は念佛のみを選択して來迎讚歎するをいふ。最後に選擇付屬とは觀經中に於ては定散諸行を明すと雖も唯だ念

佛の一行のみを付したまふをいふ。

カンキョーシヨケン 願行寺 (1)三門門下慈

心良空の住處の舊址。京都府宇治郡宇治村木橋。往昔願行寺と號し藤原鎌足の子定惠菩薩の開基入道の地とて南都北嶺の間に争起り遂に墳墓の發掘伽藍の湮滅を來す。後三祖記主門下の高足慈心良空中興し、此の地に住して法幢を建て所傳の義を弘む。六派の一たる木橋派これなり。爾後末寺八十有餘個寺を擁し隆盛を臻せしも時移ると共に漸く木末雜散して現在に至る。

(2)京都市本郷區駒込通分町。良辨僧正開山願行和尚開基。延暦年中草創。もと華嚴宗に屬し、鎌倉肩ヶ谷にありしも天正年中、中興東徹徳川家康の命により現在の地に移し淨土宗に改む。

(3)京都市品川區南品川町。既成山光明院と號す。開山長運社觀音祐崇。後土御門天皇の勅命により當寺に於て十日十夜の法要を修せしことあり。

カンキョーシヤク 觀經釋 (一卷) 源

空撰。觀經の末書。觀無量壽經釋ともいふ。本書は宗祖源空が、唐善導の釋義に開り、立教開宗の精神に立脚して觀經の註釋をなせるなる資料なり。

なるか明かならざるも、述者入阿とは鎌西門下の敬蓮社入阿入西のことならん。然れば、本書は鎌西門下に於ける觀經疏の注釋書として記主の傳通記と共に合せ見るべき貴重なる資料なり。

カンキョーシヨケンモンシヨ 觀經

疏見聞集(五卷) 道教授(推定)・湛空記。正安二・三年記。金澤文庫藏。本書は弘安八年鎌倉新善光寺にて治定し畢れる觀經疏の講本にして、支義分見聞集一卷、定善義見聞集二卷、散善義見聞集二卷より成り(序分義缺)、諸行本願義の立場より見たる觀經疏の末書として珍重すべきものなり。

カンキョーシヨクミョーシヨ 觀

經疏光明抄(六卷) 長西述・永源記。金澤文庫藏。文永五・六年寫。本書は、覺明房長西が觀經疏を講義し、弟子永源が京都一條萬里小路阿彌陀寺に於て書寫せしもの。一部十八卷の内、第三・第七・第八・第十・第十五・第十六の六卷五冊のみ現存す。六卷の内容は、光明抄支義分一卷、同序分義二卷、同散善義三卷より成り(定善義は一卷も存せず)各卷の終りに奥書を附す。本書は少部の殘缺本なるも諸行本願義の立場より善導の觀經疏を解釋せるものとして珍重すべきものなり。

もの。その内容は、一部に五意を立て、初めに概説解題、後に入文解釋を施す。よく一經の根本精神を發揮し善導の宗旨を傳ふ。本書は觀經研究上の權威書として重要再讀すべきものなり。

カンキョーシヨロツカン 觀經十六

觀經正宗分十六段あるを稱して觀經十六觀と云ふ。第一日想觀・第二水想觀・第三寶地觀・第四寶樹觀・第五寶池觀・第六寶樓觀・第七寶座觀・第八佛想觀・第九眞身觀・第十觀音觀・第十一勢至觀・第十二普賢觀・第十三蓮花觀及び第十四・第十五・第十六の上中下三輩觀を云ふ。就中、前三觀は息慮凝心の上にて大乘の眞理又は彌陀淨土の正依二報莊嚴を對象として觀想する所謂定善にして、後三觀は散亂心にして總べての感覺知覺を發し此の土の事物に接觸しつゝ、嚴修善する所謂散善を説くものなり。

カンキョーシヨケンシヨ 觀經

疏見聞集(七卷) 導空撰・崇順寫。金澤文庫藏。元應年間の寫本なり。本書は、九品寺の長西の法孫性仙導空の講せし觀經疏の稿本を傳へ、鎌倉善光寺にて書寫せしもの。その内容は、支義分見聞抄第二、序文義見聞抄第

カンキョーシヨコロク 觀經疏講錄

(一卷) 四帖疏の註釋書。作者不詳なるも、文中に善導被後一千四十二年を經たりとするより推せば享保年間の作と思はれる。本書は四帖疏を釋するに三祖良忠の傳通記、七祖聖圓の傳通記釋鈔等を指南となし語句の末節については淨影・天台・嘉祥を始め支那諸師の解を批判的に採用す。支談を五科に分てる以外は別に分科を設けず、疏の文相を順次に細釋せり。

カンキョーシヨゼンキ 觀經定善義

善導の觀經四帖疏四卷中の第三卷。觀經の定善十三觀を釋せる部分をいふ。シヨノシヨ(四帖疏)

カンキョーシヨゼンキモンドーシケ

ンモン 觀經定善義問答私見聞(一卷) 覺修撰・西園記。金澤文庫藏。本書は、隆寛の著作と推定される定善義問答に更に註釋を施せしもの。著者覺修は又信樂とも云ひ初め隆寛に事へ、後智慶に受教し、智慶と共に隆寛教義の繼承者なり。本書は隆寛教義研究には具三心義、散善義問答と共に合せ見らるべき新資料なり。

カンキョーシヨセンリヤクシヨ 觀

一・第二、定善義見聞抄第二、散善義見聞抄第一・第二・第三の八冊を現存し、各冊の終りに奥書を附す。本書は長西門流に於ける觀經疏の末書として諸行本願義研究のためには見逃すべからざる資料なり。

カンキョーシヨキガキ 觀經疏問書

(七卷) 良忠説・良聖記。金澤文庫藏。建長七年記。本書は、三祖良忠の觀經疏の講義を門弟良聖が記録せしもの。その内容は、支義分見聞書三卷、序分義問書一卷、定善義問書三卷より成り、散善義を缺く。何れも下徳國琉那郡福岡郷にて講せられしものにして、各卷の中頃に開講の日附を記し、本書の講義を行ひし其の有様を彷彿せしむるものあり。觀經疏傳通記の草稿本としてその價値珍重するに足る。寂靈の淨土述聞鈔並に覺宿の觀經諸解總目に云ふ福岡鈔と稱するものは現存せざるも、恐らくは金澤文庫に存するこの本を指すものならんか。

カンキョーシヨケンイシヨ 觀經疏

顯意抄(四卷) 入阿述。金澤文庫藏。善導の觀經疏の注釋書。建治二年記。本書は、序分義顯意抄一卷、定善義顯意抄一卷、散善義顯意抄二卷より成り(支義分缺)、何人の書寫の内容を知る事を得ず。

カンキョーシヨデンズキ 觀經疏傳

通記(一五卷) 良忠撰。善導の觀經を註釋せるもの。觀經四帖疏傳通記・觀經傳通記、又略して傳通記とも云ふ。本疏に四帖あるを以て此書も亦各帖にその卷數を分つ。即ち觀經支義分傳通記六卷、觀經序分義傳通記三卷、觀經定善義傳通記三卷、觀經散善義傳通記三卷なり。康元三年下徳國木光明寺に於て起稿し、正嘉二年同國西福寺に於て稿を終り、後文永十一年より翌建治元年に至り鎌倉悟眞寺に於て之を治定し、弘安年間更に少しく添削せり。之を極再治本と稱す。本書は淨土宗に於ける四帖疏研究の權威書なると共に亦た正流に於ける宗義顯彰の重要な典籍にして、爾後の諸師文義の解説之を以て準とせざるはなし。末註、建治四年(寂靈)・料簡鈔八卷(道光)・授決鈔十八卷(性心)・見聞十五卷(良榮)・釋鈔四十八卷(聖圓)・再鈔十四卷(聖圓)等。

観經疏傳通記見聞 (一) 寂慧撰 (一五卷)

観經疏傳通記の末書。傳通記に開、観經疏運澤鈔・坂下鈔・運澤鈔ともいふ。元來十五卷本なりしも、その中散善義見聞第一、並に第二は現存せず。本書は、寂慧良曉が、その師記主良忠の観經疏傳通記十五卷に對し、自らの見聞によつて註釋を試みたるもの。甲州運澤の地に於ける撰述なるが故に運澤鈔ともいふ。はじめより忠實に傳通記の各卷について懇切歴歷に見聞を記し、文中或は藤田派の説又は有人の説を評量するも、その思想極めて穩健よく師説を祖述顯彰せる良書といはるべきものなり。

(2) 良榮刪補 (二六卷)

観經疏傳通記の末書。藤田四帖疏傳通記見聞・傳通記見聞・大澤見聞・良榮見聞ともいふ。本書は、大澤見聞(良榮が大澤圓通寺開山なるが故に)或は良榮見聞と呼べる、如く良榮の名が冠せられてはゐるが、卷首に持阿良心の序文を附する等のことより見ても、實は持阿良心の見聞に對して良榮がこれを刪補せるもの、如し。持阿良心は名越尊觀の資にして、良榮がこれを刪補せしはもとより首肯するに足る。本文は傳通記の各卷について各のその見聞を記述せるものなり。

カンギョーシヨブンギ 觀經序分義

善導の觀經四帖疏四卷中の第二卷。觀經記説の序分を釋せる部分といふ。↓シジヨノシヨ(四帖疏)

カンギョーシヨリヤクシヨ 觀經疏略鈔(八卷)

良忠述。四帖疏の末書。觀經疏傳通記略鈔ともいふ。本書は弘長二年七月、高野の敬忍房の請に應じて、記主良忠が自ら記述せしものにして、或は敬忍房鈔ともいふ。一部八卷は四帖疏に對する隨文解釋にして傳通記の述作に先だつ二十年前の著なり。傳通記に比して簡略なるもの。

カンギョーシヨシンロン 觀經扶新論(一卷)

成度撰。觀經疏傳通記扶新論ともいふ。本書は、天台の草庵道因が觀經扶正解を著して靈芝元照の觀經疏傳通記を破斥せるにより、元照の門下たる成度がこれを撰破せしもの。

カンギョーマンダラ 觀經曼荼羅

觀經の説相を畫けるもの。古來この觀經曼荼羅に諸種あり。瑞應傳によればすでに善導が觀經曼荼羅を畫くこと三百餘なりといはるゝも今日所傳のものは觀經十六對圖にして普通

これを善導曼荼羅といふ。我國に於ける當麻曼荼羅はこの觀經曼荼羅の代表的なるものにして觀經の全説相を畫き、その描寫は精妙巧緻を極む。↓シヨードマンダラ(淨土曼荼羅)

カンギョーリヨザンマイ 觀經兩三昧

觀經中に説かれたる二種の三昧。一に觀佛三昧、二に念佛三昧。↓カンブツザンマイ(觀佛三昧)・ネンブツザンマイ(念佛三昧)

カンギョーロクエン 觀經六緣

善導の觀經疏序分義に依れば觀經三序の中發起序を細分して六緣となす。六緣とは(一)禁父緣(王舍大城以下)、(二)禁母緣(時阿闍世以下)、(三)厭舌緣(時韋提希以下)、(四)欣淨緣(唯願爲我廣説以下)、(五)散善願行緣(爾時世尊即便微笑以下)、(六)定善示觀緣(佛告阿難以下)を云ふ。六緣については各項參照。↓カンギョーサンシヨ(觀經三序)

カンケ 勸化 説教のこと

足利の末期より徳川時代に亘つて使用されし言葉なり。↓セツキョー(説教)

ガンケ 含華 極樂淨土に往生するに九品の差別あり

この中、上品上生のものは生れたがらにして七寶の開蓮華に坐して妙法を聞けども、上品中生已下のものは佛智の不思

議を了知せずして疑ひながら念佛して往生せんことを願するが故に、淨土往生の後、その障の輕重に従つて一宿乃至十二大劫は蓮華の中に含まれて三寶を見聞すること能はざる態をいふ。↓ギョータイグー(疑城胎宮)

カンケイジ 寬慶寺

長野市東之向町。開基高天神城主栗田入道龍覺。初め城廓内にあり栗田寺と稱し、天台宗に屬す。後ちの城主寛安の代に到り漸く淨土教に歸依し、父寛慶の命により、永正元年大いに堂宇を改築し洞譽春虎を請して開山となし、寬慶寺と改稱す。後ち兵火に見舞はれ天正元年現在の地に轉す。後また震災の厄に遭ひ、明治十六年第十七代願譽のとき堂宇を再建し、當地方屈指の名刹なり。寺寶數十點。

カンゴトローク 漢語燈錄(一〇卷)

源空述・道光輯。淨全第九卷所收。異言語燈錄の中、前半の專ら漢文を以て記せる部分を別行して漢語燈錄といふ。↓クロダニシヨ(一ニシヨトトク(異言上人語燈錄))

カンゴトロークシユイ 漢語燈錄拾遺(一卷)

了惠編。淨全第九卷所收。本書は拾遺語燈錄とあり、了惠が宗祖の法語・講説及び消息を纂輯せる所謂漢語燈錄に漏れた

カンケイジ—ガンサブツシン

るものを拾ひしものなり。その述作年代は明ならず。内容は一卷三篇より成る。(一)三昧發得記、附夢感聖附記。(二)淨土隨聞記、臨終祥瑞記。(三)答博陸問書の三篇を收載す。各項參照。

カンサイ 感西

一八三三 宗祖の門人。眞觀房ともいふ。十九歳にして宗祖に師事すといふ。性、文才に長じ書を能くし、進士入道と稱せらる。建久九年宗祖遺集を撰述するに當り、命じて筆を執らしむ。宗祖没後起請に依らば、年來の給仕に報せん爲、吉水中房、高島一ヶ所の附屬を約束つけられしを知るも、遂に宗祖に先立ちて正治二年二月寂。壽四十八。

カンサツ 觀察

分別して觀るの義。即ち慧を以て諸法の性相を分別照見するを云ふ。往生論に「云何んが觀察なる。智慧をもて觀察し、正念に彼を觀じて如實に毘婆舍那を修行せんと欲するが故なり」と云へるが如きことなり。

カンサツシヨキョー 觀察正行

五種正行の一。↓ゴシユシヨキョー(五種正行)

カンサツジヨコ 觀察助業

↓ジヨ

これに於ける當麻曼荼羅といふ。我國に於ける當麻曼荼羅はこの觀經曼荼羅の代表的なるものにして觀經の全説相を畫き、その描寫は精妙巧緻を極む。↓シヨードマンダラ(淨土曼荼羅)

カンゴトロークシユイ 漢語燈錄拾遺(一卷)

了惠編。淨全第九卷所收。本書は拾遺語燈錄とあり、了惠が宗祖の法語・講説及び消息を纂輯せる所謂漢語燈錄に漏れた

カンケイジ—ガンサブツシン

るものを拾ひしものなり。その述作年代は明ならず。内容は一卷三篇より成る。(一)三昧發得記、附夢感聖附記。(二)淨土隨聞記、臨終祥瑞記。(三)答博陸問書の三篇を收載す。各項參照。

カンサイ 感西

一八三三 宗祖の門人。眞觀房ともいふ。十九歳にして宗祖に師事すといふ。性、文才に長じ書を能くし、進士入道と稱せらる。建久九年宗祖遺集を撰述するに當り、命じて筆を執らしむ。宗祖没後起請に依らば、年來の給仕に報せん爲、吉水中房、高島一ヶ所の附屬を約束つけられしを知るも、遂に宗祖に先立ちて正治二年二月寂。壽四十八。

カンサツ 觀察

分別して觀るの義。即ち慧を以て諸法の性相を分別照見するを云ふ。往生論に「云何んが觀察なる。智慧をもて觀察し、正念に彼を觀じて如實に毘婆舍那を修行せんと欲するが故なり」と云へるが如きことなり。

カンサツシヨキョー 觀察正行

五種正行の一。↓ゴシユシヨキョー(五種正行)

カンサツジヨコ 觀察助業

↓ジヨ

これに於ける當麻曼荼羅といふ。我國に於ける當麻曼荼羅はこの觀經曼荼羅の代表的なるものにして觀經の全説相を畫き、その描寫は精妙巧緻を極む。↓シヨードマンダラ(淨土曼荼羅)

カンゴトロークシユイ 漢語燈錄拾遺(一卷)

了惠編。淨全第九卷所收。本書は拾遺語燈錄とあり、了惠が宗祖の法語・講説及び消息を纂輯せる所謂漢語燈錄に漏れた

カンケイジ—ガンサブツシン

るものを拾ひしものなり。その述作年代は明ならず。内容は一卷三篇より成る。(一)三昧發得記、附夢感聖附記。(二)淨土隨聞記、臨終祥瑞記。(三)答博陸問書の三篇を收載す。各項參照。

カンサイ 感西

一八三三 宗祖の門人。眞觀房ともいふ。十九歳にして宗祖に師事すといふ。性、文才に長じ書を能くし、進士入道と稱せらる。建久九年宗祖遺集を撰述するに當り、命じて筆を執らしむ。宗祖没後起請に依らば、年來の給仕に報せん爲、吉水中房、高島一ヶ所の附屬を約束つけられしを知るも、遂に宗祖に先立ちて正治二年二月寂。壽四十八。

カンサツ 觀察

分別して觀るの義。即ち慧を以て諸法の性相を分別照見するを云ふ。往生論に「云何んが觀察なる。智慧をもて觀察し、正念に彼を觀じて如實に毘婆舍那を修行せんと欲するが故なり」と云へるが如きことなり。

カンサツシヨキョー 觀察正行

五種正行の一。↓ゴシユシヨキョー(五種正行)

カンサツジヨコ 觀察助業

↓ジヨ



四賢策勸進の十阶段に分別し、持戒念佛の立場より宗義を眺めたる點、宗學者の参考とすべきものあり。

カンジョーヨーレツ 御稱勝劣

觀察と稱名との勝劣についての論題。淨土行者の實踐法としての五種正行（讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚嘆供養）中に就て、稱名のみの佛の本願として、之を正定業と規定し、觀察は佛道修行の要目なるも、佛の本願に唱むれば稱名こそ勝れ、觀察は劣れるものといはねばならぬ。宗祖の常に仰せられし詞に「近來の行人觀察をなす事なけれ、佛像を觀ずとも、運慶、康慶が造りたる佛程だにも、觀じあらはすべからず、極樂の莊嚴を觀ずとも、櫻梅桃李の花果程も、觀じあらはさん事かたかるべし、ただ彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生の願を信じて、ふかく本願をたのみて一向に名號を唱べし」とあるは正しく稱名勝れ觀察劣れることを説けるものなり。

カンジョーフオン 觀成不遠 善導が

觀經の去此不遠の文を釋するに當り、三義をあげし中の一義。即ち西方十萬億土通しと雖も、行者心を西方に專注し觀念すれば、終に

定境相應して明瞭に觀見することを得て、今生に於いて淨土を見ることをうるが故に不遠なりといふ意なり。

カンジョーヨーレツ 觀稱勝劣

カンジン 勸進

（一）人を進めて佛道に入らしむるをいふ。勸誘策進の意。又勸傳卷十四に「姨の禪尼ヤナ、めんがために念佛勸進の消息をつかはさる」と云へるは、是れ念佛の修行を勸誘するの意なり。

（二）造寺等の資を寄附せしめて自他の善根功徳を積むべきことを勸誘したるより轉じて勸財・勸募とも稱し淨財の寄附を勸むることを意味するに至る。

カンジン 願心

カンジンオージョーロン 勸心往生論

（一）卷）天台沙門忍空述。淨土第一五所收。仁平四年（八一四）撰。本書は念佛三昧を以て、末法の要路とし、天台の立場に於て念佛往生を勸導せしもの。その内容は、勢頭に十五の問答を設け、二十種の事を擧げて穢土の濁惡を厭ひ淨土の妙境を欣ぶべきことを説き淨土を願求する方法は念佛なりとなす。而して天台と慧心の意により念佛を釋するに、

（一）心性は本來の佛性、（二）萬法皆彌陀、（三）歷緣對境の念佛の三門を分つ。この中、第二に於ては阿彌陀の三字に天台釋を施し、第三に於ては六塵を觀するに（一）即境念佛（二）密事欣求（三）託緣厭離の三意を以てし各門を通じて、南無阿彌陀佛を唱ふべしとあり。斯様に本書は天台の立場より、實相の理念、淨土莊嚴相の觀念及び口唱稱念の修行を勸む。

カンジンオージョーロンジンクンジョー

勸心往生論慈訓鈔（一卷） 聖明述。淨土第一五卷所收。應永三年（二〇五六）撰。本書は、忍空の勸心往生論の周到なる註釋書。勸心慈訓集ともいふ。原書の作者は天台宗侶にして、本書作者は淨土宗侶なるを以て、本書の述作に特に注意を拂ひ、原書の開闢に勸むるも、併しその趣の相違せるものあるは止むを得ず。内容を見るに題目と釋文とに分れ、題目に能勸所勸門・修因得果門・能證所證門の三門を立て、釋文は序分・正宗分・流通分に分別して文相を詳述せり。

カンジンギ 勸進義

淨土十五流の一。勸進業ともいふ。東大寺勸進職たりし俊乘房重源の所説なり。↓ジョードジョーゴリユ（淨土十五流）

カンジンヨーケツシュウ 觀心要決集

（一卷） 聖明作。淨土第一二卷所收。本書は作者が富士山麓大宮に參詣せし時、通夜せる道俗百餘人の中、十人が交々立つて所信を披瀝して法樂に擬したるものと思はる。思ふに初學者のために神備並に佛敎諸宗の觀心の淺深等を寓話的に示したるものならん。即ち第一は巫女が和歌の深意を述べ、第二は一俗人が君子の大道を演説し、第三は童子が孝弟仁義の要諦を説き、第四人以下は皆僧侶にして、或は持戒修禪説、或は三論の諸法皆空、或は天台の四教五時一心申道觀、或は眞言の十住心三密加持、或は華嚴の十重無盡法界圓融、或は拍手大誦するもの、或は參禪開悟の極要を論述せり。これらの寓話は作者自身の悟道の心境表白とも察せらる。

カンス 貫主

貫主 貫主ともいふ。一宗一派の頭領の義にして、もと天台座主を指せしを僧職の上の始とし、後一般に本山・諸大寺の住持に對する呼稱として用ひらるるに至れり。本宗にても此の意味に用ふ。

カンズイ 感隨

江戸幡勝院の學僧。奥州の人。その性俊利強記、よく外典に通じ時人呼んで漢玉感隨といふ。後増上寺知堂に

ついて爾法し、新山天光院に首置。問もなく更に江戸幡勝院の主となる。壽不詳。

カンゼオン 觀世音

（觀自在菩薩） 菩薩普門品 ↓カンノンギョー（觀音經）

カンゼオンボサツフモンボン 觀世音菩薩普門品

（觀音經） 本來は、一宗一派を開創せし元初の祖師の意なるも、現在普通には専ら淨土宗祖法然上人の異稱として使用さる。↓ゲンター（源空）

ガンソコ 元祖講

元祖大師報恩のため同志が相會して念佛修行をなし勤行の方規を學ぶ集り（講社）をいふ。普通、元祖の命日又は元祖に縁由のある日を選んで淨業を勵み道心を策勵するを常となす。

ガンタイ 願體

願事の對。一願中の主體をいふ。この願體に關して古來學者各宗間に於て議論紛からず。例せば、觀經四十八願中の第十八願について、その信心願體なりや稱名願體なりやの議論を生ずる等これなり。

カンチ 權推

權推・權推ともいふ。權推・權推・權推・權推・權推に作る支應普賢には譬叱囉囉（Chitraghara）と云ひ、譬叱は打の義、囉囉は所打木の義なりと釋す。印度寺院にて僧衆

を集むる爲めに用ひたる鳴物にして、版木の如きものならん。後世轉じて版木・洪鐘の如き鳴物を打つ作法を云ふ。

カンチコクシ 觀智國師

普光觀智國師の略稱。應川初期の淨土宗の大立物源覺存應慈昌の諡號。↓ジンジョー（慈昌）

カンチョー 管長

神佛二道の一宗一派を管轄する所の主長にして、主務大臣の許可を得て就任し、末寺住職の任免、教師等級の進退、寺院所屬の寶物・什器類の保存等、監督官廳に對して總べての責任を負ふ。その就任に選舉・交代・世襲等の別あり。共に勤行待遇を受くるものなり。本宗に於ける管長制度は、明治五年教部省令により新設され傳通院養老撤定を初代管長となす。明治十一年各本山會議の上、一宗を東西兩部に分ち東部管長は増上寺石井大宣その任に當り、西部管長は知恩院養老撤定之に任ずることとせらるも、明治十八年この東西兩部制度は廢止され、五ヶ本山一年交替の管長制度を定めたるも、又亦た紛議を醸し、明治二十年終に現行の如く知恩院管長の任に當ることとなり宗務所を増上寺に置くこととせり。現行法にては四箇本山法主中より一宗公選によつて管長を選定し主務大臣の認可を得て上任するものとなす。



その職制は列祖の洪範を繼承し教化を純正し宗制の條規により一宗を統理するものにして、これがため宗會の召集・教令・訓令・命令の發布、教師・住職・宗内職員の任免・僧階・教階・學階の叙任、宗侶の賞典並に懲戒、布教・教育・社會事業に關する統管等をなすものとす。

**カンチヨーフク** 管長服 管長の被着する莊嚴服を云ふ。是れに大禮裝・禮裝・正裝略裝の四種あり。大禮裝とは御忌會・遠忌等一宗の重要法要に着用するものにして、純素の刺貫又は切袴に袴の長素絹又は道具衣、金地宗敎入の九條袈裟を着し、紫紺地金襴の水冠を戴く禮裝。禮裝とは通常一般法要に用ふるものにして純素の刺貫又は切袴に袴又は紫の半素絹又は道具衣、金糸修多羅の七條又は大師五條を着し、紫紺地金襴の認公帽子を戴く禮裝。正裝は法要以外の慶弔敷送等に著し純素色の刺貫に紫の半素絹、金糸宗附の大師五條を着し認公帽子を戴る禮裝。略裝は平常に着用するものにして袴又は紫色の半素絹又は袈紗衣に金糸宗附の大師五條又は威儀細を着し半認公帽子を冠り、袴を着せず。

**カンツリ** 關通二三四六 徳川中期の捨世派僧。字は無礙、雲介子と號す。俗姓は横井

氏、尾張國に生る。少にして事徳寺吳峰に就き十三才得度、十六才東都に遊學、學業謙磨し、正徳二年祐天より宗成兩派を受く。又敬首に謁し善講成を受く。享保十年伊勢長島光房寺檀越平岩空山の臨終の善知識となりしを以て化導の初とし、嗣後、尾張・伊勢・美濃・近江・京都・大和・九州等諸國を巡錫勸募すること四十八年、一百箇所に留錫し、寺院を開創すること十六箇寺、得度の僧尼千五百餘、受戒するもの三千餘人、日課誓約の男女千萬人に及びしと。儉素節量、忍辱慈悲、身を以て籠を垂れ一數千萬人を勸化し、日課念佛せしめん。の自誓發願文は、教化に専注精根せし彼の全貌であり、門弟になせし選擇集の講義、眞俗に説する一枚起請文、三部般若名鈔の教論に當りては嚴重に思想通達反覆閱讀して然る後ち對談せしと云ふ。彼の布教的態度は以て教家の進退とすべきもの。全面すべて布教指針となる彼の著書總數三十一部八十餘卷あり、現にその大部分は關通上人全集五卷として上梓さる。布教宣揚に碎身粉骨し、遂に京都北野の轉法輪寺に寂す。時に明和七年二月二日、壽七十五。

**カンツリオシヨキヨゴキ** 關通和尙行業記(三卷) 道弟等記。淨全第一八

卷所收。享和二年刊。本書は徳川時代の高僧關通の行歴を道弟等が編纂し、上人三十三回忌の時上梓せしものにして、その版本は今尚ほ洛西龍安寺の轉法輪寺に藏す。その内容は、上人一代の行業と法語とを備めたるものにして初めに天龍寺桂洲の題文と華頂山迦魯大僧正の序文を掲げ、末尾に道弟の跋文を載す。

**カンツリガタ** 關通型 徳川中期の高僧關通好みの佛具の型をいふ。多くは宣徳の銅器を用ひ、角型を斥け丸味を帯びたる質素簡潔を旨とせるものなり。

**カンツリシヨニンゼンシユ** 關通上人全集(五卷) 具には雲介子關通上人全集といふ。本書は、雲介子關通の法系京龍安寺の轉法輪寺田中俊孝が、高僧且碩學の師たる關通の著書・講録・消息・講話草稿並に同師の傳記等廣汎なる範圍に亘つて編輯し、前後十一年餘の年月を閲して昭和十二年完成せり。

**カンツリリユー** 關通流 關通上人の流れを汲むものをいふ。曾て徳川家康淨土宗に歸依して後は、特に淨土宗の僧侶を優遇しそれが爲に宗侶は自ら奢侈に流れ、殿堂の美

衣服の華を競ひ、更に基督教教儀の後は一層僧侶の安逸を増し、佛祖の意に背き、宗祖の精神に悖るものが漸く多くなりしにより、愛宗護法の志あるものは黙止し難く、出來得る限り之を矯せんと企て、その色彩は徳川時代の中頃に最も強く顯はれて、謂ゆる捨世派、律院の興起を見るに至れり。關通上人その後を承けて、専ら念佛の一行を修し、質素清酒な宗風を起し、自ら一流をなすに至る。この門流を後世、關通流といふ。

**カンテイゴセモノガタリ** 関亭後世物語(二卷) 薩寛作。續第一四卷所收。後世物語・関亭問答集とも云ふ。本書は問答體より成る和文の消息にして、薩寛の後世物語と自力他力と一念多念分別とを骨子として多念往生の義旨を明にせるもの。本書は古來より長樂寺薩寛作と傳ふるも、文中所々に薩寛及び餘師の法語を引用せる所より推察するに或は門人の作かとも思はる。

**カンテツ** 觀徹 (1)三三八 長崎大音寺開山。法蓮社傳譽と號す。筑後の人。俗姓藤原氏、安武義久の第三子。九才のとき同地高教寺に得度し、十四才にして關東に掛錫、慶長十九年長崎に遊ぶ。當時長崎は耶穌教甚だ流

行せしも、師教然として市内に中道院を開く。徳化普くして耶穌の徒これを阻まんとして害を加へんと謀るものあり、爲めに鎧冑師に許して双劍を帯びしむ。元和二年、幕府より蕨博多西津館の地を賜ひ寺となし正覺山大音寺と號す。これ長崎に於ける寺の濫觴なり。寛永十五年、三代將軍家光に謁して賜物のことあり。慶安四年十一月十三日寂。壽六十四。

(2)三三七 徳川中期の宗學者。圓通社義淨覺眞阿と號す。京師の人。幼にして觀禪に従ひ得度、十五才東遊、性相の學を極む。雲臥の命により小金東漸寺に住し、後ち江戸崎大念寺、水戸常願寺、鎌倉光明寺に居住す。資性道心に富み、毎に日課六萬聲、阿彌陀經十萬卷を誦し勤修策勵す。彼の弘教の志は晩年の著、三部經合讀に顯示され、その簡潔明快なる淨土三部經の經釋はよく後學の指針たり眞に景仰惜く能はざるものなり。享保十六年十二月寂。壽七十五。

**カンドー** 歡幢 二五〇八 知恩院第七十代。即蓮社光明阿越覺實喜と號す。弘化二年五月、幕府の台命により新田大光院より知恩院住職に轉昇。翌三年五月大僧正に任官。在

住三年寂。嘉永元年八月三日寂。壽不詳。

**ガンド** 關土 關土所成の關土。即ち阿彌陀佛の西方極樂淨土のこと。この關土は法藏因位の誓願に酬報して成就したる報土なるが故に願土といふ。

**カントーサンリユー** 關東三流 關東三箇とも云ふ。京都三流(木幡派・三條派・一條派)の對。三祖記主長忠門下に俊才多く、中に就て最も著明なるものに六派あり。六派中、關東に本寺を有する白蓮派の寂感、藤田派の性心、名越派の性觀を關東の三流と云ふ。寂感は相洲白旗郷に、性心は武州藤田郷(埼玉縣寄居町附近)に、性觀は相州鎌倉名越に各の教線を張り、傳道に従事して淨土念佛を弘傳せり。依つて此れ等を關東三流といふ。

**カントージユハチダンリン** 關東十八檀林 關東に於ける淨土宗十八箇の宗侶養成機關にして同時に學問所をいふ。慶長七年(二二六二)河川家康が増上寺存應に命じて、其制度を定めしめたるもの。其の數は彌陀の十八願及び徳川氏の稱號たる松平氏の松を十八公と呼ぶより、その感運を祈り、且つ法運無窮を計りしものといふ。即ち相模鎌倉光

明寺・東京小石川傳通院・芝増上寺・東京下谷  
勝院・東京深川靈巖寺・武蔵鴻巣野崎寺・常  
陸瓜連常福寺・下總飯沼弘經寺・上總生實大巖  
寺・武蔵川越蓮華寺・下總結城弘經寺・下總小  
金東漸寺・武蔵岩槻淨國寺・武蔵龍山大善寺・  
常陸江戸崎大念寺・上野新田大光院・上野館林  
善導寺・東京本所靈山寺の十八箇寺をいふ。  
この十八箇寺の沿革・變遷等については徳川  
末期の僧福門の撰林志あり。各寺については  
各の項参照。

カンネン 観念 (1) 眞理或は佛體を觀察  
し思念することを云ふ。

(2) 口稱の對。口稱の念佛に對して、観念の  
念佛と云ふことあり。阿彌陀佛を觀察し思念  
するを云ふ。古來、念佛の語を解するに兩様  
あり。一は念を觀念の義と解し、佛を觀察思  
念するを云ひ、他は念を稱念の義とし、佛の  
名號を唱ふることを云ふなり。

カンネンアミダブツソーカーザンマイ  
クドクホーモン 觀念阿彌陀佛相海三昧  
功德法門(一卷) 善導著。淨土第四卷所  
收。善導略して觀念法門と云ふ。本書の題名  
の觀と相海とは觀佛の意をあげ、念の一字は  
念佛の意をあく、故に本書は觀佛三昧を明せ

るものなり。即ち觀佛三昧海經般舟三  
昧經等に依て、觀佛三昧法・念佛三昧法・入道  
場法懺悔發願法等を明し、又波羅・護念・見  
佛・攝生・觀生の五種増上觀を説く。初に依  
觀經明觀佛三昧法一、依般舟經明念佛三昧法  
二、依經明入道場念佛三昧法三、依經明道場  
内懺悔發願法四とあり。次に依經明五種増上  
觀義一卷にあり、その下に大經等の六部の注  
生經をあぐ。第二の問答は、觀佛觀念者の現  
生所得の功德を説いて作者の信仰を明し、第  
三問答は日夜六時に恒に淨業を修せる者に獲  
得ありて盡さずば如何なる方法を以て除滅す  
べきかを明す。本書は、よく善導の信念の熾  
烈なる狀を隨所に見るを得。本書の日本に傳  
來した史實は明かならざるも、平安朝の初め  
承和六年開行によつて將來せられ、その後淨  
土教の興隆と共に屢々上梓さる。

カンネンセンジン 觀念淺深 宗祖法  
然上人が撰集に於て三輩を分別せし用語に  
して、觀佛の淺深と念佛の淺深とをいふ。觀  
佛の淺深とは觀の當體の淺深をいひ、念佛の  
淺深とは行者の安心起行の淺深をいふ。

カンネン。ネンブツ 觀念念佛 佛の  
相好を自か心に觀じて念佛することを云ふ。

の註釋を施せしものにして、本書研究の好指  
針なり。元祿・寶水の頃、長仰校訂註釋を施  
して今日に至る。

カンネンホーモンシキカンチユー 觀  
念法門私記冠註 觀念法門私記の長仰訂正  
本の冠註を淨土宗全書刊行の際、別行せし  
ものにして、本文の典據其の他を明にし、研究  
上の便益に資するものなり。

カンネンホーモンシキケンモン 觀念  
法門私記見聞 (1) 聖德撰(二卷) 本書は、  
西覺聖德が長忠撰觀念法門私記に對し、白蓮  
相傳の宗義に立脚し、且つ自らの見聞を加味  
して註釋を施せしものにして、記主門下の異  
派特に名越良榮見聞に對抗して著はされし  
もの。

(2) 良榮述(二卷)。大澤見聞・良榮見聞と  
もいふ。本書は、大澤圓通寺良榮が、名越流  
の立場より、良忠撰觀念法門私記の註釋をな  
せるものにして、名越宗義を研究する上に於  
て好資料とすべきもの。

カンネンホーモンシキシヨ 觀念  
法門私記私鈔(二卷) 加祐述。本書は、南  
肥澤代山水正寺加祐が、良忠撰觀念法門私記  
の文々句々につき訓詁的註釋を施せるもの。

カンネンホーモンノマツシヨ 觀念法  
門の末書 善導五部九卷の隨一たる觀念法  
門はその所説最も實際的にして古來本書を研  
究せしもの尤だ多く、従つて末書亦た勝から  
ず。今その主なるものを擧ぐれば、觀念法門  
私記二卷(良忠)・同私記見聞二卷(聖德)・  
同二卷(良榮)・同私記私鈔二卷(加祐)等  
あり。この外、近時金澤文庫より發見されし  
入阿の觀念法門要略記一卷、性仙導空の觀念  
法門管見鈔二卷等あり。各項参照。

カンネンホーモンヒヨーシヨ 觀念  
法門要略記(一卷) 入阿述。金澤文庫蔵。  
書は淨土宗西山派の學僧鶴木の行願覺庵が、  
善導の觀念法門の文々句々を註釋したるもの  
にて、古來より西山教義研究の好指針書の一  
として珍重する所のもの。

カンネンホーモンリヤツキ 觀念  
法門要略記(一卷) 入阿述。金澤文庫蔵。  
本書は、龍西門下の敬蓮社入阿が觀念法門の  
要文を採釋して註釋を施せるもの。建治二年  
四月十五日書了の奥書を存す。龍西門下  
の述作にかゝる五部九卷の末書の一にして、  
記主の觀念法門私記と併せ研究さるべき新資  
料なり。

惠心僧都の往生要集に現れたる念佛の如きは  
正しく是れなり。初めに阿彌陀佛の自毫相を  
觀じ、次第に三十二相を觀じて念佛する方法  
にして、惠心僧都以後法然上人に至るまでの  
觀山の念佛は主としてこれに屬するものな  
り。

カンネンブツ 實念佛 實行ともいふ。  
密中三十日の間、禱頭を巡廻し、念佛を唱ふ  
る修行なり。カンギョー(實行)

カンネンホーモン 觀念法門 一、カン  
ネンアミダブツソーカーザンマイクドクホー  
モン(觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門)

カンネンホーモンカンケンシヨ 觀  
念法門管見鈔(二卷) 導空撰。金澤文庫蔵  
鎌倉時代の古鈔本。本書は、九品寺長西の法  
孫性仙導空が觀念法門の註釋を試みたるもの  
にして上下二卷の内、下卷の末尾を缺く。長  
西門流に於ける五部九卷の末書の一として珍  
重すべきもの。

カンネンホーモンシキ 觀念法門私記  
(二卷) 良忠述。淨土第四卷所收。善導の  
五部九卷の一たる觀念法門の註釋書。觀念法  
門記ともいふ。本書は、著者良忠が、龍西相  
承の立場より、觀念法門に對する字句・宗義

カンノコバタ 龜の小旗 儀式に用  
ふる旗の一種。龜塔を莊嚴するに用ふ。光明遍  
照十方世界念佛法生攝取不捨」と記す。

カンノン 觀音 一、カンジザイボサツ  
(觀自在菩薩)

カンノカン 觀音觀 觀經十六觀の  
第十。極樂淨土の觀世音菩薩の身相を觀想す  
るをいふ。カンギョージューロツカン  
(觀經十六觀)

カンノンギョー 觀音經(一卷) 具名。  
觀世音菩薩普門品。法華經普門品・觀世音經・  
普門品・普門品經ともいふ。法華經第二十五品  
の品名。別行して古來觀音經と稱し、諸宗を通  
じて旺んに讀誦さる。その内容は觀世音菩薩  
の普門示現の妙用を説けるものにして乃ち初  
めに觀世音菩薩の名號を稱ふれば身口意の三  
業に於て、諸の厄難を免れ諸の妙樂を得るこ  
とを明し、次に觀世音菩薩の三十三身の應現  
を説き、更に頌を以て所説の要を述ぶ。

カンノンコー 觀音講 觀世音菩薩の  
功德威力慈悲等を讚誦する法會の名稱にし  
て、我が國に於ては西國・關東及び各地に於  
て三十三所の靈場を定め、又はその本尊の影

佛三十三身を安置し、各靈場の詠歌を唱詠すること廣く行はる。

カンノンジ 観音寺 (山三重縣三重郡日水村。往古聖武天皇の勅により、神龜四年小野の海より出現せる観音を安置するため一字を建立。清和天皇の御宇智證大師再建、後ち現在の地に移轉し寶治二年四月、三祖記主良忠淨土宗に改め、後奈良天皇の御宇勅願所となる。

(2)大阪府三島郡吹田町。高瀬山と號す。天平十年行基菩薩開基。もと法相宗の名刹なりしが、後ち法然上人留錫して念佛宗通じたまひしより淨土宗に改む。享祿二年中興心覺、元祿十六年性覺上人再興し、現在に到る。寺寶、行基菩薩作と傳ふる試觀音、惠心僧都作と傳ふる船玉觀音、聖德太子作と傳ふる多門天等あり。

カンノンジユキキヨ 觀音授記經(一卷) 劉宗養無竭譯。觀世音菩薩得大勢至菩薩授記經・觀世音菩薩授記經ともいふ。本書は佛が觀世音並に大勢至菩薩所得の如幻三昧と觀世音並に大勢至の本生を説き、及び阿彌陀佛入滅の後は觀世音菩薩が佛處を補ふといふ記別を授けたるもの。この經は淨土一門

に於て要觀する書にして古來四譯ありと傳ふるも現存するものは本經並に北宋施護譯佛說如幻三摩地無量印法門經三卷の二譯のみなり。

カンノンフシヨ 觀音補處 觀音菩薩

は阿彌陀佛入滅後その佛位を補處するや否やの論題。平等覺經卷三・大阿彌陀經卷上に依るに、その國の人民恐怖することあらば觀世音に歸命して解脱することを得べく、阿彌陀佛滅度の後は觀世音・大勢至の二菩薩順次に成道して衆を領すること説き、又觀世音菩薩授記經にも亦阿彌陀佛に次いで七寶菩提樹下に於て等正覺を成じ、普光功德山王如來と號すと説き、悲華經卷三にも阿彌陀佛に次いで成道し遍出一切光明功德山王如來と號すと説く。淨影・智顛等の諸師は阿彌陀人涅槃説を以て應身となすに對し、道鏡は安樂集卷上に於て假へ願没の相を示現するも實の滅度に非ずとし、同經及び寶性論の所説に據り、報身五種の相の一にして、淨原善根の衆生は還りて見ること故の如くなれば、彌陀の佛格は報身なりとす。

カンブツ 觀佛 佛の相好・功德を想觀するをいふ。大別して觀佛について佛の理性

を觀する理觀と、佛の事相を觀する事觀との二あるも、淨土門にては専ら後者の意に解し、又信仰對象を一に阿彌陀佛とするが故に、彌陀佛に對する觀想は古來相當旺んにして且重要視され、正流に於ては五念門の觀察門、五種正行中の觀察正行等に攝して、阿彌陀佛に對する觀想を往生のための正定業たる諸名念佛の助業なりとなす。觀經について古來念觀兩宗を説いて、念佛爲宗と併説し、これ等兩三昧を宗となせるをみるも觀佛の重要なることを知り得る。↓カンブツイシュ(念佛爲宗) ↓ネンブツイシュ(念佛爲宗)

カンブツイシュ 觀佛爲宗 念佛爲宗の對。觀經兩宗の一にして阿彌陀佛の身相等を觀想する觀佛三昧を觀經一經の宗旨なりとなすをいふ。觀經々宗に對する正流の解は古來一經兩宗の説をとるも、この兩者の中、實際問題として念佛三昧を重視することもよりなり。一枚記請文に「もろこし我が朝にもろくの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にも非ず」とあるが如きその證なり。↓ネンカンリョーシュ(念觀兩宗)

カンブツエ 灌佛會 ↓ゴータンエ(降誕會)(1)

カンブツザンマイ 觀佛三昧 佛を觀想する三昧定の意。略して觀佛と云ひ、時に念佛と同義に用ひらる。即ち釋迦・彌陀等の佛身の相好及び功德等を觀念觀察すること。

觀無量壽經に一次に當に更に無量壽佛の身相光明を觀すべし、是の觀をなすを一切の佛身を觀すと名づく、佛身を觀するを以ての故に亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり、無緣の慈を以て諸の衆生を攝す、此の觀をなす者は、身を他世に捨て、諸佛の前に生じ無生忍を得、是の故に智者當に心を離れて謗に無量壽佛を觀すべしと云へる如く、此の定に入つて一佛を見得れば、即ち十方一切諸佛をも見ることをえて眼前に記別を授かることを得、この觀佛三昧は宋代以後支那に流行し、日本天台の淨土教は多く觀佛を用ふ。↓カンブツ(觀佛)

カンブツザンマイカイキヨ 觀佛三昧海經(一〇卷) 東晉佛跋陀羅譯。略して觀佛三昧經・觀佛經とも云ふ。佛陀が迦毘羅城尼拘樓陀林中に於て、父王と姨母との爲めに觀佛三昧に入りて解脱を得べきことを教へられしもの。内容は十二章に分れ、第一六譽品・第二序觀地品・第三觀相品・第四觀佛心品・第五觀四無量心品・第六觀四威儀品・

第七觀馬王祿品・第八本行品・第九觀像品・第十念七佛品・第十一念十方佛品・第十二密行品なり。經の終末に「佛阿難に告ぐ、此の經を觀想不動と名づく、是の如く受持すべし亦觀佛自毫相と名づく、是の如く受持すべし亦逆順觀如來身分と名づけ……亦念佛三昧門に名づく」云々とあり。開元釋教錄第十四には羅什譯の觀佛三昧經一卷を出せるも今經との同異詳ならず。

カンムリョージユキキヨ 觀無量壽經

(一卷) 魏良耶舍譯。淨土三部經の一。又觀無量壽佛經・無量壽觀經十六觀經・觀經等ともいふ。劉宋元嘉元年より十九年に至る間の譯出に成る。その内容は、阿闍世の惡逆に愁歎する韋提希夫人の請に應じ、釋尊が神通を以て阿彌陀佛とその淨土の十六觀並びに三福九品定散兩門の益を説き給ひたるもの。所説の段落に依りて、韋提希初め五百の侍女等無生忍を得たる途を王宮會といひ、阿難又稱名の附屬を受けて後、善闍維山に還り復設をなす一段を靈山會といふ。支那の釋家多き中、善導獨り他と見を異にし、本經々宗について觀佛念佛兩三昧を宗となし、往生淨土を體とする本願所期の要典なりとせしかば、本宗にては特に之を重んじ、殊に佛意は一向

カンムリョージユキキヨガツサン 觀無量壽經合讚(二卷) 觀微撰。觀無量壽經の末書。觀經合讚ともいふ。本書は、義譽觀微が、觀無量壽經要文の註釋をなせるもの。内容は、はじめ觀經の解題を試み、次に經文の註解をなす。その文意に簡且明、寸言以て全般を示すに足るものにして、本經研究の初學者に裨益するところ渺からざる書なり。

カンムリョージユキキヨギシヨ 觀無量壽經義疏(1) 隋慧遠撰(二卷) 觀無量壽經の末書。觀無量壽經義記・觀無量壽義記・觀無量壽義疏・觀經淨影疏ともいふ。本書は、觀經の註釋書中最古のものにして、淨影寺慧遠が觀經の註釋を試みたるもの。内容は、はじめに五要をあげ次に經文の解釋をなす。

(2)隋古巖撰(一卷)。觀無量壽經の末書。觀無量壽經疏・觀經古巖疏・觀經義疏ともいふ。本書は、嘉祥寺古巖が隋唐一般佛教の立場より觀經の註釋をなせるもの。内容は、六門を分つて觀經の經旨をのべ、その説相は、無量壽經と對比すること多く、南北朝時代の

説をあく。

カンムリヨージユキヨージヤク 觀無量壽經釋

カンムリヨージユキヨージヤク (觀經釋) 觀無量壽經疏(二卷) 三卷ともいふ。觀無量壽經の末書。龍興撰。欠。

カンムリヨージユキヨージヤク 觀無量壽經隨問講錄(五卷) 義山撰。觀無量壽經の末書。寶永三年作。もと隨問記といひ、義山が門人見阿の請により寶永三年これを講じ、享保十二年見阿が同志の請により觀經を講義せしものが現存の書なり。

カンムリヨージユキヨージヤク 觀無量壽經の末書。寶永三年作。もと隨問記といひ、義山が門人見阿の請により寶永三年これを講じ、享保十二年見阿が同志の請により觀經を講義せしものが現存の書なり。本書は、義山がその博なる知識と親切なる卓見とを以て傍ら従来の諸書を參考してはじめに觀經の概説をなし、次に觀經の一々の文について詳密懇切なる註解をなせるものにして蓋し觀經研究の好資料なり。

カンムリヨージユキヨージマツシヨ

觀無量壽經の末書。淨土三部經の隨一たる觀無量壽經は淨土往生の行法を明せる主要典籍として古來甚だ多く讀誦研究され、その末疏の現存するもの亦た尠からず。殊に唐の善導この觀經の疏を作つて古今指定の義を宣揚してより、偏依善導を標榜する淨土一宗に於ては特にこの疏を重要視せり。従つてその概説調話等の宗義顯彰の章疏少からず。今支那述作並に日本述作書中、淨土宗關係の主なるものを列記すれば、次の如し。先づ支那述作としては觀無量壽經疏二卷(慧遠)、觀無量壽經疏二卷(智顛)、觀無量壽經疏一卷(吉藏)、觀無量壽經疏三卷(元照)、無量壽觀經疏四卷(善導)、觀無量壽經疏(龍興)等あり、日本撰述の章疏又甚だ多きも淨土宗關係のものとしては、觀經釋一卷(源空)、觀無量壽經合讀二卷(觀世)、觀無量壽經隨問講錄五卷(義山)等あり、此の他、部分的に觀經を釋せるもの又はその大意を述べたるもの等尠からず、今はその主なるものを擧ぐるのみ。各書の内容については各項参照。

カンムリヨージユツキヨージシヨ

觀無量壽佛經義疏(三卷) 宋元照撰。觀無量壽經の末書。觀無量壽經義疏・觀經折論・觀經元照疏ともいふ。本書は、西湖靈芝無礙寺元照が、自らの教學、天台の思想を以て觀經を註釋せしもの。内容は、上巻に於て列義總意、四科を分つて一經の概説をなし、中・下兩卷に於て經文解釋をなす。蓋し天台的立場よりする觀經觀を知る上の參考書なり。

カンムリヨージユツキヨージシヨ

觀無量壽佛經疏(二卷) 隋智顛説。觀無量壽經の末書。觀無量壽經疏・觀經天台疏ともいふ。本書は、天台智者大師智顛が、天台の思想を以て觀經を釋せるもの。内容は、はじめに序あり、次に五重玄義をあげて心觀爲宗實相爲體と論じ、十六觀を理觀となし、一心三觀の實行を主張し、後に經文の解釋をなす。著者が天台大師なるゆへこの書は日本天台の淨土教化にも相當重要な役割を演ぜし要書なり。

カンムリヨージユツキヨージシヨ

觀無量壽佛經疏妙宗鈔(六卷) 四明知禮撰。天台の觀經疏の註釋書。天台五小部の一。天福五年作。觀無量壽經妙宗鈔・觀經疏妙宗鈔・觀經妙宗鈔・妙宗鈔・知禮の鈔、四明の鈔ともいふ。本書は、支那天台再興の祖四明知禮が、天台の觀經疏を隨文的に解釋しその眞意を發揮せるものなるも、その中間々知禮の創説を見る。その内容は、一心三觀の理觀を高調し、即ち、約心念佛を主張せるものにして、唯に天台教學のみならず我が國への影響も亦た尠しとせざる重要書なり。

カンモクゲ

灌沐偈 浴佛偈とも云ふ。

我今灌沐蓮華佛 淨智功德莊嚴衆 五濁衆生令離苦 願證如來淨法身 浴佛功德經に出づ。灌佛會の時導師花亭の正面に至り、小杓を執り本偈を唱へ三度誕生佛を灌沐す。意は釋迦牟尼佛に灌沐する功德によりて五濁の衆生苦を離れ、極樂に往生して佛果菩提を證得せんとなり。

カンモクパン

灌沐盤 香湯盆とも云ふ。花亭の中に甘茶を盛り誕生佛を安置する盤。

ガモンイ

雁門 支那山西省代州。曇鸞の出生地。

ガモン

願文 一般に佛菩薩の願文のことなるも、淨土教の隆盛なると共に専ら阿彌陀佛の四十八願の文を指すこと多く、又四十八願中の第十八願たる念佛往生の願文のみを指すことあり。

カンモンヨージシヨ

觀門要義鈔(四三卷) 證空述。善導の五部九卷の註釋書。即ち觀經玄義釋觀門義鈔五卷・觀經序分要義釋觀門義鈔五卷・觀經定善義要義釋觀門義鈔六卷・觀經散善義要義釋觀門義鈔六卷・法事讚積學要義鈔二卷・觀念要義釋觀門義三卷・往生禮讚要義釋觀門義鈔十卷・般舟讚要義釋觀門義

鈔七卷よりなる。此の書はもと和文なりしを寛文中空覺が漢文に改め刊行せるもの。此の觀門は弘願より顯はれて弘願に歸す、又弘願に依らざれば顯はれず、故に觀門は能詮にして弘願は所詮なり。一代の教説は觀門の範圍を出でず。然るにこの要義を述ぶるに行門・觀門・弘願門の三門を立て、行門は一切定散の諸行、觀門は觀經の定散の諸行、弘願は阿彌陀佛の本願なり、而して五部九卷通じて弘願他力なり、南無阿彌陀佛の一行を指示せりと知るが觀門の教義なり。

カンヨ

感譽 ↓ソんテイ(存貞)

カンヨ

觀譽 ↓ユーツー(結崇)

カンヨリユ

感譽流 ↓カンヨリユ ↓デンポ(感譽流傳法)

カンヨリユゴジユクカジヨ

感譽流五重九箇條 次項に同じ。淨土宗傳法流派の一。單に感譽流ともいふ。足利末期の感譽存貞によりて唱導されしもの。感譽は時代的要求に應じて傳法に改革を加へ從來の傳法を五重と宗脈の兩度の式に分化し五重は初めの七日を前加行、次の七日を本行として、略式を以て自行分の宗要を九箇條即ち、(一)願者傳(二)願具傳(三)五重自證門傳(四)授手印傳(五)五通五箇傳(六)面上傳(七)三種病人傳(八)未回心聲聞傳(九)氣息傳として相傳をなす。これを五重自證門の傳或は淺學相承とも呼び、其餘の傳法は平生に讓る。次に宗脈は五重を受けて後、修學の功積り法顯滿じ、更に宗義の秘奧を求めんとする者に對して化他分の宗要五箇條即ち(一)宗脈以上化他門傳(二)都部傳(三)授手印傳(四)總口傳(五)凡入報土傳を相傳せしめ、これを碩學相承或は宗脈化他門の傳と名づけ、以て從來の傳法を二分して箇條傳法と定む。爾來これが永く増上寺の定式となり、本宗に於ては特別の禮林を除く外は、主としてこの感譽の傳法形式によりて相傳して今日に到れり。↓カジヨ(感譽傳法)

ガブリキ

願力 本願力・誓願力ともいふ。淨土教の隆盛となると共に専ら阿彌陀佛が法藏因位の音に發せる本願の力用を意味するに到れり。

ガブリキジネン

願力自然 衆生が極樂淨土に往生することを得るは、衆生自身の思惟や分別によるにはあらず、偏に阿彌陀佛の本願力に討らはれて自然に往生することを

得るとの意。

ガンリキシヨジョーのホード 願力所成報土 極樂淨土のこと。この國土は法藏因位の本願力に酬報して成就せる報土なるが故にかくいふ。

カンリヨ 感靈 三三三三 黒谷金成光明寺第四十五代。洞聖社山阿彌佛感靈海と號す。攝津有馬の人。安永三年小金東漸寺より黒谷に轉住。同五年十二月失火ありて本堂・方丈・庫裡烏有に歸す。茲に於て感靈は洛中洛外に勸進を始め諸檀越の寄進を募つて漸次堂宇の復興に盡瘁せるも業半にして天明三年十月七日寂す。壽六十五。

カンリヨ 觀了 三三三三 百萬遍知恩寺第四十九代。神蓮社洞聖と號す。寶曆八年七月、江戸縣隠院より百萬遍住職に轉外。同山覺宇の新築完備に盡瘁。明和二年九月五日寂す。壽六十五。

カンリヨ 岸了 三三三三 知恩院第四十四代。入蓮社通譽仰阿彌と號す。伊勢の人。正保四年生る。同地松坂御敬寺祖について出家、のち關東に下り小石川傳通院に修學し更に増上寺に掛錫す。新田大光院・鎌倉光明寺等に歴住し、正徳五年六月、六十九才にして

化を受くるに足る状態に到る因縁を云ふ。恰も月影の水に宿るに、水の澄むを要するが如く佛の教化は根柢の純熟を縁として起さるゝものなり。

キオー 義應 一ハタギオー(秦義應) 字は直爾、秦連社通譽と號す。俗姓不詳。或は下總國長岡の人。無結の資ともいふ。學業成つて下谷傳通院に入り、後更に新田大光院・小石川傳通院等に歴住し、承應元年九月幕命により増上寺に晉む。在住八年、萬治二年十一月辭山、青山新靈院に隱棲、同三年正月二十一日寂。壽六十二。

キオンシヨジョー 祇園精舎 一ギジ ユギツコドクオン(祇園給孤獨園) 空齊、別に冲默と號す。初め増上寺學寮に學び、岩槻淨國寺を経て、新田大光院に住し、専ら著作を事とし、當時靈巖鳳潭の念佛明導割を駁撃反駁し論戰を挑み、天台・日蓮・眞宗等の諸宗の學者筆鋒を並べて肉薄せしが、義海は我宗を代表して彼等の銳鋒に當り、よく破邪顯正、以て本宗の面目保持に力めし功績偉大なるものあり。寶曆五年正月寂。壽

七知恩院住職に台命さる。翌六年三月參府、偶々將軍家御の嘉去に會ひ増上寺の葬送に列す。同六月歸洛、七月十七日寂。壽七十。

キカイ 義海 三三三三 徳川中期の學僧。空齊、別に冲默と號す。初め増上寺學寮に學び、岩槻淨國寺を経て、新田大光院に住し、専ら著作を事とし、當時靈巖鳳潭の念佛明導割を駁撃反駁し論戰を挑み、天台・日蓮・眞宗等の諸宗の學者筆鋒を並べて肉薄せしが、義海は我宗を代表して彼等の銳鋒に當り、よく破邪顯正、以て本宗の面目保持に力めし功績偉大なるものあり。寶曆五年正月寂。壽

ギオーーキギヨーイツシン

キ

て知恩院住職に台命さる。翌六年三月參府、偶々將軍家御の嘉去に會ひ増上寺の葬送に列す。同六月歸洛、七月十七日寂。壽七十。

カンロ 甘露 三三三三 阿彌多作り、不死・天酒とも譯す。もと吠陀に出で、諸天の飲料たり。味甘くして蜜の如く、不死の靈藥として一度飲めば死することなく、香氣馥郁たりと云ふ。佛教にては専らその教法の甘味なるを喩ふるに用ふ。

カンロジ 甘露寺 兵庫縣尼ヶ崎市別所。聖王山積善院と號す。源永開基。當地方の名刹なり。寺寶、法然上人の袖笠等。

カンロスイダラニ 甘露水陀羅尼 甘露經陀羅尼呪とも云ふ。施餓鬼會の時用ふ。餓鬼に供養する飲食を甘露に變成せんと念じて誦す。

キカン 義觀 三三三三 字は傳隨、雄連社長孫と號す。奥州の人。天養顯悟、出家して淨土宗に歸し修學すること三十有餘年、俱舍・唯識・華嚴・法華一として通ぜざるなく殆んどその文を空記す。晩年、下野黒羽に住しその門を訪れるもの多し。延寶八年八月六日寂。壽不詳。

キカンシヨシ 起觀生信 曇鸞が往生論註に於て天親の往生論の文を標目して用ひたる語。三祖良忠は往生論註記にこれを譯して、起觀とは起行、生信とは安心、又解行を分別せば起觀は行、生信は解にして、即ち觀の起行に依りて往生を得と信する安心を生ずるを義となすと云へり。

キキヨ 機教 一キキヨ(機法)

ギ 疑 信の對。阿彌陀佛の救濟を信ずる能はざる自己の迷情をいふ。選擇集には「涅槃の城(極樂淨土)は信をもつて能入となし疑情をもつて所止となす」とあり。

キエ 歸依 歸投依憑して救護を請ふこと。その對象として普通、佛と法と僧との三が擧げられ、これを三歸と云ふ。放浪せるものが家郷に歸り得て、それを依處となして、初めて安らかなるを得るが如く、歸依は動亂せる魂の救ひの第一歩であり、又佛道修行の第一課なり。

キエゲ 歸依偈 得度式のととき唱ふる文「歸依大世尊 能度三有苦 亦願諸衆生 普入無爲樂」四分律行事鈔資持記下に出づ。同書に依れば、之れ大悲を以て三有を度する世尊に歸依し併せて其の期誓を明すもの。得度式の時新發意に十方佛を禮せしめ訖つて説く偈にして道門に入つて歸焉を知らしめんとするものなり。

キエン 機縁 衆生の機根が佛菩薩の教

キキヨー 起行 安心の對。心を起して行を立つるの意。淨土教に於ける實踐修行。即ち助け給への安心確立によりて身に禮拜恭敬、口に稱名讚歎、意に憶念觀察等の三業を行する動作を言ふ。善導は起行を、大別正觀二行となし、就中五種正行(讀・觀・禮・讚・供)の中の第四稱名を以て正定業、餘の四を以て助業とせしが、宗祖又之を受けて起行を重んじたことは、決疑鈔卷一に選擇集一部十六篇の組織を評して「初の第一篇は是れ判教之大綱、後の十五篇は即ち起行之綱目」と言へるに徴して明かならん。因みに起行の一種として天親・曇鸞が所謂五念門(禮・讀・作・觀・遍)を正依の行とするもこれ前の五種正行と開合の異なるのみ、共に以て正因の起行たり。一アンジンキギヨー(安心起行)

キキヨーのイツシン 起行一心 行を成せんが爲一心にして他事を離れざるの意。決疑問答心鈔卷上に「意に助け給へと思ひ口に南無阿彌陀佛と唱へて他事なく、心々相續して心一境に住するを起行の一心と名づく」と言へる是れなり。而してこれに定散の異あり。定の一心とは三昧と相應して都べて緣慮を息めるを一心となし、散の一心とは散善

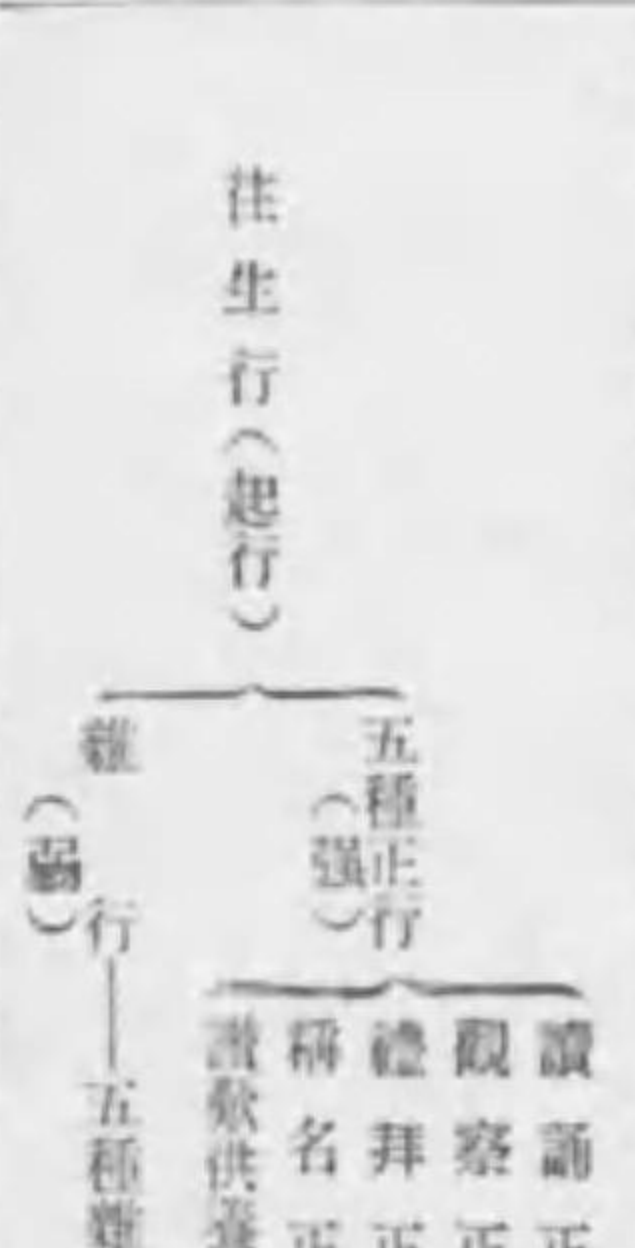
を行すと雖も分に随つて心を損する等持の分を以て一心となすを言ふ。

キギヨーのガン 起行願 起行に属する願。五念門中の第三作願門と第五廻向門を指す。觀經玄義分に十願十行と言へる如く、往生には必ず願行具足なかるべからず。而るに作願門とは一切時・一切處・三業・四威儀に専らなす所の功徳、初・中・後を問はずして皆眞實心の中に發願して普國に生ぜんとするものにして、廻向門とは、己が作る所の一切の善根を以て諸の衆生と共に極樂へ往生せんと願するものにして何れも起行の願と言ふべし。

キギヨーのキシン 起行疑心 ムニシユギツン(二種疑心) キギヨーのコーリヤク 起行廣略 起行に就ての廣説略説の意。東宗要卷第四に、尋ねて云はく、佛敎の中に廣略二説あり。今淨土宗に就て最要略説ありや。答ふ、之れあり、安心は略説すれば歸命の二字是れなり即ち稱の三心なり。起行は略説すれば故の一字是れなりと言へる如く、本宗に於ては起行を身口意三業・五正行・五念門と廣説するもその略説として萬行中稱名の一行を正定業と定めたるは願被稱故の故の一字なるを以て、故の一字を之に充つるものとなす。

キギヨーのサンゴ 起行三業 起行の具體的動作に名づけたる語。即ち、身には禮拜恭敬、口には稱名讚歎、意には憶念觀察を修するを身口意の三業と稱し、行者三心具足して此の三業を起さば即ち現當兩益にあづかり得るなり。

キギヨーシキ 歸敬式 歸入式とも云ふ。宋信者若しくは異教異宗を信せる者が改宗して本宗の信者と成る時取り行ふ儀式にして、本尊阿彌陀如來、三國傳燈列祖等願望の下に、教誡師より本宗の合掌の仕方、十念の受け方、本尊及び祖師の恩徳、安心起行作業の綱要、教會衆の心得等を説示開導する儀式なり。現行差定に依れば、法鼓(入信者着席)・版本・道場酒水・佛鉢・作相・入堂・香燭・三寶標・華請(三華請)・歡佛偈・表白・説示開導・入信者燒香・三拜・入信者懺悔・酒水灌頂・授與三歸三寶・授與日課・授與歸敬章・授與十念・歸敬誓

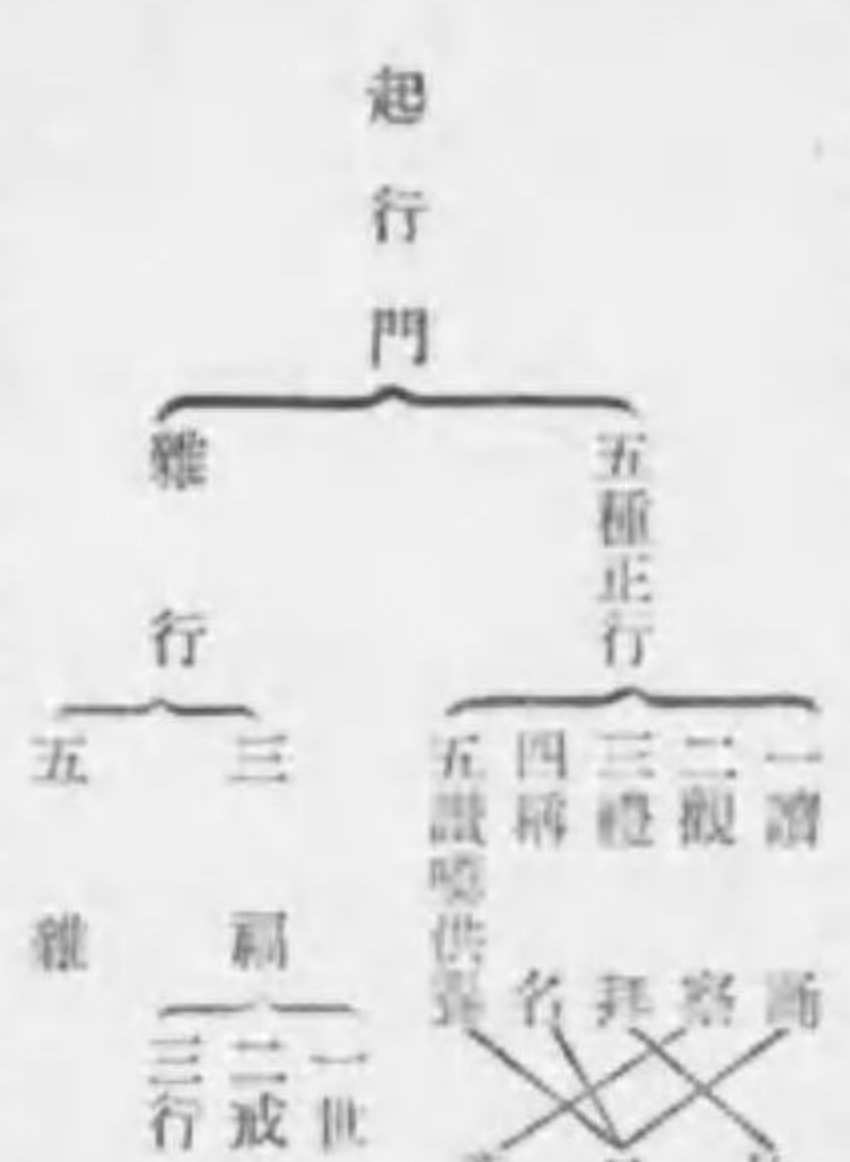


約・導師復座・開經偈・誦經・發願文・攝益文・念佛一會・總回向偈・總願偈・三歸禮・送佛偈等の次第による。

キギヨーソノオー 機教相應(機)と教法(法)とが相應一致するをいふ。元來衆生の機根は千差萬別であり、佛の教法亦たこの千差萬別の機根に相應して(應病與藥的に)種々に説述さる。従つて衆生が實踐修行に際しては自己に最もふさはしく相應せる教法を選ぶべきなり。鈍根の人は他力易行の教法をとり、聖者總行の人は自力聖道の教法を修するが如き即ちこれなり。淨土門の教法が末法の時機相應、底下の機根相應といはるゝもまた機教相應するが故なり。

キギヨーノイチジ 起行の一字 ムジヨードシユニシチジノクケツ(淨土宗七字の口決) キギヨーのブンザイ 起行分際 起行

を動作の上から分類し、その限界を定むるに就いて言ふ語。本宗に於ては、善導の敬善義に基き、往生の行業多き申より正定助正を分別して特に稱名行をその分際となす。善導は之に就いて隨順佛敎、隨順佛意、隨順佛願の故に專修一行をとると言ひ、その分際を明示せり。圖示の如し。



キゲネンブツ 義解念佛 念佛の内容意識を了解したる上の念佛を云ふ。往生記には善導念佛往生の機として、一に信に善導和尙の解釋を以て指南して、難行を捨て、正行に歸し義理を知らざる者、彌陀本願の旨を信

の根本要件となすに對して、淨土宗西流の如く安心起行の兩者は共に肝要となす立場を安心門の側より起行門といふ。



知して念佛して往生する人。二に善導一師に限らず善導・道綽・懷感・迦才等の和漢兩朝の人師の解釋中に於て、心の引く所に任せ、信の發する所に隨て念佛して往生する人等を擧ぐ。凡そ念佛往生の機には仰信と解信とある中、

この機は善導より念佛の實踐に入る解信分の機なり。但し二祖維西が義解念佛として之れを嫌はれしは、先づ念佛の意義を了解せずして稱名を行ずるは何等効果なしと斷定し、念佛の意義を學せば稱名の實踐は無用なりと主張する者を、私義邪流邪義なりと排斥されしなり。このこと微溟探集に見ゆ。即ち善導の一念義には安心門・起行門を立て、安心門は信智の一念、起行門は稱名の一念なり。安心門の日は須らく學問すべし。念佛稱名せずして往生す。起行門の人は義を知らざる故に往生すべからずと云ひ、又法本房行空は念佛に稱名と理念との二種を立て、稱名は淺近にして相の淨土に生じ、理念理解は深遠の故に體の淨土(寂光土)に生ず。寂光往生最も殊勝なり。之れ開會理解を生因とす。何んぞ稱名を要せんやと主張せる如き是れなり。

キゲンセツシユクシヨエ 紀元節祝聖會 毎年二月十一日の紀元節を祝ふ法會。儀式は洪鐘・版本・國歌齊唱を以て始まり、宣讀・祝聖文を拜讀し紀元節の歌を以て終る。キコー 擬講 學階第五級の名稱。ツカイ(學階) キコーシキ 起工式 起工祭とも云ふ。

殿堂・家屋等建立の際、天地神祇十方諸佛を祭り、その加護を願ふと共に建立の業を起さんことを表白する儀式。先づ露地の四隅に幡を立て、紅白の幕を以て圍み、正面に五色の大幡幣を建て其の前に淨鏡を安置し、其の左右に破陣弓・破陣矢を立て、壇を設け香華・供具等を如法に獻ず。式の次第は先づ四方清水に初まり次に讀經念佛す。

キコン 機根 (1)機とは可發の義、佛の教化を受くるに堪ふる衆生のこと、根とは増上の義、五根・六根・二十二根等と言へる如く、身を莊嚴し、身を導養すべき増上の用あるもの。即ち佛の教を修行してゆく衆生の力を根と云ふ。

(2)淨土門にては、機根と熟字して普通、機と根とを同義に解し、下機・上機・下根・上根等といふ。

キザン 香山(晴山) 二二七三 東京香山梅窓院の住僧。字は玄海、青蓮社香譽と號す。姓は栗原氏、東郡神田の人。幼にして父を喪ひ十一歳の時香山安立院善譽に就て出家す。天性學業を好み講書論議比肩するものなし。後香山梅窓院に遷住す。常に清貧に處し稱名念佛おこたらず、寛政六年四月十七日寂。壽八十三。

ギザン 義山 三三〇八 徳川中期の宗學匠。諱は良照、義山は字なり。又圓觀と號す。京都の人。十五歳出家し、名越檀林大澤圓通寺開堂に隨從し、宗餘庵の奥義を究む。學成り歸洛、教に従ひて講學を事とし、常に宗籍の器及するを惜み、善本を諸方に索求し、論註、五部九卷、講義集等を校訂梓行すること枚擧に遑無し。殊に開堂の依歸に依り、同門圓智と勤修傳傳校註に最も精力を傾倒し、整理修補して、公刊せるものがかの撰議六十卷にして、その持擧能まざる博渉の勞は熾として、宗門永遠の座右書たるに恥ぢず。彼は德行清白、學徒の啓發を己が任となし、華頂山に庵居し只管安養を期し、名利の爲の講學を肯せざりしこと彼の全貌を知るに足る。四方風を扇みて集り又屢々召されて講義に法を説く。宗義の宣揚と教學の興隆に多大の功績を建し、享保二年十一月洛西華開院に遷化す。壽七十。

ギザンオシヨウギョウゴキ 義山和尚行業記(一卷) 珂然撰。淨全第一八卷所收。具名、洛東華頂義山和尚行業記並要解。本書は寛保元年六月著者七十三歳の時の作にしてその體裁は全文漢文體を以て記述され、

處々に細註をほどこし以て學匠義山の生涯を録し、其の遺徳を顯揚せるものなり。

キサンホーゲ 歸三夜傷 善導の觀經疏卷頭の偈頌を稱して歸三寶偈と云ふ。文初に「先勸大衆發歸三寶」とあるよりかく稱せられる。或は「先勸大衆」とあるより勸衆偈とも云ひ、又四句一行の偈文十四行より成る故、十四行偈とも稱す。

キシガミカイレイ 岸上核嶺 二四九八 明治初期の大布道家。字は痴堂、唯蓮社廣譽と號す。天保十年八月八日尾張名古屋に生る。十三歳にして同地瑞寶寺文嶺に就て得度し、安政元年、増上寺に掛錫して兩派を受く。後ち尾張に歸り木村春樹の家で寓して大藏經を披閱し、學成りて後増上寺に講席を張り宗學を講ず。明治三年自から進んで淨土宗教叢書を撰し、東西兩都に設立せん事を首唱し、福東兩都に講席を張り學徒を訓育すること十數年、明治十六年洛南宇治平等院に住し、明治十八年二月寂。壽四十七。(著書)選擇集纂註五卷・説教惟中策九卷・原人論講義五卷等多數あり。

ギシャエ 香園會 觀經兩會の一。一オ一ダニ(王宮會) 香山(晴山) 二二七三 東京香山梅窓院の住僧。字は玄海、青蓮社香譽と號す。姓は栗原氏、東郡神田の人。幼にして父を喪ひ十一歳の時香山安立院善譽に就て出家す。天性學業を好み講書論議比肩するものなし。後香山梅窓院に遷住す。常に清貧に處し稱名念佛おこたらず、寛政六年四月十七日寂。壽八十三。

Parvata 中印度摩揭陀國王舍城東北にある佛設法の古蹟。祇園彌・伊沙彌・壽園多、等に作り、靈鷲・靈頭・鷲鷲、等と譯し、又鷲峯・鷲臺・靈山等ともいひ「わしのみ山」と訓ず。モハール州(Lahore)ラヂギル(Bahawalpur)東南のチャタ山(Chakraborty)の南面にあり。山形鷲に似たるによりてこの名を得たり。

キシュ 記主 三祖良忠の異名。良忠の述作並に宗書に對する註釋甚だ多く、寂後記主禪師と勸設せらるると傳ふ。故に一般に稱して記主といふ。↓リョーチユー(良忠)

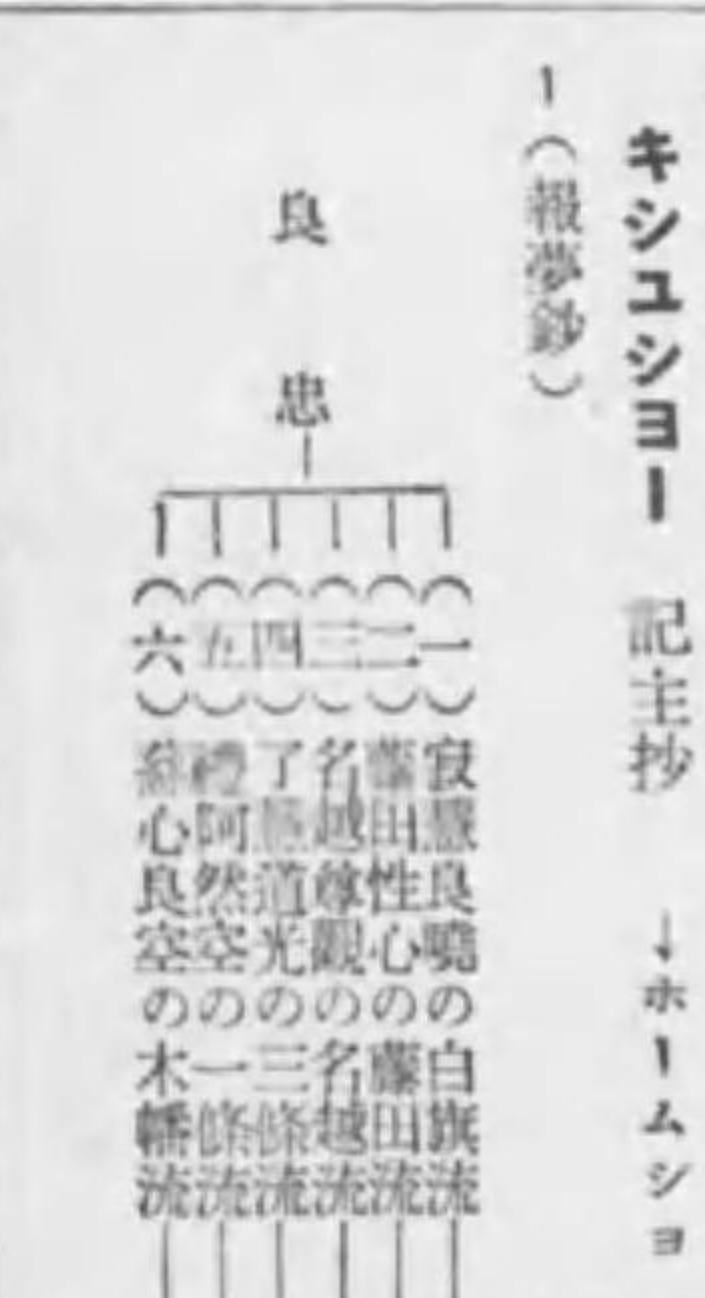
キジュカイリヤクカイギ 机受戒略戒儀(一卷) 靈亮述。續淨第九卷所收。授菩薩戒儀といふ。本書は一乘菩薩戒を授くる略式を記述せるもの。問師の所謂、廣・中・略の三種戒儀の中略戒儀に當る。

キシユキツコドクオン 祇樹給孤獨園 Javanakudupitadonvriana 略して祇園精舎・祇園精舎・祇園ともいふ。中印度憍薩羅衛城の南即ちサヘト・マヘトの南方約五丁の地に在り、佛説法の舊蹟なり。近時數次の發掘により發見せられたる伽藍の礎石等は往時の規模廣壯なりしを偲はしむるものあり。その語義は祇陀の樹林ある給孤獨の僧園の義。

キシユ—キシユモンカロッバ

祇陀は波斯匿王の太子、給孤獨は舍衛城の長者にして波斯匿王の主藏更なる須達の異名。夙に孤獨を憐れみ布施を好めるにより給孤獨長者の稱あり。歸佛の後舍衛城附近に精舎を建立して佛を主とする僧伽に獻せんとし、地を相するに祇陀太子所存の園林に如くものなし。因て之を購はんと欲せるも太子惜みて許さず、即ち八十頃の敷地に黄金を布きて購ひ精舎を建立せり。長者は五十四億金を投ぜりと。又祇陀林につきては祇陀太子の植えし樹木が繁茂せる故にこの名ありと云ひ、又須達長者黄金を地に布くに少しく未だ滿たず、太子これを良田なりと思惟し、相諮りて樹を植えたる故にこの名ありともいふ。太子は土地を賣れる代價なる十八億金を投じて門小屋を作れりと。精舎の中央に佛殿たる香室あり、その周圍に八十の小房ありといふ。佛は此處に十九回安居したまへり。

キシュヨウ 記主抄 ↓ホームシヨ (報夢抄)



キシユゼンジン 記主禪師 淨土宗第三祖然阿良忠の禪師號。一説に伏見天皇の永仁元年に記主の號を賜りしものと云はれ古來最もよく使用され來りし稱號なり。↓リョーチユー(良忠)

キシユゼンジンシデン 記主禪師繪詞傳(六卷) 吉水玄信編。明治十八年刊行。

キシユモンカ 宜秋門院 名は任子、藤原兼實の女。建久元年正月十一日後鳥羽院の女御となり、同年四月二十六日中宮となり、正治二年六月二十八日院號のことあり、中宮にて一品の宮御懷妊の時宗祖を請じて受戒し給ふ。

キシユモンカのロッバ 記主門下六派 三祖記主禪師良忠門下には英才多からず輩出し、教學甚だ旺んにしてその主なるものに六人あり。各の所傳の教義を述べ、後世にはゆる記主門下の六派、又は單に六派・六流と稱さるゝに至る。その六派とは圖示すれば左の如し。六派については各項参照。

キジュン 義順 三三〇〇 泉州惠運社の住僧。字は彌妙。便所社成譽と號す。河内行川の人。幼にして相蓮社主便所即道に師事し又圓重叢林に修學すること多年。後ち惠運社に歸住し永宣を拜して紫衣を着る。ひたすら淨業を増進して道俗を化導す。寶曆七年正月十八日寂。壽五十八。

キジョー 疑城 次項に同じ。

キジョータイグー 疑城胎宮 單に疑城・胎宮・華胎ともいふ。福樂淨土の邊地のこと。大經によると、阿彌陀佛の福樂淨土の邊地に一の宮殿あり、七寶を以て莊嚴す。若し疑心を以て阿彌陀佛を念ずる者は、この宮殿の中に胎生して、五百歳の間、三寶の名を聞くことを得ざるなり。疑心ある者の宮殿なれば疑城と云ひ、胎生の宮殿なれば胎宮と稱し、華に含まるゝこと胎内の如くなるが故に華胎と云ひ又含華とも名づく。蓋し宮殿中に産居して、見佛聞法の益を得ざること胎生の如しとするなり。大經直讀要註第二十四に「今の胎生の者は、此の弘願他力實體化用を知らず、疑を致して邊界に生じて高胎に墮す」と釋せり。

キジョーモン 起請文 (因神祇又は諸佛諸尊に對し、言の偽なきを書き、以て告げ

訴ふるなり。告文又は誓狀とも云ふ。一念發停止の起請文。一枚起請文の如し。  
(2)一枚起請文の略。イチマイキシヨーモン(一枚起請文)

キジン 鬼神 變化極りなき超人的自在力を有するものにして、或は兇惡を恣にして人畜等を傷害する惡鬼神(夜叉・羅刹・風神・雷神等)又は佛敎を護持し國土を守護する善鬼神(梵天・帝釋・地祇・龍王)等其の種類多し。

キシン 疑心 信仰上の疑惑心を云ふ。

疑心に二種あり。即ち安心の疑心と起行の疑心なり。安心の疑心とは念佛して果して往生を得るや否やを疑ふことを云ふ。起行の疑心とは念佛は決定往生の行なりと信するも、我が身を反省して往生の大事が可能なりや否やを疑ふをいふなり。この二者に對する正流の解釋は、安心の疑心は往生不可能なるも、起行の疑心は往生可能なりとなす。宗祖が「佛の本願をば疑はねど、我心のわろければ往生は叶はじと申相ひたるが體で本願を疑ふにて侍るなり」とあるは味ふべき言葉なり。アサンゾギトキヨージョー(安心疑と起行疑)

キシンオージョー 疑心往生 虛疑往生ともいふ。疑心を懐ける者が往生する意。即ち阿彌陀佛の本願を疑ひながら、淨土の行

を修する者の往生をいふ。正流の解によれば疑心に二種ある中、起行の疑心は往生を妨げざるも起行を廢する時は往生を得ずとなす、そしてこの往生は邊地胎宮の往生とさる。この疑心往生説は念佛實修上の體験より考察されしものゝ如し。前項を見よ。

キのジンシン 機深信 ↓ニシユジンシン(二種深信)

キソク。デン 氣息傳 ↓カジョーデン

キソク(箇條傳法)

キソクネンブツ 氣息念佛 一氣息念佛の義。心を名號に懸けて他念無き時、數珠又は佛の相好に十處を瞻望して一息の間に緩なら才急ならず名號を相續して十念を具足するを云ふ。

キタオオージョーイオン 北尾往生院

三結寺の前身。↓サンゾジ(三結寺)

キチジョージ 吉祥寺 福岡縣遠賀郡香月町。當寺に鎮西國師聖光房辨長の誕生地にして其の本像を安置す。はじめ鎮西國師自らの慈母の宏恩に酬へんがため前帝の阿彌陀佛を刻んで奉安せり。世にこれを聖母の彌陀といふ。境内に國師及びその祖先香月氏果代の墓あり。

キチジョーゾー 吉祥草 Kishu 功祚。

姑奢・供箭に作り、茹草・犧牲草と譯す。濕地に生じ茅又は薄に似たる草。吉祥といはれる所以は、釋尊が此の草を敷きて菩提樹下に坐して成道せるためとも、或は吉祥童子が此の草を釋尊に奉りしたためなりともいふ。

キチゾー 吉藏 三三〇〇 支那の三論宗の大威者。胡吉藏ともいひ、世に嘉祥大師と稱す。隋代金陵に生る。性は安氏、その祖先是安息國の人なりといふ。七歳のとき出家して興皇寺法朗に仕ふ。その福悟の天資は諸く三藏に通曉し十九歳にして百論を講す。後ち東の方果越の境に遊び嘉祥寺に止り講説を張り學者雲集して手を越え、三論の疏を著す。又天台山に智顛を訪れて道交あり。隋の大業二年(一説に仁壽二年又は開皇末年)煬帝の勅により揚州慧日道場に入り、尋いで京師日嚴寺に移る。唐の高祖の優遇頗る厚く十大德の一に置く。齊王元吉に請せられ延興寺に住して道風益々振ふ。武德六年六月寂。壽七十五。著書頗る多く、法華經・華嚴經・金光明經・觀無量壽經・中論・十二門論等の註疏をはじめ數十部百餘卷を超ゆ。

キチョーザンカイソドシリョーシヨーニンデン 義重山開祖吞龍上人傳 ↓ドシリョーシヨーニンデン(吞龍上人傳)

ギテン 義天 三三〇〇 清淨華院第四十四代。源運社高僧と號す。京都伏見の人。山に師事して法を嗣ぎ、江戸下谷西蓮寺を開く。寛文二年九月勅請により清淨華院に普重同六年二月隱退。天和三年五月十三日寂。壽不詳。

キトー 祈禱 心願をこめて佛・菩薩の冥加護を求むること。祈念・祈願・祈請とも云ふ。主として攘災・治病等の如き現世求福の意に用ひらる。蓋し印度にありては、吠陀時代に呪術祈禱の法行はれ、支那に於ても古くより天神地祇に祈る風ありしは事實なり。初期佛典中には、この事見えざるも、密敎の興隆するに及んで種々の儀軌漸く整ふ。吾が國にては、祈禱・大占・杖式・呪符等と稱して上古より神祇に祈るの風行はれたりしが、佛敎の傳來と共に、その思想は漸く發展し、講經・法會・造像・起塔等皆これ息災祈禱の爲に行はるゝに至れり。吾が淨土宗にては、後醍醐天皇の御宇、疫癘流行せし時、知恩寺善阿勒を奉じて百萬遍念佛會を修し之を攘除せしより疫を攘ひ癘を除き、晴雨を祈る等に之を修するに至り、近時、何々祈願會なるもの旺んに行はる。

ギトー 義燈 二四〇〇 淨土律僧。浪華の

人。はじめ江戸増上寺に修學し後ち京都聖聖院に行き靈源を證明師となし自誓受具す。後ち三河深見崇願寺に住せしが關通の請により尾張國一色村圓成寺に轉住し奉律第二世となる。延享二年六月十七日寂。壽五十二。門下に徳門・道光・可圓・慧恭等あり。

キニチ 忌日 人の死亡せし日をいふ。或は命日ともいふ。忌日とは忌み擯る日の意。命日とは命過の日の義。普通忌日とは月々の亡日をいひ、年々その月に當る忌日を正忌日或は祥月又は祥月命日といひ、死亡後一周年に當る正忌日を一周忌、二周年に當る正忌日を三回忌、六周年に當る正忌日を七回忌、乃至百回忌等といふ。普通これらの正忌日に追善供養の法事を營むこと廣く行はる。又死後七七日に至るまでの謂ゆる中陰の毎七日と百々日とに供養をなし、初七日忌、百々日忌といふは死亡日の意には非ざるも、何れも忌み懼む可き日としてこれを忌といふ。

キニユーシキ 歸入式 ↓キキョーシキ(歸入式)

キバ 普賢 Jivaka 釋尊在世當時の名醫。普賢經・普賢等に作り、活・活命・能活等と意譯す。割闥世の舅母兄。徳又戸羅國の實迦羅について醫學を學ぶこと七年、後ち王舍城



に飯り、國手たると共に篤く佛敎を信ず。摩訶陀國阿闍世太子、提婆の示唆により父王頻婆娑羅を弑せんとせしとき、時の大臣月光と共に彼を諫めしこと觀無量壽經に見ゆ。

**キホー** 機法 機教ともいふ。佛の教法と之れを信受する衆生の機根とをいふ。この二者は相對して、法は能化・所信に當り、機は所化・能信に當る。即ち法は機を教化するもの、機に信受せられるものにして、機は法に教化され、法を信受するものなり。この機と法との關係は安樂集上に「時に約して被らしむるに勸めて淨土に歸せしむ、若し教時機に赴かば修し易く悟り易し、若し機教時乖かば修し難く入り難し」と云はれてある如く兩者相應一致するときに、得脱又は往生が出来るものとされてゐる。→キキヨ—ソ—オー (機教相應)

**キホーゲシヨ—シン** 機法解説信

五重傳法の内容。古來よりこれを書傳に配當して機法解説信と習ひ傳ふ。機とは宗祖の往生記の内容をなすもの、法とは辨阿の末代念佛授手印の内容をなすもの、解とは然阿の領解末代念佛授手印の内容をなすもの、證とは然阿の決答疑問鈔の内容をなすもの、信とは曇覺の往生論註に表はれたる本願念佛の信受

を意味するものなり。→ゴジュ—(五重)(1) **キミヨ—** 歸命 *namas* 己が身を投げて出して佛に歸順するをいふ。歸命の原語南無(*namas*)は多義にして今言多く、古來種々に意譯されてゐるが、歸命は其の譯として最も多く使用されるもの、一なり。菩薩の觀經疏支義分によれば、南無には歸命と發願同向との二義ありとなす。三祖良忠は觀經疏傳通記支義分に歸命萬十方の文を解して、恭順敎命の義を先師の義となし、六字釋の歸命の語を釋して歸身・度我・救済の意すなはち身を命を捧げて佛に救済を求むるの意となす。かくの如く正流の意は、決答疑問鈔心鈔に「心に南無と念ずるを安心といふ」と述べ、この南無に「たすけたまへ」と傍訓せる如く、和語を以て表現せられたる「たすけたまへ」の意と解するを正意となす。

**キミヨ—イン** 歸命院 京都市下京區佛光寺通大宮西入。開山文譽作念。慶長十六年徳川秀忠創建。天明八年火災に罹り、安政四年顯譽嶺敷檀越の協力を竟て再建、現在に到る。

**キミヨ—ソ—** 歸命想 三想の一。→サンソ—(三想)(3)

**キミヨ—ホンガンシヨ—** 歸命本願鈔

**ギモンド—** 疑問答 →ゴヨ—ドジュ—ロツカジヨ—ギモンド—(淨土十六箇語疑問答)

**キヤカラバアア** 阿若(阿)字は *araha* (*araha*) 依阿羅漢阿と書す。塔婆の上部表に書する文にして空風水地の五大を象徴せるもの。この五大は一切萬有の色法を該攝したるものにして、**阿**(阿)字は *araha* (*araha*) 本不生の義、法身如來の境界は不生不滅にして堅固不變常恒なる徳を有し、地大は此の徳を意味するが故に阿字を以て地大を證はす。**若**(若)字は *araha* (*araha*) 離言説の義、法身の境界は言説の相を遠離する徳を有し、水大はこの徳を意味するが故に**若**字を以て水大を證はす。**阿**(阿)字は *araha* (*araha*) 離垢の義、法身如來の境界は一切煩惱の塵垢を解脱する徳を有し、火大はこの徳を意味するが故に**阿**字を以て火大を證はす。**若**(若)字は *araha* (*araha*) 因果の義、法身如來の境界は相待俱成の因果造作を離れ離得自然の大活動をなす徳を有し、風大はこの徳を意味するが故に**若**字を以て風大を證はす。**阿**(阿)字は *araha* (*araha*) 虚空の義、法身如來の境界は虚空の如く無碍淨人の徳を有し、虚空はこの徳を意味するが故に**阿**字を以て虚空を證はす。然して法界の色法何れも方・

(二卷) 向阿證賢述。續淨第八卷所收。三部假名鈔の一。本書は著者が一日洛東眞如堂にて通夜せしとき夢に老僧二人(釋迦・彌陀)の閑談を見、これを大鏡の構想に模し流暢なる假石文を以て執筆せしもの。述作年代は眞如堂縁起によれば元享の頃となす。その内容は、佛敎の法門多しと雖も、末世の衆生は偏に四十八願成就の彌陀大願に托すべき旨を説き、上卷では第十八願の總論と十方衆生の文について、中卷では至心信樂欲生我國の文について、下卷では若不生者不取正覺の文について説明せり。末書に註六卷(滿證)外數部。

**キミヨ—ホンガンシヨ—ゲンチユ—**

歸命本願鈔註(六卷) 證賢述・滿證註。續淨第八卷所收。三部假名鈔註の一。貞享四年刊。本書は註者滿證が天和年中、同學の需めに應じて京都北野經恩寺で講義を開きしときの講案を、その師智阿の高命により、推蔽を重ねて刊行せしもの。その内容は、上本に於ては教門多しと雖も淨土一門のみ末世衆生救済の法門なること、上本・中本・下本に於ては大經第十八願の文を、下本に於ては宗祖門下の異議に關して批判説明をなす。餘は鈔の本文の文法的説明には著者の知己たる賀茂眞淵の指示を受けたりといふ。本書の原本

圓・三角・半井・寶珠の五種の形色を出でず、これを各の五大に配當して總して宇宙法界の色法を象徴して塔婆に記す。而して裏面には(阿)字を書して六大體大無碍相入を示す。

**ギヤクエン** 逆縁 順縁の對。違逆の縁の意。即ち惡師惡友等の逆縁及び誘惑並に正法を誹謗せる逆事却て入道の縁となるを云ふ。觀經散善義傳通記第一に「逆縁に値ふて而も信の用を施す、故に増長と云ふ。例せば彼の猪の金山を擲り、風の求程を増すが如し」と云へるこれなり。

**ギヤクザイ** 逆罪 五逆罪・五無間業ともいふ。→ゴヤクザイ—(五逆罪)

**ギヤクザイジヨシユ** 逆罪除取 →ギヤクザイジヨシユ—(逆罪除取)

**ギヤクシヤオ—ジヨ—** 逆者往生

阿闍世太子の大業應は逆業にして、偏に苦者を憐みたまふ故に、五逆の罪人も歸命すれば、直に救済されて往生することを得るの意。觀經の下品下生に五逆十惡の不善を行じたる惡人も命終の時に隨んで善知識に教へられ令聲

にては註釋は本文に對する割註として記述されるたるも續淨刊行に際して便宜上、本文は本文、註釋は註釋として一具して印刷せり。

**キミヨ—ムリヨ—ジユカク** 歸命無量壽覺

南無阿彌陀佛の譯名。觀經支義分に「南とは是れ歸、無とは是れ命、阿とは是れ無、彌とは是れ量、陀とは是れ壽、佛とは是れ覺、故に無量壽覺といふ」と云へるに出づ。  
**キミヨ—ライハイ** 歸命禮拜 歸命は總じては身口意の三業に通じ、別しては意業に限る。歸命禮拜の歸命は意業、禮拜は身業なり。即ち禮拜して歸命の誠心を表すを云ふ。  
→キミヨ—(歸命)  
**ギモ—** 疑問 疑惑・疑情・疑といふに同じ。疑が心を束縛して不自由ならしむるを網に譬へたるもの。  
**ギモンジ** 義門寺 富時縣重諸郡本庄村藤王山と號す。開山直心。貞和二年草創はじめ時宗なりしが、第十一代蓮入和尚のとき浄土宗に改む。天正十五年中納言秀長討薩のとき當寺を營所となし、その時地所數十町を寄附され朱印地として永世官護あり。日向守護伊東義祐の子義門深々歸依して菩提寺となす、依つて寺號を義門寺と改稱せり。末寺五、臨濟十二。

不絶具足十空兩無阿彌陀佛することによりて往生すと説くればなり。これを宗義上攝取門と云ふ。

キヤクシヤジユネン 逆者十念

五逆の極罪を犯せる者も、至心懺悔して阿彌陀佛に歸命し、十念稱名すれば往生を得るの意。即ち觀經の下々品に「下品下生の者とは或は衆生有つて不善の業たる五逆十惡を作つて諸の不善を具す、乃至是の如き愚人命終の時、臨んで善知識の種々に安慰して、爲に妙法を説きて教へて念佛せしむるに遇へり、乃至汝もし念ずること能はずんば、當に無量阿僧祇劫すべし、是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具して兩無阿彌陀佛と稱せしむ、即ち極樂世界に往生することを得る」とある是れなり。

キヤクシユ 逆修 豫修とも云ふ。豫の修するの意。即ち生前に於て死後の往生善提に資せんがために、善根功徳を修するを云ふこの本義から或は轉じて戒名を附すること、或は若き者が先に死し、老いたるものが其の冥福を祈り修する意に用ふ。清濁燈籠第七には安樂房邊西の父外記入道師秀が宗祖を請じて七七日逆修を修せしことを記し、その説法を收録せり。平安中期より、上は皇室より、

下は一般庶民に至るまで之を盛んに修せしものゝ如し。

キヤクシユセツホー 逆修説法(一卷)

宗祖源空述。淨全第九卷漢語燈籠所收。本書は安樂房邊西の父外記入道師秀が、阿彌陀如来の來迎引接の儀を刻み、淨土五祖の影像を圖し、開眼供養に併せて自身死後七日追善供養の逆修を行ひし時、導師をされし宗祖の説法の聽聞記なり。初七日には佛身論並に三部經の大意を述べ大小二經を以てし、第二七日には觀經定散二善十六觀を説き、第三七日には重ねて大小二經を説き、第四七日には諸佛の功徳の無量なることを説き、第五七日には極樂の依正二報と大經の大意を述べ、第六七日には更に阿彌陀佛の功徳無量なることを難行を捨て、百即百生の專修念佛を策勵すべきことを勸進せり。

キヤクホーゾシユ 逆誘除取 五逆と詳説正法とは往生することを得るや否やの論題。阿彌陀佛の本願即ち第十八願に、十方衆生を救済すとあるも、その十八願文の終りに「唯除五逆謗正法」と云ひ、五逆罪の者と正法を謗るものとを除くとあり。然るに觀經には五逆の罪人も往生出来るとあり、兩經その説を異にせる爲こゝに五逆謗法を除くか

取るかの論を生ず。この矛盾を解決することとは、淨土家諸師の間には可成重要な問題とさるるも本宗にては、善導の指南により、これらは佛の大聖表現の相違にして、大經の所説は抑止門の立場より未だ恐るべき罪を犯さぬものに對して豫め犯さざるやう訓誡されしもの、觀經の所説は攝取門の立場より已に五逆等を犯せるものも、懺悔歸命すれば往生することを得る意を説かれしものと解するかくの如く文相よりすればこの除取の説き方は一見矛盾せるものゝ如きも化導の相違なりと見るを正流の立場となす。

キヤクホーゾシユジユゴケイキ 逆誘除取十五家異義 五逆罪・謗法罪の者の往生の得否の矛盾を調するは(大經の不許と觀經の許)古來より淨土諸家の間に重大な問題として取扱はれ種々の解釋あり。懷感は詳説論第三に十五家の異義を述べ、即ち(一)觀經に取るは懺悔の人なり、壽經に除くは懺悔せざる人なり。(二)觀經に取るは真心に逆を造る人なり、壽經に除くは真心に逆を造る人なり。(三)觀經に取るは唯是れ五逆を造る人なり、壽經に除くは是れ五逆と謗法とを造る人なり。(四)觀經に取るは是れ逆類を造る人なり壽經に除くは正しく五逆の人なり。(五)

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

キユーオー 爰往 三三〇 甲州醫合院の開山。俗姓不詳。はじめ櫻井に修學し妙解の深業に超出し行操業更に勝過す。後諸國に遊歴して行化愈らす、遂に甲斐國に一字を建立して歸命院と號す。應長十四年三月二十三日寂。壽不詳。

キユーオー 爰往 三三〇 百萬遍知恩寺第二十七代。心蓮社と號す。俗姓・法系等不詳。初め越後糸魚川善導寺に住して法燈を挑ぐるに徳光遠く天聽に達し、天文十三年皇家再興宗門紹隆の輪命を拜して百萬遍に轉住し翌日紫袍を賜ふ。永祿元年十二月二十二日寂。壽不詳。

キユーガン 究富 三三〇 百萬遍知恩寺第三十八代。本蓮社譽と號す。高崎大信寺不疑に嗣法し、其の役を承けて大業を領す。正保二年、三河源空寺より台命により百萬遍に轉住。應安元年四月二十四日寂。壽七十二。

取るか論を生ず。この矛盾を解決することとは、淨土家諸師の間には可成重要な問題とさるるも本宗にては、善導の指南により、これらは佛の大聖表現の相違にして、大經の所説は抑止門の立場より未だ恐るべき罪を犯さぬものに對して豫め犯さざるやう訓誡されしもの、觀經の所説は攝取門の立場より已に五逆等を犯せるものも、懺悔歸命すれば往生することを得る意を説かれしものと解するかくの如く文相よりすればこの除取の説き方は一見矛盾せるものゝ如きも化導の相違なりと見るを正流の立場となす。

キヤクホーゾシユジユゴケイキ 逆誘除取十五家異義 五逆罪・謗法罪の者の往生の得否の矛盾を調するは(大經の不許と觀經の許)古來より淨土諸家の間に重大な問題として取扱はれ種々の解釋あり。懷感は詳説論第三に十五家の異義を述べ、即ち(一)觀經に取るは懺悔の人なり、壽經に除くは懺悔せざる人なり。(二)觀經に取るは真心に逆を造る人なり、壽經に除くは真心に逆を造る人なり。(三)觀經に取るは唯是れ五逆を造る人なり、壽經に除くは是れ五逆と謗法とを造る人なり。(四)觀經に取るは是れ逆類を造る人なり壽經に除くは正しく五逆の人なり。(五)

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

觀經に取るは是れ菩提心を發する人なり、壽經に除くは是れ菩提心を發さざる人なり。(六)觀經に取るは是れ至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり、壽經に除くは是れ不至誠に阿彌陀佛を念ずる人なり。(七)觀經に取るは是れ十信菩薩人なり、壽經に除くは十信の菩薩に非ざる人なり。(八)觀經に取るは開提に非ざる人なり、壽經に除くは是れ開提の人なり。(九)觀經に取るは是れ已に領受される人に對し、壽經に除くは是れ未だ逆を造らざる人に對す。(一〇)觀經に取るは是れ開門なり、壽經に除くは是れ閉門なり。(一一)觀經に取るは五逆業の是れ不定業にしてこれ轉すべき時を説く、壽經に除くは五逆業の是れ定業にして轉すべき時を説く。(一二)觀經に説くは佛頂位の人なり、壽經に除くは佛頂位に非ざる人なり。(一三)觀經に取るは解脱分の善根の人なり、壽經に除くは解脱分の善根を種えざる人なり。(一四)觀經に取るは是れ第二階の人なり、壽經に除くは是れ第三階の人なり。(一五)觀經は是れ唯十念を具足する人なり、壽經に除くは是れ十念を具足し及び十念を具足せざる人に通ずると云へるこれなり。宗義としては善導の指南の如く抑止・攝取の二門による佛の大慈悲の表現の相違と見る。

大昌寺を開き、に禮念佛し、同十年六月... 壽八十二。著書説法式要三卷は正に彼の...

キユーシユー 炭州

恩寺第三十代。字は太翁。團圓社開導専公と號し、自ら頭骨髪と稱す。奥州會津野澤の人...

キユーセン 炭善

寺第二十九代。等遊社と號す。江州高島郡船木園船寺の開山。天正三年、徒業を引具して...

キユーソン 及存

人。貞蓮社信譽助久と號す。越前の人。俗姓石井氏、普光親智國師に師事してその薫陶を受け、江戸牛込早稲田に宗源寺を開く。寛永...

キヨカイ 虚階

「天武天皇行宮」を興つて堂宇となし、後ち俊業房重源家字を建立す。慶應年中有栖川宮御新闢所を仰付けらる。もと末寺十三ヶ寺を有して寺門隆盛なりしも後ち次第に衰頹、寺費も安政年中火災のため焼失、今は唯だ陳和彫作と傳ふる梵鐘を存するのみ。

キヨカイ 教階

本宗布教師の階級。明治初年には一等布教師より五等布教師に至り、中頃には一級巡教師より三級巡教師に至る名稱を使用せしが、明治の末年より現行の名稱となる。即ち司教・准司教・讀教・准讀教・輔教・准輔教の六階級に分ち、司教を一級に、准輔教を六級とし、僧階・學階の一級乃至六級に配當し、僧侶資格分限として重んぜらる。又佛教專門學校卒業者は准輔教に、大正大學卒業者は輔教に、初叙せられ、その他のものは檢定により、或は功績により進級せらるゝものとす。

キヨカイ 行誠

二四六六、姓は福田氏、

五年十二月十五日没。壽不詳。

キユーテヨ 炭長

恩寺第三十八代。天蓮社と號す。美濃國岐阜の人。俗姓は織田氏。百萬遍第二十七代炭善の養となり隨從して諸國を歴遊し、後ち錫を止めて越後高田に善導寺を開創し、天文二十二年六月、勅請により百萬遍に看み、宮中に選擧集を講じ同月二十五日當山に紫衣の永宣旨を賜ふ。水暦六年八月二日没。壽七十二。

キヨア 恭阿

知恩院第十三代。傳記不詳。天授四年北朝永和四年九月二十日没。

キヨアンジ 教安寺

甲府市金手町。甲斐山西橋院と號す。永正元年使譽菩提開創。徳川家康の祖父信忠の住居せしところ。往古は寮舎十六、末寺十四を擁する大寺院なりしが近世漸く衰頹してその面影を失ふ。

キヨイ 教意

知恩院第五十六代。金蓮社覺譽如阿即定と號す。羽州の人。元祿十三年生る。増上寺に入つて修學し、日課を勵むこと業に勝る。台命により、川越蓮聖寺第二十五代、飯沼弘經寺第四十七代、鎌倉光明寺第六代等に歴住し、明和六年十一月暮命により知恩院に轉昇、翌七年九月大僧正に初めは太宰、龍華社立誓普阿と號す。文化三年武蔵國豊島郡に生る。六歳江戸小石川傳通院に投じて出家し、支願に事へて宗餘業の學を專け、經史和歌を學ぶ。十九歳京都に遊び嵯峨の正定院立道に遇ふて解行得る所あり又叡山の靈澄に謁して台律諸部を承け、小石川に還り覺淵に隨つて宗餘業の遺産を究め、又靈澄の東叡山淨名院に移錫するに及んで改めて天台・俱舍の奥旨を受くること多年、學徳大に進み英名盛なり。遂に傳通院學頭に擢んでられしも、幾くもなく辭して蓮華勝會を興す。慶應二年請に應じて兩國同向院に住し、次いで明治維新の初に當り諸宗の高僧と謀りて同盟會を結び、大に教法の維持を圖らんとし、推されて盟主と爲る。次いで明治六年神佛合併大教院建つや選ばれて教頭と爲り、十年傳通院に轉じ、十二年増上寺に看み大教正に補せられ淨土宗東部管長となる。時に増上寺火災の後なりしかば、諸州を巡錫して淨財を募集し、遂に大殿を復興せり。十五年弘教書院を興し、活字大藏經印行の業を企て、自ら主宰となり校本對閱大に勉め十八年多功を奏す。同年深川木曾寺に退隱し、靜かに淨業を事とす。然るに二十年一宗統治の制定まるに及び、亦推されて知恩院に看み淨土

任官。在住二年、翌八年十一月十二日没。壽七十二。

キヨイクシタン 教育資料

ドシユーキヨイクシタン(淨土宗教育資料)キヨウエ 經衣

キヨウエ 經衣

キヨウエン 教園 教園は少年少女の集會の名稱なり。明治以來これを子供會・少年教會・日曜學校・土曜學校等と稱せることあるも、昭和十一年宗祖八百年降誕記念として名稱統一の議起り、華宗一致教園と改稱するに至れり。

キヨウエンジ 慶圓寺

東京市葛飾區新宿町。東雲山秀清院と號す。雲念開山。慶長年中、矢作五郎右衛門その地所内に彌陀の尊像一體を發見して草庵を結び、雲念より林譽慶圓の號を授けられて念佛三昧を修す。此當寺の始のなり。

キヨオン 教音

増上寺第六十七代。唱譽と號す。萬延元年十二月鎌倉光明寺より叡山に轉昇す。慶應元年十二月辭職。同三年十月没。壽不詳。

キヨオンジ 慶恩寺

奈良縣宇陀郡神戶村。開山法山。持統天皇九年五城行宮宗管長となる。此年冬病に罹り、二十一年四月病牀に在りて傳語を草し、病を抑へて御忌を修し、當日二十五日正午遂に寂す。壽八十三。弟子本誓寺播磨等。師氣宇寛安、風手酒院、人呼んで羅漢行談と曰ふ。宗我見なく禪林の空堂・環溪・蘭園、日宗の日蔭、天台の唯我、眞言の雲照等皆道交深く、居士信者敬慕して止まず、又和歌を善くし、高崎正風、税所篤子等交を結び其高風に服せりといふ。著作多し、行誠上人全集見るべし。

キヨカイシヨ 教會所

本宗にては一般に、開教區或は新開地に寺院を創立する時、淨土宗教會所と名づくるを例とす。その發達せざるものは永く教會所名を保存するも多數の信徒を獲得するに及ばば寺號公稱の許可を得るものとす。その教會所は寺院と同様の機能を有し、管理者は住職と云はず、主任と呼ぶ。現に開教區並に新開地の各所には多數の教會所を存す。

キヨカイシヨニセンシユー 行誠上人全集

(一卷) 編纂編輯。行誠上人の遺文を集録したるもの。明治三十二年一月作。收むる所、初め上人の肖像・筆蹟等を掲げ、次に門人河瀬秀治氏の物せる上人の略歴を載せ

本文は初めに雪窓書問一卷、いり日の光一卷、梅楓瑞傳二卷、大日本佛法傳一卷、藤山法語、撰註一卷、傳記一卷、次に時論八篇、法語四十篇、華宗六篇、難詰四十五篇、次に辛酉紀行、向阿上人を訪ふ、房總日記、東夷紀行、東行旅談、西遊日記の六篇、次に書東三十一通、遺書四通、をみなへし、死牛渡を掲げ、詩文の部に琴林集として漢詩三百十五首、其他疏・表白・難詰・序跋・碑文等三十六篇、和歌の部には釋教百首、於知集集に二百五首、後落葉集に短歌五百九十一首、今様二首、長歌二首を載せ、更に上人の逸事二十餘項を附せり。

キヨウカイトツギ 教誡律義(二卷)

唐道宣撰。具名を教誡新學比丘行護律儀といふ。新學の沙彌に遵奉せしむべき律儀を録せしもの。その内容は二十三章四百六十五條より成る。即ち入寺法・在師前法・事師法・在寺住法・在院住法・在房中住法・對大已夏五臘梨法・二時食法・食了出家法・洗鉢法・誦法・入寮法・入堂布薩法・上廂法・於六時不得誦法・入溫室法・見和尚團製得不起法・見和尚團製不得禮法・看和尚團製病法・敬重上座法・掃地法・用水淨法・入聚落法これなり。その各項下に何條と記し、餘の行相は戒本にありと結び、卷頭に自序あり述作の由來を記し、義學研鑽

の盛んなるに随つて、諸善律儀の廢損ざるを愼し、正法を護持し、遺教を闡發するには、律を重んぜざるべからざるを以て、此書を述作する旨を記せり。註疏多し。

キヨウガクイン 教學院 ↓シンギン(審議院)

キヨウカクゲ 警覺傷 版木・雲版又は魚版を鳴らす時唱ふる偈文。敬白大衆生死事大無常迅速各宜醒覺勿放逸」普通訓讀して用ふるものとす。

キヨウガクコウシユウカイ 教學講習會

教學講習會は、宗侶をして宗義の精要を攻究し布教の要綱を修得せしめ、解行を策進せしむるを目的とす。分つて高等普通の二種とす。↓コウトコウシユウカイ(高等講習會) ↓フツコウシユウカイ(普通講習會) キヨウガクコウトコウシユウカイ 教學高等講習會 ↓コウトコウシユウカイ(高等講習會)

キヨウガクシユウホー 教學週報

學週報社發行の週刊雜誌。本誌は昭和二年七月渡邊海旭等の努力により非常時局に即應して發刊し、九月十六日創刊號を出す。淨土教

報と共に本宗に於ける教育誌として一宗の公私諸消息を傳ふるものとして重きをなす。

キヨウガクフツコウシユウカイ 教學普通講習會 ↓フツコウシユウカイ(普通講習會)

キヨウガシマ 經ヶ島 俗に兵庫の築島と云ひ、平清盛の築きしものにて、雜工事にて容易に成就し難きを以て、一人を海中に沈め、石に一切經を書寫して、その石を以て固め得たるを以て經島と云ふ。傳説によれば宗祖配處に赴く時此の地に於いて水陸無遮會を行ひ、その法規絶えず毎年正・五・九月に法會を営むといふ。

キヨウカタビラ 經帷子

經文を書寫せる帷子のこと。經帷・經衣とも云ひ、或は曳履兼衣、又は無常衣とも稱す。元は麻の白衣を用ひしも、後には木綿の白衣、又は紙衣を用ひ、經文・陀羅尼・名號等を寫し、之を死人に着せる時は、業障消滅し、地獄の苦患を脱せしむるを得ると信ぜらる。現今、眞言宗にては、多く隨求陀羅尼を書し、吾が宗にては、彌陀三尊の種子、或は名號を書し、又身比には無量壽經の「欲得衣服隨念即至如佛所讚應法妙眼自然在身」の文を書き、下帯には若

在三輪勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱」の文を書き、頭陀には「百味飲食自然飽滿雖有此食實無貪者」の文を書き、脚絆には「足履其上陷下四十階畢足已還復如故」の文を書き、冠には「觀無量壽經の「其天冠中有一立化佛高二十五由旬」の文を書き、上帯に無量壽經の「佛智不思議不可稱智大廣廣智無等無倫最上勝智」の文を書き、通例とす。

キヨウカン 慶嚴(慶富・慶岩) 三三三三

常陸大念寺開山。聖(聲)源社源聲と號す。天文二十三年、肥前豐田城主藤原知光の三子として生る。幼名を仙千代と云ひ、家亡びたるに由り筑後の善導寺にて出家す。後ち川越善導寺、増上寺等に遊學し觀智國師の座下に入る。天正十九年常陸に遊び大念寺の開山となる。後ち再び筑後に歸り善導寺に重す。元和三年大念寺にて寂す。壽六十四。

キヨウカン 行觀 ↓カクニ(覺德)

キヨウカン 壺鑑 ↓シユンバ(俊把)

キヨウカンソウジヨウ 經卷相承 知識相承の對。依用相承とも云ふ。淨土宗の祖師相承に就ての八祖相承次第を立つるもの。淨土祖師として聖明の淨土眞宗付法傳に出づ。即ち聖明は淨土教義傳承の意を考へ六祖八祖の二系譜を立てそれを基本として三國に

互る淨土宗祖師を規定せる中に就て鳥鳴・龍樹・天親・菩提流支・曇鸞・道綽・善導・源空の八祖相承説を云ふ。何れも正依經典の傳承相傳の因縁を以て淨土宗祖師とされしものなり。 キヨウキ 慶喜 念佛行者が往生の確信を得し場合の法悅。 キヨウキ 經木 (1) 檜や杉等の材木を薄く削り、その形を塔婆の如くなしたるもの。もと經文を書寫せしよりこの名もあるも、今は法要、回向、孟蘭盆等の際、これに先亡靈の戒名を記入して佛前又は墓前に供ふるを常とす。 (2) 音木を指す。讀經のときに打つ拍子木なり。普通に燭笏とも云ふ。 キヨウキ 御忌 次項を見よ。

キヨウキ 御忌會 宗祖法然上人の忌日

に行ふ法會にして本宗に於ける一宗法要の一。元と天皇皇后等の御忌日に行はる法會の稱なりしも、大永四年正月十八日、後柏原天皇より知恩院御尊存牛に下し給ひし風詔に「自今孟春の月に遇はば京畿門葉を集會して一七日晝夜法然上人の御忌を修すべし」と宣し給ひたるにより爾來専ら此の稱を用ひ、毎年正月十九日より二十五日に至る七日間知恩院御影堂に於て修するを例とす。其の儀式は頗る壯

嚴を極め、風詔拜禮、敬禮誦誦、念佛行儀等今も尚ほ古式に依りこれを修す。京阪門中寺院より住職後約十ヶ年を經たる者六人を選んで唱導師となし十九日より二十四日に至る六日間、毎日一人づゝ高座に登りて敬禮誦誦を朗唱せしむ。これを唱導師と稱す。又二十五日には當日導師として唱導師勤仕後凡そ二・三十年を經たる者この役に當る。餘他の諸本山並に末寺に於ても此の間法會を修す。明治維新以後其の期日を四月十九日より七日間に改め、東京増上寺を初め他の三ヶ本山も之れに倣ふ。御忌會は初め知恩院のみこれを稱し、在京三本山は知恩院講と呼びしが、明治以後は總べてこれを御忌會と通稱することとなれり。

キヨウキジ 行基寺

行基菩薩開基。天平勝寶年中草創にして聖武天皇の勅諭所なり。後ち寺運衰頹一時は中絶せしことあるも、寶永年中性參中興し、藩主松平義行開基となる。當地は古來行基菩薩の入定の靈地として其の名聞ゆ。

キヨウキブン 行儀分

解義分の對。眞宗にては其疏と呼ぶ。善導の著書の中で行儀十なはち念佛修行の實踐的方面に關する述作をいふ。即ち法事讚、觀念法門、般舟讚、往

生禮讚の四部これに相當す。イブタカシ  
(五部九卷)

キヨクカイギン 經行 *walk service* 一定の場所を往復歩行することを云ふ。一キンヒンとも發音す。その方式に關しては、十新律第五十七に「經行の法とは比丘應に直く經行して、おそからず疾からざるべし。若し直きこと能はずんば、當の地に畫して相を作り、相に従つて直行すべし。是を經行の法と名づく」とあり。蓋し一種の運動法にして印度にては道俗共に之を爲したるものゝ如し。

キヨクカイギン ショー 教行證 教法、行法、證法ともいひ、又三法とも稱す。佛の正法。三方面なり。教とは佛の教説、すなはち佛尊一代所説の十二分教、行とは教説の實踐修行、すなはち四諦、十二因縁、六度等の行、證とは修行に依り得らるゝ證果、菩提、涅槃等の果をいふ。

キヨクカイギン 教區 一自治行政の地域區劃上の制度の名稱。教區は更に地域的に組を置き、組の下に部を置き、部は組とす。茲に明治初年以來の變遷を述べれば凡そ三時期を経て現行制度となる。第一は大教院時代。この時は東京芝増上寺に大教院本部ありて、各國

に中教院、小教院を置きて全國寺院を統一したるもの。第二は東西二部制度。この時は東部管長を増上寺に、西部管長を知恩院に置き、愛知縣以西を西部に、靜岡縣以東を東部に屬せしめ、未寺抜ひとし、各國に出張所を、その下に地名を附したる組を置き、全國を統制したるもの。第三は八大教區時代。即ち明治二十年五月十八日の制定發布にかゝる。第一東京、第二仙臺、第三長野、第四名古屋、第五京都、第六大阪、第七山口、第八熊本を各大教區と云ひ、各々その下に數個の小教區を置けり。次で明治三十一年五月現行制度制定以來十一回の更正を経て、現に次の如く全國四十八教區あり。その名稱は、東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・福島・宮城・岩手・青森・南信・北海・秋田・山形・新潟・佐渡・北信・南信・山梨・加那越・靜岡・尾張・三河・岐阜・伊勢・伊賀・滋賀・福井・京都・大阪府・福河原・兵庫・奈良・和歌山・南海・鳥取・出雲・石見・岡山・廣島・山口・福岡・日豊・長崎・熊本・佐賀これなり。この外に開教區ありて略ぼ教區と同じ(別項開教區參照のこと)。尙この各教區に教務所を設け、教務所長一名、布教團長一名、參事若干名を置き所管の事務を掌り、この教務所の下に組寺務所を置き組長ありて事務を

執り、その下に參務ありて組内寺院と組寺務所との中間の事務を掌るものとなす。なほこの各教區に教區會あり、その教區中より教區會議員を選出してその教區に於ける規則の設定制又は改廢並に歳計豫算の議決をなす。この教區會には議長並に副議長各一名を置き、教務所長は定期又は臨時に教區會を召集する權限を有す。

キヨクカイギン 行空 宗祖の弟子。法本房と號す。美作の人。はじめ宗祖に師事せしが建水の法難に佐渡に流さる。後成覺房幸西と共に異義を主張し、幸西と共に宗門門下を斥けられ、終る所を知らず。彼の所立を寂光土義と稱す。

キヨクカイギン 玉翁 *三三三* 足利中期の人。京都本覺寺開山。俗姓上杉氏、越後に生る。幼にして一禪寺に入つて曹洞の禪要を學びしも、二十歳後關東に掛錫して般若三昧の法を闡く。文明の末年京都に上りしに時恰も應仁の兵亂のため寺院多く灰燼に歸せしかば、師は瓦礫の間に念佛を談じつゝ、之れが再興に盡瘁して、洛東眞如堂、六波羅蜜寺、嵯峨禪堂、近江石山觀音堂等を興營す。後ち京都五條に本覺寺を開き、後柏原天皇御筆の阿彌陀經並に國書寫の號を賜ふ。大永元年正月

法難にて、全體に金具を以て裝飾し、寄り掛るところを圓く曲けてつくり、四本の脚は打ち違ひに組み、床には皮革を張りて、横木を以てつらね前の方に足を受くる小さき臺あり。

キヨクカイギン 敬虔修 四修の一たる恭敬修の異名。イシシユ(四修)

キヨクカイギン 敬虔修 四修の一たる恭敬修の異名。イシシユ(四修)

十八日寂。壽六十二。

キヨクカイギン 教區會議員 一キヨク(教區)

キヨクカイギン 輕垢罪 波羅夷罪の對。重罪にあらずしてたゞ清淨の業行を汚濁する程度の罪を云ふ。法藏の梵網經菩薩戒本疏第四輕垢罪の下には「輕垢とは前の重戒に簡ぶ是を以て輕と名づく。無犯に簡異するが故に亦た垢と名づく。又譯す、清淨の行を汚濁するを垢と名づけ、體重過にあらざるを輕と稱す」と云ひ、この輕垢罪に四十八種の別あることを示せり。即ち梵網經に説く四十八輕戒の如き即ちこれなり。

キヨクカイギン 行具三心 三心統合の心理的分類の一。智具の三心、仰信の三心と共に並べ用ふ。三心の必要なる所以や意義等は理解せずとも只一心に念佛精進する中には自ら三心の具せらるゝ場合あり。之を行具の三心と言ふ。東大寺十問答に「行具の三心といふは、一向に歸するは至誠心なり、疑心なきは深信心なり、往生せんと思ふは迴向心なり、かるがゆへ一向念佛してうたがふおもひなく往生せんと思ふは行具の三心なり、五念四修も一向に信する者には自然に具するなり」と言へる是れなり。廣く淨土諸家

中には、阿彌陀佛の修し給へる諸善萬行の龍れる名義中に三心を具ふといふ意に解する者あれど、是れ今淨土宗義上に言ふ行具三心とは全く異なるものなり。

キヨクカイギン 玉塚 本書は藤原兼實の日記にして、長寛二年(一八二四)十月、内大臣の宣旨を受けてより正治二年(一八六〇)十二月に至る三十七年間の公私大小の事實を日別に隨録せるものにして、寫本を以て傳へられ卷數不同なり。或は五十冊、或は八十冊或は九十冊、或は目錄を併せて二百三十冊とせり。今日にては國書刊行會の發行にかゝる二卷本最も普及せり。著者兼實は九條家の祖にして朝にありて攝關の職にあること多年、賢宰相の譽高く、中頃宗祖に歸依し、教説を受けし事は勅傳等に出づるも、その年月を記録せず。然るに本書は親ら月日を明記せる爲祖傳研究上便益する所多し。

キヨクカイギン 旭連社 一ダイアミダキヨウジ(大阿彌陀經寺)

キヨクカイギン 曲業 佛事法要に用ふる稿子的一種。圓椅・交椅ともいふ。朱又は黒の

改むるに至れり。即ち第一(東京)第五(東都)第六(七)聯合教授は明治三十九年三月二日及び六日附を以て徴兵預備専門學校入學の資格を認定せられ、第四(愛知)教授も四十二年五月二十八日附を以て徴兵預備の特典を得第八(福西)教授は三十八年四月二十二日講義校に先立ちて中學組織と改め福西中學と改稱の認可を得、四十一年三月三日徴兵預備の特典を得たるが第一教授も之に倣ひ三十九年三月二十二日芝中學校と改稱し、中學組織に改め、第四教授は四十二年九月七日東海中學校と改め中學組織とせり。四十四年三月の宗制變更により教區聯合共立の制を廢し一宗共立宗務直轄となり、同年七月教學院に於て各教授を中學組織に改むることに決議せらるゝに及び四十五年三月二十六日第六、七聯合教授は上宮中學校同日二十七日第五教授は東山中學校と改むることを認可せられたり。かくて六教授中五教授は中學校となりしも、第一、第三聯合教授は徴兵預備の特典中學等位認定をも得ざる唯一の教授なりしが、大正二年三月に至り名古屋に移され東海中學校に併置豫除の學年を了らしむることとなり。要するに八教授は八教授となり、八教授は漸次五中學校となり、時勢に伴ひ一宗教師養成方針が各

宗に先んじ専門學校卒業程度を以て標準とするに及び、佛教專門學校、大正大學專門部を普通教師養成機關とし、幾多歴史に富む教授も今や純粋中學校となり一般子弟の教育道場として、僅かに宗教教育あるを特色として今日に及べり。

キヨージュー 櫻興(環興) 無量壽經述義述文贊・觀無量壽經疏の著者。新羅國龍川の人。姓は小氏、十八歳にして出家、夙に三藏に通曉して宗望一世に鳴る。時の國王たる文武王臨終のとき神文王に遺命して櫻興を國師とせしむ。神文王元年國老にあげられ三郎寺に住し聲望愈々揚る。その著はすところ尤だ多く涅槃經・法華經・金光明經・無量壽經・觀無量壽經をはじめ諸經律論の註疏をなすこと無慮四十部百餘卷に及る。壽不詳。

キヨージュー 行業 淨土行者の宗教的實踐行為をいふ。これを廣義に解釋すれば、一切の行為を擧げることを得るも、宗義としては淨土三部經に説示されたるものと限定すべく、普通には定善・散善、或は世福・成福・行福と分別せり。中に就て稱名念佛は散善の行であり、行福の善と解さる。

キヨージュー 敬西 ヲシノズイ(信瑞) 經宗(信瑞)の對。一經典に説かれたる教法の骨格となれる主要點をいふ。

キヨージュー 慶秀 三三三六 百萬遍知恩寺第二十五代。千蓮社傳譽と號す。俗姓不詳。十二歳にして百萬遍第二十三代眞譽についで剃髮修學。又叡山・東寺に學ぶ。はじめ八幡正法寺に住し宗法を宣揚せしが、大永元年七月後柏原天皇の勅請により百萬遍住職となり法化を布き、天皇の御歸依亦淺からず。大永二年九月、一七日間宮中に大原講義を講じ、御宸翰の知恩寺額、一枚起請文像贊並に紫胞を賜ふ。又後奈良院の體依深く御宸翰及び首座論旨を賜ふ。徳光煥然一世に高く、天文年中、八幡正法寺に隱栖、永祿二年九月十日寂。壽八十四。

キヨージューアジャリ 教授阿闍梨 授成三師の一。教授師ともいふ。戒場にて受者の威儀進退等を教へる人。小乘戒にては現前の師を以て、教授阿闍梨とし、羯磨阿闍梨と共に之を五夏以上の者たるべしとなすも、大乘闍梨に於ては懺勅を請するを常規となす。

キヨザン 魚山 支那の地名。瀟山とも作る。魏の曹植始めて此地に於て梵唄を製す我國樂覺大師の入唐(承和五年同十四年)せし際此の梵唄を相傳す。其後第十代に良忍あり、特に此の道に精しく大原山に來迎院を創建し、此處に於て之れを傳授す。爾來この地が梵唄聲明の根本となり、支那の山名に因んで山を魚山と云ひ、顯教の聲明は悉く此の流に屬す。

キヨージ 脇士 扶持・脇持・夾持とも作り、脇立、又は「ワイダチ」とも訓ず。即ち中尊の左右、若しくはその周圍に在りて、中尊の總用を表明し、その作務を辨ずる侍聖を云ふなり。蓋し脇士は、諸尊に依りて同一なる。通常、彌陀に觀音・勢至の二菩薩、藥師如來に日光・月光の二菩薩、又は藥王・藥上の二菩薩、釋迦如來には迦葉・阿難の二大弟子、或は文殊・普賢の二菩薩を脇士となすが如し。

キヨージュー 敬首 三三三六 武藏正受律院開山。白蓮社宣譽と號し環塔庵と稱す。俗姓佐々木氏、父祖は近江八幡の郷士なり。天和三年三月十五日江戸神田の寓居に於て生る。六歳湯島の靈雲寺に參詣して出家の志ある。滿然の授業修成儀に「懺勅善法を教授阿闍梨と爲す」と云へり。

キヨージュー 堯淳 三三三二 京都嵯峨清涼寺住僧。山城の國藤原の人。十四歳のとき仙翁寺藏泉庵主に就いて出家す。戒行精嚴或は體を禁じ或は木食を修し艱難辛苦す。堅固の謹行よく道俗を化導し、天文二十三年四月二日寂。壽不詳。

キヨージューキヨージュー。デン 形状形名傳。カゾジョーデンゴ(簡體傳法)キヨージューセイシヨ 教師養成所一宗教師補の教師たらむとするもの、教育機關。昭和四年知恩院山内先求院に開設され、普通宗學院卒業者にして、成績優秀なる者を收容、修業年限二ヶ年、律師の分限を得るところなるも、昭和十三年宗學院が職業養成所と變更せられたるを以て、昭和十七年限り附院の運命に會せり。

キヨージューカ 經塚 經典を守護して、法流以後に傳へんが爲め、或は自家の新編、菩提又は業生血脈の爲めに、經文を書寫して筒(經筒と稱す)中に納め、之を名山、勝地、墓邊等に埋藏し、土を盛り上げて塚を築き、

元祿九年十五歳の時増上寺の學侶岸了について得度し祖海と云ふ。後ち山城藤子谷法然院に忍波を訪ひ教を受け、更らに近江安養寺靈堅に師事して顯密の學を修め二十四歳の時岸了のもとに歸る。此の年靈堅の證明により自誓受戒して敬首と名づく。岸了は増上寺祐天と號して正受院を律院とし師を開山とす。享保年間下谷に隱棲して草庵を環塔庵と云ふ。寛延元年病に伏し、八月二十五日弟子元皓に遺訓し九月二十日寂。壽六十六。遺骨を下谷寺に葬る。(著書)天台戒律講述五卷・當麻曼陀羅正義四卷・阿彌陀經隨聞記・梵網經精義・即心念佛摘歌各二卷・續即心念佛摘歌説・一枚起請文親聞錄・放生會儀軌・地藏菩薩念誦儀軌・梵網經玄談各一卷等甚だ多し。

キヨージュー 教主 教主の對。此の變遷世界に於て教化を承る、主即ち釋迦佛の異名。釋迦彌陀二尊の關係に就て二尊一教の立場を採れる正流の意にては、業生救済の主たる彌陀佛と、この救済の教法を業生に説示したまふ釋迦佛とを共に同じく大悲の發露即ち權の兩面と解して、前者を教主といひ後者を教主と説くを恒となす。↓ニッソイツキョー(二尊一教)

この上に五輪塔等を設けたるものを云ふ。  
**キヨースクエ** 經机 經卓ともいふ。日常勤行、法要等の際、佛前にて讀經するとき契經を載せる机をいふ。

**キヨースエイカイ** 共生會 共生會は推尾辨匡博士の主唱のもとに大正十一年六月二十一日鎌倉光明寺に門下同人數十名會合し其生のおつとめの式により七日間第一回結集を開きしに始まる。その目的は浄土教を中心とする佛敎統一にして、佛敎の實際化を期し専ら信仰の現代指導充實の運動なり。共生の主張は左の五ヶ條につきる。(一)同信協力を通じて成就衆生の大道を辿らんとするもの、國境も民族も隔ぶ所ではない。(二)同事の聖訓を奉じて分擔協同の二邊を完了せんとするもの、貧富も男女も隔つる處ではない。(三)共存の實義を體して共生浄土の成就を念ずるもの、利鈍も強弱も相携ふる考である。(四)無量の光壽に攝せられ、知行足の精進を心とするもの、智愚も能くも歸一する積りである。(五)如來の靈徳に化せられて偏後愚痴意慢卑弊の打破せらるゝことを希念して已まざる以上、會は現に財團法人として東京市日本橋區室町四ノ五に本部あり、機關誌として月刊「共生」「ともいき」の二種を發行し全國、朝鮮

講道等に多數の會員を有し熱心なる信者全國中央結集年一回、各地支部それぞれ地方結集を隨時行ひ、推尾師表自ら指導に當りつゝあり。共生のおつとめの特色は聖典朗讀・音楽・體操・靜慮・感話・美化作業等を配し、人生の愉快なる生活訓練をなすにあり。現にその感化力多大なるものあり。

**キヨースエイシサツイン** 教勢視察員 布敎視察の特設機關。各教區の教勢視察に任じ、報告事項を浄土宗務所より發行し、一較敎化傳道の策勵に資しつゝあり。

**キヨースエン** 教全 三三八八 和泉林法寺住僧。字は徳光、鎌倉社念譽齋阿と號す。越後の人。はじめ敎賀西福寺に入り、更に増上寺に修學す。功成つて京都京極淨園寺に入る。後諸國を行脚し、和泉下田林法寺に住す。享保十三年五月十五日寂。壽不詳。

**キヨースエン** 行仙 龍西上人の門下。京都の人、大納言頼盛の孫。始め靜遍僧正に隨從して諸宗に通曉し風節高顯なり。後龍西の門に入り専ら往生の業にいそしむ。寂年並壽不詳。

**キヨースエン** 行善 行願に同じ。サンブク(三編)

**キヨースエン** 教相 傳一代の敎法の説相といふ意。この敎相を明かにするものが所謂敎相判釋にして、本宗にては聖道浄土二門、難易二道の敎相判釋を立つ。キヨースーハシジャク(敎相判釋)

**キヨースー** 經藏 (1)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (2)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (3)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (4)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (5)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (6)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (7)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (8)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (9)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (10)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

云ふ。

(2)經堂・藏殿・輪藏・法寶殿といふに同じく一切經を納置する庫藏を指す。

(3)知恩院伽藍の一。知恩院大殿の東南方に在り。元和五年徳川秀忠の建立、現に國寶に指定さる。堂内に八角殿の經架あり五千六百餘卷の宋版大藏經を納む。

**キヨースーカン** 形像觀 ↓ゾーゾーカン(像觀)

**キヨースーキリガミシューイテツ** 敎相切紙拾遺(二卷) 聖應記。淨全第七卷所收。徹選擇の末書。徹選擇集敎相切紙拾遺徹ともいふ。本書は、著者西譽聖應が、徹選擇本末口傳抄に漏れしものを補足究明せるもの。その内容は、總じて六通を分ちこれを六字名號に配して説明をなす。

**キヨースークドク** 形相功德 極樂淨土の二十九種莊嚴の中、國土十七種功德莊嚴の一。極樂淨土の往生人は淨光の力によつて端正の相を受け、色優妙絶たる功徳あるをいふ。これ光明の照用を揚げしものにして、四十八願中の第二十七萬物嚴淨顯成就なり。

**キヨースージュウハツツ** 敎相十八通(二卷) 聖因撰。淨全第二卷所收。本書は五部九卷を始め、論註・安樂集・群疑論・

講道等に多數の會員を有し熱心なる信者全國中央結集年一回、各地支部それぞれ地方結集を隨時行ひ、推尾師表自ら指導に當りつゝあり。共生のおつとめの特色は聖典朗讀・音楽・體操・靜慮・感話・美化作業等を配し、人生の愉快なる生活訓練をなすにあり。現にその感化力多大なるものあり。

**キヨースエイシサツイン** 教勢視察員 布敎視察の特設機關。各教區の教勢視察に任じ、報告事項を浄土宗務所より發行し、一較敎化傳道の策勵に資しつゝあり。

**キヨースエン** 教全 三三八八 和泉林法寺住僧。字は徳光、鎌倉社念譽齋阿と號す。越後の人。はじめ敎賀西福寺に入り、更に増上寺に修學す。功成つて京都京極淨園寺に入る。後諸國を行脚し、和泉下田林法寺に住す。享保十三年五月十五日寂。壽不詳。

**キヨースエン** 行仙 龍西上人の門下。京都の人、大納言頼盛の孫。始め靜遍僧正に隨從して諸宗に通曉し風節高顯なり。後龍西の門に入り専ら往生の業にいそしむ。寂年並壽不詳。

**キヨースエン** 行善 行願に同じ。サンブク(三編)

**キヨースエン** 教相 傳一代の敎法の説相といふ意。この敎相を明かにするものが所謂敎相判釋にして、本宗にては聖道浄土二門、難易二道の敎相判釋を立つ。キヨースーハシジャク(敎相判釋)

**キヨースー** 經藏 (1)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (2)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (3)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (4)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (5)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (6)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (7)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (8)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (9)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (10)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (11)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (12)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (13)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (14)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (15)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (16)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

講道等に多數の會員を有し熱心なる信者全國中央結集年一回、各地支部それぞれ地方結集を隨時行ひ、推尾師表自ら指導に當りつゝあり。共生のおつとめの特色は聖典朗讀・音楽・體操・靜慮・感話・美化作業等を配し、人生の愉快なる生活訓練をなすにあり。現にその感化力多大なるものあり。

**キヨースエイシサツイン** 教勢視察員 布敎視察の特設機關。各教區の教勢視察に任じ、報告事項を浄土宗務所より發行し、一較敎化傳道の策勵に資しつゝあり。

**キヨースエン** 教全 三三八八 和泉林法寺住僧。字は徳光、鎌倉社念譽齋阿と號す。越後の人。はじめ敎賀西福寺に入り、更に増上寺に修學す。功成つて京都京極淨園寺に入る。後諸國を行脚し、和泉下田林法寺に住す。享保十三年五月十五日寂。壽不詳。

**キヨースエン** 行仙 龍西上人の門下。京都の人、大納言頼盛の孫。始め靜遍僧正に隨從して諸宗に通曉し風節高顯なり。後龍西の門に入り専ら往生の業にいそしむ。寂年並壽不詳。

**キヨースエン** 行善 行願に同じ。サンブク(三編)

**キヨースエン** 教相 傳一代の敎法の説相といふ意。この敎相を明かにするものが所謂敎相判釋にして、本宗にては聖道浄土二門、難易二道の敎相判釋を立つ。キヨースーハシジャク(敎相判釋)

**キヨースー** 經藏 (1)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (2)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (3)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (4)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (5)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (6)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (7)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (8)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (9)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (10)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (11)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (12)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (13)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (14)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (15)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (16)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (17)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (18)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (19)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (20)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (21)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (22)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (23)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (24)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (25)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (26)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (27)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (28)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (29)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (30)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (31)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (32)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (33)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (34)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (35)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (36)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (37)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (38)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (39)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (40)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (41)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (42)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

**キヨースー** 經藏 (43)三藏の一。律藏・論藏等の對。佛所説の經典を該攝して律藏と

平素貧賤に甘んじ高操淳厚を以て鳴る。後ち伊勢野田入門寺に住す。語不詳。

**キヨイチ** 鏡智 名越派尊觀門下。その傳歴明かならざれども、彼自筆の授手印(佛教専門學校藏)今日に傳存し、名越派に於ける授手印傳授を知る上に於て珍重するに足るものなり。

**キヨードー** 行道 列をなして道を歩むの意。行は列の義。釋氏聖覺卷中に「覺佛は亦旋繞とも云ふ。此の方には行道と稱す」とあり。従つて行道は譯語にあらざることを知る。五分律に「讀誦・坐禪・行道を妨廢す」とあるは、經行を謂つて行道とせるものなり。依つて古翻には行道・經行の二事を混じたるを見るべし。蓋し行道はたゞ列をなして、道を歩むの意なるも、古來これを佛邊旋繞の意に用ひ、旋右・旋市・繞佛と同意に解釋せり。

**キヨートサンリユ** 京都三流 關東三流(白雲派・藤田派・名越派)の對。三祖記主門下に俊英輩出して所謂六派をなす。その中、地理的に京都に行はれし、慈心の木幡派望西種了慧の三條派、禮阿の一條派の三流を京都三流といふ。

**キヨードーシヨク** 教導職 明治維新の際佛敎の流行により各宗教會は混亂の

極に達せしため、明治五年敎部省令により敎導職が設けられ神官僧侶をこの職に補せり。その内容は十四級へ大敎正・權大敎正・中敎正・權中敎正・少敎正・權少敎正・大講義・權大講義・中講義・權中講義・少講義・權少講義・調導・權調導に分れ本宗にては知恩院法主俊光は權少敎正(第六級)増上寺法主明賢は大講義(第七級)に任せられたるを初めとす。

**キヨードーメツジン** 經道滅盡 佛の經法の滅盡すること。→ホーメツ(法滅)

**キヨニチ** 敬日 京都東山長樂寺の僧。俗性生國不詳。出家して天台宗に歸し、後ち長樂寺隆寛に師事して淨土教を學ぶ。然して後ち一義を別立す。その謂ふところは、餘の諸行を修するも亦た報上に生る、諸行は佛の本願の行にあらず、九品往生の中、上品上生は報の淨土なるも已下の八品は並に淨地往生なりとなす。又通世に三の口傳をあぐ、一には同宿、二には同體なる後世者の施を並べたる所に不可住、三には通世すればとて舊來の有様を悉く不可改云々。寂年不詳。門下に慈心あつて世に聞ゆ。

**キヨニンジ** 敎念寺 靜岡縣志太郡小川村。三寶山と號す。開山觀譽祐崇。文正

年中この地に惡疫流行して死者續出せしかば屍を集めて一處に葬り一字を建立せるもの。寺寶、法然上人眞筆と傳ふる經文、徳川家康より拜領せる茶の湯茶碗等。

**キヨハ** 曉把 三三三 足利末期の人。控蓮社信譽任誓と號す。京都淨國寺開山。俗姓千葉氏、總州の産。十二歳のとき道譽貞把に法を嗣く。永祿三年京都極淨國寺を開創す。永祿十一年十月五日寂。語不詳。

**キヨハハン** 敎判 →キヨトツーハンジヤク(敎判釋)

**キヨバン** 魚版 本名を柳と云ふ。版の形も魚に似せて作るが故に魚版と云ふ。これを打つて時を報ずるに用ふ。その打ち方は版木の打法による。

**キヨビヤク** 敬白 敬白文の初頭に用ふる語。佛德又は諸聖の高徳を讚歎し、隨喜の情を陳べ、冥護を乞ふ時に用ふる一種の文體を云ふ。諸種の講式中に用ふる所の表白も亦これに類す。その文の初頭に多くは敬

住して述ぶる語なり。次項を見よ。

白の語を置くが故にかく名づけらる。神道に於て用ふる祭文・祝詞の類に似たり。

**キヨフク** 行福 →サンブク(三福)

**キヨフタイ** 行不退 →シフタイ(四不退)

**キヨホー** 敬法 二六〇〇 清淨華院第八代。寺傳によると懸鐘坊眞照僧全と號し、伏見天皇々孫尊親親王の御子。十一歳にして叡山西塔黒谷の傳信和尚の室に入り剃染受戒、黒谷並に松林房に住して圓戒を宣揚し、念佛安心を玄心に親受し鑽西派流を窮む。當時兵亂少からず堂宇の受難また夥しとせず、この間にあつて宗廟顯彰、正法興流のため盡瘁し徒弟を委ふこと三百に餘る。應永七年三月二十八日寂。五七日に際して大僧正に任官。壽八十一。

**キヨマン** 憍慢 自ら高ぶつて他を下げしむ心狀を云ふ。無量壽經に「憍慢と弊と憍意とは、以て此の法を信じ難し」と云へるが如く、淨土宗にては他力の救済を説くが故に、憍慢を以て入信に大害ありとし、特に之を除くべきことを力説す。

**キヨマンネンブツ** 憍慢念佛 憍慢心に住して修する念佛をいふ。

**キヨマンネンブツシヨフ** 憍慢念佛生不 憍慢心に住する念佛は往生しうるや否やの論題。淨土宗意に於ては他力救済を主體とするが故に憍慢心の念佛は往生不可能なりとなす。勅傳第二卷に「されば我程の念佛者よもあらじと思ふは假事なり、此の思は大憍慢にてあれば、即ち三心を缺くるなり、又それを便りとして、魔障の來りて往生を妨ぐるあり」と云へるそれなり。又往生記に難達往生の難十三種を擧ぐる中の第一に憍慢心に住せる人の不往生を記すが如きもこれなり。

**キヨマンビヤクセツカイ** 憍慢僻説 四十八觀成の一。新學の者を輕蔑することとを戒めたるもの。

**キヨマンフシヨホーカイ** 憍慢不講法戒 四十八觀成の一。人を侮り法を輕んずることを戒めたるもの。

**キヨムシヨ** 敎務所 敎區の事務を執行する所。各敎區並に各開敎區毎に設置さる。その役員として敎務所長一名、參事三名以内、書記若干名をおき、敎務所長の就任は選舉制にして敎區會の議出、參事は敎務所長の推薦にして任期は共に二ケ年となす。

**キヨムシヨチヨ** 敎務所長 一宗敎區の最高理事者。開敎區を除く。その敎區會に於て選出し管長の任命によりて就職す。任期滿二ケ年、その敎區行政一切の事務を管掌するものとす。

**キヨヨ** 竟譽 →ノガミウシガイ(野上運海)

**キヨヨ** 經譽 →ダテイ(愚底)

**キヨライ** 敬禮 恭敬禮拜の略。佛及び法僧等を禮拜すること。

**キヨライゲ** 敬禮偈 釋迦牟尼佛を敬禮する文。敬禮天人大覺尊 恒沙羅智智圓滿 因圓果滿成正覺 住壽無念無未來 心地觀經序品に出づ。施餓鬼の時合鼓の前にこの偈を誦す。

**キヨライロクイ** 敬禮六位 施餓鬼會の時、十方世界の佛・法・僧・釋迦牟尼佛・觀世音菩薩・阿難陀尊者の六位を敬禮し誦する文。「南無常住十方佛 南無常住十方法 南無常住十方師 南無本師釋迦牟尼佛 南無大慈觀世音菩薩 南無啓敎阿難陀尊者」

**キヨランオージョ** 狂亂往生 四種往生の一。→シシユオージョ(四種往生)

**キヨリヨネンブツ** 敎念念佛 敎念念佛



へて佛を念せしむる意。觀經の中品下生の往生人は、五逆十惡を造りし惡人にして、まさに惡道に墮すべき重罪の者なるも、偶ま命終の時に善友來つて、種々に慰めて罪を悔ひ、勝妙なる法を聞かしたる内に佛を念すべきことを教ゆ。これを教令念佛といふ。然るにこの人は苦に逼められて、心に佛を念ずることを得ず。故に教へて口に佛名を稱せしむ。かくて十念念佛を稱へ、終にたやすく往生を得。これ所謂五逆往生なり。

キヨリヨイヤシャ 福良耶舎 觀無量壽經一卷の譯者。時稱と譯す。西域の人。三藏に通じ特に禪觀を以て專業となす。劉宋元嘉元年支那建鄴に入る。太祖文帝深く嘆賞を加へ、勅によりて鍾山道林精舎に住す。僧舎の請により、觀無量壽經一卷・觀經王華上二卷・觀經一卷を譯す。後江陵に移り、厥蜀に遊び、禪道を宣傳し後江陵に還りて寂す。壽六十。

キヨレキ 經歴 方蓮社十譽と號す。下總大須賀の人。少にして好學博覽野乘神史に通ず。十八歳にして小金東漸寺開學館歴につき出家し、後ち藤山に學び、長泉院普寂の講筵に侍すること千席に及ぶ。尋いで關西に上り掛錫、禪・密・天の諸宗を研鑽す。

京に大阪に、三河に、熊本に東海西走二十餘年四方に遊歴せしが文化七年寂。壽七十一。

キヨレンジヤ 敬蓮社 入阿又は入西とも云ふ。長州の人。初め成覺房につき一念義を學び、十二歳、建保二年宗祖の三回忌法要に於て聖覺の説法を聴き、一念義を確し鎮西に走り、二祖鎮西國師の熱懐に入る。安貞二年肥後住生院に於ける第一・第二授手印結集別時會に連り、嘉禎三年三祖と共に宗門の要義を相傳す。國師示寂後恩師の傳歴を編し、敬慕私淑の誠を著し師誦を録することありし等より推測せば聖護と共に國師膝下常隨給仕の愛弟にして、嗣法傳承者たること疑無し。國師滅後(入阿三十六歳)三祖入唐以前彼は鎌倉に下向して教化に従事せしことあり。彼は未だ鎮西に在りし頃或る時修阿と三心の體について論じ、修阿の門弟滿願社は、入阿に與し、國師の證明を得て修阿の義の謬なることを披露す。修阿面目を失ひ國師を恨む。依つて二祖は滿願社の行爲を惡みて破門せられし逸話を殘す。入阿の著類る多くすべて鎮西教義顯彰の光彩を放ち、三祖をして鎮西教學大成確保せしめし法勳者なり。弘安八年寂。壽八十三。(著書)觀經疏顯意鈔・行儀分要略記等若干卷。

キリカイシヤク 切刺笏 勸經の時に用ふる勸笏の一打方。經文の一句一打の割合に打つを云ふ。

キリク 毘 阿彌陀如來の種子、又觀世自在菩薩にも通ず。寶三 毘 伊 惡 四 四字合成の風吹けば、雲霧晴れて彌陀之現はる」とあり。

キリバカマ 切袴 差貫の代用をなす袴の一種。刺袴ともいふ。差貫の裾を切つて袴の形に作りしもの。その用途は本宗に於ては第二禮装として用ひられ、現行の制規では第一級より第三級までは白色、第四級第五級は水色扱白、第六級より第八級までは紫色、第九級第十級は水色無地と規定せり。

ギリユ 義御 徳川末期に於ける圓頓戒の復興者。その著淨土戒學綴略一卷は續淨第九卷に收められ今日に傳はる。この書は小松谷松林等に於て著者がその門下のため指示せしもの。

キリンシヨサイロン 麒麟聖財論(四卷) 元魏菩提流支造。麒麟聖財立宗論又は麒麟論とも云ふ。本書は聖財が二種二教の判教を建てし際依憑せりと稱するものにて、四

卷中前三卷には釋尊一代の教相を判釋し、後の一巻には淨土教につき六種の要義を出してその宗旨を明し、淨土の快樂を備えて撰す。類聚探支鈔(大支著)には六義を出して偽作なることを論證す。恐くは聖財の時代に造られしものならんか。

キントツ 吟達 百萬遍知恩寺第四十三代。常蓮社命阿然覺と號す。紀州の人。嚴宿に嗣法し、寶永四年六月江戸深川靈巖寺より轉昇。正徳四年五月、釋迦堂前に複刻寶陽阿彌陀經石を建つ。享保八年三月二日寂。壽不詳。

キントツ 吟達 百萬遍知恩寺第四十三代。常蓮社命阿然覺と號す。紀州の人。嚴宿に嗣法し、寶永四年六月江戸深川靈巖寺より轉昇。正徳四年五月、釋迦堂前に複刻寶陽阿彌陀經石を建つ。享保八年三月二日寂。壽不詳。

キンチュウロン 金鐘論 (1)大我著(1卷)。寶曆十一年七月、敬蓮の序と亮慶の跋あり、加ふるに舊梓田陸の厄に三分一を燒失したるを以て之れを補ひて刊行せる神阿の補闕跋を附す。内容は漢文體を以て天下名教に益せんがために、和漢の賢哲金鐘辯じ難きものあるを憂ひ、眞偽を古典古史に探り、忠臣孝子と盜臣賊子とを批判せるものなり。即

ち卷之上に亮輝・由文・夏高・湯武・放臣・夷齊・武賢・老子・孔子・顔子・莊子・孟子・惠修・顏原・道法の十五論、卷之下に聖皇・尊子・守屋・普神・源子・文信・正成・豐子・茂郷・國史の十論を收む。(2)一デンゴキンチュウロン(傳語金鐘論) キンテツ 吟徹 徳川中期の人。辨蓮社大譽と號す。俗姓武田氏、江戸に生る。幼にして本誓寺文賀に師事し、了學に法を嗣ぐ。初め本誓寺に住し、次いで淺草に九品寺を開き、又伊勢に白尊寺を創草して此處に住す。寛文七年二月二十一日寂。壽不詳。

キンブエン 禁父縁 觀經六義の一。阿闍世太子が父王を誦禁せしことが觀經起説の因縁となりしをいふ。一サンジヨロクエン(三序六義) キンモエン 禁母縁 觀經六義の一。阿闍世太子が其の母草提希夫人を七重の深宮に幽閉せしことが、觀世起説の因縁となりしをいふ。一サンジヨロクエン(三序六義) キンランエ 金襴衣 金襴を以て作成せる袈裟。この袈裟は釋尊の在世に於て橋邊彌此れを奉り、佛入涅槃に臨み、經法と共に迦葉に附屬せられしに始る。爾來宗僧も之れを受用す。我が國に於ては吉野朝頃より、高僧に對して朝廷より金襴衣を下賜されし例跡が



は報土往生は得られずとなし、吾等自身で唱ふる行を排斥す。眞宗教義に於ては要門・眞門・弘願門の三門を立て、西山の所謂行門を以て要門とし、観弘二門合して眞門とし、第十九願を要門、第二十願を眞門に依るとし、更に眞實弘願の一門を立て、之を第十八願に依るとす。此等の三門に修行信證の四法ありとし、就中、眞實弘願門の修行信證は、四法共に要眞二門に異なるとし、教を大無量壽經行を他力念佛、信を他力の深信、證を往生即成佛とし、具に三願、三機、三往生、三淨土等を分別せり。

**クキヨースンポー** 恭敬三寶 佛と法と僧との三寶を尊重し敬禮すること。恭敬三寶は佛道修行の第一歩であり、歸依佛、歸依法、歸依僧の三歸を以て表はされ、同時に佛道修行の全體を貫く根本精神でもある。三寶を恭敬すといふと雖も究極する所は佛を恭敬することとなる。

**クキヨージ** 弘經寺 (1)關東十八檀林の一。下總結城郡豊岡村。壽龜山天樹院と號し飯沼弘經寺と通稱す。應永二十一年羽生城主渡邊吉定、横曾根城主藤原經貞等檀越となり、歎譽良筆創立す。後ち勅願寺に列す。當寺は創草以來學匠相續して研學の宗徒雲集し俊足

の輩出すること數あり。寺門大いに榮ゆ。天正元年兵火にかゝり時の住職貞把一時兵亂を結城弘經寺に逃る。慶長八年照譽子學徳川秀忠の女天樹院の歸依をうけ中興す。明治三十九年五月、庫裡・大衆寮・大方丈・寶藏等烏有に歸す。末寺數十。

(2)關東十八檀林の一。下總國結城郡結城町西町。壽龜山榜嚴院と號し、結城弘經寺と通稱す。天正元年飯沼弘經寺兵火にかゝるや、住持國譽存把逃れて結城に到り庵居せるを、文祿四年結城秀康がその女松姫のため一寺を創して存把を開山とせるもの是なり。爾來徳川家の歸依厚く寺門大いに繁榮す。諸堂完備し當地方屈指の名刹にして末寺數十。寺寶亦た妙からず。

(3)下總三弘經寺の一。茨城縣取手町。開山歎譽良筆。應永年中草創。開基は大鹿城主にして代々香華院たり。中興照譽子學は學徳を以て化を布けり。利根川の流域に位し景勝希れに見る名刹なり。

**クキヨージ** 恭敬修 四修の一。クキヨースンポー(四修)。

**クキヨースンポー** 究竟大乘 淨土教が佛教中の至極の法門なることを意味する語にして無上至極の大乗教と云ふ意なり。究

に微妙の功徳あるをいふ。

**クサノウジ** 草野氏 鎮西(九州)鏡ノ社の大宮司草野二郎平平の一族にして、該地方の豪族なり。はじめ念佛を信せざりしが後ち深く鎮西上人に歸依して師の大檀越となり外護の力勝からずといふ。

**クサンジンギ** 具三心義(二卷) 隆寛撰。金澤文庫藏。建保四年二月作。本書は、山城宇治郡野郷に於て隆寛の自筆本を書寫せるものなるが何人の寫本なるや明かならず。その内容は上下二卷より成り、善導の散善義に明せる三心の一節を註釋しつゝ、自説を述べたるものなり。上卷には第一章惣明三心義、第二章別明三心義の中の至誠心迄、下卷には同章心釋より第三章惣結三心義を明す。その叙述中に於て幾多の問答を設けて彌陀佛五劫思惟の本懐たる三心具足正行を宣説す。本書は隆寛教義研究には必讀の要書なり。

**クシ** 空師 宗祖法然上人源空の略名。空の字を探りしもの。↓ゲンター(源空)

**クシ** 空師 宗祖法然上人源空の略名。空の字を探りしもの。↓ゲンター(源空)

**クシ** 空師 宗祖法然上人源空の略名。空の字を探りしもの。↓ゲンター(源空)

竟は梵語Sūtraの譯。最上・畢竟・事理の至極なり。辨阿耨多羅三藐三菩提の卷頭に究竟大乘淨土門の句あり、一宗の口傳に屬す。

**クケツ** 口決 ↓クデン(口傳)

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

竟に梵語Sūtraの譯。最上・畢竟・事理の至極なり。辨阿耨多羅三藐三菩提の卷頭に究竟大乘淨土門の句あり、一宗の口傳に屬す。

**クケツ** 口決 ↓クデン(口傳)

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

のうちに佛の御名を「かりそめの色のゆかりの」(上卷)「柴の戸にあけくれかゝる」阿彌陀佛といふよりほかに「極樂へつとめてはやく」阿彌陀佛と心は西へ、「月影のいたらぬさとほ」往生は世にやすけれど、「阿彌陀佛と十聲となへて」(中卷)「千とせふる小松のもとを」「おぼつかなたれがいひけん」「池の水人の心に」むまれてはまづ思ひ出ん、「阿彌陀佛と申すばかりを」「露の身はこゝかしこに」「これを見んおり」(下卷)等の歌にして、勸傳、誦經錄等に載する上人の歌詠として確實なるものをのみ注せしなり。

**クキヨースンポー** 空公 宗祖法然上人源空の異名。↓ゲンター(源空)

**クキヨースンポー** 空公 宗祖法然上人源空の異名。↓ゲンター(源空)

**クキヨースンポー** 空公 宗祖法然上人源空の異名。↓ゲンター(源空)

竟に梵語Sūtraの譯。最上・畢竟・事理の至極なり。辨阿耨多羅三藐三菩提の卷頭に究竟大乘淨土門の句あり、一宗の口傳に屬す。

**クケツ** 口決 ↓クデン(口傳)

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

**クケツソージョー** 口決相承 ↓クデン

九條の布を横に縫り合せて作りたる袈裟。一ヶサ(袈裟)

クシヨージンマイ 口稱三昧 口稱念佛三昧ともいふ。一心不亂に口に南無阿彌陀佛と稱すること。この口稱三昧は往生の正因なるも、利根のもの現生に於て三昧獲得することもあり、勅傳第七に「上人、專修正行としをかされ、一心專念功つもあり給しかば、つひに口稱三昧を發得し給き」と云へる是れなり。

グジョージ 弘淨寺 愛知縣海部郡津島町。白鳳山觀月院と號す。白鳳十年天武天皇の勅諭により、宮中奉安の聖德太子一刀三體作樂師如來の下賜を受けて草創、依つて勸願寺の待遇を受く。兵火に厄されること數次にして荒廢尤しかりしを、後ち坂西中興となつて淨土宗に改む。寺寶、慈覺大師作木尊阿彌陀如來、惠心僧都第三尊來迎佛等。

クシヨージョーギョー 口稱正行 五種正行の隨一たる稱名正行の異名。イゴシヨシヨギョー(五種正行)

クシヨージョーニン 空上人 宗祖法然上人の略名。宗祖の諱源空の空を取つて空上人と呼ぶこと古來弘く行はる。

クシヨージョーネンブツ 口稱念佛 觀念念

佛又は意念佛の對。口稱名號、口稱一行ともいふ。淨土宗正傳の念佛にして但だ口に南無阿彌陀佛と稱ふるをいふ。善導の觀經疏第四に「若し口に稱するには、即ち一心に彼の佛を稱す」と説き、選擇集には「第四の口稱を除くの外、讀誦等の四種を以て助業となす」と説く。これらは觀經の「令聲不絕其足十念稱南無阿彌陀佛」の文に本づく。而して口に南無阿彌陀佛と稱するを本願正因の正定業となす。

グシヨージョーノボンブ 遇小凡夫 善導の觀經疏支分分に、觀經所説の九品の往生の中、中三品は小乘の上善又は下善を修學する凡夫と稱して遇小の凡夫と稱せるをいふ。

クシヨージョーミョーゴ 口稱名號 一クシヨージョーネンブツ(口稱念佛)

クスハシムラ 楠橋邑 二祖關西上人の生誕地。筑前國香月庄楠橋邑(福岡縣遠賀郡香月町)。二祖の父は古川則茂、香月城主香月則宗の一族にしてその先祖は小狭田彦に出づ。景行天皇二十七年熊襲討伐のことあり。小狭田彦日本武尊に從つて勳あり、賞録として香月の地を賜ひ世に「香月の君」と稱せらる。香月莊後分れて十箇村となる。楠橋邑またその内に在り。

グゼイ 弘誓 (1)一切衆生を濟度して佛果を得せしめんとする佛菩薩の弘大の誓願。無量壽經卷上に「衆生の爲の故に弘誓の徳を被る」とあり。淨土門にては彌陀の別願をも弘誓と稱し、之を萬機普益の誓願の表と解せり。故に般若舟に「彌陀弘誓の力を蒙らずんば、何れの時、何れの劫にか發願を出でん」、往生禮讚偈に「彌陀の本弘誓願を信知す」等と云ふ。

(2)四弘誓のこと。一シグゼイ(四弘誓)

グゼイイン 弘誓院 愛知縣知多郡阿久比村。更養山長安寺と號す。傳教大師開創の勸願寺、兵火に見舞はるゝこと屢々、荒廢幾變遷す。寛文年間佐野九郎兵衛對正、靈夢を感じて出家し、堂宇を修理するをもつて開基となす。開山善譽。中興開山松樹代に新寺造營現在に至る。

グゼイシ 弘誓寺 近江七弘誓寺の一。滋賀縣時部郡村字下野。野村弘誓寺と通稱す。もと眞宗總持寺末寺なりしが後ち淨土宗に改む。

グセイノフネ 弘誓船 佛の大慈より發せる弘大の誓願は、一切の衆生を救済して悟りの彼岸に渡さんが爲なれば、之を船に譬へて弘誓の船と云ふ。

グゼイブツ 弘誓佛 我々衆生救済の誓願を持ちたまへる佛のこと。淨土一門に於ては専ら彌陀一佛を意味するを常途となす。

クゼセイシヨーニ 久世成章尼 二三四八

三時知恩寺門跡。尼衆學校初代校長。明治三十二年十二月二十三日京都市上賀茂子爵久世通照の女として生る。俗名具子、十七歳華族會館女子部卒業後一旦他家に嫁したるも、故ありて一男を成し三十歳離別となり、出家して吉水賢庵に就て得度、野上海運大僧正に就て傳宗傳成し、明治三十三年十二月京都市新町上立賣南入三時知恩寺の門跡住職となる。苦心勉學三十九年一月第五教區傳教講習會を終了し布教に堪能なり。明治四十五年四月宗制變更により新に尼衆學校が京都に設立せらるゝや初代校長となり、その間育英の外全國尼僧を統一して吉水會を設立指導に當りつゝありしが、大正十四年五月二十八日寂。壽五十七。

クーゼン 空禪 二二〇 知恩院第二十

代。俗姓、附法の師等不詳。師の在世中、知恩院回縁に稱る、時に後花園天皇永享三年、文曆の復興を隔つる百九十餘年。時の將軍義教は即時造營の命を下し、師も亦た人別一文あて四十八萬人を勸進する意巧を凝し、數年を経ずして舊觀に復す。寶徳二年四月二十八

日寂。壽不詳。

グククジユーネン 具足十念 十念を具足するをいふ。一ジッショシヨブツ(十聲稱佛)

グソクトクホンのガン 具足徳本願 四十八願中の第四十四願。他方國土の菩薩にして彌陀の名號を聞かんものを歡喜踊躍し徳本(六波羅蜜)を具足せしめんことを誓はれしもの。

グツツカイ 具足戒 二三四八

比丘及び比丘尼の受持すべき戒。略して具戒・大成とも云ふ。大別して、波羅夷(Parajika)、僧殘(naiika)、不定(anirya)、捨墮(sambhanga-pyattika)、單墮(Payattika)、波羅底提舍尼(patidhananyo)、學舍尼(sikkhama)戒(akhavaga-samatha)の八種とし、諸律は此等の戒數一定せず。四分律によれば、比丘に二百五十戒(四波羅夷・十三僧殘・二不定・三十捨墮・九十單墮・四波羅底提舍尼・百衆學・七波羅夷)、比丘尼に二百四十八戒(八波羅夷・十七僧殘・三十捨墮・百七十八單墮・八波羅底提舍尼・百衆學・七波羅夷)あり。具足と名づくるは、戒數に依るにあらず、之に由て一切の境界に於て罪を離れしむるの意なり。

グーダイノボンブ 遇大凡夫 觀經上

三品の往生人の機根について善導の觀經疏支分にはこの三者を共に大業相應の凡夫なりと解し之れを遇大の凡夫と稱せるをいふ。

クーダツ 空脱 二三四八 増上寺第二十

一代。字は靈無、辨華社業譽と號す。江戸の人。俗姓不詳。はじめ禪家に入りしも後ち隨意に佛法修學して宗要の精髓を會得す。推されて結城弘誓寺に入り、更に鎌倉光明寺に晉進す。寛永十七年、幕府の命により増上寺に轉昇、翌年召されて登城し幕府の露仰厚し。慶安三年五月隱退を願ひ、同年六月二十日寂。壽七十二。

クツ 履(香・烏) 麻儀式に用ふる履物。木履ともいふ。履とは「ハキモノ」の總稱にして其の種類又少なからず。現今では多く桐の木を彫つて作り漆を以て黒くぬりかためたものを用ひ、時には布をもつて製したるものをも用ふ。

クテイ 俱胝 三〇(三〇) 印度數量の名。拘胝・俱致・拘梨・拘致に作り、億と譯す。十一を十となし、十を百、十百を千、十千を萬、十萬を洛叉、十洛叉を度洛叉、十度洛叉を俱胝となすといふより見れば一千萬の數なるべし。但し時に十萬、百萬を稱する

事あり。

**グテイ** 愚底(1)三三三知恩院第二十三代。三河大樹寺開山。眞徳社勢。又善公と號す。室町中期の人。京邸に生る。了曉の室に投じて剃髮受業し、嗣法す。性隱逸を好み遊歴して三河の地を教化し、岡崎城主松平親忠の歸依を受け、屢々城中に參じて法を説き念佛口決す。又城主の請により伊田町にて職役者の爲一七日の念佛會を修し、ついで同地に大樹寺を建立し勸行意らす。永正元年珠琳に次いで知恩院第二十三世となり、在住七年、再び大樹寺に歸住し本宗と徳川氏との關係を結んで教團擴張に努むること多し。永正十三年四月寂。壽七十三。

(2) 室町中期の人。上總小金東兩寺開山。經書と云ふ。遠州の齋。十五歳にして小石川傳道院に修學し、後ち諸家の講肆に歴遊し、大いに法門を弘通す。壽不詳。

**クデン** 口傳 口頭をもつて傳授するの意。又、口授・口決・或は面授・口決相傳とも稱す。即ち兼録すべからざる秘法、又は作法等を口にて、師匠より弟子に相傳すること云ふ。往生論註卷上に「若し必らず知ることを須るんには亦方便あり、必ず口授すべし。之を筆跡に題することを得ず」と云へるか如

き、又五重授戒等に於ける口傳等はその例なり。又、獨り佛教のみに限る事なく、音楽、茶、花、和歌、武藝等にも、各亦その秘密を傳へ、この口傳を用ふるの風あり。

**クイーデン** 宮殿 *vihara* 佛菩薩等の住する堂閣の意。轉じて佛像等を安置する小寶殿を云ふ。印度、支那にて一般に行はれ、本朝にても早くより作られしもの、如く法隆寺寶財帳にこの名あり。宮殿の様式は必ずしも一定せざるも、莊嚴せる入母屋造の屋蓋に前面及び兩側に扉を有するを普通とし、或は略して扉のなきものもあり。

**クデンダイゲ** 口傳題下(一卷) 良慶述。續淨第一四卷所收。本書は、元亨四年、良慶明心がその資良山妙觀の間に對して、聖光房海長が末代念佛授手印の冒頭の句たる「末代念佛者、知淨土一宗義、修淨土一宗之行」の語意を解答し之を良山が謹受せしものその内容は、はじめ概説をなし次に問答を設けて聖淨二門の教相、淨土一宗の行を説明せり。

**クトー** 句頭 雜那の異名。トイナ(雜那)。

**クドクイン** 功德院 (1) 宗祖得度の靈跡。比叡山東塔東谷の地(現在法然堂のある

地)にあり。宗祖の師匠なる功徳院肥後阿國聖皇圓の住坊なり。

(2) 宗祖源空開創の現在の百萬遍知恩寺の前身。初め加茂の河原屋即ち今の相國寺の地にあり、後ち屢々轉じて現地に移る。トチオンジ(知恩寺)。

**クドクインアジャリ** 功徳院阿闍梨トチオンジ(皇圓)

**クドクジ** 功徳寺 長野縣諏訪郡北山村湯川。金台山と號す。天正年中、願覺榮海草創。戰國時代武田信玄後遠征の途次當寺に假本營を置き、時の住僧巖住に歸依し堂宇を再建して師を中興開山となす。

**グトクリユ** 愚禿流 トシンランギ(親覺義)

**グドーボ** 求道房 トエジン(惠尋)

**グドンネンブツ** 愚鈍念佛 佛の偉大なる願力を素直に信じて、一切の思慮を棄まざる條件に佛意に隨順する所謂單直仰信の念佛を云ふ。これ淨土一宗に於て依つて以て正意とする念佛なり。正直に指導者の勧めを信じて、念佛せば必らず往生すと聞いて何等私の計らひを挟まざる故其の當處に佛願佛智に契ふ。切紙十二通に「凡夫の當位は即ち單信を改めず直ちに本覺大信を行するなり、天眞

獨朗の形なり」といひ、往生記には此の念佛の機を淨土の正機とし、大五重道定略抄には「此の機は機法共に本家單信にして是れ即ち二尊三佛の本懐、宗門至極の機なるが故に宗門第一の機なり」といふ。されば淨土門に於て出要を希ふ者は、自己の智解を用ひず、自ら思ひ下りて無智の蒙に同じて直信實行すべきなり。臨西上人辨長曰く「設ひ螢火一分の智ありと雖も須らく癡闇無才の身と思ひ成すべし。何んぞ下愚の卑身を以て上智と誇て慢ぜんぞ」と、之れを愚愚機と云ふ。宗祖の法語に「聖道門の修行は智慧を窮めて生死を離れ、淨土門の修行は、愚疑に還りて極樂に生る」といへるは全く此の意なり。

**グドンネンブツダイイチノキ** 愚鈍念佛第一機 念佛往生の機に十六種ある中、

愚頭第一に擧げられたる機(愚鈍念佛の項參照)を云ふ。此に第一と云ふ意に就ては兩様に見られ得る。普通には列聖次第の最初の意若し宗旨の上より云へば種々往生の機に三十種ある中の第一位、正中の正と見る。元來往生記に念佛往生の機に就て廣く三十種を列擧せるも、其の意は如何なる様式の者が宗旨に叶ふかを知らしめ、且つ宗祖獨自の内證は何れにあるやを確證せしむるを所詮となす。若

し宗旨に立脚して其の正意の存する所を示せば、第一段(智行兼備)には第三を正と爲し第二段(義解念佛)には第一を正と爲し、第三段(持戒念佛)には宗の本意無く、第四段(破戒念佛)には第二を正と爲し、第五段(愚鈍念佛)には第一を正と爲す。此の中特に第五段愚鈍念佛第一の機を正中の正とす。問書に曰く「凡夫の情量資求にして見生直入の機なるが故に愚鈍念佛第一の機を正が中の正と取るなり」と。此の機こそ實に單信の大信、淨土の正機、二尊大悲の本意、發達入流、果海の深妙なり。これ釋迦・彌陀・大師上人の内證なり。此の書一部始終の證要も結局之れを窮明するにありと無題記に記す。前項參照

**クネン** 口念 トイネントシヨーンネン(意念と稱念)

**クノ一サツゲイ** 久納察問 トニニニニ朝

鮮國教の貢獻者。清蓮社眞誓心阿成功と號す。愛知縣愛知郡笠寺村の人。慶應二年九月生る幼にして同郡光顯寺に出家し、愛知教授卒業後、結城孤獨寺にて宗學を究め、明治三十年愛知縣西加茂郡稱讚寺住職となる。次で三十年二月開教使となり朝鮮に渡り仁川教會所主任となり大伽藍を創建し六年間勤職、明治三十九年太田教會所創立主任として轉勤、私

財を擲て數壇千餘坪を寄附し再び寺院を建立し勤職九年、大正五年六月再び仁川明照寺住職となり宗風の宣揚に盡す。朝鮮開教事業に盡瘁すること二十五年その功績著しとせす。大正十二年三月二十日寂。壽五十八。

**グフエガン** 供不廻顧 トエコーホツガ

ンシンシク(廻向發願心四句)

**グホツコンゴシ** 共發金剛志 道俗

共に金剛不壞の三心を發すとの意。善導の觀經疏の卷頭偈文に出づ。金剛志を厭欣心の堅固なること、解するは正しからず。

**クホン** 九品 觀經には上中下三輩に各の上中下の三品が開かれこれを總稱して九品といふ。即ち上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生の九是れなり。而して經文によればこれら各々は所修の行業、及び日時、來迎の儀相、生後の得益等に不同差異のあることが窺はれる。大經の三輩と、觀經の九品と關係は開合の相異にすぎざること、選擇集に詳述するが如し。

**クホンアンニヨ** 九品安養 トクホ

ンジョード(九品淨土)

**クホンイン** 九品印 九品淨土に位する彌陀の結ぶ印相にて諸佛同じからず。大指、

願指を塗じたるものを身印又は上品の印とし、大指・中指を塗じたるものを身印又は上品の印とし、三印の各の指を併前に安せば上生、胸前に置けば中生、左右の手を上下に安せば下生となる。各印を各の組合せて九品印を分別す。九品各の印を照す。

クホンイン 九品院 愛知縣額田郡岩津町。開山徳住。文政年中開創。安政年中求道中興。本尊は行基菩薩作なりと傳ふ。開基以來常念佛道場とし今日なほ日夜稱名の聲絶ゆることなし。

クホンオージヨ 九品往生 九品淨土に往生すること。クホン(九品)  
クホンオージヨキ 九品往生義(一卷) 良源述。淨全第一五卷所收。詳には極樂淨土九品往生義略註と云ふ。觀經の九品往生の文を天台教義に立脚して解せしもの。撰號は題下に「台山僧良源奉御略註」と記す。内容は、觀經所説の上品上生より下品下生に至る經文を詳解せるも、全然天台教義に依り義教の無量證據を多く引用せり。

クホンカイイ 九品階位 阿彌陀佛の極樂淨土に上品上生より下品下生に至る九種の階級差位あるを云ふ。蓋し往生人の心に淺

深あり、行の多少あり、時の長短あるに依つて九種の階位を設くるなり。  
クホンカイボン 九品皆凡 觀經所説の九品の淨土に往生する機根は、いづれも皆な淺薄生死の凡夫なりと云ふ意。古來九品の往生人の機根論について異説あり諸家多く九品の人を聖者と解するも、善導は古今指定の創見に立脚して九品皆凡の説をなせり。凡夫なる點に於ては九品何れも同等なるに九品の別を立つる所以は蓋し縁に遇ふこと異なるに依つて九品の差位ありとなす。又この九品を大別して上品三人は大乗に遇へる凡夫、中品三人は小乘に遇へる凡夫、下品三人は惡縁に遇へる凡夫なりとす。

クホンカクオ 九品覺王 九品淨土の覺王、即ち阿彌陀佛をいふ。  
クホンキ 九品義 ↓クホンジリユ (九品寺流)

クホンキヨゴ 九品行業 觀經所説の散善三福の行は細別して九品に分れるが故に九品行業ともいふ。↓サンブククホン(三福九品)クホンシヨキヨ(九品正行)

クホンサイバン 九品細判 觀經に説かれたる上品上生より下品下生までの九品の

一々に就て、道理上より又各の九品あるが故に九九八十一品となる。然るに又この八十一品に各の九品あり、此の如く次第に追つて無量の品類ある筈なり。蓋し機根に多類あり、行に淺深あるが故にかく細別されるものとなす。

クホンサベツ 九品差別 衆生の機根に差別あれば所修の行業に亦差異あり。從て所求の淨土にも九品の別ありと説くを云ふ。良忠觀經散善略註一に「問ふ、九品差別は機に依るか行に依るか。答ふ未だ問意を得ず、機に不同あるが故に行に不同あり、差別を問ふ事何の意ぞや、但し上品は同じく遇大の凡夫なれ共、行の不同に依て上品とは成れり。中下六品も例へて知るべし」とあり。

クホンジ 九品寺 宗祖門下覺明房長西の創する所。九品の阿彌陀佛を安置せしより九品寺と稱せりと傳ふ。洛北葛野郡高橋(現今北野神社の北方平野神社に至る途中、紙屋川に架せる橋)附近にありしも、今は廢絶せり

クホンジギ 九品寺義 ↓クホンジリユ(九品寺流)  
クホンシヨキヨ 九品正行 觀經の九品に明す正行といふ意。九品の中には種

種の行が明されてゐる。即ち上品には三種

があり、慈心にして殺さず諸の戒行を具すること、大業の經典を讀誦すること、六念を修行すること等なり。上中品は大業經典の義意を知り、深く因果を信じて大業を誇らざること、上下品は因果を信じて大業を誇らず、但だ無上道心を發すること、中上品は五戒、八戒齋等の戒戒を受け持つこと、中上品は一日一夜八戒齋、沙彌戒、具足戒等を持つこと、中下品は父母に孝養し、世間の仁慈を行ふこと、下品の三人は諸の罪を犯せし惡人が命終の時善友に遇ふて、教を受け念佛して往生する有様等を明す。要する所九品は、諸善萬行を修行して往生する有様を示せるものにしてこれが九品の正行と云はれる。↓サンブククホン(三福九品)

クホンシヨド 九品淨土 九品安養、九品淨土、九品蓮華ともいふ。觀經無量壽經に往生人が彌陀の淨土に往生する場合に、その行者の修するところの行業の優劣等に隨つて、淨土に九種の階位ありと説く。即ち經文によるに上品上生・上品中生・上品下生の上三品、中品上生・中品中生・中品下生の中三品、下品上生・下品中生・下品下生の下三品の九の階位に相應する淨土を明し、之れを九品淨土とい

ふ。

クホンジリユ 九品寺流 覺明房長西所立の教義。九品寺義・九品義等ともいひ宗祖門下四流又は淨土十五流の一に數へらる。派祖長西は十九歳にして出家し、法然上人に就て淨土教を學び、上人の被使諸方に遺學して止観及び禪學を修め、遂に一派を開創多く洛北の九品寺に住して、彼の所立の義を弘傳せしにより彼の門流を九品寺流と稱す。又その所説の内容より諸行本願義ともいはる。その立義は、念佛も諸行も共に或は念佛を好むものゝために、或は諸行を好むものゝために平等の慈悲心より彌陀が本願の行として誓はれしものなるが故に、何れの行によるも往生は可能なり。その證據として關文第二十篇に「係念我國諸佛本」と誓はれてあると説く。然しながら念佛は勝本願、諸行は劣本願なりと主張する點がやゝ異つており、九品の差別はこの世の修行の有様で、淨土に往生すれば一味齊同なり等と主張せり。この所説に對して良忠は決疑鈔並に東宗學等に於て熾心に攻撃す。近時、相州金澤文庫より九品寺流に關する要書多數發見さる。もと宗祖門下の淨土四流の隨一たりしも後ち幾程もなく法燈を絶ち、現在は僅かに二、三部の長西の

著書中にその教説の面影を止むるのみ。

クホンシヨキヨ 九品寺流長西教義の研究 (一卷)石橋謙道著。本書は先年金澤文庫に於て發見せられし九品寺流の古鈔本を研究し、從來知ることを得ざりし長西教義の諸方面を社會に紹介し、更に新に發見せられた專註二修義、諸行本願義、二十願決疑問答、總別二願鈔に解説並に略解を施し、又附録としてそれ等四書の原文が收めてあり、長西教義を研究する上に於て好個の資料なり。  
クホンセツソ 九品説相 觀經所説の上品上生より下品下生に至る九品の一々に就き修因・往生・生後得益を詳説することを云ふ。即ち善導の散善義に説ける如く九品各品の何れも十一門義に順じて説示せるが如きをいふ。  
クホンネンブツ 九品念佛 念佛に於ける上々・上中・上下・中上・中々・中下・下上・下中及び下々の九等級をいふ。この中に上盡一形の念佛より下至十聲一聲の念佛を概括す。觀經下三品にのみ念佛を説き前六品に之を説かざるも理として念佛は九品に通涉すとみるを正流の解となす。觀念法門に「日別に一萬遍佛を念じ亦時に依て淨土の莊嚴の事を經

讚すべし大に精進すべし。或は三萬六萬十萬を得る者は皆是れ上品上生の人なり」と云へるは是れ上品上生の念佛といへるものなり。

クホンノオージユ 九品の横堅 觀經所説の下三品に明す念佛を以て當品の受法となすか否かに就き横堅に約して九品の受法を論ずるを云ふ。即ち横に約すれば念佛は通じて九品の受法となり、縦に約せば一稱一念十聲の順次を以て下三品の受法なりとす。受法とは各往生の業に充つるものを云ふ。

クホンヘンジドーイ 九品邊地同異 疑心往生人の生ずる邊地は極淨淨土の九品中に含るゝや否やについての論題。而して邊地は九品の淨土と別なりとするを宗義の所説となす。西宗要三に「爾らば云ふ所の邊地とは極樂世界の九品の内とかせん、はた外なりと云ふべきか。難じて云く、若し内と云はば道理然るべからず。極樂世界は是れ大樂善根の境、究竟如虚空の刹なり。同じ九品の内に於て善惡勝劣ありとも邊地あるべからず」と云へるものは是れなり。

クホンライコーブツ 九品來迎佛 觀經に諸種の差別あるが故に極樂往生にも亦九品の相異ありとの觀經の説相に依り、阿彌陀佛の來迎の相に九品を分ちたるを云ふ。當麻巖隱慧俊、七歳にて出家、母と共に各地に遊學す。日に千偈を誦し阿毘曇、六足、増一阿含邊せざるなく、亦餘教を以て轉法輪經、四韋陀、五明諸論、外道經書、陰陽星算等を博覽して悉く通曉す。その名聲流布するに及び前秦建元十八年符堅は呂光等を遣して迎へしむ。光慧慈及び烏耆諸國を討ち羅什を得、その年尙尙は少きを見て強ひて慧慈王の女を娶し犯戒せしめたり。符堅氏滅亡ののち後秦弘始三年十二月姚興國師の禮を以て迎ふるに及び長安に來たり得業經を譯出せり。聖年坐禪三昧經、阿彌陀經等を出し、三十五部二百九十七卷を傳譯せり。人となり神情朗徹傲席にして群を出で、篤性仁厚、汎愛を心とし己を處うして善く誘ひ終日倦むことなく、又漢語を能くし音譯流便を主とす。門下三千餘人と稱しそのうち關中の四傑(道融・僧觀・僧肇・道生)四英(曇影・慧觀・道恒・曇濟)の八を什門八俊と稱しその高足たり。後秦弘始十五年四月十三日長安大寺に寂す。壽年七十。

クミ 組キョーク (教區) クミチヨ 組長 組長は教區事務を分擔すると共に、組内寺院の監督に任ず。任期四箇年。組内寺院の公選に依り管長これを

曼陀羅下邊の九品來迎圖の如き是れなり。クホンレンゲイ 九品蓮臺 觀經の説に依るに極淨淨土には九品の差別があり、行者の行因に隨つて各の九品蓮臺に坐す。故に九品蓮臺といふ。又行者の臨終に佛聖衆等蓮臺を持つて行者を來迎す。行者に九類あるが故に蓮臺も亦九種となる。即ち上品は金蓮臺、中上品は紫金臺、中々品は七寶蓮臺、乃至下上品は寶蓮臺、下中品は蓮、下々品は金蓮臺なり。クマガイ 熊谷 埼玉縣熊谷市。熊谷次郎直實(龜生房)の領地にして、直實の父直貞が曾つて此地にて大熊を退治せしより此の名ありといふ。次項を見よ。

クマガイジ 熊谷寺 熊谷市仲町。蓮生山と號す。熊谷直實こと蓮生房念佛往生の遺蹟。元文二年、宗祖法然上人の弟子熊谷蓮生房故里武藏國熊谷郷に遷り蓮生庵に起居して念佛す。天正年中熊谷白道當寺を中興して熊谷寺とし、徳川家の保護を蒙り寺門隆盛なり。近時回祿に罹ることありしも間もなく再建して舊觀に復す。寺寶十數點。クマガイニユードーナオザネ 熊谷入道直實 蓮生房、法力房等と號す。俗姓は平

クミナイジイン 組内寺院 組寺院とも云ふ。一宗行政區域たる教區を細別して組となし、その同一組に屬する寺院を組内寺院といふ。組内寺院は所屬本山の如何を問はず組費を納入し組長これを統へ參務これを補助す。グニョーチヨ 共命鳥 *Turdus japonicus* 善哉善哉に作り、命命鳥、生身鳥と譯す。極樂の鳥の名。この鳥は古來、人面鳥身、兩首一身の鳥といはれ、其の妙聲を以つて有名なり。實は印度北方の山地に棲む雉子の一類なりといふ。クームソームガンザンマイ 空無相無願三昧 *Samantapāsādikā* (三三昧) グモ 愚蒙 一は三 江戸祐天寺の學匠。字は祐海、俗姓新妻氏。奥州岩城の人。祐天大僧正の甥。幼にして祐天僧正の下に侍し常隨意らず、後に増上寺に遷りしも祐天示寂の後は其の遺志を繼紹して祐天寺に不斷念佛を修し証嚴經々四十餘年一日の如く、爲めに走獸飛鳥もその化を蒙れりといふ。常に弟子を説めて、佛子、家を出で佛門に入る已來、一粒一滴、如來毫相の一分、十方檀越の信施にあらざるなし、汝者みて佛教に準じて淨業

を修し、信施の恩を報ずべし、若し然らずんば殃咎立ちどころに至らんと。以てその殷重の高徳知るべし。祐天寺に住すること三十有餘年、殿堂・坊舎の壯觀悉くなり、寶曆九年法器を資祐全に附し、同十一年正月二日念佛の聲と共に禪定に入るが如く西化す。壽七十九。(著書) 威儀略記、無量壽讚等。(傳) 續日本高僧傳卷十一。クモツスケ 拘物頭華 *Kumotsu* 拘物頭は、睡蓮の一種。拘勿頭、拘牟頭、拘摩那矩母那、拘牟那、句文羅、拘某陀等に作り、地喜と譯す。花莖に刺あり白或は赤色の花を著く。大經に出づ。クイヤ 空也キョーショ (光勝) クイヤジ 空也寺 京都市下京區寺町通佛光寺下ル。空也上人光勝開基。天祿三年の草創。元と錦小路西洞院に在り、天正十九年現地に移建す。クイヤドー 空也堂 京都市中京區增樂師通油小路西人。時宗。紫雲山極樂院光勝寺と稱し、初め三條橋筋にありし故橋筋道場とも云ふ。天慶年間空也光勝の法弟定盛が本寺を建立し、空也を開基となす。毎年十一月三日空也節を修す。クイヤホンブツ 空也念佛 念佛又は

氏。武藏國熊谷の住人熊谷次郎直實の子。源賴朝の部下にして朴訥貞剛剛く探動を爲せしも、建久三年歳せられて自ら髪を斷ち、上洛して安房院の聖覺法師を訪れて出世の要道を問ふ。法師教へて法然上人に歸せしむ。法然上人の易行念佛の深旨の垂化骨髓に徹して直實歡喜擗く處を識らず、爾來上人に供奉して淨業を勵むこと一方ならず。平生一行住坐は倒踏するを例とせしは詔く人口に膾炙するところなり。後に郷里熊谷に住して淨業意ならず、建永元年八月同國村岡市に高札を掲げて明年二月八日に往生すべきことを預告す。時期到るも死せず、乃ち衆に告げて曰く、「我れ故ありて遲滯す、然れども九月四日には必ず死せん」と果して言の如くなり傳ふ。壽不詳。(傳) 勅傳二十七。クマラジユ 鳩摩羅什 *Kumarajiva* 支那譯經家中の第一人者。鳩摩羅什、兜摩羅時婆、鳩摩羅婆婆、什婆、兜摩羅什、鳩摩羅時婆、鳩摩羅婆婆、兜摩羅時婆に作り、略して羅什或は什とも云ひ、童壽と譯す。父は鳩摩羅炎その家世々國相たり、出家して龜茲國に來り國師となる。その王妹善達鳩摩羅炎を見るに及びて心動き自ら請ふて妻となり後ち羅什を生む。羅什容貌岐

和讃を唱誦しつゝ、証或は太鼓を叩き、拍子  
を合せて踊るを云ふ。平安の頃空也上人の創  
始する所なるが故に此の名あり。又踊念佛、  
踊念佛、歡喜念佛、鉢叩と稱す。これ己が念  
佛信仰の喜を踊る事に依りて表現し、又一傳  
道方法として修するものなり。念佛踊の無源  
は無量壽經卷上に「迦斯光者、三垢消滅、身  
意柔順、歡喜踊躍」の文意に緣由せるものな  
らんか。この踊念佛は交那に於ては宋高僧傳  
四、三國遺事第四等に既に之に類する語を爲  
せしことを記するも、我國にては、延喜・天  
曆の頃、京都にて空也の鉢叩念佛をその源と  
爲し、空也に次で弘安九年信濃にて一過か踊  
躍念佛を行へり。その後この行事は僧俗の別  
なく諸方に行はれ後ち眞宗門徒間にも流行せ  
り。後世に至つて、この空也念佛の分派とし  
て京都方面にては六寶念佛、燈籠踊となり、  
東京方面にては泡齋念佛、葛西念佛、鹿島踊  
等となれり。

クヨイ 供養 供養の義

供養、供給、或は略して單に供とも稱す。即  
ち飲食、衣服等の物を以て佛・法・僧の三寶及  
び父母・師長・亡者等に供給し、之を養養する  
を云ふ。所施の物に就ては多種の分類あり。  
善見律毘婆沙第十三には飲食・衣服・湯藥・

房舎の四種を明す。これ所謂四事供養にして  
施物の最も顯著なるものなり。又、法華經第  
四法師品には、華・香・瓔珞・末香・塗香・燒香・  
新蓋・幢幡・衣服・伎樂の十種供養を設けり。  
尚、供養を理供養と事供養とに分ち、或は身  
分供養と心分供養に分つことあり。供養儀式  
釋氏要覽卷中等に詳し。

クヨイゲ 供養偈 供養をなし又供養を

受くる時に唱ふる偈文「能施所施及施物 於  
三世中無所得 我等安住最勝心 供養一切佛  
法僧」心地觀經序品に出づ。經文は第四句を  
「供養一切十方佛」とす。この文意は一切三  
寶に最勝心を以て供養せんと念ずるものなる  
も又轉用して供養を受くる時に唱ふ。

クヨイシヨ 愚要鈔(三卷) 西山派光

雲明秀述。本書は著者が曾て説法したる旨趣  
四十七章を録せしもの。淨土教の根本的立  
場、淨土教より見たる一代傳教及び諸佛諸神  
の問題、淨土教の立場より會通せる孔孟老莊  
淨土教の體道、淨土教の祈禱等を解決したる  
西谷一派の寶章となす。後記に「此三卷鈔は  
往生極樂の道を信ずる在俗の尼女等の初心の  
人の爲に見易く知り易からしめん爲に假名字  
を拾ひ大和語を集めて六八の韻数を表して愚  
意の及ぶ所を問答し置者也」云々とあり。以

て作者の懇切なる心情が察せらる。  
クヨイシヨブツのガン 供養諸佛願  
四十八願中の第二十三願。極樂淨土の菩薩は  
願陀の威神力をうけて自由に無量無數の他方  
諸佛に供養することを得せしめんことを誓は  
れしもの。

クヨイトー 供養塔 供養のために造

れる小型の塔をいふ。支那にては六朝時代の  
後半期に小形の金銅像を造り、隋唐の頃は觀  
佛を造つてこれを諸寺に納めて供養とせり。  
我が國にては奈良朝時代に成れる觀佛の遺品  
少なからず、特に觀塔と稱し、土の素焼にて  
二・三寸の塔を造り、五穀豊穰を祈れりといふ  
これ供養塔の一種なり。天平寶字八年に木造  
百萬の小塔を造り、當時十大寺に分置せしが  
多くは佚亡し、法隆寺のみは今に傳存す。平  
安朝以降は供養塔造立の風習漸次廢れたるが  
如し。印度・緬甸、暹羅等にては近代に至り  
ても尙ほ造塔の習盛んに行はる。本宗にては  
古來板塔婆を使用す。先祖の遺善供養の爲に  
墓に建つを通例とす。トローバ(塔婆)

クリヤテラ 厨師 禪圓縣三井御御井

町高良山麓にあり。厨山聖光院安養寺と號す。  
厨師は俗稱なり。開山鎮西上人。厨氏の創建  
にかかる。元久年中府地の地頭厨氏篤く鎮西

上人に歸依し寺を建て上人を請す。上人爲に  
千日如法別時念佛を修し道俗を化益せりとい  
ふ。現今は筑後美禰寺の末寺なり。

クロダシントー 黒田眞洞 三三三

治時代の傑僧。安政二年生る。文久二年八歳  
にして三峯山學寮主眞我に就て出家す。福來  
嶽山に學ぶ傍ら峯地三溪、林鶴堂に就て儒學  
を受く。天資謙謙、敏達倫を絶し、明治五年  
増上寺温善大宜に就て宗戒を受け、同十二年  
策を負ふて京都に入り智積院弘現、泉前寺旭  
雅に性相學を、三井寺敬徳に戒律を、眞言宗  
和田智滿に大小戒律を學し、更に立誓の會下  
に參じて宗義の題奥を究む。同十七年歸東し  
慈忍室に寓す。次で同十八年越智專明の跡を  
受けて東部大學林主幹となり萬里小路照道と  
齊謀し學問を更革し後世宗學本校の基礎を作  
る。同十九年東西線鉄道の紛争起るや宗學本校  
の創置に力を致し二十年之が設立を見るや校  
長、學監を兼ねて教學を盡す。同三十年伊  
達靈堅に代りて執柄となる。宗務職制を改革  
し、行政區域を廢合し新に八大教區を創置す。  
又教育制度を刷新し専門高等の二學院及八教  
校を置く。同三十三年執綱職を辭するや傳  
道講習院長兼講授となり、次で三十七年高等  
學院を改めて宗教大學とするや學長となり淑

クロダニ 黒谷 京都上京區岡崎神樂岡

の東西鹿谷の西にある丘陵の稱。淨土宗四箇  
本山の一たる金戒光明寺あり。叡山の元黒谷  
に對して新黒谷と稱す。トコンカイヨミヨ  
ージ(金戒光明寺)

クロダニゲンクーシヨーニンデン 黒

谷源空上人傳(一卷) 安居院沙門也。黒  
谷上人傳、十六門記圓光大師傳、十六門記と  
も云ふ。本書は法然上人傳記中恐らくは最古  
のものに屬すべく宗廟滅後間もなく撰述され  
しもの、如し。その内容は十六章門より成る  
即ち(一)託胎前因緣門、(二)出胎已後  
利益門、(三)最初入學傳法門、(四)離親  
登山學行門、(五)受戒樂求開悟門、(六)  
發心離山修持門、(七)披覽一代聖教門、  
(八)信修念佛往生門、(九)善導來現授教

徳高等女學校の校長を兼職す。爾後四十五年  
退職に至る迄常に福徳に參じ、宗治に貢獻し  
教學に勤勞す。其の職に在ること二十六年、  
宗制多年の宿弊を一掃したる宗憲の制定と、  
宗學復興の源流たる教育制度の創設は實とし  
て宗史の一頁を劃するものなり。晩年は東京  
赤坂法安寺に入りて後進の教導に努む。大正  
五年一月二十五日寂。壽六十二。歿後其の功  
により大僧正を贈らる。

クロダニ 黒谷 京都上京區岡崎神樂岡

の東西鹿谷の西にある丘陵の稱。淨土宗四箇  
本山の一たる金戒光明寺あり。叡山の元黒谷  
に對して新黒谷と稱す。トコンカイヨミヨ  
ージ(金戒光明寺)

クロダニゲンクーシヨーニンデン 黒

谷源空上人傳(一卷) 安居院沙門也。黒  
谷上人傳、十六門記圓光大師傳、十六門記と  
も云ふ。本書は法然上人傳記中恐らくは最古  
のものに屬すべく宗廟滅後間もなく撰述され  
しもの、如し。その内容は十六章門より成る  
即ち(一)託胎前因緣門、(二)出胎已後  
利益門、(三)最初入學傳法門、(四)離親  
登山學行門、(五)受戒樂求開悟門、(六)  
發心離山修持門、(七)披覽一代聖教門、  
(八)信修念佛往生門、(九)善導來現授教

門、(十)勸進念佛往生門、(十一)嚴下教命造  
書門、(十二)頭光現顯本地門、(十三)法罪斷  
洛利益門、(十四)臨終念佛往生門、(十五)後  
後願利益門、(十六)沒後遊樂利益門の十六  
章に分つて宗祖の一代記を述ぶ。十六門記と  
いはる、はこの章數に因めるものなり。この  
書の作者については異説あれども餘他の法然  
上人傳に比して比較的古今從つて又置入少き  
所より宗祖傳研究の好資料の一に數へらる。  
クロダニコホンカイギ 黒谷古本戒儀  
(二卷) 續淨宗九卷所收。本名を授善薩戒儀  
則といふ。圓頓善薩戒を授くる作法儀則を記  
述したるもの。四師の所謂中略の三種戒儀  
の中、中戒儀に相當す。その内容は十二門を  
分ち、大體は荆溪滿然の善薩戒儀を體則とせ  
るも、文句は著しく淨土宗的なり。その文中、  
第七正受戒門の下に相傳戒と發得戒とを分ち  
相傳戒は圓頓戒の相傳儀講を擧げ釋尊より二  
十四代の淨土宗了譽より新に受者に授くとい  
ひ、發得戒は三乘淨戒となすが如きは他書に  
見えざるところにして、更に天台の觀心法を  
除くが如きその特色なり。  
クロダニコミヨージシヨ 黒谷光  
明寺誌要(一卷) 淺井法順編。淨全第二〇  
卷所收。本書は本宗四箇本山の隨一たる京都





托し此地に隠遁し述回口訣抄二巻を撰せり。時に尋ね來りし了譽聖師の法器たるを知り淨土の教相行儀を相傳せられし故地なり。而して淨蓮寺は中古廢れたれば天文年中日蓮宗日徳鹿島田村に移せり。今の日蓮宗淨蓮寺是れなり。

グンギロン 群疑論 ↓シヤタジヨード

グンギロンキカイ 群疑論疑芥(三卷) 長西撰、(推定)金澤文庫藏。鎌倉時代の古寫本。本書は撰者名を缺く殘缺本なれども、その内題に淨土疑芥 群疑論疑芥とあるより長西撰なること推定さる。一部八卷の中、現存するものは第六・第七・第八の三卷三冊のみ。法然門下の群疑論末書として珍重さるべきものなり。

グンギロンケンモン 群疑論見聞(七卷) 良忠撰(推定)良聖記。金澤文庫藏。建長八年寫。本書は、良忠の門人良聖が常陸同車師庄小倉郷に於て書寫せる群疑論の註釋書にして、良忠の講義の筆録ならんかと推定さる。法然門下に於ける群疑論末書にして現存せるもの、中最古のものなり。

グンギロンタンヨキ 群疑論要記 ↓シヤタジヨードグンギロンタンヨキ(群

淨土群疑論要記) クンコー 調公 ニハカ。知恩院第二十四代。群蓮社發善と號す。室町中期の人。了譽に師事して法を嗣ぎ三河岩津信光明寺第二世、同國御津大興寺を中興して岡崎城主松平親忠の息長親の賜依を受く。永正八年愚庵に引繼ぎて知恩院第二十四世となる。後柏原天皇永正十四年八月二十八日、知恩院第三度の回鑿に擧るや、師直ちに助縁を四方に求めて復興につとめ、同年十二月東福寺内萬壽寺の堂宇を移して、岡崎陀堂を營構す。永正十七年八月寂。稱不詳。

グンタイフキヨイ 軍隊布教 ↓フキヨイ(布教)

クンドク 訓讀 音讀の對。通常の場合には經典は音讀するものなるが、特殊の場合又は個人の意義に任せて漢譯經典を和譯して訓讀することあり。宗祖法然上人が阿彌陀經を訓讀せられしこと勅傳に見ゆ。

グンモイ 群萌 一切衆生の異名。草木の芽を生ずるが如く、衆界に群がり生れたる多くの衆生を云ふ。群生と云ふが如し。

ゲイカン 問答 二三六七。徳川中期の人。濱邊社學西阿と號し、又一呼と云ふ。江戸の人。俗性は松井氏、初め小石川傳通院に留學し、聖書を究め、後ち三嚴寺、光明寺増上寺第三十九代となり、檀信の賜依愚仰甚だ厚し。享保十一年寂。壽八十。

ゲイガンジ 慶嚴寺 長崎縣北高來郡諫早町。常樂山と號す。享德年中禪道創草。初め同地小路にありしを慶長年間今の地に移す。延寶三年堂宇祝融に見舞はれ幾干もなく再建せり。

ゲイケイ 荊溪 ↓タンネン(湛然)の異稱。古來先德の著書中に於てよく使用される、呼稱なり。↓シヨウゲイ(聖賢)

ゲイコイ 同公 淨土宗第七祖了譽聖師の異稱。或は聖公ともいひ、古來の學者間に最もよく使用されし呼稱なり。↓シヨウゲイ(聖賢)

ゲイシカシヨイ 京師和尚 善導大師の異名。善導は、高徳無比、ときの唐京師たる長安に住して専ら淨業を勵みしか故に人呼んで京師和尚といへり。↓ゼンドー(善導)

ケイジク 慶竺 ↓ニハカ。知恩院第二十一代。行蓮社大興と號す。武江日比谷の人

ゲアンゴ 夏安居 もと印度佛教々圖に於て毎年陰曆四月より六月まで雨期の爲進行困難なるにより、この間僧侶は一室に會して或は法話を聞き或は同志間に於て質疑討論等をなしたるをいふ。支那、日本に到るに及んでその形式を採用して毎年初夏宗學研究の集をなすを例となし各寺に於てもこれを開催す。特に知恩院、増上寺等の大寺院に於けるそれは一宗教學の最大行事として盛大を極めたり。↑アンゴ(安居)

ケイ 磬 勸行法要の際用ふる法器。古は扁平なる堅き石を架し懸けて打ち鳴らせしもの、後ち架の頃に銅磬を作るものあらはれその後次第にこれが世に行はれるに至る。其の形は一定せざるも多く板様にて中曲り、兩端稍々垂下り中央に鑿座あり、磬架に掛け置木を以て之を打つ。打ち方は磬に同じく二下三下とす。又磬を唐音で「キン」と訓むことあるも、この時は銅製の法器を指す。↓キン(磬)

ケイジュン 慶順 鎌倉光明寺第七代。信蓮社聖譽と號す。常譽良時が就て受業し、長祿元年應訓をうけ、後ち其席を嗣ぎて光明寺主となる。寂年並壽不詳。

ケイジヨイ 磬杖 磬を打つ杖。

ケウニン 希有人 念佛行者の讚稱。好人、妙好人、最勝人といふに同じ。念佛の法門は易行の大道といはれるが實は易往而無人の難信の法であり、この難信の法を信受する人は希有に屬するが故に希有人といふ。善導の觀經疏散善義に出づ。

ケイイブンルシユイ 涇渭分流集(一卷) 聖賢述。淨全第二卷所收。應永六年作。本書は、心不生妄即ち三心を具するも往生せずと主張せる記主門下の道光と同門尊觀の弟子明心の二師の中特に明心の説を對破されしもの。涇水は濁流、渭水は清澄の意なるを以て涇渭分流は邪正を簡別するの意。本書は作者五十九歳の著にして、作者は先に心具決定往生義を作つてその非義を論駁せるも、明心所述の口筆を入手し、今更その新義に書き、改めて本書を撰述せり。要するに本書は先の心具決定往生義の補遺とも云ふべきなるも、相傳の正義を更に瞭にせしものなり。

ケイサンエ 慶讃會 慶賀讚歎の法會或は慶讃とも作る。落慶と同義にして、すべて事の成就せることを慶賀し讚揚する法會を云ふ。現今、入佛供養等の儀を稱して慶讃會或は落慶式と名づくるも、亦その意なり。↓ラツケイシキ(落慶式)

ゲイカ 院下 管長の敬稱。院座下の意は院座即ち獅子の屬なり。獅子座は佛菩薩の坐すべき座狀なるを、後世轉じて一宗の高徳領袖を尊稱するに用ひ、院座下とは其の座下に拜伏するの意なり。今は主として各宗の管長の尊稱として用ひらる。

ケエホー 假依報 眞依報の對。觀經十六觀中はじめの二觀たる日觀、水觀に對する善導の呼稱。善導の觀經疏に依れば、觀無量壽經の正宗分に十六段ある中、第一の日觀と第二の水觀の二觀を假依報と名づく即ち此の二は、此土に於ける日輪の光明相、水の水平相、水の映徹相を觀じて、淨土に於ける依正二報の光明、瑠璃地の映徹相を觀ずる豫備となす。故に此の二を假依報と名づく假依報は寶地、寶樹、寶池、寶樓の四假依報に對するものなり。

ケカイイ 華開院 京都市上京區下立賣御前通西入ル。龜山天皇の皇子守良親王自ら法蓮和尚と稱し、御殿を寺となし開基となり給ふ。もと大宮五辻にありしが中頃今出川の北に移り、更に現在の地に移さる。初め天台宗なりしが弘安年間淨土宗に改む。本尊阿彌陀如來は善覺大師の作にて、もと坂本念佛堂に在りしものにして、眞如堂の本尊と同木なりといふ。

ケカイジ 華階寺 大津市菟原町。往古、秀郷修學のために此の地に居を構へ三井寺に登つて顯密二教を研鑽せし舊蹟なり。その後舊蹟廢絶しむるが、足利十一代將軍義澄の次男出家して禪覺西念と號し、父義澄

の菩提のため天文元年この地に一字を建て、義澄の法名旭山大居士に因んで旭高山と稱す。

ケカイのチソク 華開蓮運 念佛行者が淨土に往生して後に、蓮華の開く時間に蓮の差別あること。觀經九品の設相に依るに蓮の上下に從つて、淨土に往生して後に蓮華の開く時間に蓮の異りがある。即ち上品は往生すれば直ちに華開き、上中品は一夜を経て華開き、上下品は一日一夜を経て華開き、中上品は七日を経て華開き、下上品は七日を経て華開き、下々品は十日を経て華開きと説く。これは一應因果の律に從ひ、上位の人は自ら善根功徳が勝れてゐる故に、淨土に往生して後に、直ちに淨土の妙相を拜し、彌陀、觀音、勢至等の聖衆に接することが出来、喜悅窮りなき有様を表現し、下位の人は善根劣るが故にこの法悦が遅れて至ることを説かれしものなり。→クホソナベツ(九品差別)

ケカイトクヤク 華開得益 淨土に往生して後の利益のこと。凡そ淨土往生には九品あり九品皆華開得益を異にす。上品上生は往生後佛の色身衆相具足を見て無生忍を

得、上品中生は宿を経て即ち開き乃至一小劫を経て無生忍を得、上品下生は一日一夜にして華開き三小劫を経て歡喜地に往し、中品上生は華開き阿羅漢果を得、中品中生は七日を経て華開き、半劫を経て阿羅漢果を成じ、下中品下生は一小劫を経て阿羅漢果を成じ、下中品上生は七日を経て華開き觀音勢至が十二部經を説くを聞き善提心を發し十小劫を経て初地に入り、下中品中生は、六劫を経て華開き觀音勢至の大乘經典を説くを聞き善提心を發し、下中品下生は十二大劫を経て觀音勢至の諸法實相除罪の法を説くを聞き善提心を發す。以上の如く九品各々往生後の得益を異にす。

ゲカク 下鏡 → タイマツ(火松)

ゲギブン 解義分 行儀分の對。教相分ともいふ。古來宗學者間に於ては、善導の述作五部九卷の中、法事讚・往生禮讚・觀念法門・般舟讚の四部は往生淨土の實踐方法を説明せるものなるが故に行儀分といひ、之れに對して四帖疏一部四卷は淨土往生の理論的方面を闡明せるものなるが故に解義分と呼稱するを常とす。

ケギョー 加行 正行または本行に對する豫備的行修を云ふ。則ち五重、受戒及び正宗脉相承等を受くる前に、七日乃至百日等の前

行を修するを加行、前加行、或は前方便と稱し、本行に對する豫備として講義及び禮拜誦經念佛を策勵し、信根を増上せしめ、應承に堪ゆる器とならしむるなり。

ゲギョー 解行 知解と修行。即ち知識に依り宗義を領解すること、宗義に示す處の行を實踐すること。此の兩者は不可分の關係にありて、或は解行修行と云はれ、或は知日行足と云ひ、その一を欠くも目的を成就することを得ずと云ふ。又安心と起行、信仰と實踐をも指すこともあり。

ゲゲホン 下下品 下品下生の略。→ゲボンゲショ(下品下生)

ゲゴン 下根 上根・中根の對。下劣なる根根。→キゴン(根根)

ケゴツツーカン 華嚴通關(一卷) 別山定仙撰。續淨第一二卷所收。本書は、弘化二年著者定仙が華嚴經の思想を以て淨土宗の要義を概説したるもの。

ケサ 袈裟 出家の法衣。不正色・染色衣・壞色衣と譯す。これに大中小の三種あつて、その大なるものを僧伽梨又は九條、中なるものを僧多羅伽又は七條、小なるものを安陀會又は五條といひこれを三衣ともいふ。青黃赤白黒の五正色を避けて、他の雜色

を用ふるが故にその色に從つて袈裟といひ、其の形長方形なるが故に形に從つて數具臥具ともいひ、其の相が小片に割裁して綴り合せ恰も田疇の如くなるより、相に從つて割裁表又は田相表ともいひ、其他道服、法衣、功德衣、忍辱鏡、解脫輪相等の名あり。印度ではこの三衣の外には僧侶の衣服なく支那日本等に傳來するに及んで氣候等の關係から下に衣を着し、その上に三衣を掛ける風習を生ぜり。但し印度にては、その三衣を重ねて着用せしことあるも支那日本に於ては三衣は必ず別々に着するものとなす。その色は一に似黒、二に似青、三に似赤。似黒は即ち緇色にして、黒泥の色をいひ、似青は靑を云ひ、似赤は果實の染色をいふ。印度にては乾陀色といひ、支那にては木蘭色といひ、日本にては香染といふものなり。後世、金襴、絳子、種子袈裟、輪袈裟、疊五條、折五條、鈴懸等が作られ、小五條、三條五條等に本宗には威儀細と稱するものが略式として通常時に使用されてゐる。→サンネ(三衣)

ケザ 華座 蓮華座ともいふ。蓮華を以て作れる台座。佛菩薩はこれに坐するを以て佛、菩薩の所坐を華座と稱す。

ケザカン 華座觀 觀經十六觀の第七。

極樂淨土の主阿彌陀佛の臺座たる七寶の蓮華を觀するをいふ。→カンギョージョーロツカ(觀經十六觀)

ケサヒチャクゲ 袈裟被着儀 袈裟を被着する時に唱ふる偈文。大般涅槃經 無相禪田衣 被奉如成行 廣度諸衆生 四分律行事鈔資持記下四ノ二に出づ。資持記に依れば上の二句は染壞割裁して世に著せず出世無漏之福の衣の義にして、下の二句は勸勵にして自利利他を示すものと云ふ。之れ無相禪田衣を被着し自行化他全からしめんとの意なり。

ケシチヨ 消帳 淨土宗寺院の子弟にして檀林に籍をおき修學をなすものが、在籍中に於て、出世、寺持、病身、辭山、隨身往生、不見同等の諸種の事情によりそのを除く場合、檀林備へつけの原簿(大衆帳)より除名するをいふ。

ケシヨ 化生 蓮華化生ともいふ。胎生(胎宮)の對。上品上生の往生。佛智の不思議を了智することなくして疑ひながら念佛して往生を願するものは、往生の後直ちに蓮華開かずして蓮華の中に含まれその障の輕重により一宿乃至十二大劫の間三寶を見聞すること能はざるに對し、この化生のもは彌陀の淨土に往生して後、直ちに開華に坐して三

實を見聞し快楽憂鬱を離れなむ。大經に「便ち七寶華中に於て自然に化生す」とあり。→レンゲケジョー(蓮華化生)

ケジョード 化淨土 →ケド(化土)

ケシヨール 假正報 觀經十六觀中

第七觀想觀に對する善導の呼稱。善導の觀經疏に依れば觀無量壽經の正報を別正報(佛想觀・眞身觀)と通正報(觀音觀・勢至觀・普往生觀・維摩觀)に二分し、就中、別正報を假正報と眞正報とに分てり。從つて假正報は即ち像觀の事にして、阿彌陀佛を觀するに先立つて彌陀三尊の形像を觀する故に假正報と名づく。蓋し先づ豫備的に形像を觀じて觀想を止め、然る後に眞佛を觀想せしめんとするものなり。

ゲジョーホン 下上品 下品上生の略。

→ゲボンジョーショ(下品上生)

ケシン 化身 化身佛(化佛ともいふ)。本身ありてそれより分身せる化土の佛身。→ケブツ(化佛)

ゲシン 解信 仰信の對。教法の道理を學び、自己の理性に訴へて其義理を了解し、信仰の門に入る(三心を具足する)をいふ。

ゲジン 外陣 内陣の對。陣とは物を陳列する意、佛堂の中央を内陣といひ本尊を安

置し供養の具を列ねるに對して、通常その三方を外陣といつて、衆人參詣の席に充つ。尙ほその内・外陣を隔てるためには普通は結界を設く。

ケゼンジョ 化前序 觀經三序の一。

→カンゴヨールサンジョ(觀經三序)

ケタ 化他 →ジゴヨールケタ(自行化他)

ケタイ 華胎 →ギジョールタイグ(疑城胎宮)

ケダイ 華臺 →レンゲイ(蓮臺)

ゲダイイチキ 解第一義 觀經上品中生の人の往生の行業。善く空の法門を開き心に領納して疑はざるを云ふ。從つて觀行修行をするに及ばず、又名字の妙解をなすにも及ばず、とにかく仰信解了するを以て解第一義の要旨となす。

ケダイジ 還代寺 福井縣坂井郡加戸村

往古は平福寺と號し當地に於ける眞言宗七ヶ院の隨一たりしも、天正の兵亂によつて堂宇灰燼に歸し僧徒四散す。後寛永七年、郷民の招請に應じて演覺一丸再興、元禄年中讀覺上人如來の靈告を蒙つて寺號を哀戀山弘眞院還代寺と改稱す。

ケタイフチヨールホカイ 懈怠不聽法戒 四十八輕戒の一。懈怠にして聽法に赴か

ざることを戒めたるもの。

ケタゴジュー 化他五重 →ケチエン

ゴジュー(結縁五重)

ゲダツ 解脫 (1)→ジョーケイ(貞慶)

(2)煩惱の繫縛を離脱すること、又は離脱せるもの。而して大乘に於ては、たゞ煩惱の縛を離脱する義のみならず、自體累患を離るゝの義を説く。即ち小乘にてはただ煩惱を離れるのみを云ひ、遂に滅無に歸するに對し、大乘にては、本具佛性の自體累患を離れて清淨なるものありと解釋す。

ケチエン 結縁 佛道の縁を結ぶの意。直ちに修行を起して得脱することが出来なくとも、他日之を果たすべく因縁を結ぶこと。

この中佛から衆生への結縁、衆生が佛への結縁がある。結縁灌頂、結縁八講、結縁供養、結縁五重、結縁授戒等といふが如し。

ケチエンゴジュー 結縁五重 化他五重ともいふ。各地の寺院等に於て信心策勵の爲に傳燈師が教會衆に對して宗義を相傳する五重相傳をいふ。通常單に五重と稱するものは結縁五重を指す。

ケチエンゴジューセンチ 結縁五重

答歸(一卷) 神谷大周著。本書は明治初葉より中葉に亘つて起りし傳法問題に關して新

傳説の説を助けんとしたるもの。

ケチエンジユカイ 結縁授戒 各地の寺院に於て傳燈師が、教會衆に對して圓戒を授與する授戒のこと。通常單に授戒と稱するはこの結縁授戒のことなり。

ケチカン 結願 開自の對。法會・祈願或は修法の末日に願意を結納すること。勅傳第十に「結願の時種々の持物をとりいでける」とあるは其の例なり。一般に披掛寶、十夜會等の末日を結願と稱すること廣く行はる。

ケチミヤク 血脈 師資法門相承するを人體の血脈相通るに喩へ、之れを謂圖に現はしたるもの。選擇集第一章段に「聖道家の血脈の如く淨土宗にも亦血脈あり」と。其の形式に朱墨、墨繩、無繩あり。後中良定の五重要釋には「何れが正なる。善、相傳によるべし。俱し善が流には朱繩を用ゆ」といひ、又血脈の名は何れの時より始まるかに就ては「天然の聖教未だ考へず。是且には前漢の張良が作の明三不にあり。是れ始か」と云ひ、經典に血脈の言ありと云ひて寶網經を引く。凡そ傳法には書傳、口傳、心傳の三あり。續西土人授手印の序文に「血脈を自骨に留め口傳を耳底に納む」とあるよりすれば佛領内證の心傳印可の驗證とも見られ得る。この血脈の中、

宗義に關するものを宗脈といひ、戒に關するものを戒脈といふ。その何れも佛祖より受者に至るまでの法系謂脈を列記せり。現今宗規に於ける傳宗傳戒の行事は正しくこの宗戒兩脈相承をなすものなり。

ケチミヤクソージョー 血脈相承 血脈を師資相承すること。前項を見よ。

ゲチューホン 下中品 下品中生の略。

→ゲボンチューショ(下品中生)

ケツカイ 結界 境界を制限すること、堂塔伽藍の境域を定むるをいふ。轉じて佛堂の内陣と外陣との隔をなすため積たふる欄及び門欄の俗稱となる。

ケツキイチギョーザンマイ 結歸一行

三昧 佛意信願の念佛生活實踐の有様を云ふ。佛意信願の本願念佛一向專修の上には、三心自ら具し、四修、五念、三種行儀が具現されて行く、この意味を西宗要には「一向專修となる時に、三心も自然に具し四修も自然に具すと習ふ也」といふ。故に授手印に於て宗義實踐の說明上三心、四修、五念、三種行儀等の心、行、業の心得を明かすも、念佛實踐上の實際に於ては、念佛一行三昧の生活に歸結する旨を示して、三心も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛等と言ひて「我が法然上人

の言ひ給はく、善導の御釋を拜見するに、源空が目には三心も五念も四修も皆俱に南無阿彌陀佛と見ゆるなり」と示されてある。即ち三心の安心も一行三昧南無阿彌陀佛の上に具せる安心であり、四修、五念、三種行儀も同様南無阿彌陀佛の作業行儀である旨を示されたるを結歸一行三昧と云ふ。然し之れは三心そのもの四修そのものの法體は各々別なるも、實踐上(修相)南無阿彌陀佛と見ゆるなりと云はれしものなり。

ケツキショー 決疑鈔 →センチヤタ

デンゲケツキショー(選擇傳弘決疑鈔)

ケツキショーウラガキ 決疑鈔裏書

→センチヤタデンゲケツキショーウラガキ(選擇傳弘決疑鈔裏書)

ケツキショーケンモン 決疑鈔見聞

(五卷) 寂樂述 淨土第七卷所收。決疑鈔の末書。嘉元二年作。坂下見聞、選擇集見聞、選擇本願念佛見聞、選擇見聞ともいふ。坂下見聞といふは寂慧の住地は鎌倉坂下なりしに因みたるものなり。本書は、良忠述選擇傳弘決疑鈔中の成語、故事、事跡、宗義等の項目百八十五について、これを五卷に分つて評述せるものにして、宗義顯彰の要書なり。

(例)→センチヤタケツキショーケンモン(選

撰決疑録見聞

ケツギシヨージキテツ 決疑録直撰 (十卷) 聖徳太子傳第七卷所載。決疑録の末書。明徳四年作。本書は、了譽聖僧が良忠述作撰傳弘決疑録を注釋せるものなるが、その方法立場は、時代思潮を考慮して釋義の立場をとり、その該博なる知識と高邁なる識見を以て疑難無遺に或は難解の語を解し或は宗要の細を究明せるもの。本書の著作は明徳四年恰も佐竹義秀の長胤を避けて常陸阿彌陀山の岩窟にありしときなるが故に、參考にすべき典籍なく一に附記によりしものにして引文に間々訛誤あるも、その該切なる卓見は決疑録研究の重要資料とすべきものなり。

ケツギシヨージキテツケンモン 決疑録直撰見聞(二卷) 了譽述。決疑録直撰の末書。元來は三卷本なりしも中巻を缺く。正保四年刊。

ケツギシヨージキテツケンモン

決疑録の末書 記主良忠の撰傳弘決疑録五卷は撰傳集研究の好指針として古來尤も重用されその註釋書又抄からず。今その重なるものを集めれば、(一)決疑録見聞五卷(發註)、(二)決疑録直撰十卷(聖徳)、(三)撰傳弘決疑録見聞十卷(良忠)等あり。各項參照。

ケツコンシキ 結婚式

又佛式結婚とも云ふ。近時の流行にして諸佛祖先の靈前にて特定の男女が佛祖顯應のもと僧老同穴の交り約し信佛念佛の生活に精進せんとする意味を以て形づくる人的結合をいふ。佛前の莊嚴は清素に祭壇には新那新婦兩家の位牌を安置し、内陣正面には外陣に向つて登高座を置き、其の前に新那新婦の席を設く。式は先づ報鐘・奏樂に初まり、恭敬三禮・奉請・表白・新那新婦燒香・告諭・行齋燒香・聖水灌頂・讀經三歸三誓・授與十念・日誦勸要・壽珠授與・誓髮交歡・誓詞朗讀・成婚奉告・觀禮等と次第す。

ケツシヤネンブツ 結社念佛

同信同行の者が會合して念佛するを云ふ。念佛講、尼講、元祖講、熱教講等の類を云ふ。その起源は東晉の時代に慧遠法師が、廬山に白蓮社を結んで念佛せしに初まり、爾後今日に至るまで支那に於ては結社念佛を行へり。我が國にては二祖の門人白蓮社、寂隱の門人智海が入宋並に入元して廬山に上り、白蓮社の遺風を學び、唐朝の後これを弘通せり。

ケツシユ 結家

多人相集りて一群を結成して宗教的行事を共にするもの。淨土教にては念佛を行するもの、集りをいふ。

ケツジヨージヨ—決定往生

淨土往生が決定すること。淨土行者の決定往生は安心、起行、作業の三が成就するを要す。即ち衆生の信心を極樂にかけ、阿彌陀佛に歸命し、念佛一行に専修すれば必ず往生を得るをいふ。これを平易に言へば、唯だ助け給へ南無阿彌陀佛と稱名相續して、佛の本願に乗じて定んで往生を得るをいふ。

ケツジヨージヨ—オモヒ 決定往生想

決定往生信、決定信、決定想等ともいふ。信機信法深く佛願を信仰して聊も疑ふことなき深信のこと。和語證錄卷三には「煩惱のこきうすきをまかへりみず、罪障の輕きおもきをも沙汰せず、たゞ口に南無阿彌陀佛となへむこゑにつきて、決定往生のおもひをなすべし、その決定の心をやがて深心となつくるなり」とあり。

ケツジヨージヨ—オモヒ 決定往生業

決定業、正定業とも云ふ。決定的淨土往生の業のこと。宗祖は善導の釋義に則り、五種正行すなはち一心に淨土三部經等を讀誦すること、一心に淨土の莊嚴等を觀察すること、一心に阿彌陀佛を禮拜すること、一心に佛名を稱念すること、一心に阿彌陀佛を讚嘆供養すること等皆淨土往生業となす。中に於て決

定往生の行業としては正しく佛名を稱する稱名正行こそ本願の行業なれば決定往生の利益ありとなす。→シヨージヨ—(正定業)

ケツジヨージヨ—シユ—決定往生業

生業(二卷) 三論宗珍海撰。淨全第一五卷所收。保延五年(一七九九)撰。康治元年六月治定。本書は西方淨土往生の道は時機に契ふべく、稱念彌陀の行に決定往生の信を求むべきを説く。これを教文、道理、信心の三條に分ち、教文として稱讚淨土經、觀無量壽經及び起信論等に決定即生等と説ける文を引く。道理としては、衆生に出離の素質あり淨土は衆生攝取する所なるを以て教文に依て往生を願求すれば、必ず往生を得べしと云ふ。次に信心とは上の教文によりて信受するを決定とし、その決定が信の相なりとなす。更に決定の十門として、一に依報決定、二に正果決定、三に昇道決定、四に種子決定、五に修因決定、六に除障決定、七に事緣決定、八に弘誓決定、九に攝取決定、十に圓滿決定をあげ二卷におたつて詳述す。中に就て、本書は淨土教關係の引用書多き中特に淨影大觀經並に大乘義章を依用してゐるが如きは注意すべく、決定の意義の顯彰につとむるを特色となす。

ケツジヨージヨ—ヒミツギ 決定

ケツジヨージヨ—シユ—ケツゼンシヨ—

往生秘密義(一卷)

本書は宗祖の撰述と傳へらるゝも疑問の點あり。故に法然全集には眞偽未詳の部に編入せり。本書の題名に決定往生秘密義と冠しあるも、別に眞言密教的な點なし。天台小部集釋に「決定往生秘密義」と題する一篇あり、此の書上人叡山黒谷に在るの目録は「所藏」とあるもその義旨天台に組し到底開宗以後のものとは思はれず。内容をみると、念佛の衆生に親縁、近縁、増上縁の三縁あつて、攝取不捨の益を蒙り、無漏寶國に至ることを問答體を以て記述す。中に就て親縁とは阿彌陀如來が一切衆生の本有常住本覺如來であり、名號を稱ふる是の心は本覺明了の體なり、故に是心即阿彌陀、是心即彼國と主張してあり、その思想傾向が中古天台的であり、恐らくは偽撰ならん。

ケツジヨ—ゴ—決定業

ケツジヨ—ゴ—決定業

ケツジヨ—シン 決定信

決定信ともいふ。彌陀の本願を信じてさらに疑念を離れざる信心をいふ。論註下「念相續せざるが故に決定信を得ず」、善導の觀經疏「亦た一念の疑心を生ぜず、唯だ我が決定上上の信心を増長し成就せん」とあり。

ケツジヨ—シン 決定信

前項に同じ。

ケツゼン 月僊

徳川末期の靈僧。名は玄瑞、諱譽と號す。尾張名古屋の人。十才關通の門に投じて得度、東遊し増上寺に入り、畫を櫻井畫館に學び、天性の畫才愈々精妙を加ふ。尋いで上洛廣く元・明の畫道を探り又蘇村、應舉の風を考へ一機軸を出す。のち伊勢山田寂照寺に住し、畫名益々高く、集る所の筆料を以て堂宇を修め、貧窮の群民を救恤し、内外二宮貧民救恤資金として、金一千五百兩を提供す。山田奉行所はこの大金を永久に保存し、年一割を以つて貸付け、利子を以て毎歳末貧困者救済に充つ。世に之を月僊金と稱す。尙彼は諸國より伊勢參宮する人々の利便の爲、宮川渡の渡船賃を廢し、又寂照寺附近古市町に火災ありし時など戸毎に金一兩と米一俵つゝ施與するなど慈善救済事業に盡すこと極めて多し。文化五年寂。壽不詳。

ケツゼンシヨ—ゴ 結前生後

宗祖法然上人の撰傳本願念佛集の題跋の次に、南無阿彌陀佛(念佛爲先)と掲ぐ。二祖聖光房禪長之を撰撰集上に「題の次の文初に南無阿彌陀佛と置けるは、即ち是れ結前生後なり」と云へるによる。結前とは題跋に明す三重の念佛は共にこれ稱名念佛なることを結すること云ひ、生後とは所謂撰集に説く所の一々

の章段も皆悉くこれ稱名念佛の義なることを顯はすを云ふ。

**ケツトキモンジョー 決答疑問鈔**  
ケツトキモンジョー(決答授手印疑問鈔)

**ケツトキモンメイシンジョー 決答疑問銘心鈔(二卷)** 聖述 銘心鈔とも云ふ。淨土第十卷所收。明徳三年作。淨土宗五重相傳の第四重決答疑問鈔の註釋書にして七卷書の隨一なり。奥書に「此の書は白旗上人(寂賢良喟)の御口筆にして先師定惠上人の記録なり、今所闕を補ひ頗る愚案を加ふ」とあり。良喟(口授)定惠(記録)の著書を聖喟が訂正増補したるものと考へられる。註釋は嚴密抄録七卷書講義第七にあり。淨土傳道要巻中に收む。

**ケツトキモン 決答見聞(二卷)**

良祐述。續淨第一四卷所收。本書は、淨土宗五重相傳の第四重の要書授手印決答疑問鈔の註釋書にして名越傳書の一なり。

**ケツトキモンケツジョー 決答受決鈔**  
ケツトキモンケツジョー(授手印決答受決鈔)

**ケツトキモンケツジョー 決答授手印疑問鈔(二卷)** 然阿良忠述。決

答疑問鈔、疑問鈔ともいふ。康元二年作。七卷書の一にして淨土宗五重傳書中の第四重の要書なり。序文に本書述作の因由を述べて云ふ。良忠、下總滞在申、上總則東の在阿なる者草庵に訪ね來り、始め授手印に歸し念佛門に入り、後念佛名義集に依り往生の意を辨じたるも尙未解せざる所あり、法然門下の禪勝房と澁谷道通を訪ねて疑問の解決を得んとせしが、道通は彼に良忠を訪はしめ、彼は手に手印の疑問を擧げ口に口傳の決答を請ふ。

時に良忠餘暇の風を凌ぎ、五十九歳の顛齡の筆を走らせて在阿の間に答へしものが此の書なり。その内容は淨土宗の安心起行の不明なる個所に詳解を加へて宗義を闡明せしもの。凡べて七十八の問答より成る。即ち末代念佛授手印事に一問答、上人往生の後身、其義於水火乃至念佛修行等事に一問答、五種正行處に五問答、一心專念念佛名義乃至願彼佛願故事に四問答、付此女有種種之義等事に六問答、助正分別事に二問答、三心處に五十三問答、善導御意乃至心可修五念門一事に一問答、三種行儀處に三問答、三心五念四修三種行儀各兩無阿彌陀佛之事に一問答、善導寺聖人御房長時御勸拜御臨終次第事に一問答あり。註釋に決答疑問銘心鈔二卷(聖喟)授手

印決答見聞二卷(性心)授手印決答受決鈔二卷(良心)等あり。

**ケド 化土** 三土の一。變化土、應化土、化淨土とも云ふ。衆生の爲めに變化せる淨土にて佛の化身の住處なり。化土に淨穢の別あり。彌陀の憍慢界、觀音の補陀落山に於ける如きは化身の淨土にして、釋尊の娑婆世界に於けるが如きは穢土の淨土なり。古來淨土淨土の教化につき諸家異説多し。淨土宗は報土と判ずるも、眞宗は觀經所説の九品の淨土及び善薩處胎經所説の憍慢界、無量壽經所説の穢土を以て報土とし、法華經所説の淨土を以て報土とす。されど此等の化土は報中の化にて、報土中に眞假を分つ故なり。眞假を分つと雖も大悲の願海に酬報せしものなれば共に報土にて善導の定判に反せずと云ふ。

**ゲドクホーモン 下讀法問** 上讀法問の對。徳川時代關東十八檀林にて毎年三月・五月・九月・十一月の四回に亘り行はれたる論議にして初學者たる下座のもの草題即ち問題を提出して論議をなすものを云ふ。此の時の法問主を勤むるものは、月行事十二僧の如き上座のものにして、論議の是非を批判決擇すこれ主として初學者を提攜啓蒙するを目的とせるものにして、その草題の数は元和條目に

依れば四季を通じて二十二題なりしが後ち漸く衰へてその數を減ず。下讀法問といふは下より上に向つて草題朗讀するが故に下讀といふ。

**ゲドノソゼン 外道相善** 外道の修する修行、論註記一によるに、相善を解するに「義あり。一には相似善の意、即ち外道所説の六行觀は其の相は善薩の觀法に似るも實は善にあらざるが故にかくいふ。二には有相善の意、外道の善は人法二空の理を知らずして有相の世相を以て所樂の果となすが故にかくいふ。

**ケネンジ 快念寺** 山口縣大島郡安下庄町。眞宮山と號す。文龜年中祝融に見舞はれ堂宇悉く烏有に歸す。永正八年、頓覺堂宇を再建して開山となる。應長九年再び堂宇同様に罹り、領主吉井相模守再建、寺號を快念寺と改む。文明六年改築して現在に至る。

**ケネンジョーシヨ ガン** 係念定生願。四十八願中の第二十願。三生果遂の願、願後往生の願、蓮生米蓮の願ともいふ。十方衆生にして彌陀の名號を聞き、念を淨土にかけ彌陀と結誼せしことありて諸の徳本(念佛及び諸行)を修し、至心に回向して往生を欣ひしものありば、遂には極樂往生の事を果

ゲドノソゼン—ゲボン

遂せしめんと誓はれしもの。この第二十願は十方衆生にして聞名係念の善あるも其の善方處にして次生に於て直ちに極樂往生を得ず、この善を宿善となして次生に於ては心行具足の徳本を修行せしめ、願後生に於ては必ず極樂往生の志を遂げしめんといふ意なり。かく宿善・修行・往生と三生三世或は四生・五生等多生に亘るが故に願後往生の願、三生果遂の願等といふ。

**ゲハイ** 下輩 三輩の一。サンバイ(三輩)

**ゲハイカン 下輩觀** 觀經十六觀中の第十六。下三品の人か下輩の行業により淨土に往生することを得るを觀想するをいふ。カンゴヨロジユロツカン(觀經十六觀) **ゲハイトクシヨ** 下輩得生 三輩往生の一。サンバイオロジヨ(三輩往生)

**ケブツ 化佛** 變化身、應化身、化身佛、化身ともいふ。佛が衆生を教化利益せんがために種種の身形に變化し應現せし佛身のこと。化佛の實體は報身の大悲大慈に歸すべきものなるが、唯これは罪惡の凡夫の宜しきに隨ふて羸弱の相を現じたまひし佛身について云へるものなり。

**ケブツサンダン** 化佛讚歎 念佛行者

の功德の一。選擇集第十章に「彌陀の化佛來迎は聞經の善を讚歎せず唯だ念佛の行を讚歎するの文」といひ觀經下輩の文を引用していへるが如く、彌陀の化佛は唯だ本願の行たる念佛を修するもののみを讚歎し來迎したまふをいふ。

**ケブツライコ** 化佛來迎 前項に同じ。

**ケホー 業報** (因果報の對。果報に先だつて受くる應報にして、來世に善趣に生ずべきものは現世に於て先づ長壽・富貴等の益あり、來世に惡趣に生ずべきものは現世に疾病・刑罰等の厄あるをいふ。(四極樂淨土に生れること。往生と成佛とを區別する立場より往生の應報を廣大菩提の果報に對して業報といふ。

**ケボサツ 化菩薩** 或は莊嚴のため、或は機感に應ずる等種々の目的をもつて眞形を變じて示現せし菩薩身をいふ。觀經眞身觀に「一々の化佛に亦た衆多無數の化菩薩ありて以て侍者となす」とあり、又觀經下上品等に化菩薩の來迎を設ける如き皆これなり。

**ゲボン** 下品 下等の品類。極樂淨土に往生する應報をその行業の優劣に依つて九品すなはち九願に分つ中、下の三願を下品とな

し、この下品の三人は善導の解釋によれば悪  
悪の凡夫となし、罪惡の因縁に遇へる凡夫と  
なり。トクホン(九品)

ゲボン 外凡 トクホンゲボン(内凡  
外凡)

ゲボンゲシヨ 下品下生 九品の一。  
下キ品ともいふ。五逆重罪の凡夫にして臨終  
のときに善知識の教に遇ひ、苦しみながら十  
塵稱佛し八十億劫生死の罪を除き、金粟華の  
來迎を受け極樂淨土の蓮華の中に生れ、十二  
大劫を経て蓮華開いて聞法發心すべき機根を  
いふ。トクホン(九品)

ゲボンゲシヨノイン 下品下生印  
九品印の一にして二手の五指、無名指を捻じ  
右の手に胸の前に置いて掌を外に向け、左の



下品下生

手は掌の上に垂れ掌を外に向ける印を云ふ。  
九品淨土中、下品下生の土に住する佛の結ぶ  
印相なり。

ゲボンジユートン 下品十念 觀經所  
説の下品下生の機が、臨終に善知識の勧めに  
依て、名號を十稱するをいふ。故に經文には  
「聲をして絶へざらしめ、十念を具足して南  
無阿彌陀佛と稱せしむ」と言へり。この文に  
依て念と聲とが同一なることは明かにして、  
我が宗の念聲は一の解釋は、この文を根據と  
して口稱の名號なることを主張す。

ケボンジョーシヨ 下品上生 九品  
の一。下上品ともいふ。十惡輕罪の凡夫にし  
て臨終のときに善知識の教に遇ひ、大藏經典  
の名を聞き又南無阿彌陀佛と佛名を稱して五  
十億劫生死の罪を除き、化佛・化觀音・化大勢  
至等の來迎を受けて寶蓮華に乗じて極樂淨土  
の寶池の中に生れ、七七日を經て蓮華開いて  
聞法發心し、十小劫を經て初地に入るべき機  
根をいふ。トクホン(九品)

ゲボンジョーシヨノイン 下品上生  
印 九品印の一にして二手の五指、無名指を  
捻じ、定印をなすを云ふ。九品淨土中下品上  
生の淨土に住する佛の結ぶ印相なり。



下品上生

ゲボンチユージョー 下品中生 九品  
の一。下中品ともいふ。破戒次罪の凡夫にし  
て臨終のときに善知識の教に遇ひ、阿彌陀佛  
の佛體を聞いて八十億劫生死の罪を除き、化  
佛菩薩の迎接を受けて極樂淨土の寶池の中に  
生れ、六劫を經て蓮華開いて聞法發心すべき  
機根をいふ。トクホン(九品)

ゲボンチユージョーノイン 下品中生  
印 九品印の一にして二手の五指、無名指を  
捻じ、胸の前に掌を外に向ける印を云ふ。九  
品淨土中、下品中生の土に住する佛の結ぶ印  
相なり。



下品中生

ゲボンのライハイ 下品禮拜 三種禮  
拜の一。トクホンライハイ(三種禮拜)

ケマン 華鬘 Kemanama 俱蘇摩摩  
羅と云ひ、印度の風俗に、花を多く結び貫き  
首或は身を飾るものにして、以て佛前を莊嚴  
する飾具を云ふ。支那日本に於ては適當の花  
を得難きを以て、金剛板に華を刻みて以て代  
用す。

ケマンカイ 憍慢界 憍慢國とも云ふ。  
閻浮提の西方十二億那由他即ち極樂國に至る  
中途に憍慢界あり、國土快樂にして倡伎樂を  
なす。阿彌陀佛國に生れんとする者の中に此  
の國土に墮着して前進する能はざる者甚だ多  
しと云ふ。後世、憍慢にして彌陀を信ずること  
淺く徳少なきものは此處に止まると云ふ。

ケマンヘンジ 憍慢邊地 憍慢界は極  
樂の邊地なる故かく云ふ。前項を見よ。

ケヨーイン 華鬘院 開山祖師は徳川家康人質  
桂山府中寺と號す。開山祖師は徳川家康人質  
たりしときの書置の師たりし縁由を以て、後  
ち家康伽藍を再興、文慶を中興となし寺城五  
千二百坪、寺領三千石を附與せりといふ。數  
次の天災により、寺運漸く衰頹して現在に至  
る。徳川家康の祖母華鬘院の廟あり。寺寶、  
徳川家康持佛外數點。

ケラクムタイラク 快樂無畏樂 十樂  
の一。トクホンラク(十樂)

ケロン 戲論 pralobha 誤れる見解に  
して、實理に背き、善法を増進せざる無義無  
益の言論分別を云ふ。

ケンイ 顯意 一、九、五、西山派の人。山  
城深草眞宗院の學僧。字は道教はじめ證慧と  
名づく。藤原の人。俗姓伊集院氏。幼にして  
知恩寺聖蓮に嗣法、その聰敏の英才を膺き、  
のち上京して深草立信について宗要を學ぶ。  
總持竹林寺に住し盛んに法化を布く。平素和  
歌に親しみ秀作多し。嘉元三年(一説には二  
年)五月十九日寂。(著書)觀經疏楷定記三十  
六卷、同疑端四卷、淨土宗要三卷等。

ゲンエイ 源榮 二二七八 徳川中期の

人。星葉社鳴響と號す。觀智國師存應の弟子  
俗姓不詳なるも存應に嗣法して宗興を極め、  
江戸淺草正覺寺を中興す。後ち相模岩瀬大長  
寺第二代となり、玉繩貞崇寺、座間宗仲寺を  
開く。その後三河大樹寺に住して大いに教權  
を張る。元和四年十一月十日寂。壽不詳。  
ケンカ 獻花 佛菩薩に妙華を供養する  
こと。五種供養・六種供養・十種供養等の一な  
り。

ケンカイ 顯海 二四七五 黒谷金戒光  
明寺第五十代。聖蓮社成河明覺傳因と號す。  
江州勢田の人。山城桂極樂寺慈覺の資。文政  
三年深川靈巖寺より黒谷に轉住。同十三年四  
月二日寂。壽六十二。

ゲンカイ 支海 二三五六 長崎大音寺  
第八代。字は曇香、聲運社推譽と號す。江戸  
増上寺學寮に學び内外の學に通じ殊に詩文に  
長ず。太宰春臺、服部元喬と交遊深しといふ。  
慶長元年八月八日寂。壽不詳。

ゲンカクジ 源覺寺 東京市小石川區  
初音町。定譽隨波開山。徳川秀忠の寄進によ  
り寛永元年草創。

ケンカン 遺喚 發遣招喚の略。ハツ  
ケンシヨーカーン(發遣招喚)

ゲンキ 玄記 觀經玄表分傳通記の略。

「カンゴヨシヨデンズキ」(觀經疏傳通記)
ゲンキコー 現起光 常光の對。神通光
ともいふ。佛が衆生を教化するため時處機縁
に應じて佛身より放つ大光をいふ。「コーミ
ヨ」(光明)

ゲンキブン 玄義分 善導の觀經四帖疏
四卷中の第一卷。觀經一部の要義大綱を概説
せるもの。「シジョーノシヨ」(四帖疏)

ゲンキブンキ 玄義分記 觀經玄義分傳
通記の略。「カンゴヨシヨデンズキ」(觀
經疏傳通記)

ゲンキブンデンズキ 玄義分傳通記
觀經玄義分傳通記の略。「カンゴヨシヨデ
ンズキ」(觀經疏傳通記)

ゲンキブンリヤクシヨ 玄義分略抄
觀經玄義分略抄の略。「カンゴヨシヨリ
ヤクシヨ」(觀經疏略抄)

ケンキユースイ 研究生 「シジョー」
シヨケンキユースイ(淨土宗研究生)

ゲンキヨ 玄教 二二卷 淨土宗
第七代。淨法と號す。傳記不詳。元中二年(北
朝至徳二年)寂。遺著不詳。

ケンギョーニンオージョー 兼行人往
生 正業兼行の人も往生するといふ意。正行
は本願の行であるから勿論往生するが、正業

兼行の人の往生は可能であるか否かに就ては
問題あり。本宗の意は兼行のみの人でさへ少
分の往生を許す。況んや兼行人の往生可能な
ること勿論なるも、成るべく兼行を捨てて正
行を修し専修たるべきことを教示するなり。
然し各人意義異なるが故に兼行を好む人の場合
は妨げなしとなす。

ゲンク 源空 一八七三 淨土宗の關
組。法然房と號す。美作國久米の押領使時
國の子。長承二年四月七日生る。幼名を勢至
丸といふ。九才の時、父を喪ひ、叔父なる同
國菩提寺觀覺に就いて佛門に入りしが、久安
三年二月十五才にして比叡山に登り西塔北谷
持智房源光の室に入りしが、四月東塔東谷功
徳院皇園に師事す。ついで觀覺或を受け三大
部を學びこれを習得せしが、十八才隱遁の志
もたしがたぐ西塔北谷持智房源光の室に投じ
法然房源空と號す。觀成・密教・往生要門等を
學ぶこと六年、二十四才の春、室を出でて類
藏清涼寺に參預あり、又京師宗長に就ひ、觀
藏寺藏俊・慶嗣・實徳・仁和寺慶隆等の名匠を
訪れ、法相・三藏・華嚴・密教・律・佛心等の諸
宗を涉獵し、のち累谷に歸り觀覺に入つて
大藏經を閲覽し、ひたすら出離の要道を探り
しが、承安五年三月四十三才のとき善導の教

草庵なりしが、宗祖兩都より歸途宿寄せられ
し時忍空深く宗祖に歸し、草庵を改め源空寺
と號す。詠歌「一聲もなむあみだ佛といふ人
のはちすのうへにのぼらぬはなし」。
(四)京師市淺草區北清島町。五臺山文殊院と
號す。開山觀覺阿闍梨。徳川家康公の歸依
漢からず、慶長九年四月六日の夜の靈夢に依
り、津戸三郎爲守の護持佛、法然上人自作の
靈像の寄附を得て一字を建立す。現在當地屈
指の名刹にして境内には三代將軍家光の銘あ
る梵鐘を始め諸名士の墓所からず。
(五)山口縣大島郡沖浦村。映海山性珠院と號
す。開山松譽存貞。天文元年、長崎和泉守開
所。はじめ源空なりしが後ち淨土宗に改めて
現在に至る。

ケンクジユ 獻供呪 變食陀羅尼とも
云ふ。諸善如來に飲食等を供養する時に唱ふ
る偈文。

ゲンクシヨニンシニツキ 源空上
人私日記(一巻) 本書は宗祖法然上人の御
一代を漢文體にて簡略に要領よく述べて別傳
にして、上人の誕生、生家、得度、修學、開宗、
教化、法難、淨刑、歸俗、往生、滅後の瑞夢
に至る重要事を洩れなく收載す。其作者名
を明かにせざるも恐らく遺弟の撰ならむ。且

善義の「一心專念」の文を讀みて豁然として
觀經本願の眞意に感佩し餘行を捨て、一向に
念佛に歸す。これを淨土立教開宗の紀元とな
す。乃ち山を下り洛東吉水の地に庵居して盛
んに念佛し朝野の歸仰するもの日に多し。文
治二年秋、顯眞法印の請により大原勝林院に
於いて淨土の法義を論じ參するもの悉くこれ
に歸す。世にこれを大原問答といふ。建久元
年七月藤原實實の請により戒を授け、同三年
二月御白河法皇に授戒し奉り、同九年正月疾
を得て吉水の草庵に閉居して請を辭し念佛に
いそしみ遂に念佛三昧を發得す。ついで兼實
の請により觀經本願念佛集二卷を著して淨
土の要義を記し、四月後遺教文を製せしが
幾くもなく病瘵ゆ。建久二年兼實師について
遺製し圓成を受く。聖覺・隆寛・博長・謙空・幸
西・長西・信空・湛空等來りてその門に投ず。時
に南都北都の徒念佛の興行日に盛んなるを嫉
み、數々諍論のことありしが、元久元年冬遂
に山門の建業時起して專修念佛の停止を原主
性眞に訴ふ。宗祖これに對して七箇節經語文
を製し門弟追署して之を原主に呈したるを以
て事一旦止みしも、諸宗の誤解解せず。翌年
十月興福寺僧綱より詔狀を捧ぐるあり、偶々
住蓮・安樂の女官出家の事あるや、建永二年

つ近年世に出でたる龍圖本法然上人別傳と相
通じ、原初の風趣をなしてある點より見れば
珍重すべき資料なり。

ゲングチ 還愚癡 淨土往生を願求する
者の一般原則とも云はるべき態度にして佛に
對する没我の姿をいふ。換言すれば自力を捨
てて偏に他力に頼る姿にして之れ淨土門の特
徴となすべきものなり。聖道の諸宗に於ては
未だ曾て云はざる所なり。宗祖の法語に「聖
道門の修行は智慧を窮めて生死を離れ、淨土
門の修行は愚癡に墮りて極樂に生る」とあり。

還愚癡とは、既に覺えたる事を忘れよと
いふ意にあらず、又學問無用と云ふ意にもあ
らず、觀經の願力を仰ぐ時は全く自己の小賢
かしく智慧才覺を捨て、偏へに願力に頼れ
と云ふ意味なり。愚癡に兩様あり。一は生得
の愚、之れ仰信分の機、此の機は一向に本願
を信じて唯一念に念佛する所謂愚鈍念佛第一
の機にして淨土の正機なり。二は捨解の愚、
之れ解表分の機にして、此の機は一代の法を
よくよく心得たりと雖も、それを少しも恃み
とせず、偏へに觀經の願力を頼むを云ふ。要
するに自力自我を全く打捨て他力の佛願に頼
る状態を愚癡に還ると云ふ。

二月弟子の罪を問はれて度難を脱し罪名を蒙
井元彦と稱して土佐に配流さる。九條兼實深
く其の冤罪を心痛し、請ふて配所を讃岐に改
めて赦免に奔走す。同十二月配流を罷さると
雖も歸洛し得ず、攝津務尾寺に草庵を結び假
寓すること四年、建永元年十一月京都へ召還
の恩命に接し、同日東山大谷禪房に歸還する
や雲集の道俗絡繹たり。同二年正月、あり、
自ら歸鳥の朝近きを知り、源智の請により一
枚起請文を發し、同月二十五日寂。壽八十。
住房の東に葬る。のち慈覺菩薩・華嚴尊者・通
明國師・天下上人無極道心者・光熙大士・開光
大師・東洲大師・慈成大師・弘覺大師・慈教大師
明照大師等と誦號さる。著書は前記の外、累
谷上人語燈錄十八卷あり、關西了慧の編輯
になる。又傳記十餘部を數す。

ゲンク 還愚 一、ゲングチ(還愚癡)
に傳ふるべきに遺する偈文「此は色香味 供
養奉請障 今令(諸)諸主得 無量波羅蜜。こ
れ我の功徳によつて諸主に無量波羅蜜を得
せしめんとの意なり。

ゲンクジ 源空寺 山元祖大師二十
五靈廟の第十五番。山城國伊都郡伏見(京都府
市伏見區新大馬町)もと小幡に在りて忍空の



鑑に還つて往生するの意。前項を見よ。

ゲンコ 源光 字は覺、光  
藤社開創と號す。房州の人。十五才にして増  
上寺普光親智國師に師事して博く群書を跋渉  
し、殊に禪教の綱旨に通曉す。平素真欲にし  
て多く江戸大城の問答會に權んでらる。理深  
利、論後漢博よく一會の白眉たり。常に淺草  
善徳寺に住して化導することなしといふ。寛  
永十六年十月四日寂。壽不詳。

ゲンコー 源光 宗祖法然上人の師にし  
て比叡山の學僧。源光字は持賢房(一)に持法  
房、叡山西塔北谷に住し、學名一山に高し。  
宗祖源光について學び、後ち淨土一宗を開宗  
してより、その名後世に聞ゆ。寂年不詳。

ケンコーイン 遺徳院 天台宗の寺。京  
都市上京區北之邊町。初め正治元年伏見街道  
三ノ橋の南東の地に藤原道家が創建し、西山  
派祖證空を請じて開山となし、因宗實學四箇  
本院の一にして淨土・天台・眞言(法相)を  
兼學せり。天正三年正親町天皇の勅諭に依り  
現今の地に移り専ら寶壽の延長を請り奉る。遺  
徳とす。爾來明治四年に至る迄毎年御祈願の  
寶積を獻じ、又初禮參内拜賀を許さる。現今  
の建物は天明の火災以後再建せられたるもの  
にて、遺徳院の名は釋迦彌陀二尊の發遣來迎

の儀を表はす。寺寶、阿彌陀如來(高覺)、眞  
向阿彌陀畫像(惠心)、法然上人畫像(觀覺)  
等。

ケンコーイン 源光院 廣島市廣隆町。  
開山藤原藤原和尙。當國藩主淺野田島守長藏  
の局長部開基。慶長元年草創、もと豪屋寺  
と稱せしが、正徳四年、法然山持賢寺源光院  
と改む。

ケンコージ 玄向寺 長野縣東筑摩郡  
本郷村。女鳥羽山道園院と號す。永祿五年、  
清光開創、もと壽命山松佛寺と稱せしが後ち  
清光寺と改む。後ち松本城主水野忠直、清光  
の廟を構へ寺領を寄附して現在の寺號に改  
む。寺域廣大、女鳥羽山に據り、風光絶佳本  
尊正觀音像は行基菩薩の作と傳ふ。

ケンコージ 源光寺 大阪市東淀川區  
豐崎東通二丁目。瑞瑞山念佛三昧源光寺と號  
す。天平十九年聖武天皇の勅諭に依り行基菩  
薩建立して平生寺と號す。天治元年、平野大  
念佛寺開山良忍當寺に住して瑞通大念佛本山  
法念佛兩三昧院と改む。後ち法然上人當山  
に弘法し淨土大念佛本山源光寺と改む。もと  
無本寺なりしが明治十年知恩院末となる。  
ケンジツシンガツシヨ 堅實心合掌  
コングーガツシヨ(金剛合掌)

ケンジャクカキカイ 堅惜加毀戒 十  
重禁戒の一。懇んで、求める人に恥を興ふる  
ことを戒めたるもの。

ケンシユ 賢洲 二四七三 筑後善導  
寺第四十九世。延運社源光と號す。俗性生處等  
不詳。普賢門に隨つて學を受け龜興を極め  
門下四哲の稱あり。後ち傳通院にて宗成兩派  
を相承し學頭となる。寛政三年轉じて善導寺  
に遷し、又府中厨寺を復興す。文化九年二月  
二日寂。壽不詳。(著書)論註研機鈔二卷、識  
知淨土論略記一卷、開明成授記一卷等。(傳)  
筑後善導寺志、略傳集。

ケンシユ 賢從 二五二八 清淨華院  
第六十一代。慶運社延譽と號す。嘉永五年九  
月勅請により清淨華院に晉重。安政三年正月  
遷歸、明治元年九月十一日寂。壽不詳。

ケンシユ 玄周 二〇八七 清淨華院  
第十四代。南興寂然と號す。萬里小路内府時  
房卿の息多房卿の舍弟。應永三十四年生る。  
十二才にして等閑について出家す。文安三年  
の秋、父時房建聖院を千本五辻に開き佛立意  
照國師を以て開祖となし、師こゝに住せしも、  
變くならずして應仁の兵亂あり、堂宇同様に  
罹る。故に房を轉じて叡林院に移り傍ら清淨  
華院の事務を執る。文明十五年十二月、清淨華院

の再建に着手し、長享元年八月これを完成す。  
長享二年七月清淨華院の寺務を辭して叡林院  
に隱棲、同月十日寂。壽六十二。五七日に際  
して眞意和尙の機號を賜ふ。

ケンシユ 源授 二二〇四 黒谷金成光  
明寺第二十九代。堪忍社忍譽と號す。法を増  
上寺普光親智國師に嗣き、宗風を江戸天徳寺  
に掲ぐ。寛永十二年黒谷に晉み、同二十一年  
江戸に赴き歸途に於て寂す。時に同年十一月  
二日なり。壽不詳。

ケンシユクガホー 寛叔迦寶 寶石の  
名。堅叔迦、堅説迦、譯、赤寶、赤石にして  
赤珊瑚に似たりといひ、或は寛叔迦樹の花の  
赤色に似たるが故にかくいふと傳ふ。

ケンシユシヨインシヨ一ケツジャシヨ  
一ギ 顯授手印請決邪正義(一卷) 了月  
撰。本書は増上寺開山西譽の弟子了曉が、曾  
て授手印請決一卷を著せしに對し瓜連常福寺  
の英譽了月が該書の中の信法半印、傳法兩印  
の説に就て、了曉の説は本宗相傳の義に背く  
ものとして彼の説を辨駁非難せしもの。文  
明十六年五月四日瓜連常福寺に於て本書を記  
述せり。この難に對して了曉の弟子勢譽愚底  
は延徳二年に、授手印請決清濁一卷を著して  
反駁せり。授手印請決、授手印請決清濁、破

清濁の項参照。

ケンシユン 玄順 二二四八 小石川傳  
通院中興。號は普廣、法通社壽阿と號す。越  
前中州新川郡松倉郷の人なり。幼にして魚津  
西願寺願性に就て出家し後ち傳通院に學ぶ。  
文政三年香衣の輪旨を受け天保六年生實大嚴  
寺四十五世となる。後ち新田大光院、東都傳  
通院に歷住し傳通院の御靈殿等を改築し中興  
號を贈らる。晩年光雲台に隱棲す。安政六年  
七月十一日寂。壽七十一。

ケンシヨ 見性 鎌倉末期の人。覺入  
の門下。長門に生れ、備後蓮華院に於て所學  
の法を弘む。その所説、三心所證義を立て、  
稱名念佛半自力半他力の説をなせること世に  
知らる。

ケンシヨ 顯照 二四〇二 清淨華院  
第五十代。體運社淨譽と號す。元文三年十一  
月勅請により清淨華院に晉重。寛保二年正月  
二十五日寂。壽不詳。

ケンシヨ 玄照 清淨華院第二十代  
顯玉と號す。傳記並寂年不詳。  
ケンシヨ 源正 二二八八 知恩院第  
三十一代。太華社忍譽と號す。萬里小路の出、  
講覺尊照僧正の甥に當る。下總生實の大嚴寺  
の所化。寛永五年七月台命により知恩院に晉

重。同年八月五日寂。壽不詳。

ケンシヨ 玄恕 一〇六〇(魯同)  
ケンシヨ一オージョーデン 現説往生  
傳(三卷) 桂風撰。元文四年作。本書は桂  
風が見聞する所の往生の詳端を筆録したるも  
のにして僧侶廿七人、尼僧十七人、信士十五  
人、信女十五人、童女二人、都合七十六人につ  
いて現在に於て諸の瑞相を感じ念佛往生せる  
傳を記せしもの。

ケンシヨク 見濁 五濁の一。ゴジ  
ヨク(五濁)  
ケンシヨージ 見性寺 大阪市住吉區  
桑津町。住吉は難波大別王の寺にして、難波  
寺、百濟寺とも稱し行基菩薩開創と傳ふ。もと  
光明皇后ここに施願院をたてたまひ、平重盛  
が伽藍を修理し念持佛を納めしことあり。承  
元二年三月法然上人天王寺に參詣あり、生駒  
山より出づる月を眺めて水想觀を行じかの月  
影の歌を詠じたまふと傳ふ。明治十六年堂宇  
回廊にかり同二十七年吉水信阿再興。寺寶  
法然上人の月影の御影、徳木上人自作者波塔  
等。

ケンシヨージ 劍正寺 一宮市大門町  
開山開通。明和五年、淨貞法子志願を立てて  
一字を創建、阿彌陀堂と稱す。慶應二年劍正

寺と改め今日に至る。

ケンシヨージ 幻性寺 山口縣大島郡  
蒲野村。開山心覺。元和五年、千葉九郎  
左衛門平元庶子の子幻空童子菩提のため創建  
し、長尾山清冷院幻空寺と號す。享保七年類  
徳の厄に遭ひ、第十一代寂賢再興す。明治四  
年、小松の萬性寺を合併して現在の寺域に改  
む。寺域は風光明媚、景勝の位を占む。

ケンシヨードテンカイロン 顯淨土傳

或論(一巻) 聖一撰。淨土第一四卷所收。  
略して淨土傳或論、傳或論ともいふ。本書は  
淨土宗の傳承する圓頓菩薩戒の由来と意義を  
述べて他に虧れてゐることを示したるもの。  
その内容は六箇の間答より成り、第一第二に  
他宗の難を決し、第三に自宗の難を決し、第  
四、第五に自宗の難を決し、第六に不信の難  
を決す。即ち初め天台宗に倒置されし圓頓戒  
が、宗祖に傳承するまでの歴史、淨土宗がそ  
の轉流たることを主張し、その戒風の特徵を  
擧げ、淨土宗に宗と戒の二つの血脈あるを説  
く。更に持戒は念佛の助業なることを明せ  
り。その所説よく宗成兩派の傳受を強調し傳  
法史上注意すべきものなり。

ケンシヨードテンカイロンホチュウ

顯淨土傳或論補註(二巻) 全長註。續淨

第九卷所收。本書は著者全長が了譽聖師の顯  
淨土傳或論の文相を平明に解釋し以て讀書研  
究の初心者をお慰せんと試みたるもの。  
ケンシヨブツド。カン 見諸佛土願  
四十八願中の第四十願。普見十方諸土とい  
ふ。釋淨土の菩薩をして、意に任かせて十  
方無量微淨の佛土を照見すること願の前に立  
ちて自らの面像を見るが如くならしめんこと  
を誓はれしもの。

ケンシヨームシヨ。オーシヨ。見

生無生往生 無生而往生又は現世得往  
生の對。凡夫が實生實滅の妄執に立脚して念  
佛すれば此の世を去つて後の世には淨土に往  
生して永遠の生命と無量の益を得るものと想  
定して(見生)淨土往生を願ふも、その實、  
淨土に往生してみればそこは元來彌陀本願力  
所成の無漏無生之處にして、其處に於て自ら  
は覺えざるもおのづから無生を證得し、從來  
は實生實滅の往生と考へてあたりしものは實  
は生滅を離れた無生の往生となるをいふ。こ  
の意味を聖は頌讚十一に於て「見生の實證  
を改めざる凡夫、覺らずして無生の本際に入  
入す。煩惱の迷本を斷せざるの衆生、立ちど  
ころに涅槃の常樂を證得す。有相の心を以て  
無相の悟に契り、事相の行を以て實相門に入

る」といへり。

ケンシン 顯眞 一七五三 延曆寺學僧。

藤原顯能の子。夙に叡山に登り顯密の學を究  
め、四十を過ぎて大原に隱遁す。壽永二年僧  
官を賜はらんとすれど辭して受けず。慧光房  
永祥の誘ひに依り宗祖に淨土の法門を訪ひ、  
更らに淨土教義研鑽の後文治二年秋宗祖を大  
原新林院に招き丈六堂に於て專修の義を聽く  
師深く專修念佛に歸し、餘行を抛ちて念佛三  
昧に入る。三年正月同志十二人と不斷念佛を  
修し、十月大原山中に五房を建つ。六年三月  
延曆寺の應主に就き、五月權僧正を拜し、建  
久三年十一月十四日東塔圓應房に於て寂。壽  
六十三。遺命に依りその全身は新林院に葬る。  
〔傳〕勅傳一四、本朝高僧傳。

ケンシン 玄心 二〇三三 清淨華嚴第

六代。寂願と號す。向阿闍黎の弟子、傳記不  
詳。正平十八年(北朝貞治二年)六月二十七  
日寂。壽欠。

ケンシン 玄信 二二〇四 増上寺第七

十二代。香壽社經實美阿闍黎と號す。信實に  
九田氏、信州更級郡信島村の人。文政十二年  
九月十七日生る。八歳の時拜師の善導寺弘賢  
に就いて出家し傳通院に宗義を究め、東叡山  
應澄に天台を學す。後増上寺に轉住し極業

顯る名あり。香衣輪旨を受け、明治五年十一  
月生實大嚴寺に置し、同八年轉じて鎌倉光明  
寺住職となる。明治十七年宗制新定の際協議  
紛然として管長、本山住職全部辭職せし時、  
選ばれて淨土宗管長事務取扱ひとなり、東叡  
西走して宗制確立につとむ。ついで増上寺に  
兼せし。未だ嘉祥せざるに寂す。時に明治廿  
七年七月十七日。壽五十九。著書「三心私記  
講義二卷、天台教儀圖記一巻、心地觀經釋  
品科註二卷、記主禪師繪詞傳六卷等。  
ケンシン 源信 一七〇三 日本淨土教

の先覺者。比叡山横川慈心院の學僧にして世  
に惠(慈)心僧都といふ。平安中期の天慶五  
年、大和葛木郡に生る。父は卜部正親、母は  
清原氏。幼にして父を喪ひ、奇夢を感ずるこ  
とあつて叡山に登り良源に師事して學解隆積  
十五才にして既に八講の師となり學僧一山に  
高かりしも、ひたすら名聞を厭ひ、榮華を避  
け入道年中横川の慈心院に歸居して一家の義  
を弘め専ら淨業を事とし著述にいそむ。時  
人その穢客滯乎たるを稱して今迦葉といひ亦  
その盛徳遙かに宋の高僧に傳はり彼の地に於  
て日本源信如來と稱せられたりといふ。永觀  
二年往生要集を著し後世日本淨土教の先驅を  
なす、亦これを宋に送るに諸師嘉賞せざるな

ケンシン—ケンゼンザンマイ

し。長保五年源信の弟子寂照入宋せんとする  
や台教に關する二十七條の義を四明の碩學知  
禮に咨問し、知禮その該博なる學解と高邁な  
る識見に驚嘆し爾後學解の往復屢々なり。身  
體弱すと雖も學徒その門に雲集し後世惠心流  
の基をなす。然も一期の稱名念佛二十億遍な  
りといひ、又造作するところの佛像の彫刻尤  
だ多し。寛仁元年六月十日寂。壽七十六。著  
書「一乘要決三卷、要法門二卷、觀心略要集  
二卷、大乘對供會抄十五卷、因明四相遠略註  
三卷等は惠心の學的的地位を如實に意義つけ  
るもの、又淨土教關係としては往生要集三卷あ  
つて後世淨土教徒の指針となる。この外に阿  
彌陀經略記一巻、二十五三昧起請、眞如觀、  
白毫觀、菩提要集、來迎和讃、六時讚一巻、  
等あり。現存の惠心著といはるるものの中に  
明に後世の偽作と思はるるもの亦た尠からず  
淨土依憑經論章疏目錄には淨土教關係の著  
作三十一部、蓮門經語録には三十六部を擧ぐ  
。師は當代無比の才解に住しながら生涯顯職  
につかず晩年には少僧都をも辭して専ら解行  
につとめ天台一家に於ては檀那流に對する惠  
心流の祖と仰がれ、淨土一門に於ては日本淨  
土教の先驅と慕はれ、蓋し平安末期に於ける  
佛敎世界の第一人者といはるべき高僧なり。

ケンシンケンブツ 現身見佛 現身に

於て見佛するをいふ。往生要集卷下本に念佛  
の利益七種を明す中第三に出づ。源信は文殊  
般若、般若經、念佛三昧經、十二佛名經等の  
文を引いて證となし、現身に見佛することを  
明かす。十二佛名經には「若し人、能く至心  
に七日佛名を誦すれば、清淨の眼を得て能く  
無量の佛を見ん」とあり。

ケンシンジ 玄信寺 東京市深川區龜

住町。淨土宗深川五方丈の一。幽遠山深妙院  
と號す。開山源運社本譽玄故。寛永六年住賢  
町に創建せしも後ち現在の地に移す。寺賢、  
惠心作阿彌陀佛、崇源院念持佛、弘法大師作  
辨才天、桂昌院念持佛等。

ケンセイ 源清 趙宋代天台の學僧。觀

無量壽佛繪像記二卷の著書あり。

ケンゼンザンマイ 現前三昧 諸佛如

來を目前に見ることを得る三昧を云ふ。觀經  
には「彼の國に生じ已りて、諸佛現前三昧を  
得ん」とあり。傳述記には道闇の説を引き、彼  
國に生れ已りて、諸根常に諸佛を見、修習を  
假りて方に見るにあらざるが故に現前三昧と  
云ふ」とあり。此の三昧を得る時節の迅速は  
機根に依り不定にして、定機は眞身觀に「無  
量壽佛を見るものは即ち十方無量の諸佛を見

ることを得—と説けるが如く、現に此の三昧を成じ、散後には觀經五百の侍女の如く、彼の淨土に生じて此の益を得るものと解さる。

ゲンゼンジュキ 現前授記 佛が聖弟子の現前に於て修證の得失又は差別等の記別を授くるをいふ。四種授記の一。菩薩の善根を積聚し、根性純熟するを以て、大衆の中に於て當に必ず成佛すべしと未來を顯說して授くるをいふ。觀經眞身觀に「無量阿僧祇劫してまつるものは即ち十方の諸佛を見たまつる無量の諸佛を見たまつるが故に諸佛現前に授記したまふ」とあり。

ゲンゼンゾーモツ 現前僧物 一ツモツ(僧物)

ケンセンチャク 顯選擇 薩寬著。並覆の聖者定願か宗祖法然上人の選擇集を破斥せんとして著したる彈彈擇に對し、宗祖の門人隆寛律師がこれを論破せし書にして、此書中に嘉祥の法難の誘因となりし「汝が辭破のあたらざることをたとへば晴天の飛塵のごとし」との文あり。

ケンゾー 敵弁 一ツゾーギシキ(稱儀式)

ゲンゾー 查察 一三三〇 隋代の人。細部に生る。はじめ信都の僧法師について出家し、經論に通曉し特に律に意を用ふ。

開皇三年隋の高祖に謁し辨教論を作る。のち煬帝に金光明經等を講じ、同十二年大興善寺に入り譯經の業に従ふ。大業二年召されて禁中の翻譯館に入り、同六年七月寂。壽五十四。善導大師の往生禮讃中には西方淨土阿彌陀佛を讚するに查察法師の文を引用せり。

ゲンソ 現相 十二門戒儀即ち開顯菩薩戒を授くる時の十二作法の中の第九。開顯戒を受くることによりて諸の佛國に瑞相現じ爲に諸善護受者をして堅固覺行の心を起さしめ、受者は宜しく之を信知し、至心に業戒を守護し、身命を惜まず、犯戒することなき様に努むるをいふ。

ゲンゾーエコー 還相廻向 住相廻向の對。極樂淨土に往生したるものが、再びこの娑婆世界に還り來つて、一切の衆生を勸導し、之れを教化し、共に佛果に向ふをいふ。一ニコー(廻向)

ゲンゾーエコーゲ 還相廻向偈 主として能化の廻向のとき用ふる偈文。誓到彌陀安養界 還來穢國度人天 願我慈悲無障礙 長時長劫報慈恩 法華讀下に出づ。淨化せる能化の還相廻向を念じ、併せて佛恩報謝の行業を成せんとの意なり。

の二十九種并嚴の中、國土十七種功德莊嚴の一。極樂淨土は教主彌陀の眷屬たる諸聖衆皆な等しく彌陀の正覺の花より化生して一染平等優劣尊卑なき功德あるをいふ。

ケンゾクジユカイ 眷屬長壽願 四十八願中の第十五願。人天壽命の願ともいふ。極樂淨土中の人天の壽命の無量無邊ならんことを誓はれしもの。

ケンチ 還推 一カナンチ(觀推) 二代百萬遍知恩寺二代。源智字は勢觀、俗姓は平氏。平家没落後母と共に源氏の探索を脱れて潜居し、建久六年十三歳にして宗祖の室に入る。宗祖はこれを慈圓僧正の下に送り出家得度せしむ。後ち宗祖の門に歸り淨土の教義を受け、常隨給仕すること十八年、宗戒の兩脈を承く。宗祖の臨終に當り、師は請ふて御自筆の念佛安心の肝要の御所存を受く、即ち一枚起請文之れなり。師は且つ道具、本尊、房舎、聖經等を附屬せらる。曆仁元年十二月十二日加茂神宮寺(功德院)に寂す。壽五十六。功德院は後に知恩寺と改む。著書「還推要訣」一卷。「傳」勸傳四十五、龍溪祖傳、淨土傳證聖記等。

ケンチヤクジユカイカイ 棟樑受戒戒 〔著書〕五重本末講義六卷、紫雲山縁起及縁起考(傳) 異谷誌要。

ゲンチン 玄珍 清淨業院第二十一代。瑞鳳と號す。傳記並寂年不詳。

ケンドー 顯道 二三四八 知恩院第七十一代。慈蓮社萬壽所歸命阿達達と號す。寛政二年越中放生津に生る。同地大榮寺一代となり、嘉永元年九月、五十九才にして幕府の台命により鴻巣勝願寺より知恩院住職に轉昇す。在任約十年、安政五年五月十二日寂。壽六十九。

ケンドージョーシユのガン 見道場樹 四十八願中の第二十八願。極樂淨土に往生せるものは凡聖を通じて高さ四百萬里の道場樹を知見せしめんことを誓はれたるもの。

四十八願成の一。何人と雖も受戒を請ふものにはこれを授けて攝化すべく、えりこのみして漏失することを戒めたるもの。

ケンチユージ 建中寺 名古屋市簡井町。徳興山崇仁院と號す。慶安三年尾張藩主徳川光友の創建。成慶院存勳山。墨印五百石を給せられ永代紫衣の輪旨を賜ひ、頗る結構壯大なりしと。中興到譽傳及寺門發揚に努めしも不幸天明五年堂舎災燬に歸す。幾くもなく再營、堂宇中本堂には鳥佛師の作と傳ふる本尊阿彌陀佛を安置す。寺域一萬七千九百四十坪、境内には藩主時代の靈屋、兼中連殿の墳墓等多し。寺寶、蒙古聖衆の繪巻物二軸、同えことば一軸、田うを屏風一双等。元と所本寺なりしが維新後知恩院末となる。

ケンチユージ 玄中寺 玄忠寺ともいふ。善覺大師の住寺。支那北州文水谷石壁(山西省大原府)に在り。北魏の末、善覺この地に淨業を修して梁の肅王、魏王孝靜帝等を初め貴族の歸仰を受く。後ち東魏興和四年善覺は山西省汾水平遙山寺に示寂せしが特に勅してこれを玄中寺に葬り碑を建つ。大業年中道綽禪師善覺の遺風を慕ひこの寺に訪で専ら淨業を勵みしこと著く人口に膾炙す。現今永寧寺と稱する寺あり。

ケンチユージ 玄忠寺 山瀬谷市田町。開山存。天文二年、開部玄忠邸へ出家の僧存余來り投じ、開部氏これに深く歸依し老母追弔のため宅地を寄附して一字を創建す依つて玄忠寺と稱す。

ケンチユージ 玄忠大師 支那淨土五祖の隨一善覺の異名。善覺は山西省汾州北山石壁玄忠寺に住して淨業を勵勵し行化を布きしが故にかいふ。一ドンラン(曇鸞) ケンチヨ 見超 二二二二 知恩院第四十七代。慈蓮社仰阿照唐如空と號す。承應三年生る。瓜連常福寺第三十三世、小石川傳通院第二十三世等に歷住し、享保十二年八月七十四才にして知恩院住職に台命さる。在任五年餘、同十七年正月七日寂。壽七十九。(傳) 知恩院史。

ケンチヨ 原澄 二四二二 異谷金成 光明寺第四十九代。清蓮社生渡國阿淨譽と號す。江洲信樂の人。文化二年、江戸崎大念寺より愚谷に轉住。同七年、知恩院宮堂超法親王得度の教授師をつとむ。堂宇の修補に盡力すること多年、文政三年七月寂。壽六十八。

ケンネン 源然 黒谷金成光  
明寺第二十五代。親社社長良把と號す。鎌倉光明寺より轉住。慶長十年、豊臣秀頼の寄進により阿彌陀堂を改築す。現存のもの見たり。慶長十四年四月七日寂。壽不詳。傳一。黒谷志要。

ケンバ 源武 知恩院第二十  
六代。大和香久山法然寺の開山。勢多尾底の弟子。教團社保譽と號す。大永七年知恩院住職となる。聖大永八年の初めに辭山。其の他の事蹟明かならず。天文二十一年三月三十日寂。壽不詳。傳一。知恩院史。

ケンブツ 見佛 山大和前司親盛入道のことにして大和入道ともいふ。覺實には高麗を引きて五位下大和守左衛門尉親盛は多嗣公の十三代の孫とす。その行跡は不明なるも初めは天台宗を學し、八坂引導寺に住せしもの如く、後ち宗祖に歸依す。勅傳に依るに入道は建久三年(一八五二)秋後白河法皇の御菩提の爲めに引導寺に於て心阿を調聲とし、住蓮、安樂と共に助普して六時禮讃を修し、淨土宗六時禮讃の源流をなす。七箇條の起請文にも其の名見え、大原問答雜起に依ればその論席にも列坐せる旨を傳ふ。  
(傳)佛身を見ること。多く念佛三昧の利益たるも佛の加被力によつて見佛することもあり見佛の中に平生の見佛と臨終の見佛との二あり。如實なる念佛三昧により佛身を見、又觀經華嚴經に説かれたる草葉の見佛の如きは平生の見佛であり、觀經九品往生入が稱名によりて得る見佛の如きは臨終の見佛なり。臨終上人は師の善述の至る所に見佛を説き、念佛三昧の極致を見佛となす。その見佛たるを觀佛にあらずして如来の光明を見るにあり。即ち不離佛、值遇佛の境地を云ふ。

ケンブツオージョー 見佛往生 念佛三昧の功又は佛の加被力によつて佛の色身を見佛して往生するをいふ。多く上根の人の往生にして下根の人にはこのこと少し。  
ケンブツザンマイ 見佛三昧 見佛は三昧により、三昧は必ず見佛す、故に見佛三昧の稱あり。觀念法門に「又此の稱を以て證するに、亦是れ彌陀佛の三力外に加するが故に見佛す。三昧と言ふは即ち是れ念佛の行人心に稱念して更に雜想なく、念佛住心し、塵相離すれば、心眼即ち開けて彼の佛を見ることが得。了然として現すれば即ち名づけて定と爲し、亦た三昧と名づく。正しく見佛する時、亦聖衆及び諸の莊嚴を見る。故に見佛淨土三昧増上縁と名づく」と云ひ、釋淨土

るも佛の加被力によつて見佛することもあり見佛の中に平生の見佛と臨終の見佛との二あり。如實なる念佛三昧により佛身を見、又觀經華嚴經に説かれたる草葉の見佛の如きは平生の見佛であり、觀經九品往生入が稱名によりて得る見佛の如きは臨終の見佛なり。臨終上人は師の善述の至る所に見佛を説き、念佛三昧の極致を見佛となす。その見佛たるを觀佛にあらずして如来の光明を見るにあり。即ち不離佛、值遇佛の境地を云ふ。

群論第七に「佛をして絶えざらしむれば、遂に三昧を得て、佛聖衆の嚴然として常に目前に在るを見る。故に大業日藏分經に言はく、大念は大佛を見、小念は小佛を見ると。大念とは大摩訶佛を稱するなり。小念とは小摩訶佛を稱するなり。斯れ即ち聖衆なり。何の感あらんや。現に即今の諸の修學者を見るに、唯摩訶佛を稱して念佛すれば三昧成じ易く、小摩訶佛を稱すれば遂に隨散多し。此れ乃ち學者の知る所にして、外人の曉むるところにあらず」と云へる如きは即ち口稱念佛による三昧發得にして、又以て見佛することを得るを説けるものなり。これ觀佛、口稱の何れたるを問はず不離佛值遇佛、見佛定の生活に名づけたるものなり。  
ケンブツジユキ 見佛授記 佛が修行者の未來の證果を一々區別して豫言したまふこと。某菩薩は何時、何世界に於て佛となるべしなど宣ふこと。委しくは見佛して記別を授かること。觀無量壽經上品上生に「彼の國に生じ已りて、佛の色身の相具足するを見たまつり、諸の菩薩の色相具足するを見る光明寶林妙法を演説す。聞き已りて即ち無生法忍を悟り、須臾の間を經て諸佛に歷事して十方界に闢し、諸佛の前に於て次第に授記せ

られ本國に還り到つて、無量百千の陀羅尼門を得」といふによりて知るべし。

ケンブツジョー 見佛障 命終時の來迎あるも即時に見佛出來ざる罪障をいふ。善導大師別傳註卷上に「見佛の障とは是れ淨土に生じ已れば、蓮華亦合して三寶を見聞すること能はず、是を以て罪を債ふ、罪に多少有りて華開遲速すること經に説くか如し」と云へり。

ケンブツゾージョーエン 見佛増上縁 五種増上縁の一。ゴシユゾージョーエン(五種増上縁)  
ケンブツのフドー 見佛不同 衆生の機根の相違に従つてその見佛同じからざるをいふ。觀經九品を見るも或は色身を見るあり、或は化身を見るあり或は極樂に生じて直ちに見るあり、或は時を経て見るあり、此等の相違遲速皆な因縁の熟不熟によるをいふ。  
ケンブツモンポーク 見佛開法樂 ↓ジユラタ(十樂)

ケンホクエツシヨ 遣北越書 源空述一念義停止起請文ともいふ。漢語燈錄所收。本文は宗祖がその在世中越後の國に於て成覺房の弟子等が一念往生の義を唱導せりとの門弟光明房の消息に基いて、之を停止すべく撰

述せられしもの。その撰述は宗祖七十七歳、承元三年六月十九日附の起請文にして、内容は一念義の邪道を成め、且つ往生の行人の隨ふべき道を示されたるもの。

ゲナム 還無 ↓クレダツ(空脱)  
ゲンヤク 現益 當益の對、現在世の利益といふ意。ゲントーセリヤク(現當二世利益)  
ゲンユー 現有 ↓ヤマシタゲンユー(山下現有)

ゲンヨ 源譽 ↓キョーガン(總嚴)  
ケンリヤクホーゴ 建曆法語 ↓イチマイキシヨーモン(一枚起請文)  
ケンリユー 賢龍 百萬遍知恩寺第六十代。天竺社運譽と號す。伊勢國一志郡の人。姓は高田氏。同國松坂清光寺卓明の弟子。慶應三年四月、幕府の命により館林善導寺より百萬遍住職に轉昇、これ台命住職の最終なり。時恰も明治廢佛毀釋の只中にして、師はこれが對策に腐心、能く力を教法の宣揚と寺務維持の聖業に捧す。明治十八年洛東岡崎井窪寺に隱棲して専心淨業を勵む。同年八月一日寂。壽六十七。

ゲンリユー 源立 ↓ドーザン(道殘)  
ケンリヨ 顯了 増上寺第

五十九代。實譽と號す。文政六年三月傳通院より轉じて嶽山に遺す。而して同七年嶽山坊中十七ヶ院に香衣を許可す。然るに知恩院の徒これを喜ばず、終に香衣騒動となり文政十二年爲に職を辭す。後ち傳通院念成等の調停により天保元年再住六十代に補さる。天保二年三月寂。壽不詳。

ゲンリヨ 源良 黒谷金成光明寺第二十三代。星蓮社看譽と號す。黒谷第二十一代性譽法山の資。初め鎌倉光明寺に住し後ち黒谷に轉住。文政二年豊公の寵姫徒君を大檀那として御影堂を再興す。文政四年三月十九日寂。壽不詳。  
ゲルシヨ 源流章 ↓ジョードゲルシヨ(淨土源流章)

コ

コー劫 *Kōjō* 劫波の略。時分・大

時・長時・又は分別・時節等と譯す。算數の及ばざる長大の年月の意。大明三藏法數には草木・沙羅・芥子・碎塵・拂石等の五輪を以てこれを説明す。その中、芥子、拂石の二輪最も廣く經論に散見す。前者を芥子劫と稱し方四十里の城の中に芥子を滿たし、長壽の天人三年毎に一粒を取り去り、その盡くる時を云ふ。後者を拂石劫と云ひ、方四十里の磐石あり三年に一度、天衣を以て一拂し、石の消磨する時節を云ふ。

コー業 *Kōgō* 造作の義。身體と口と意にてなす善、惡、又は無記の働きの意。通常これを身口意の三業と稱す。俱舍論光記によれば業に二を分つ。(一)身の造作、語の造作を直ちに業となし、(二)第六意識と相應して起る思の心所即ち身を動作する思を身業、語を動作する思を語業、意を動作する思を意業となす。この二種の中、俱舍にては第一種を以て實業となし、唯識にては、第一種

を以て實業とし、第二種の身語を發動する現行の思の心所を實業とす。淨土教にてはその質、量等を問はず一般に衆生所作の三業の該稱に用ふ。

コーア *Kōa* 向阿 *Shōyōken* (譯音)

宗祖法然上人の門人。傳歴不詳なるも、熊谷直實入道が洛西栗生野に光明寺を建て、後ち元久二年關東へ歸る時に、宗祖の門弟たる幸阿にこの寺を付屬す。嘉祿法難の時、宗祖の遺骸を此の地に於て茶毘にし、其の後幸阿は羅西に赴きて布教に専心せりと傳ふ。

ゴアクシュ *Gōakushū* 五惡趣 五惡・五道・五惡道

ともいふ。邊界を地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五種に分類せるもの。この中、天上に修福の果報とされ、餓鬼とは飢渴に苦しめらるゝものにして貪欲又は中品(下品)の五逆十惡の果報とされ、畜生とは鳥獸虫魚等の類にして愚癡又は下品(中品)の五逆十惡の果報とされ、人間とは五戒又は中品の十善の果報とされ、天上とは六欲天・四禪天・四無色天等の總稱にして上品十善及び禪定による果報と解さ

れる。

ゴアクダン *Gōakudan* 五惡段 無量壽經卷下に廣く五惡を説めて五善を勸めたる一段あり、この文は五惡の相を詳説せるより此の名あり。同經の毘盧五種現存する中、平等覺經、大阿彌陀經には之を收むるも、他の無量壽如來會、無量壽莊嚴經等には之を欠き、梵本にも亦これを見ず。

コーアショーンテン *Kōa shōntēn* 向阿上人傳(二卷) 撰者不詳。淨全第一七卷所收。本書は外題を向阿上人傳傳、内題を向阿上人傳となす。その刊行の概起に依れば、上人の遺跡西光庵の什寶にして繪は古唱和尚、書は林觀雲竹法師の筆跡、廣澤の孝源大僧正の跋文あるを、天明七年五月に刊行せし如く記されてあり、向阿の事跡は諸書散逸し或は略にして始末窺ひ難きものあり。然るに本書は粗々向阿の事跡を知り得る好資料なり。

コーアミダブツ *Kōa midabutsu* 幸阿彌陀佛 *Kōa* (幸阿)

コーアイン *Kōa in* 公安院 京都市左京區岡崎東福川町。開山賢譽萬説。正保三年十月、尾張藩祖徳川義直公開基。享保十二年火災に罹り堂宇寶物等悉く焼失す。享保二十一年再建。

コイシカワガクエン 小石川學園 東

京市小石川區表町七九。大正十三年七月創立。その保育部を主とし内務省の依頼を受け、明照會が初代園長鈴木積善によりて創設せる隣保事業なり。

コイシカワデンズーイシ 小石川傳

通院志(一卷) 睡門編。淨全第一九卷所收。覆林小石川傳通院志、又單に傳通院志、小石川志とも略稱す。本書は、關東十八撰林の隨一たる小石川傳通院(東京市小石川區表町)の寺志にして諸他の撰林志と同一體裁の編述なるもその記述稍々詳密なり。その内容は古山開祖・將命再營・法眼堂會・院寮列名・賜茶應章・開山高徳・法弟上足・歷世山主・傳燈師普・尊尼系傳・所傳高靈・門末由繼の十二部より成り、當寺の史實沿革等を述ぶ。末尾に光雲寺及び當覺寺が寺號公稱の許可を受けて傳通院末となりしことを附説せり。

コイセンヨキガクエン 皇威宣揚祈

願會 皇國の威武を中外に宣揚せんことを天地神明、十方三世諸佛、諸大菩薩等に祈願する法會にして近時旺んに行はる。

コイイン *Kōi in* 公胤 *Hōin* 天台宗 鎌

倉初期の人。世に明王院僧正と呼ぶ。中院右少將兼俊の子。夙に園城寺にて顯密の學に達し

コイシカワガクエン——コーエジ

曾て宗祖の專修念佛を據ひ淨土決疑抄三卷を著して選擇集を成す。後ち宗祖に見みえ深く念佛門に歸依し、所作の著書を燒きて前非を悔ひ上人の勸化に歸し、宗祖滅後滿中陰法會の導師を勤む。建保四年閏六月廿日寂。壽七十二。

ゴイン *Gōin* 五音 聲明音楽にて用ふる基本

音階の名稱。音の高低を五つに分ち。宮・商・角・徵・羽と名づけたるものなり。此の中、宮を主音とし次第に商・角・徵・羽と上り、其の上は一重二重と五音を反覆して音をあげ、低音の時は宮より下も羽・角・商・宮と次第に下り一重二重と反覆して低音を示す。此れもと支那音樂の音階にして黃帝の昔より傳はると云ふ。後世五音を五佛・五藏・五季・五味等に配するものあれ共聲明音階としては第二義的のものなり。

コウん *Kōn* 孤雲 *Sōun* 知恩院第四十代

禪師專譽と號す。寛永元年生る。岩槻淨園寺第十一代、新田大光院、鎌倉光明寺第四十七代等に歴任し、貞享五年二月、暮命により知恩院に轉身。在住すること三年、元祿四年十一月六日寂。壽六十八。

コーウんじ *Kōu nji* 光雲寺 東京市小石川區表

町。もと傳通院學寮なり。明治十二年九月、軍

京府下西小松川の仲台院に合併しある常法院を移し常法山光雲寺と號す。

コーウんじ *Kōu nji* 光運寺 四日市市上新町。

三重山と號す。開山源譽。正安三年開創。應仁年間兵火に罹り再建せしことあり。末寺五ヶ寺。

コーエ *Kōe* 香衣 *ganha* 乾陀即ち香樹に

よつて染めたる衣の意にして、香木の樹皮、根、葉、果實等の煎汁を以て染めたる法衣をいふ。依つて本來は、木欄色又黃褐色なるべく、青・黃・赤・湖を香衣の四色といふ。何れにしても從來は香衣は勸許によつて着服すべきものとされ紫衣に次ぐ重要な衣服なり。宗祖大師は白河法皇の召に應じて仙洞に往生要集を講じ、圓頓戒を御進講申し上げ上人の號と香衣を賜ふたと傳えられ、これ我國勸賜香衣の嚆矢とす。香衣は中古以降僧正位以上の僧侶の法服なりしが室町時代以後、香衣の輪旨(勸許)を受くる風習が追々各宗の間に流行し、本宗にては徳川時代に檀林、格寺、能分地等の寺格に香衣地あり、これを平僧の上紫衣地の下に置き、現行法に於ても尙其の規を准用せり。

コーエジ *Kōeji* 香衣地 徳川時代に香衣の輪

旨を朝廷より賜りたる寺院のことを云ふ。

**ゴエネンブツ** 五會念佛 唐の大興四年(一四二九)に法照が始めし念佛修行の一儀式にして五會法ともいふ。五會念佛は大經の一清風時に發して五音の聲を出す。とあるに基き、五種の音聲を以て彌陀三尊を念ずるをいふ。此の法事の作法は道俗多ければ六・七人、少ければ三・五人の好聲のものを選ひ所定の行儀をなし、五音の曲調に寄せ觀念次第して念佛を唱ふ。即ち第一會は平聲觀念、第二會は上聲觀念、第三會は平聲觀念、南無阿彌陀佛、第二會は平上聲觀念、南無阿彌陀佛、第三會は非聲非觀念、南無阿彌陀佛、第四會は南觀念、南無阿彌陀佛、第五會は四字轉念、南無阿彌陀佛と次第す。この五會念佛は、かの高僧大師入唐の時將來せる五台山念佛三昧法これにして、後ち徳川延寶頃の忍波これを京都獅子谷に移し行ふ、世に獅子谷五會念佛と稱するものこれなり。

**ゴエネンブツリヤクホージサン** 五會念佛略法事讃 一、ジヨドゴエネンブツリヤクホージサン(淨土五會念佛略法事儀讃)

**ゴエネンブツ** 觀念佛 善導宗祖の専ら勸められし本願念佛のこと。凡そ宗教の實踐の行事の方法に就て、其の發達の輕路を辿れば觀より聲となれるもの、如し。譬へば佛敎以前の印度敎にせよ、印度の佛敎にせよ、

支那初期中期の佛敎にせよ、何れも皆觀念を主とす。次で眞言の眞言、日蓮の唱題念佛に訴ふと雖も亦之れ自力の見を出でず。淨土敎の念佛に於ても初めは觀念念佛の念佛を主張せしが善導並びに宗祖に至つて、聲の念佛を力説す。觀念念佛の念佛は實踐の場合、種々の感情や概念等所謂妄想邪念排補し其根本目的を果し難く、又相好を想像し思惟を凝らす事は幻覺を誘起し且つ之れを客觀的實在と見誤り易し。口稱念佛は是等の弊習を免れ得るのみならず、音聲の連續は身心全部を活動せしめ、其處には煩惱・妄念の網を張ることなく、知的推理の聯想も這入する餘地なく注意の中心も定まり漸次宗教的深味へと進展して功果最も顯著なり。大以談義録に「易修而功高易行而理深」と云へる、誠に實修的體驗の聲なり。善導が佛の十方衆生の聲、一切を洩らさざる願意に基きて「乃至十念」を「下至十聲」と釋し、宗祖が念佛は一を強調して口稱の念佛を勧められたる事、最も深意の存す所なり。「異香よりも紫雲よりも、南無阿彌陀佛と唱ふる聲に過ぎたる往生のしるし」は傳るべき、かまへて唯とかくのうら思なく、眞心に念佛して本願にあづけ奉りたまへこと。聲に出す念佛に就て善導同歸集には十徳を數

へ、永觀律師は更に一徳を追加されたり。一、ゴエネンブツ(高聲念佛)

**ゴエホー** 五會法 一、ゴエネンブツ(五會念佛)

**ゴエホージサン** 五會法事讃 一、ジヨドゴエネンブツリヤクホージサン(淨土五會念佛略法事儀讃)

**コーエン** 皇圓 一八二九 天台宗。時人肥後の阿闍梨と稱す。藤原重兼の子。惠心流の學者橘生の惠覺に師事し、叡山東塔の功德院に居住して道譽高し。宗祖十五歳の時彼の門に投じ、三年に亘りて三大部を修學す。俗傳に依れば、師は彌勒の出世を待たん爲遠州櫻ヶ池に投身し大蛇に化せしと。嘉應元年説譯不詳。

**コーオンジ** 皇恩寺 和歌山縣那賀郡小倉村。懷岳正清院と號す。開山信譽。天正年中、小倉領主津田晴物、普光觀智國師の弟子たる信譽を招請して、その先祖の墓地に一字を建立し光恩院と稱し、當時小倉莊以下七ヶ村悉く眞言宗なりしを淨土宗に改め一村に一寺を設けて光恩院の末寺となし、現今合せて十三ヶ寺を存す。元和七年、徳川賴宣の命によりその妹正清夫人を院内に改葬し、その法號を取つて院號となし皇恩寺と改む。

**ゴカイ** 五戒 在家の人すなはち優婆塞優婆夷が受持すべき五の訓戒。五學處・五大施ともいふ。即ち不殺生成・不偷盜成・不邪淫成・不妄語成・不飲酒成。一に不殺生成とは生物を殺さざること。二に不偷盜成とは與へられざるものを取らざること。三に不邪淫とは邪まなる姪を行ぜざること。四に不妄語成とは無實虚妄の言を作さざること。五に不飲酒成とは酒を飲用せざること。

**コーカイイツタイ** 香海一齋(一巻) 普賢撰。安永元年十二月の序文あるより推察してそれ以前の作なることが知られる。本書は圖相を畫き毎章これに解釋を加へ以て佛敎の理を説明せしもの。

**コーカイゲ** 廣開偏 諸佛問向文ともいふ。十方恒沙佛 六通證知教 今案二卷。廣開淨土門觀音疏支義分に出づ。支義分傳通記に依れば釋迦彌陀二尊の教に依つて淨土門の義理を説かんことを述べ併せて十方諸佛に意見を請ふ意なるも、法會の時に唱ふるは、此の意義を轉用して淨土門の法會を修せんことを十方諸佛に表白し其の意見を請ふ意なり。

**コカク** 虎角 二二九 生實大嚴寺の學僧。字は雲洞、隱跡社安譽と號す。俗姓飯田氏、甲斐の人。十三才にして道譽貞把に従つ

て出家し宗學をうく。初め岩槻の淨安寺に住し、後ち生實大嚴寺に移り、宗風宣揚、學徒養成に力をいたし、又感學存貞と協力して檀林清規三十三箇條を作製す文應二年二月寂。壽五十五。(著書淨土因義私、淨土六祖勘文等)。

**ゴーガ** 恒河 一、恒河、強伽に依り、天堂來と譯す。印度東北に流るる印度三大河の一。源をヒマラヤ山に發し延々千五百哩、幾多の支流を合して印度洋に注ぐ。この流域は印度古代文明の發祥地にして佛敎も亦この地に興る。従つて印度にてはこの河の恩恵を蒙ること多く遂に之れを神聖視し、須彌山説起るに到つては閻浮提四大河の一として之を採る。この河の雄大なることは、よく經典に於て無量無數を例示せんとして恒河沙を喻に引くことによつても知らる。

**コーガクジ** 光街寺 (1)三重縣榮名郡長島村中筋。天機山傳通院と號す。開山飯沼弘經寺第九代支譽大機。徳川家康の母傳通院殿の菩提所たり。慶安二年、松平佐渡守良尙の移轉と共に現在の地に移る。

(2)長野縣北佐久郡小諸町。徳川家康の母傳通院殿菩提のため其の嫡男元康下徳田關前に一字を建立して光岳寺と號し、飯沼弘經寺住

職支譽大機和尙を開山となす。元康の嫡男忠良は美濃大垣を領しこの地に光岳寺を創立、寛永元年小諸の領主となるや此の地に在りし芳泉寺を改稱して天機山傳通院光岳寺と號す。現在の寺これなり。

**コーカクタイシ** 弘覺大師 法然上人の説法。宗祖法然上人。五百四回忌正當たる、文化八年正月十八日、時の帝光格天皇より賜りたるもの。一、ホーネンシヨーニンノシヨー(法然上人の説法)

**コーガシヤ** 恒河沙 一、Sahasra 恒河の沙といふ意なり。具には恒河沙數と稱し、略して恒沙又は江沙とも云ふ。算計を以て知る事能はざる數を恒河の沙の多量なるに喩へたるもの。智度論卷七には四義を以てその理由を辨す。

**コガネトーゼンジン** 小金東漸寺志 (一巻) 樺門撰。櫻林志の一。文政天保年間作。本書は著者がその晩年に關東十八檀林の隨一たる小金東漸寺(千葉縣東葛飾郡小金町)の寺志を記述せしもの、その内容は創體起原・現存堂宇・什寶數目・毎夏禮札・寶章主幹・並に上古領知・藤山源末・開山略傳・列世法將・山本墓碑・輪下秀匠・門列各條の十二項に亘つて叙述せり。

コガン 古刹 三三三三 京都法恩寺住僧  
明譽と號し、又康舟といふ。初め増上寺の學  
僧となり、後ち京都法恩寺に住す。晩年西岩  
倉に閑居し、道般畫を嗜む。雲舟の風を慕ひ  
人物山水を畫き、殊に大墨の像に長ず。享保  
二年五月二十三日寂。壽六十五。(著書) 當  
麻受陀羅曼曼二卷、淨土十六祖傳一卷、隆寬  
律師傳一卷等。

コガン 古巖(古品) 三三三三 増上寺第  
三十一代。入道社流譽顯故と號し、顯海とも  
いふ。俗姓不詳。幼にして父を失ひ母と共に  
流浪しや、長ずるに及んで伊勢飯野郡山澤村  
正覺寺草庵の室に入つて出家す。その後江戸  
に下り學究に精進し道譽義解、倫を絶す。は  
じめ小金東漸寺に住し後ち飯沼弘經寺に轉せ  
しが、貞享三年壽命により芝増上寺に晉む。  
元祿四年二月病のため歸職を乞ひ、同五年許  
されて隠栖、麻布一本松の隱室に移る。同年  
九月十六日寂。壽七十二。

コガン 廣願 十二門戒儀即ち圓頓善  
薩戒を授くる時の十二作法の中の第十一。圓  
頓戒を受けて生ずる所の功德を衆生に回施し  
共生極樂の大願を發さしむるを云ふ。  
ゴガン 五觀 食事五觀ともいふ。僧侶

が食事に臨んで發すべき五の觀念。五觀とは  
行事終下二によれば「一には功の多少を計り  
彼の來處を知る、二には自ら己身の德行を持  
む、三には心を防ぎて過を離る、四には正し  
く良藥を事とす、五には業道を成せんとな  
す」をいふ。即ち第一は食物を得るの幸否及  
び施主の恩、第二には我れに此れを受用する  
德行ありや否や、第三には讀んで食し多く貧  
らざるること、第四には飢渴を治する良藥のつ  
もりにて受用すること、第五には道を修めん  
がための食事なることを自覺思念して食事を  
受用する等これなり。

コキ 胡跪 胡跪に作る。胡人跪坐の義  
にして印度に於ける佛敎禮の坐法なり。全て  
屈膝の相を云ふ。これに長跪、半長跪、五跪  
等あり。各項參照。

ゴキ 五跪 敎禮法の一。胡跪の一種に  
して兩膝何れかを地に着け足先きを立て、片  
膝を立てて、腰を跪して足の上に置く坐法を  
云ふ。

コギョー 虚疑往生 一ギンシ  
オージョー(疑心往生)

ゴギヤクエシン 五逆廻心 五逆造罪  
の悪人が轉向して念佛に歸するをいふ。この  
語は選擇集の中に「五逆の廻心上上に通じ、

讀誦の妙行亦た下下に通ず」といへるによる  
宗祖によれば、選擇集に於て、九品と諸行の  
關係を説明し、凡そ九品の配當は、是は一應  
の義にして、五逆の廻心が上品に生れ、大  
業を讀誦せる妙行が下々品に生ることもある  
と述べられてゐる。又大體に於て觀經の説相  
によれば、勝れた行は上品に生れ劣つた行は  
下品に生ると説かれてゐる故に讀誦大乘の人  
は上品に、解第一義の人は中上品に、發善  
提心の人上下品に、受持五戒の人は中上品  
に、受持八戒の人は中上品に、行世仁愛の人  
は中下品に、十惡造罪轉向念佛の人は下上品  
に、破戒偷盜轉向念佛の人は下中品に、五逆  
重罪轉向念佛の人は下下品に往生すと説かれ  
てあるも、これは一應の説き方にして、實を  
言へば九品の中に各九品ある筈なれば九九八  
十一品となり、又その八十一品に各九品ある  
譯であり、實は無量の品類に分たるべき筈な  
り。されば殊勝なる念佛の功德により五逆の  
重罪を犯せる者が轉向して念佛する場合は、  
上品に生れることを得るは決して不合理に  
あらず。

ゴギヤクオージョー 五逆往生 五逆  
罪を犯せる悪人が淨土に往生するを云ふ。五  
逆はあらゆる造罪の中最重罪にして必ず墮獄

すべきものなるも、念佛の功德は更に超絶な  
るが爲、かゝる人も若し念佛を修すれば淨土  
に往生することを得るなり。無量壽經にては  
同じく念佛の功德を説くも五逆と謗法とは共  
に往生を許さず。而るに觀經下下品にては之  
を許す。この矛盾に關しては往生論註、觀經  
疏には抑止攝取の二門をもつて詳しく會通せ  
り。↓ ギヤクホーゴヨシユ(逆謗除取)

ゴギヤクザイ 五逆罪 五逆ともいふ。

恩田に違逆し徳田を棄擲する五種の暴惡なる  
罪業。無間地獄の苦果を感じる惡業なれば無  
間業ともいふ。(一)三業通相の五逆。一に殺  
父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四に破和合僧  
五に出佛身血。(二)大業の五逆。一に塔寺  
を破り經像を燒き佛法僧の物を取る、二に聲  
聞辟支佛の法及び大業を毀謗覆藏す、三に沙  
門を打罵訶責驅使し又還俗せしめ或は其命を  
斷つ、四に五逆の一業をなす、五に因果を撥  
無し常に十不善業を行す。(三)同類の五逆  
一に母無學の尼を犯す、二に入室中の菩薩を  
殺し、三に有學の聖者を殺し、四に衆僧の和  
合縁を奪ふ、五に佛の塔婆を破る。

ゴギヤクボーホー 五逆謗法 五逆と  
謗法。五逆とは五種の逆罪にして殺父・殺母・  
殺阿羅漢・出佛身血・破和合僧、謗法は誹謗正

法の略にして佛法を誹り謗ること。無量壽經  
卷上には「唯だ五逆と正法を誹謗するものを  
除く」とて、五逆罪と謗法の者は往生を許さ  
ずとなすに對して觀經下下品には五逆の往生  
を説き兩者の所説矛盾するにつき古來逆謗除  
取の論題あり。乃ち無量壽經は抑止門の立場  
より逆謗を除き、觀經は攝取門の立場より逆  
謗の往生を許すと説く是れなり。↓ ギヤクホ  
ーゴヨシユ(逆謗除取)

コギョー 小經 數佛偈、四誓偈、眞身  
觀文等の如く經典より抜き出したる偈文及び  
小部の經典を云ふ。

コギョー 去行 婆婆即ち穢土を去る行  
業。即ち往生淨土の爲に修する諸種の行をい  
ふ。善導の觀經疏支義分に「唯願佛日教我觀  
於清淨業處よりは即ちこれ業提希自ら爲に通  
じて去行を請す」と云ひ、「唯願教我思惟教  
我正受よりは即ちこれ業提希自ら爲に別行を  
修せんと請す」と云へるこれなり。就中前者  
を過去行、後者を別去行と云ふ。また去行は  
正雜二行に通ず。決疑鈔卷二に「總じて之を  
言はば難行を修する者は其の去行は所求と所  
歸とに違ず。故に一々の失を成ず。正行を修す  
る者は其の去行は所求と所歸に順ず。故に一  
々の徳を成ず。謂く西方の行人極樂を以て所

求と爲し、彌陀を以て所歸と爲し彌陀の事を  
行すれば所歸及び所求に相順するが故に親近  
等の徳を生ずるなり。又西方の行人極樂を以  
て所求と爲し、彌陀を以て所歸となすと雖も  
若し其の去行の餘行に依る者は所歸及び所求  
に相違す、故に疎遠等の失を成ずるなり」と  
云ふ。即ち去行は正雜二行に通ずることを知  
る。↓ ショゴグシヨキコギョー(所求所歸去行)

コギョーキ 去行疑 去行の疑といふ  
意。去行とは淨土往生の行因即ち正雜二行を  
いふ。その行因を疑ひつゝ實行するを去行の  
疑といふ。去行の疑ある者は往生しうるや否  
やについては、往生は出來うるも種々の障礙  
が生ずる故に疑はないやうに心掛けねばなら  
ぬ十住毘婆沙論には「若し人善根を種えて疑  
へば即ち善聞かず、信心清淨なるもの華開い  
て即ち佛を見る」と云ひ、又地持觀の文には  
「心に疑なきことを得よ必ず淨國に生ず」と  
説かれてあるを、善導釋して「疑を難ること  
を得ざれ、往生を得ると雖も華に含まれて出  
でず或は邊界に生じ或は宮胎に墮す」と言は  
れてある如きは何れも去行を疑ふ障を設ける  
ものなり。

ゴク 五苦 五種の苦情の意。これに諸  
説あり。(一)生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離

苦(善導觀經疏序分義)、(二)生老病死苦・愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五陰盛苦(大明三藏法數卷二十四)、(三)諸大苦・人道苦・畜生苦・餓鬼苦・地獄苦(大台觀經疏)、(四)無量壽經所説の五痛五燒のこと(善導觀經疏)、(五)五濁のこと(善導觀經疏)。

ゴクアキノボンブ 極悪凡夫 十惡五逆の凡夫ともいふ。身に一善を修することなく、恒に五逆十惡等の重罪を修犯せる凡夫のこと。觀經所説の下品下生の機根の如き正しく是れなり。念佛門にては斯くの如き凡夫にても阿彌陀佛の本願によつて攝取されて極樂淨土に生るゝことを得となす。

ゴクエ 黒衣 墨染めの衣。律制によれば純黒色は非法とせられる。即ち黒とは雜泥の意にして多くの果汁を鐵器の中合して混となし、或は池や井戸の泥をとつて、これで染めし色をいふ。支那には北周の時代の記録に僧衣を黒色となしたること見へ、我國にては平安時代に既に墨染の衣といつて、通世の僧或は忌中の服とせられ、鎌倉時代には可なり廣く用ひられしもの、如く、かの宗祖大師は御一代、墨染の衣に墨色の五條袈裟を召されしは周知の事實なり。現在用いてゐる黒衣は全くこの墨染の衣から轉せしものなるも、公

式の法要にはこれを用ひず、而して其の地合にも麻布、絹布、絹、縵子、羽二重、縮緬等様々のものを使用するの風あり。

ゴクエノデーデン 黒衣相傳(一卷) 良運撰。續淨第一四卷所收、本書は、天文十六年著者良運が六十八才のとき記主門下六派(三條了惠道光を除く)門人系統を記述せしもの。

ゴクイクドク 虚空功德 極樂淨土の二十九種莊嚴の中、三種功德の一。此の土の虚空は變遷不慮に起り妖祥不測なるに反し、極樂淨土は全く其の患なく虚空に經綸交結し四面を周匝し、一々の羅網に寶鈴を垂れ聲無邊の法音を演べてゐるをいふ。大經「珍妙の寶網羅其上を覆ひ、一切の莊嚴應に隨つて現ず」とあり。

ゴクシカイ 國使戒 四十八輕戒の一。國と國との間の使者となつて相ひ問はしむることを戒めたるもの。

ゴクソク 五具足 花瓶一對と燭燭立一對と香爐一個との五箇の佛具をいふ。基瓶一個と燭臺一個と香爐一個との三種の具(之れを三具足といふ)を一つの卓の上に置くことが支那宋代の禪宗に於て行はれしこと勅修清規等に見ゆ。我國にても、室町時代禪宗興隆とともに廣く行はれ今日に至る。

ゴクドゴンジキ。ガン 國土嚴飾願 四十八願中の第三十二願。雜物麝香の願ともいふ。極樂國土は無量の雜寶もて莊嚴し、色香具足し、淨穢十方を薫香せんことを誓はれしもの。

ゴクドシヨージョー。ガン 國土清淨願 四十八願中の第三十一願。徹見十方の願ともいふ。極樂の國土は莊嚴清淨にして鏡の如く、十方の佛刹をその中に於て照見することを得せしめんことを誓はれしもの。

ゴクブンジ 國分寺 奈良縣高市郡八木町。もと聖武天皇勸願の道場なり。中興開山好譽再建。向國長谷寺の觀音像と同木同作と傳ふる十一面觀音像あり。

ゴクベツシキ 告別式 一ツギシキ(葬儀式)

ゴクラク 極樂 極樂淨土の略。ゴクラクジヨード(極樂淨土)

ゴクラクオージョー 極樂往生 阿彌陀佛の極樂淨土に往生するをいふ。オージョー(往生)

ゴクラクジ 極樂寺 (1)京都市東山區山科町西野。桓武天皇遷都の供養寺田中某開基元和・承徳の頃淨土宗となり照譽初代となる。

元祿十五年大石良雄移住して檀越となり、亡主の靈碑に菜地を添へて依託す。文化四年祝融に罹り堂宇灰燼に歸す。後ち一字を再建して現在に至る。

(2)長野縣更級郡稱向山町。記主禪師開山。光明山と號す。往昔は同郡佐野村に在つて眞生寺と稱し眞言宗に屬せしが、延應元年記主禪師の巡錫あつてより淨土宗に轉す。後しばしば移轉し、天正十一年上杉景勝この地の領主となるや其の臣須崎三河守稻山城を築きしとき、當寺中興明譽支榮深くこれが歸依を得て城下五日町に堂宇を建立せしことあり。寛永十九年現在の地に移る。寺寶、山越三尊、六字五體名號等。

(3)兵庫縣有馬郡有馬町。建久八年法然上人草創。開基河上民部維清。萬治二年より寛文七年に至る九年間獻上人留錫化導の舊蹟なり。第四十五世中興感遠、彦根城主井伊掃部守の歸仰を受けて本堂を再建せり。寺寶、圓光大師自筆と傳ふる二祖對面御影、願末作本尊阿彌陀如來等。

(4)米澤市東寺町。開山良空。慶長三年草創。もと越後にあり上杉家の菩提寺なりしが、上杉氏の當地移封と共に移轉し寺領を寄附さる。境内に上杉景勝の室持岩院の墓あり。

十六羅漢圖、山越彌陀等。

(10)高岡市坂下町。應安年中、後醍醐天皇八皇子越中宮佛眼明心法親王當國に御配流の御創建されし寺。

ゴクニクジヨード 極樂淨土 Mikkyō 此の娑婆世界を去ること西方十萬億土の彼方に存する阿彌陀佛因感果の淨土の名。又極樂世界、極樂界、安樂淨土、安樂世界、安樂國、嚴淨國土、安樂淨土、安樂世界、安樂界、安樂土、西方淨土、清泰國等とも稱し、單に淨土、極樂、西方等とも呼ばれる。原語は現存梵本によれば蘇訶訶帝 sutahavati 即ち安樂、樂有の意なり。茲に極樂乃至安樂と譯せらるゝに相當すべき原語としては、anārambhi 或は anārambhi 又は anārambhi が適當と想はれる。此の淨土が特に西方にありとするは諸經論の等しく説く所なるもその理由に關しては諸説一準ならず、或は方位上未來世界を西にとりたるものとなし、或は太陽神話に附會して日沒所を彼佛の住所となしたりと言ふ。又その娑婆との距離に就ても異説少からず、共に恐らく大數に約したる爲ならん。その土の功德莊嚴に關しては、淨土三部經を初め往生論、釋淨土群疑論、安國論、往生要集等に説く所にして、何れも皆四十八願



成就の相を基準として理想的佛國土を想像たらしめんとするに努めたり。又其の土位を判ずるに、善淨の報土論に依りて本邦淨土各派も皆之を報土と爲すが如きも、九品淨土を判ずるに異説を生じて東西隆寛、眞覺等は遂に通報化の説を出すに至れり。餘則充棟、諸佛淨土を説くこと多しと雖も、廣く人類理想の極を盡し久しく諸長渴仰の的となりたるもの獨り極樂を以て最となす。良に北方佛敎の精華、民間信仰の標本なりと言ふべし。

ゴクラクジヨードクホンオージョーギ 極樂淨土九品往生義 ↓クホンオージョーギ (九品往生義)

ゴクラクジヨードシユキ 極樂淨土宗義(三卷) 隆寛撰。金澤文庫藏、隆寛律師全集卷上所收。上卷欠。承久二年寫。本書は、長樂寺隆寛が、極樂淨土の國土・禮儀等の諸問題について論述せしもの。その内容は上卷は國土相を解するものなるも現存せず。中卷は往生禮について報土往生・過土往生の二機をあげ、下卷は惣結淨土宗義として、國土相・往生機・一宗名義等を結す。本書は、長樂寺義を知らんとするものにとりて貴重なる資料なり。

ゴクラクセカイ 極樂世界 ↓ゴクラク

タジヨード (極樂淨土)

ゴクラクトソツシヨールツ 極樂兜率

勝劣 彌陀の淨土と彌勒のそれと何れが優れ、何れが劣れる乎古來異説あり。安樂樂上卷には四種の優劣を判じ、迦才淨土論下卷には更に之を詳説せり。即ち兩者を化主、化土、所化の三點より判じて淨穢す、難易七の別を擧げ、何れも極樂を勝易、兜率を難劣なりとす。其他、古藏は觀無量壽經疏、懷感は淨淨土群疑論、元曉は遊心安樂道等に夫々異説を掲げ、或は十二勝劣、或は十四勝劣等を主張すれど何れも徒勞、秋毫之を判ずる理由なし。されば兩者には本質的差別あるに非ず、他力易行を同じうする兩信仰はその目的、方法等に於て差異選擇を異にするに非ずして、兜率信仰の裏面に伴ふ極樂信仰の盛行にその勝劣の跡を見るものなりと言ふべし。その理由即ち、一は佛の名號彌陀に優味あり、二は本願の説彌陀に廣大を認め、三は現在説法の魅力彌勒の本質に適ひ、四は世親の著論生易よく極樂信仰を鼓吹せるに基くものと言はる。選擇第六門に「當に知るべし、兜率近しと雖も難淺く、極樂遠しと雖も難淺きこと」と言へる如きは這般の消息を語るものなり。

ゴクラクノケ 極樂化 ↓極樂淨土に生

一千體の千手觀音中三百餘體、東大寺南大門金剛力士像、虚空藏菩薩像、四天王像中增長天像等。運慶、安阿彌快慶等その門より出で名あり。

コーゲイ 光岡 三三三 増上寺第四代。文庫社隆興と號す。近江國蒲生郡蒲生兵衛三郎秀重の二男。事に依て出家し普賢聖觀に從つて得度す。性學を好み、就中和歌詩賦に巧なり。文明十一年十一月普賢に嗣で増上寺第四代となる。後ち越前葛山に仙年寺を開創す。明應元年五月十四日寂。壽不詳。(傳)葛山誌九。

コケシン 虚假心 至誠心の對。不實の心。この心を除かんが爲めに至誠心を教ふ。決答抄には「偽て之れを行ずる者は貧賤名利の心に牽れて而も往生極樂の思を忘る。名利を求んか爲め許しく外見を飾つて内心と外相と調はず同じからず、内心には名聞利養を求め、外相には往生の行儀を現じて、之れを謂ひ偽る者は此れは是れ虚假心具足の行者なり、往生不可の心なり」とあり。

コケゾードクゼン 虚假雜毒善 凡夫の修する處の善根をいふ。凡夫所修の善根は不實にして煩惱に依つて汚されざるものなき故に虚假といひ雜毒といふ。↓ゾードクゼン

コケネンブツ 虚假念佛 名聞利養、憍慢貪欲の心を以て修する念佛を云ふ。西宗要第六に「虚假と云ふは或は名聞のため、或は利養の爲めに念佛を申し、又人に請せられて申しあるいて布施を打ち取て、我身の利養と

ン(雜毒善) コーゲツイン 高月院 愛知縣東加茂郡松平村字松平。もと徳川將軍家の一族松平氏の菩提所にして常樂安地の格式を有し寺門清淨なりしが後ち漸く衰頽して今日は昔日の面影を失ふ。

コゲツゼンシユ 菴月全集(二卷) 渡邊海旭(號して菴月といふ)の遺文集。昭和八年一月廿六日渡邊海旭歿するや、門下生等相議して菴月全集刊行會を組織し遺芳を蒐録す。上卷は著述、研究論叢に分れ、著述には「歐米の佛敎」を載せ、研究論叢中には淨土宗本校卒業後渡歐途、渡歐中、歸朝後の三期間に涉り發表せられたる四十六種の學術論文を輯録し、附録に歐文著書論文目録を掲ぐ。下卷は講義論叢、警世時言、感懷隨筆、詩話文苑、實業消息の五部に分つて研究論文以外の文獻遺墨を整備採録し、附録に略傳、哀悼文、素描集、略年譜を載す。上卷は昭和八年五月刊、下卷は同年十二月刊。

コケネンブツ 虚假念佛 名聞利養、憍慢貪欲の心を以て修する念佛を云ふ。西宗要第六に「虚假と云ふは或は名聞のため、或は利養の爲めに念佛を申し、又人に請せられて申しあるいて布施を打ち取て、我身の利養と

きに用ふ。又この代文として遊式の淨土靈願儀所載の「願此香燭雲 偈誦十方界 供養一切佛 尊法諸賢聖 無邊佛土中 受用作佛事 普熏諸衆生 同生安樂刹」の文を用ひることもあり。總べて香は佛使ともいはれ佛を迎え奉る使と解さる。佛菩薩に對して吾等が燒くこの香燭に乗じて道場に来臨し給えと心に念じつゝ唱ふべきものなり。

コゲ 五悔 五種の悔過の意。五門の序次により滅罪の法を修する香事を云ふ。往生禮讃に出づ。一に懺悔(已往の罪を發露して將來を誠しむ)、二に勸請(十方の如來を請じて法輪を轉せんことを勸む)、三に隨喜(自他一切の善根を稱讃す)、四に向向(極樂に往生せんため一切の善根を回向す)、五に發願(極樂に往生し六神通を得、十方界に入り苦の衆生を救濟せんと願す)。此の中、懺悔の名は初の一なるも、皆よく罪を悔ひ惡を滅する故、五悔と名づく。五悔の思想はその源、十住毘婆娑論、摩訶止觀等に出づるものにして、佛敎の悔過の一様式なり。

コーケイ 康慶 京都七條の佛師。肥前法橋と號し、宗朝五代の孫、康助の二子なり。父の後を繼ぎ彫造を以て名高し。彼の手になる佛像中重なるものは蓮華王院中尊及び左右

なす。是れを我が自行往生の念佛と人に向つてこれを云ひ、又憍慢恭敬高慢の爲めに申す念佛を、年來の間我れ念佛するぞと云ふ。是れを憍慢の念佛とは云ふなり。此の憍慢の念佛は往生すべからず、是れ虚假の念佛なるが故なり」とあり。

コーゲン 興玄 二二七六 知恩院第五十九代。誠運社聖阿實譽徳雲と號す。享保元年生る。結城弘經寺の正舎の實となり、同寺第三十六世、飯沼弘經寺第五十二世、小石川傳通院第四十世等に歴住し、天明四年八月、知恩院住職に任命され、翌五年三月大僧正に任官。同八年三月十八日寂。壽八十一。(傳)知恩院史。

ゴケン 五眼 一切の事理を照了する五種の眼。即ち肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼をいふ。肉眼とは吾人の肉眼を以て物を見ること。天眼とは天趣又は禪定等によりて得たる眼にて遠く廣く微細に事物を見ること。肉眼が通常人のもの見方であるに對して、天眼は鋭き觀察力を有する人の觀察をいふ。慧眼とは空理を照見する智慧、從つて分別する所無きが故に衆生を救済することを得ず。然るに法眼とは差別を審に了知する智慧をいふ、從つてこの人にはこの法と云ふ様に各の

方便道を知り、一切衆生をして覺證せしめることを得。佛眼とは法眼の完成されしものにして、慧眼、法眼の二つに於て無碍たる智慧をいふ。

コーケンシンシユーククシ 高顯眞宗 國師 存牛が安政四年に孝明天皇より賜りたる勅諭號。ゴソングユイ(存牛)

ゴケンホーオンロン 護國報恩論(一巻) 覺性撰。本書は、天台の學匠中道寺覺性が得尾明惠の推邪論並に同莊嚴記を破説して撰集を撰譯せしものなるも現存せず。

コーゴ 香盒 香を容るる器。香合、香函に作る。木製、陶製、金屬製、布製等種々あり。

ゴコー 後光 背後の光相の意。佛菩薩の項背より發する圓輪の光明。又、全身より發する光輝を云ふ。項背と全身とに二重に光輝を發するを輪後光といひ、身、頭光の縁に附したる光輝を擴大して輪形となしたるを輪後光と云ひ、圓輪になれるを圓光と云ふ。

コーコクジ 光國寺 山形縣東八代郡金生村。阿彌陀山と號す。開山彈正上人。慶長三年草創にして彈正當地方行化の蹟蹟なり。第二代覺念行者諸堂宇を整備し、その後第九代英譽のとき現在の地に轉ず。寺寶、彈正上人御影像外數點。

の觀經を釋せるは悉くその意を譯れる故に、善導自ら觀經疏を著して後等の是非を楷定して經の正意、佛の眞意を鮮明ならしめんとすの意なり。この義は所謂自力聖道門の通規による觀經觀に對して他力淨土門の立場を闡明にし、凡入報土の義を創説せる善導独自の見解にして、他力の眞髓に透徹し佛の眞意に契へる古今の妙釋として、淨土一門の極めて珍重する所なり。

人御影像外數點

ゴコーシユイ 五劫思惟 阿彌陀如來が法藏比丘の因位に於て、四十八願を建立する前、五劫の間思惟せしことを云ふ。無量壽經上に「時に彼の比丘、佛所説の嚴淨國土を聞いて皆な悉く觀見し、無上殊勝の願を超發して其の心寂靜、志著するところなし、一切世間の能く及ぶものなし、五劫を具足して佛國を莊嚴し清淨の行を思惟し攝取したまふ」と云へる是れなり。

ゴコーシユイシヨ 五劫思惟抄 具名は五劫思惟論抄と云ふ。現存せず、從つて卷數不明。本書述作の動機に關しては源流章によれば、聖空(如輪房)と理園とが法藏比丘の五劫思惟に關し、一は唯思と云ひ他は修行なりと主張し論議せしため、師の聲明房長西は本書を作り、兩論を判決して五劫は修行にして唯思念には非ずとせるものなり。

ゴコーシユイミダ 五劫思惟彌陀 阿彌陀佛が因位法藏菩薩のとき一切衆生救済のため五劫の間獨坐思惟して工夫を凝せるを云ふ。此の五劫を以て淨影、法位、玄一、徹興等は修行の時となすと雖も、義寂、源清、源空等は發願思惟の期間と爲せり。奈良東大寺に善導作と傳ふる五劫思惟の彌陀佛像あり。

は一定せざるも、普通方二尺五寸位、高さ一尺二寸位なるものを用ふ。その形の方形なるは引字地輪の形を象るものにして善提心の大地を表示し、善修行者が大善提心に住して諸經觀察を修すべきことを示せるものなり。



(陀彌惟思劫五)

等身木造塗漆にして蓮華座上に跏趺坐し兩手合掌して胸前に當て目は半開して沈思の狀を示し、頭髮頗る狂びて圓鬚狀を呈せり。又京都一條紙屋川上ル地藏院(椿寺)木尊も五劫思惟の彌陀にして靈佛なり。

ゴジョーゲサ 小五條袈裟 ↓ゴジョーゲサ(五條袈裟)

ゴコンカイジヨ 古今楷定 古今の

觀經を是正して後世の規範を決定するの意。この語は善導の觀經疏の後序に「某、今此の觀經の要義を出して古今を楷定せんと欲す」といへるより出づ。古今楷定の意義について、古とは淨影・嘉祥・天台等の諸師の觀經疏、今とは善導時代に於ける彼等の後繼者並に所謂通論家を指し、楷とは楷模即ち後世の法戒・規範の意、定とは決定の意、乃ち古今の諸師

の觀經を釋せるは悉くその意を譯れる故に、善導自ら觀經疏を著して後等の是非を楷定して經の正意、佛の眞意を鮮明ならしめんとすの意なり。この義は所謂自力聖道門の通規による觀經觀に對して他力淨土門の立場を闡明にし、凡入報土の義を創説せる善導独自の見解にして、他力の眞髓に透徹し佛の眞意に契へる古今の妙釋として、淨土一門の極めて珍重する所なり。

ゴコンカイジヨのシャク 古今楷定 釋 次項に同じ。

ゴコンカイジヨのシヨ 古今楷定疏 善導の觀經疏の異名。古今楷定釋ともいふ。本疏の後序に諸師の證誠を求めて「某、今この觀經の要義を出して古今を楷定せんと欲す」といへるよりこの名あり。ゴジョーゲサ(四帖疏)

ゴザ 高座 説法、説戒師、法會の導師等の坐する座。釋尊の金剛寶座に象る高い牀座をいふ。又禮盤ともいふ。本來の高座は、高さ五尺餘にして一方に階段を附す。多く佛前の左右に置き左方に導師が登り、右方に講師が登りて相對して坐するものとなす。現時本宗で用ひる高座は禮盤といひ、これ多くの修法に用ふる佛具にして上に半疊を敷く。高さ

は一定せざるも、普通方二尺五寸位、高さ一尺二寸位なるものを用ふ。その形の方形なるは引字地輪の形を象るものにして善提心の大地を表示し、善修行者が大善提心に住して諸經觀察を修すべきことを示せるものなり。

コーサイ 幸西 一八〇三 宗祖門下にして一念義の創唱者。成覺房と稱す。初め叡山西塔南谷に住し、鐘下房の少輔と號せしも、愛見にをくられて眼前の無常に哭き、遁世して宗祖の門に入り幸西と改む。早くより宗祖の義に違背して行空と共に一念義を主張し、門下を排斥されて越後地方に邪義宣揚せしもの如し。宗祖滅後嘉祿の難には、隆寛・空阿と共に流罪に處せられ、壹岐或は伊豫に流されと傳へられ、或は讃岐大手島邊りを徘徊して配所に赴かざりしとも傳ふ。寶治元年四月八十五才寂。源流章に依れば、彼の門葉一時榮えしもの、如きも、後不振にして遂にその跡を絶つに至れり。「著書」略料簡、一掃記、佛傳、凡願一乘、略觀經義、京師和尚類聚傳、玄義分抄等頗る多し。

コーサイカシヨ 廣濟和尚 聖西樓了慧道光が後醍醐天皇より賜はりし稱號。！

コーサイギ (道光) (1) 幸西義 幸西所説の義は一  
念義といはるゝも創唱者の名に因んで幸西義  
ともいふ。イイチネンギ(一念義)

コザカ 小坂 洛東綾小路東端の地。善  
慧房聖空が此の地に住して所傳の法門の宣揚  
につとめし所。依つて聖空を小坂の聖空と呼  
び、其の流義を小坂義ともいふ。

コザカギ 小坂義 西山派祖善慧房聖空  
は洛東綾小路小坂に住して所説の法門(弘願  
義)を弘めしが故に彼の所立の義を住地の名  
に因んで小坂義ともいふ。イダガンギ(弘願  
義)

コーサンゲ 廣慶師 善導大師の往生禮  
讃には、要・略・廣及び上・中・下の三懺悔を説  
く。その要とは「至心懺悔無懺悔十方佛り  
乘御本願生彼國」の偈をいひ、略とは懺悔、勸  
請、隨喜、回向、發願の五悔を修するもの、  
廣とは廣く佛法僧の三寶並に現在同行の大家  
に向つて過去現在の罪業を懺悔するものにし  
て、同書末尾所載の「敬白十方諸佛懺悔已至  
心歸命阿彌陀佛」の文をいふ。その文意は敬  
白より發露懺悔までは三寶と非人と法界と衆  
生の四類に對して懺悔する意を明し、從無始  
已來より不可知數までは懺悔する罪業の本體

ゴシキノハタ 五色幡 幡の一種。佛堂  
を莊嚴する具。青・黄・赤・白・黒の五色布又は  
紙等をもつて作れる幡をいふ。法要儀式等の  
場合これを堂内に張り巡らして莊嚴具となす  
ものとす。

ゴージジョーベン 業事成辨 本願念  
佛實踐の行者が獲得する精神的相。覺師は  
業事成辨と云ひ、道師は業道成辨と云ふ。善  
導は單に業成と云へるも、之れ只名稱の具略  
にして其の意相は同じ。往生の爲に修したる  
行業が成就立せるを云ふ。換言せば往生の  
障礙となる一切の惡業滅盡して、當來受くべ  
き往生の果に於て、何等障害なき當果無障の  
位を云ふ。されば三心具足の稱名により往生  
の因を成ずるを業事成辨とは云はず、往  
生の因を成じたる上に更に往生の障礙を消盡  
したる位を業事成辨と云ふべきなり。口決鈔  
上に業成と成業との別を明す。この業成に、  
平生業成、臨終業成、一念業成の三義あり。

西山義は一念業成を主張し、長樂寺義は萬  
機臨終業成を強調せるが、口決鈔に此の二義  
を評して「西山義の一念業成は、但だ本願の功  
徳を信じて、未だ機根の上下を顧みず、律師  
の臨終業成は偏へに機に因はれて、本願の強  
義を忘る」といふ。又名越の義(選擇口筆)

を示し、如是等罪より罪之多少までは、我等  
の罪の無邊なることは唯佛のみ知り給ふ處で  
あるとの意を明し、今於三寶前より憶我清淨  
までは、我が懺悔を攝受し給へと請ひ、始終  
今日已下は行者自ら誓を立て一切法界皆共に  
極樂國に往生せん事を發願する意なり。

コーサンジ 高山寺 京都市右京區西院  
淳和院町。當寺所在地は往古平安禪所の一に  
して西院の河原と稱し、空也上人作なる地藏  
尊を安置せる舊蹟なりしが、度々の戦亂によ  
つて荒廢しあたるを復興のため一字を建立し  
て、惠心僧都作なる地藏菩薩像を安置して高  
西寺と稱し後ち寺號を改む。俗に西院河原の  
地藏と呼ぶものこれなり。

コーシ 香資 コーデン(香資)  
コーシ 講師 (1)すべて講演會に講題を  
掲げて講演する人を指して講師といふ。然れ  
ども學術講演、通俗講演の別ありて、講師に  
も適不適あるべく、廣義に解すれば家庭教育  
に於ける童話の主任講師は母親であるべく、  
學校教育では教師を主任講師と見、社會教育  
には自らその使命を果し得る専門的技術ある  
講師あるべき筈なり。故に宗侶にして人格、  
信仰、親切、熱誠、話術等秀でたるものが、  
布教の延長として通俗社會指導講演に講師た

るが如き、正しく狹義に所謂講師たるべし。  
現に此等各種の専門的講師は社會各方面に要  
求せられ、従つて宗門待望の一役と見るべき  
ものなり。

(2)學階第三級の名稱。ガツカイ(學階)

コジ 居士 Kōshi (1)巡羅越に作る。  
財に居る士、家に居し法に居する人の意。一  
般には在俗の佛弟子に名づく。  
(2)大師の對。戒名にこれを附するは有位有  
官の人士又は扶宗護法の貢獻者等に限る。古  
は將軍及び貴顯には大居士を用ひ、士人等は  
居士と號するを例となせしも、近時は一般に  
濫用されつゝあり。

ゴシキノイト 五色絲 青・黄・赤・白・黒  
の絲。古來、念佛者が臨終に阿彌陀佛像の手  
より自己の手にかけわたして、以て引接せら  
るゝ想ひをなすの風行はる。諸聖聖賢に西域  
祇園寺無常院の命色の立像の五色の綵繡を述  
べるに依り印度に夙に其の風の存したるが如  
くなるも其の眞偽未詳なり。我國にては平安  
朝に此風盛んに行はれ徳川時代に及べり。京  
都金戒光明寺所藏山越彌陀來迎圖は臨終佛と  
して造立せられ、其中尊は五色の綵繡にて  
世に知らる。五色の絲のこと勸傳卷四十四、  
和語燈錄卷五等にも見えたり。

は三心具足の初一念に業事成辨すと説く。然  
し西山義とは相違し、十六ヶ條疑問答見聞第  
一に其の區別を明にして居る。白眞正義は隨  
機不定とて業成は一念(實王論)、十念(觀經)、  
平生(小經)、臨終(下下品)に通ずと主張す。故  
に傳通記には「機根異なる故に業成亦一準な  
らず」と。禮讚の記には「業の成不は機に隨  
ひて遲速あり」と。又三心具足の念佛と業事  
成辨の念佛との同異に就ては、註三に「大旨  
不異」と云ひ、述開鈔之を詳釋せり。

ゴジツクグシン 虚實俱具心 イシジ  
ヨリシシツタ(至誠心四句)

コシフオン 去此不遠 經文によれば彌  
陀の淨土は西方十萬億の佛土の彼方にあると  
謂はれてあるが、念佛實踐の法味觀念の上か  
ら言へば、此所を去ること遠からずと解すべ  
きなり。即ち觀經に「爾の時世尊摩希希に告  
げ給はく、汝今知るやいなや、阿彌陀佛此を  
去ること遠からず、汝まさに念を繫けて諸か  
に彼の國を觀ずべし、淨業成ぜんものなり」と  
と言はれてあるはこの意なり。即ち觀念の力  
によれば在火の月を見るが如く、諺かに觀見  
すること出来る故に去此不遠(此を去ること  
遠からず)といふ。善導は觀經序分義に於  
て觀經の去此不遠を釋するに三義を擧ぐ、一

には分齊不遠、二は道里不遠、三には觀成不  
遠これなり。各項參照。

コシヤクゴジユーテンホーキソク 古  
昔五重傳法軌則(一卷) 本書はかの有名な  
舎牛の傳法事變の際に、舎牛が鎌倉光明寺か  
ら持ち出して、京都の西往寺に來り自像を造  
つてその中に納め、決して他見を許さざりし  
を、寶永七年に義山がその像から取り出せし  
傳法軌則なり。故に後世のものに比して餘程  
古風を帯び頗る參考となるもの多し。淨土傳  
燈傳要中卷に收む。イチヨードンキリガミデ  
ンボ(潮音切紙傳法)

ゴジユー 五重 (1)我宗の宗意安心の奧  
義を相傳するを傳法と云ふ。然るに上古は一  
定の形式なく列祖か何れも三經・論註・五部九  
卷の中の重要な義を示し口授相傳し來りたる  
も、應永十年九月十四日七祖聖師が六十三歳  
の時に、五重指月目錄を作り、五十五箇條の  
目錄を擧げ、その弟子西譽聖聰に五重相傳を  
授けてより我宗傳法の形式はこゝに始めて一  
定し今日尙ほこれを傳持す。五重とは初重往  
生記(源空作)、二重末代念佛授手印一卷  
(辨長作)、三重授手印領解鈔一卷(良忠作)、  
四重決答疑問鈔二卷(良忠作)、五重往生論註  
十念(覺賢作)なり。聖師はこの五重の各の

に註書を製し、初重授受録一巻、二重傳心鈔一巻、三重傳心鈔一巻、四重傳心鈔二巻を作

第六卷所收。本書は作者爲康がその著拾遺往生傳に洩れたものを拾録せしものにて、その

ゴジューキキガキ 五重問書(一巻) 聖觀音・西仰記。本書は増上寺の開山西觀聖

種供養と稱す。ゴジューケチミヤク 五重血脈 五重相傳のとき、傳燈師より受者に授くる淨土宗

傳、(二五)禮拜門口傳、(二六)讚歎門口傳、(二七)作願門口傳、(二八)觀察門口傳、(二九)回向門口傳、(三〇)恭敬修口傳、(三一)無

五重傳法の改革、圓頓戒授受の刷新、布薩戒の改正等に専ら力を用ひしが、その中この五